

---

宮 代 町

---

# 道仏上／道仏北／伝承旗本服部氏屋敷跡

---

地特(改築)工事(新橋通り)線埋蔵文化財発掘調査(整理)事業委託)

2 0 1 0

埼 玉 県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団





1 道仏上遺跡・道仏北遺跡・伝承旗本服部氏屋敷跡航空写真（北東より）



2 道仏上遺跡・道仏北遺跡航空写真（北西より）





1 道仏上遺跡航空写真



2 道仏北遺跡航空写真



## 道仏上遺跡・道仏北遺跡・伝承旗本服部氏屋敷跡の紹介

三つの遺跡は、新橋通り線（県道蓮田杉戸線）のバイパス工事に伴い調査が行われました。

道仏上遺跡<sup>どうぶつかみ</sup>は、東武伊勢崎線東武動物公園駅の南東約1 kmに位置し、標高約7 mの台地上に広がっています。遺跡からは、近世（約400～200年前）の溝跡や土壇<sup>どこう</sup>がたくさん見つかりました。溝跡は調査区の西寄り部分で重なって発見されており、その方向は北東―南西方向とそれに直角に交わるものがほとんどです。恐らく屋敷地などを区画した溝だと思われます。

道仏北遺跡<sup>どうぶつきた</sup>は、道仏上遺跡の東約100 mに位置し、南東方向から入り込んでいる小さな谷を挟んで向かい合っています。今回の発掘調査では、縄文時代前期（約5,500年前）の竪穴住居跡5軒と縄文時代と考えられる土壇<sup>どこう</sup>や炉跡が見つかりました。また、縄文時代早期（約8,000年前）から後期（約4,000年前）の様々な土器が出土しており、この遺跡が長期間にわたって人々の生活の場として栄えたことがうかがえます。

伝承旗本服部氏屋敷跡は、道仏上遺跡・道仏北遺跡の南西約1 kmにあります。江戸時代のはじめ頃（約400年前）、この地域は旗本の服部政光<sup>はっとりまさみつ</sup>・政信<sup>まさのぶ</sup>によって治められていましたが、屋敷の所在地についてはわかっていませんでした。今回の発掘調査で、調査区中央部から幅約11.5 mの大きな溝跡が見つかりました。伝承どおり服部氏の屋敷地を区画した堀割の一部である可能性も考えられます。



# 序

埼玉県では、「ゆとりとチャンスの埼玉プラン」のもと、人々の活発な交流と活力ある地域の創造のために道路交通環境の整備に取り組んでいます。現在、県内各地では交通量の増加による渋滞が発生し、その緩和が重要な課題となっています。宮代町域の県道蓮田杉戸線においても、慢性的な交通渋滞の解消と地域の活性化を目的に、県道拡幅と一部路線のバイパス化、そして東武伊勢崎線との立体交差化を盛り込んだ道路整備が計画されました。

今回建設が予定された宮代町西原・道仏地内には、道仏上遺跡、道仏北遺跡、伝承旗本服部氏屋敷跡が存在しています。これらの埋蔵文化財の取り扱いについて、関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の処置を講ずることとなりました。発掘調査は、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受けて当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、道仏上遺跡からは近世の土壌や溝跡が、道仏北遺跡からは縄文時代前期の竪穴住居跡や土壌が、また伝承旗本服部氏屋敷跡からは中世から近世にかけての井戸跡や溝跡、掘立柱建物跡などが見つかりました。特に道仏北遺跡は今回の調査とこれまでの周辺の調査結果から縄文時代前期中葉の大規模なムラであることがわかり、当地域の歴史を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、これら発掘調査の成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護、普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として広く御活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました埼玉県県土整備部道路街路課、杉戸県土整備事務所、宮代町教育委員会並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成22年 3 月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
理 事 長 刈 部 博



# 例言

1. 本書は、埼玉県南埼玉郡宮代町に所在する道仏上遺跡、道仏北遺跡、伝承旗本服部氏屋敷跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

道仏上遺跡 (DUBTKM)  
南埼玉郡宮代町大字道仏271番地他  
平成16年4月15日付け教文第2—6号

道仏北遺跡 (DUBTKT)  
南埼玉郡宮代町大字道仏558—1番地他  
平成15年11月28日付け教文第2—69号

伝承旗本服部氏屋敷跡 (HTTRSYSKAT)  
南埼玉郡宮代町西原347—1番地他  
平成12年7月4日付け教文第2—33号
3. 発掘調査は、地特(改築)工事(新橋通り線)に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課(当時)が調整し、埼玉県土木部道路整備課(当時)および県土整備部道路街路課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。また、整理報告書作成事業は埼玉県県土整備部道路街路課から委託を受け、当事業団が実施した。
4. 発掘調査・整理報告書作成事業は、I—3の組織により実施した。各遺跡の発掘調査・整理報告書作成事業日程と担当者は以下のとおりである。

[発掘調査]  
道仏上遺跡  
平成16年3月29日～平成16年6月11日  
(西井幸雄・吉田 稔)

道仏北遺跡  
平成15年11月20日～平成16年3月24日  
(昼間孝志・西井)

伝承旗本服部氏屋敷跡  
平成12年6月23日～平成12年9月8日  
(木戸春夫・渡辺清志)

[整理報告書作成事業]  
道仏上遺跡  
平成21年10月1日～平成21年10月31日

道仏北遺跡  
平成21年11月2日～平成22年1月29日

伝承旗本服部氏屋敷跡  
平成22年2月1日～平成22年3月24日  
(松本美佐子)
5. 発掘調査における基準点測量は、中央航業株式会社(道仏上遺跡、道仏北遺跡)・株式会社大宮測技(伝承旗本服部氏屋敷跡)に委託した。また、空中写真撮影は、中央航業株式会社(道仏上遺跡、道仏北遺跡)に委託した。
6. 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、出土品の写真撮影は松本が行った。
7. 出土品の整理・図版作成は松本が行い、木戸・西井・上野真由美の協力を受けた。
8. 本書の執筆は、I—1を埼玉県市町村支援部生涯学習文化財課、その他を松本が行った。
9. 本書の編集は、松本が行った。
10. 本書に掲載した資料は、平成22年4月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。
11. 発掘調査、本書の作成にあたり、下記の機関・方々からご教示・ご協力を賜った。記して感謝いたします(敬称略)。  
宮代町教育委員会(青木秀雄・河井伸一)



# 凡例

1. 各遺跡におけるX・Yの数値は、日本測地系（旧測地系）による国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯 36°00'00"、東経 139°50'00"）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は、すべて座標北を示す。

道仏上遺跡（C-7グリッド北西杭）

日本測地系  
X=1570.0000m Y=-9030.0000m  
北緯 36°00'50"7975  
東経 139°43'59"3124  
世界測地系変換値  
X=1924.7103m Y=-9323.0634m  
北緯 36°01'02"2917  
東経 139°43'47"6360

道仏北遺跡（C-5グリッド北西杭）

日本測地系  
X=1540.0000m Y=-8810.0000m  
北緯 36°00'49"8313  
東経 139°44'08"1011  
世界測地系変換値  
X=1894.7086m Y=-9103.0602m  
北緯 36°01'01"3257  
東経 139°43'56"4241

伝承旗本服部氏屋敷跡（F-4グリッド北西杭）

日本測地系  
X=760.0000m Y=-9790.0000m  
北緯 36°00'24"4858  
東経 139°43'28"9916  
世界測地系変換値  
X=1114.7223m Y=-10083.0733m  
北緯 36°00'35"9823  
東経 139°43'17"3183
2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10m×10mの範囲を基本（1グリッド）としている。
3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）を付し、両者を組み合わせて呼称した。
4. 本文中に使用した遺構の略号は以下のとおりである。

S J	竪穴住居跡	S B	掘立柱建物跡
S K	土壇	S D	溝跡
S E	井戸跡	S X	竪穴状遺構
5. 本書における挿図の縮尺は、原則として以下のとおりであるが、一部例外もある。縮率は、個々の図面内に記した。

遺構	全体図	1/400
	遺構図	1/60・1/100・1/200
遺物	縄文土器拓影図	1/3・実測図 1/4
	旧石器・縄文石器	2/3・1/3
	陶磁器・石製品	1/3・1/4
6. 遺物の残存率は、図示した部分についての凡その残存率を5%刻みで示した。
7. 遺物の焼成については、数値での表現が難しいため、良好・普通・不良の3段階で表す。
8. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を示す。
9. 本書に使用した地図は、国土地理院発行の1/50,000の地形図及び宮代町都市計画図（1/2,500）である。
10. 文中の引用文献等は、(著者 発行年)の順で表現し、その他の参考文献とともに巻末に一覧を掲載した。

# 目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	(2) 土壙	60
1. 発掘調査に至る経過	1	(3) 炉跡	61
2. 発掘調査、報告書作成の経過	2	(4) 遺構外出土遺物	61
3. 発掘調査、報告書作成の組織	3	3. 近世の遺構と遺物	69
II 遺跡の立地と環境	4	(1) 井戸跡	69
1. 地理的環境	4	(2) ピット	69
2. 歴史的環境	5	VI 伝承旗本服部氏屋敷跡の遺構と遺物	71
III 遺跡の概要	9	1. 中・近世の遺構と遺物	71
IV 道仏上遺跡の遺構と遺物	17	(1) 土壙	71
1. 縄文時代の遺構と遺物	17	(2) 井戸跡	74
(1) 土壙	17	(3) 掘立柱建物跡	77
(2) 遺構外出土遺物	18	(4) 溝跡	77
2. 近世の遺構と遺物	19	(5) 竪穴状遺構	83
(1) 土壙	19	(6) ピット	89
(2) 溝跡	31	(7) 遺構外出土遺物	89
(3) 竪穴状遺構	42	VII 調査のまとめ	91
(4) ピット	42	1. 調査の成果	91
(5) 遺構外出土遺物	42	2. 道仏北遺跡出土の縄文時代前期中葉の 土器について	93
V 道仏北遺跡の遺構と遺物	43	3. 道仏北遺跡出土の黒曜石について	95
1. 旧石器時代の調査と遺物	43	写真図版	
2. 縄文時代の遺構と遺物	44	抄録	
(1) 住居跡	44		



# 挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形	4	第34図 第3号住居跡	49
第2図 周辺の遺跡	7	第35図 第3号住居跡出土遺物	50
第3図 遺跡位置図	10	第36図 第4号住居跡	51
第4図 道仏上遺跡調査区全体図	12	第37図 第4号住居跡出土遺物(1)	52
第5図 道仏北遺跡調査区全体図	13	第38図 第4号住居跡出土遺物(2)	53
第6図 伝承旗本服部氏屋敷跡調査区全体図	15	第39図 土壇(1)	55
[道仏上遺跡]		第40図 土壇(2)	56
第7図 縄文時代の土壇	17	第41図 土壇(3)	57
第8図 第29号土壇出土遺物	18	第42図 土壇出土遺物	59
第9図 遺構外出土遺物(1)	18	第43図 炉跡	61
第10図 近世の土壇(1)	20	第44図 遺構外出土遺物(1)	62
第11図 近世の土壇(2)	21	第45図 遺構外出土遺物(2)	63
第12図 近世の土壇(3)	22	第46図 遺構外出土遺物(3)	65
第13図 近世の土壇(4)	23	第47図 遺構外出土遺物(4)	66
第14図 近世の土壇(5)	24	第48図 遺構外出土遺物(5)	67
第15図 近世の土壇(6)	25	第49図 遺構外出土遺物(6)	68
第16図 近世の土壇(7)	26	第50図 第1号井戸跡	69
第17図 近世の土壇出土遺物(1)	28	第51図 ピット	70
第18図 近世の土壇出土遺物(2)	29	[伝承旗本服部氏屋敷跡]	
第19図 近世の土壇出土遺物(3)	30	第52図 土壇(1)	72
第20図 溝跡(1)	32	第53図 土壇(2)	73
第21図 溝跡(2)	33	第54図 土壇出土遺物	73
第22図 溝跡(3)	34	第55図 井戸跡(1)	75
第23図 溝跡出土遺物	35	第56図 井戸跡(2)	76
第24図 竪穴状遺構	37	第57図 井戸跡出土遺物	76
第25図 第6号竪穴状遺構出土遺物	38	第58図 第1号掘立柱建物跡	77
第26図 ピット(1)	39	第59図 第1号溝跡出土遺物	78
第27図 ピット(2)	40	第60図 溝跡(1)	79
第28図 遺構外出土遺物(2)	42	第61図 溝跡(2)	80
[道仏北遺跡]		第62図 第7号溝跡出土遺物(1)	81
第29図 旧石器調査区及び出土土器	43	第63図 第7号溝跡出土遺物(2)	82
第30図 第1号住居跡出土遺物	44	第64図 第1号竪穴状遺構	84
第31図 第1号・第5号住居跡	45	第65図 第1号竪穴状遺構出土遺物	85
第32図 第2号住居跡	47	第66図 第3号竪穴状遺構	86
第33図 第2号住居跡出土遺物	48	第67図 第3号竪穴状遺構出土遺物	87

第68図 ピット ……………88  
 第69図 遺構外出土遺物 ……………90

[まとめ]  
 第70図 伝承旗本服部氏屋敷跡堀推定図 ……92  
 第71図 道仏北遺跡出土土器及び  
 前期中葉の土器群 ……………94

## 表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧 …………… 6	第18表 炉跡計測表……………60
第2表 遺構番号新旧対照表 ……………16	第19表 石器計測表……………68
[道仏上遺跡]	第20表 ピット一覧表……………69
第3表 縄文時代の土壌計測表 ……………17	[伝承旗本服部氏屋敷跡]
第4表 石器計測表……………18	第21表 土壌計測表……………71
第5表 近世の土壌計測表 ……………26	第22表 土壌出土遺物観察表 ……………74
第6表 近世の土壌出土遺物観察表 ……………30	第23表 井戸跡計測表……………74
第7表 溝跡計測表……………35	第24表 井戸跡出土遺物観察表 ……………76
第8表 溝跡出土遺物観察表 ……………36	第25表 第1号掘立柱建物跡柱穴計測表 ……77
第9表 竪穴状遺構計測表 ……………36	第26表 第1号溝跡出土遺物観察表 ……………78
第10表 第6号竪穴状遺構出土遺物観察表 ……38	第27表 第7号溝跡出土遺物観察表 ……………82
第11表 ピット一覧表……………41	第28表 溝跡計測表……………83
第12表 遺構外出土遺物観察表 ……………42	第29表 第1号竪穴状遺構出土遺物観察表 ……84
[道仏北遺跡]	第30表 第3号竪穴状遺構出土遺物観察表 ……87
第13表 第1・5号住居跡柱穴計測表 ……………46	第31表 竪穴状遺構計測表……………87
第14表 第2号住居跡柱穴・炉跡計測表 ……46	第32表 ピット一覧表……………89
第15表 第3号住居跡柱穴・炉跡計測表 ……48	第33表 遺構外出土遺物観察表 ……………89
第16表 第4号住居跡柱穴・炉跡計測表 ……54	[まとめ]
第17表 土壌計測表……………58	第34表 黒曜石分析一覧表……………95



# 写真図版目次

## [道仏上遺跡]

- 図版 1 1 調査区全景 (東から)  
2 調査区全景 (西から)
- 図版 2 1 第1・2・5・19号溝跡  
2 第2号溝跡  
3 第7・8・20号溝跡  
4 第15・18・22号溝跡  
5 第21号溝跡  
6 第1号土壇  
7 第3・4・86号土壇  
8 第11号土壇
- 図版 3 1 第14号土壇  
2 第20・21号土壇  
3 第22号土壇  
4 第23号土壇  
5 第24・25号土壇  
6 第26・27号土壇  
7 第28号土壇  
8 第29号土壇
- 図版 4 1 第30号土壇  
2 第35号土壇  
3 第37号土壇  
4 第38号土壇  
5 第39号土壇  
6 第40号土壇  
7 第41号土壇  
8 第42・43号土壇
- 図版 5 1 第44号土壇  
2 第45・47号土壇  
3 第46号土壇  
4 第48・49・50号土壇  
5 第51号土壇  
6 第52・53号土壇  
7 第54号土壇  
8 第56・57号土壇

- 図版 6 1 第58号土壇  
2 第59号土壇  
3 第61号土壇  
4 第62号土壇  
5 第63号土壇  
6 第65・67号土壇  
7 第66号土壇  
8 第68号土壇
- 図版 7 1 第69号土壇  
2 第70号土壇  
3 第77・78号土壇  
4 第87号土壇  
5 第88号土壇  
6 第5号竪穴状遺構・第15号土壇  
7 第6号竪穴状遺構  
8 第7号竪穴状遺構

## [道仏北遺跡]

- 図版 8 1 遺跡見学会風景  
2 第1・5号住居跡  
3 第2号住居跡
- 図版 9 1 第3号住居跡  
2 第4号住居跡遺物出土状況  
3 第4号住居跡
- 図版10 1 第1号土壇  
2 第2号土壇土層堆積状況  
3 第2号土壇  
4 第3号土壇  
5 第4号土壇  
6 第5号土壇  
7 第6・8号土壇  
8 第7号土壇
- 図版11 1 第9号土壇  
2 第10号土壇  
3 第11号土壇  
4 第12号土壇





[道仏北遺跡]

- 図版22 1 第1号住居跡出土遺物  
2 第4号住居跡出土遺物  
3 第8号土壙出土遺物  
4 第25号土壙出土遺物  
5 遺構外出土遺物  
6 遺構外出土遺物
- 図版23 1 第4号住居跡出土遺物  
2 第4号住居跡出土遺物  
3 第1号住居跡出土遺物
- 図版24 1 第2号住居跡出土遺物  
2 第3号住居跡出土遺物(1)
- 図版25 1 第3号住居跡出土遺物(2)  
2 第4号住居跡出土遺物(1)
- 図版26 1 第4号住居跡出土遺物(2)  
2 第4号住居跡出土遺物(3)
- 図版27 1 土壙出土遺物(1)  
2 土壙出土遺物(2)
- 図版28 1 遺構外出土遺物(1)  
2 遺構外出土遺物(2)
- 図版29 1 遺構外出土遺物(3)  
2 遺構外出土遺物(4)
- 図版30 1 遺構外出土遺物(5)

2 住居跡・土壙出土遺物

- 図版31 1 遺構外出土遺物(6)  
2 遺構外出土遺物(7)

[伝承旗本服部氏屋敷跡]

- 図版32 1 第7号溝跡出土遺物  
2 第7号溝跡出土遺物  
3 第7号溝跡出土遺物  
4 第1号竪穴状遺構出土遺物  
5 第7号溝跡出土遺物
- 図版33 1 第1号竪穴状遺構出土遺物  
2 第1号竪穴状遺構出土遺物  
3 遺構外出土遺物  
4 遺構外出土遺物  
5 第7号溝跡出土遺物  
6 遺構外出土遺物  
7 遺構外出土遺物
- 図版34 1 土壙・井戸跡出土遺物  
2 第1号溝跡出土遺物  
3 第7号溝跡出土遺物
- 図版35 1 第1号竪穴状遺構出土遺物  
2 第3号竪穴状遺構出土遺物  
3 第7号溝跡・第3号竪穴状遺構出土遺物

# I 発掘調査の概要

## 1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では基本目標「安心・安全な暮らしを確保する」の施策として「交通安全の推進と安全な道路交通環境の整備」を推進している。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、このような施策に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

県道蓮田杉戸線の道路改良工事にかかる埋蔵文化財の所在および取扱いについては、平成12年1月28日付け道建第546号で、道路建設課長（当時）から文化財保護課長（当時）あて照会があった。

文化財保護課では平成12年度から平成15年度にかけて確認調査を実施し、その結果をもとに、道仏上遺跡、道仏北遺跡、伝承旗本服部氏屋敷跡について「現状保存することが望ましいが、やむを得ず工事を実施する場合は記録保存のための発掘調査を実施すること」と回答し、保存について協議を実施した。しかし、工事計画の変更が困難であったため発掘調査を実施することとなり、発掘調査は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとなった。

文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事及び杉戸県土整備事務所長から以下のとおり提出された。

それらに対する保護法上必要な勧告は括弧内に記したとおりである。

道仏上遺跡

平成15年11月20日付け杉整第2683号  
(平成15年11月28日付け教文第3—710号)

道仏北遺跡

平成15年5月12日付け道街第127号  
(平成15年5月20日付け教文第3—111号)

伝承旗本服部氏屋敷跡

平成12年3月28日付け道建第728号  
(平成12年3月31日付け教文第3—971号)

また、文化財保護法第57条1項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査の届出に対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知番号は以下のとおりである。

道仏上遺跡

平成16年4月15日付け教文第2—6号

道仏北遺跡

平成15年11月28日付け教文第2—69号

伝承旗本服部氏屋敷跡

平成12年7月4日付け教文第2—33号  
(生涯学習文化財課)



## 2. 発掘調査・報告書作成の経過

### (1) 道仏上遺跡の発掘調査

道仏上遺跡の発掘調査は、平成16年3月29日から平成16年6月11日まで実施した。調査面積は1,440㎡である。

事務手続き等の準備の後、4月から順次事務所設置工事・囲柵工事等を実施した。並行して重機による表土除去作業、続いて遺構実測作業のための基準点測量及びグリッド杭敷設作業を実施した。

表土除去終了後の4月中旬から本格的な調査に着手し、人力による遺構確認作業を行ったところ、近世の遺構が多数検出された。直ちに遺構の精査を開始し、土層断面図・平面図等の作成及び写真撮影等の記録作業を行った。また調査区中央部を横切る生活道路部分は、重機による道路の付替えを行った上で、調査を行った。

遺構の調査をほぼ終了した5月18日には航空機による航空写真撮影を実施した。残る記録作業等を終え、事務所撤去後、事務手続き等を行い6月11日までに全ての調査を完了した。

### (2) 道仏北遺跡の発掘調査

道仏北遺跡は、平成15年11月20日から平成16年3月24日まで調査を行った。調査面積は2,100㎡である。

この遺跡では廃土置場の確保が困難であったため、調査区を南北に分け、半分ずつ調査を行う手法をとった。そのため表土除去、基準点測量、航空写真撮影をそれぞれ2回行った。

11月下旬に事務手続き、事務所の設置、囲柵工事等の準備を進め、まず南側から調査を開始した。12月上旬、重機による表土除去を行い、基準点測量の後、中旬から人力による本格的な調査を実施した。遺構確認作業の結果、調査区全域にわたり縄文時代の遺構が検出されたため、順次、遺構の精査を開始した。その手順は道仏上遺跡と同様である。南側の調査が終了した1月中旬に1回目の

航空写真撮影を行い、北側の調査が終了した3月上旬に2回目の撮影を行った。

また、3月6日には遺跡見学会を実施し、調査の成果を地域住民や県民に広く公開した。

記録作業等を終え、事務所撤去後、事務手続き等を行い3月24日までに全ての調査を完了した。

### (3) 伝承旗本服部氏屋敷跡の発掘調査

伝承旗本服部氏屋敷跡は、平成12年6月23日から平成12年9月8日までを対象に調査を行った。調査面積は1,200㎡である。

調査対象地は県道の現道及びその拡幅部分であるが、周辺には迂回路がないため道路を片側通行とし、調査は半分ずつ2回に分けて実施した。

事務手続き、事務所の設置などの準備を行い、まず西側調査区から着手した。6月下旬から囲柵工事、重機による表土除去、基準点測量を実施し、人力による遺構確認作業を行った。中世から近世にかけての遺構が検出され、順次、遺構の精査を開始した。その手順は道仏上遺跡と同様である。8月には東側調査区へ移動した。東側調査区からは幅広の溝跡が検出されたが、狭小な調査区の上、西側には現道が走っていることから、鋼板で安全対策を施しながら調査を行った。

全ての記録作業等を終え、事務所撤去後、事務手続き等を行い、調査を完了した。

### (4) 整理・報告書の作成

整理・報告書作成作業は、平成21年10月1日から平成22年3月24日まで実施した。

作業はまず、出土遺物の水洗・注記作業を行い、その後、接合・復元作業を実施した。接合の終了した遺物は、機械実測による下図をもとに実測図を完成させた。破片遺物は、採拓し、断面の実測を行った。実測図、断面図ともにトレースを行い、レイアウト後、遺物図版の版下を作成した。

遺構図面に関しては、平面図、断面図の整合性をとった上で第二原図を作成し、スキャナーでパソコンに取り込み、デジタルトレースを行った。パソコン上でレイアウトを行い、遺構図版の版下を作成した。また、抽出した遺物は写真撮影し、発掘調査時の遺構写真とともにパソコン内で編集

を行い、写真図版を作成した。

1月上旬から割付作業と原稿執筆を進め、下旬には印刷業者を選定して入稿した。校正は3回行い、平成22年3月に報告書を刊行した。また、図面類・写真類・遺物は整理、分類し、収納作業を行い、すべての作業を終了した。

### 3. 発掘調査・報告書作成の組織

#### 平成12年度（発掘調査）

理 事 長	中 野 健 一	<b>調査部</b>	
常務理事兼管理部長	広 木 卓	調 査 部 長	高 橋 一 夫
<b>管理部</b>		調 査 部 調 査 副 部 長	石 岡 憲 雄
管 理 部 副 部 長	関 野 栄 一	専 門 調 査 員	
主 席	阿 部 正 浩	(調査第一担当)	坂 野 和 信
主 席	野 中 廣 幸	統 括 調 査 員	木 戸 春 夫
主 席	江 田 和 美	主 任 調 査 員	渡 辺 清 志

#### 平成15年度（発掘調査）

理 事 長	桐 川 卓 雄	<b>調査部</b>	
常務理事兼管理部長	中 村 英 樹	調 査 部 長	宮 崎 朝 雄
<b>管理部</b>		調 査 部 副 部 長	坂 野 和 信
管 理 部 副 部 長	村 田 健 二	主 席 調 査 員	
主 席	田 中 由 夫	(調査第一担当)	昼 間 孝 志
		統 括 調 査 員	西 井 幸 雄

#### 平成16年度（発掘調査）

理 事 長	福 田 陽 充	<b>調査部</b>	
常務理事兼管理部長	中 村 英 樹	調 査 部 長	宮 崎 朝 雄
<b>管理部</b>		調 査 部 副 部 長	坂 野 和 信
管 理 部 副 部 長	村 田 健 二	主 席 調 査 員	
主 席	田 中 由 夫	(調査第一担当)	昼 間 孝 志
		統 括 調 査 員	西 井 幸 雄
		統 括 調 査 員	吉 田 稔

#### 平成21年度（報告書作成）

理 事 長	刈 部 博	<b>調査部</b>	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 長	小 野 美 代 子
<b>総務部</b>		調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	整 理 第 一 課 長	宮 井 英 一
総 務 課 長	田 中 雅 人	主 事	松 本 美 佐 子

## II 遺跡の立地と環境

### 1. 地理的環境

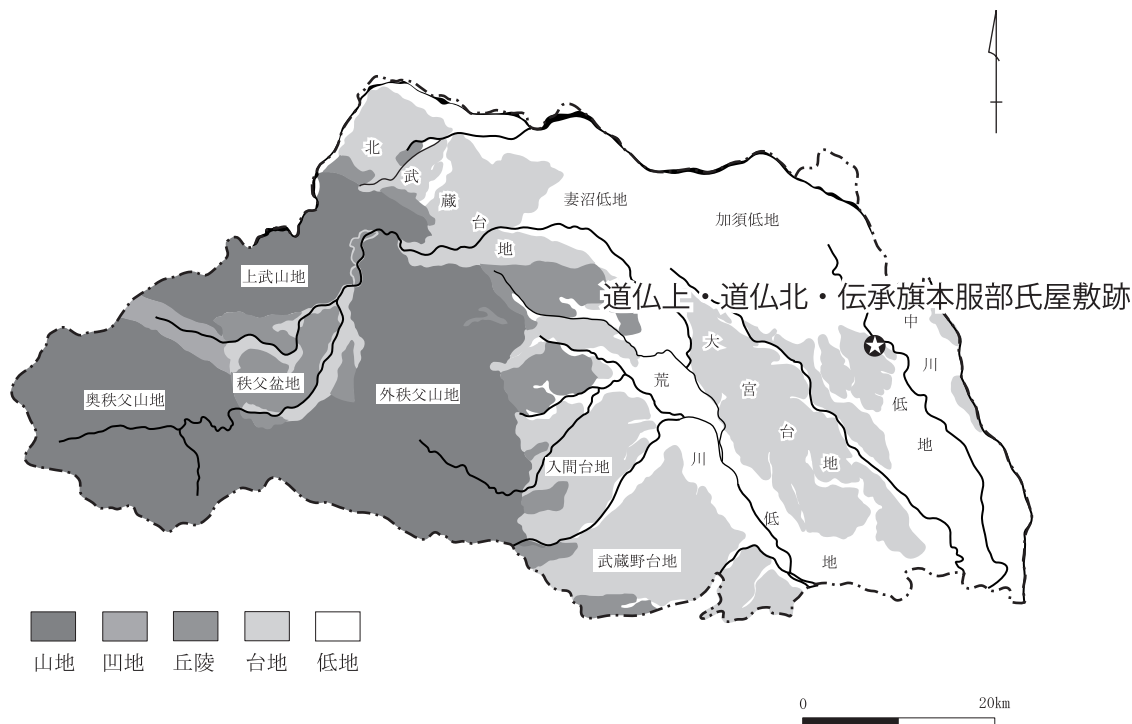
道仏上遺跡・道仏北遺跡・伝承旗本服部氏屋敷跡が所在する宮代町は、埼玉県の東部、中央付近に位置する。町域は東西6.3km、南北6.7kmと縦長の形を呈し、東から時計回りに杉戸町、春日部市、白岡町、久喜市と隣接する。東の杉戸町との境界には、利根川の旧流路である古利根川が北西から南東方向に蛇行しながら流路をとる。

宮代町の地形を概観すると、北西から南東方向に島状に点在する標高8～11mの台地とその周囲に広がる標高6m前後の後背湿地、古利根川の流路に沿って形成された標高6～7mの自然堤防から成り立っている。そのため町域は全体的に比高差が少なく、起伏はほとんど感じられない。

台地は大宮台地の東側周辺部、慈恩寺支台にあたる。西側が高く、東側へ徐々に標高を減じる大宮台地であるが、宮代町域では加須市付近を中心とする関東造盆地運動の影響が加わり、標高はわ

ずかに7～10m程である。そのため周辺部の低地との区別は明確ではない。特に町域中央部から北西部にかけての台地縁辺部は地盤沈降が顕著で自然堤防下に埋没した台地がみられる。遺跡はそれら台地の縁辺部や埋没低台地上に立地している。道仏上遺跡と道仏北遺跡は慈恩寺支台、最東端の狭小な台地の南端部に対峙するように位置する。伝承旗本服部氏屋敷跡は姫宮落川を挟んで両遺跡の南西にある台地中央部に所在し、遺跡北側には東から細い谷が入り込んでいる。

町域の東部は、古利根川によって形成された自然堤防が流路に沿って延びており、その対岸の杉戸町以東は旧利根川の乱流域であった広大な中川低地が続いている。縄文時代早期から始まった縄文海進ではこの低地に海が入り込み、奥東京湾が形成された。最盛期の縄文時代前期には、栃木・群馬・茨城県境付近まで進み、各地に多くの貝塚が



第1図 埼玉県の地形



形成されたが、宮代町ではこの時期の貝塚は発見されていない。恐らく貝塚が形成されるのに適した遠浅の海岸線が少なかったためと考えられる。

## 2. 歴史的環境

宮代町の遺跡は、3つの地区に比較的まとまって分布している。一つは町域の北西側、桑原地区を中心とする地域で、その中では東桑原宿屋敷遺跡(31)と国納丸屋遺跡(35)の発掘調査が行われている。また、市域南東部の道仏地区には直径500m程度の範囲内に3つの遺跡が確認されており、平成9年に発掘調査が行われた道仏遺跡(4)および本書で報告する道仏上遺跡(1)および道仏北遺跡(2)がある。更に、道仏地区の遺跡群から姫宮落川を挟んで南西側の低位台地には町域でも最も多くの遺跡が立地し、本書で報告する伝承旗本部氏屋敷跡(3)はこれらの中心付近に位置する。

### 旧石器時代

宮代町域で最も古い人々の生活の痕跡が確認されているのは約2万年前の旧石器時代のものである。旧石器時代の遺跡は町内で8遺跡が確認されている。前原遺跡(9)からは、時期の異なる2か所の石器集中が検出された。ナイフ形石器16点を主体とした約1万8千年前のものとナイフ形石器や角錐状石器などを含む約2万年前のものである。前者の石器集中からは800点を超える多量の剥片類も出土しており、「石器製作跡」と考えられる。近年調査が行われた金原遺跡(13)では、前原遺跡と同時代のナイフ型石器を主体とする石器集中11か所や礫群が多数検出された。前原遺跡との関連性が注目される。また、逆井遺跡(25)では約1万4千年前の細石器を中心とする石器集中が、山崎北遺跡(38)では旧石器時代終末の尖頭器、及び細石器と関連する石器群が出土しており、旧石器時代から縄文時代への移行時期の様相を示す資料として重要である。また、西桑原遺跡(32)では分布調査によってナイフ型石器が採取されてお

り、町域南東部に集中していた旧石器時代の遺跡が北西部にも広がることが確認された。

### 縄文時代

縄文時代には、町内でこれまでに41ヶ所の遺跡が確認されており、早期から後期にわたってほぼ絶え間なく人々の痕跡が伺えるが、晩期の遺跡は現在までのところ報告されていない。

草創期は、前原遺跡から微隆起線文土器の破片7点と表裏縄文土器が出土した。また、前原遺跡、山崎北遺跡、地藏院遺跡(6)、金原遺跡で尖頭器が検出されているが、いずれの遺跡においても明確な遺構は発見されていない。しかし、確実に人々の痕跡が伺えることから、今後遺構の発見が期待される。

早期になると町南東部の台地を中心に遺跡数は増加し、集落が形成される。前原遺跡、逆井遺跡、地藏院遺跡、金原遺跡、山崎遺跡(24)、山崎北遺跡、国納丸屋遺跡などで早期の遺構が検出されており、道仏北遺跡や道仏遺跡など多数の遺跡で土器が出土している。まず、前原遺跡では、撚糸文期の住居跡7軒のほか、集石遺構や炉穴が検出され、町内最古の大規模集落として認められる。住居跡からは多量の局部磨製石斧などの石器や岩偶といった貴重な遺物も出土しており全国的に注目される。逆井遺跡では、沈線文期の竪穴状遺構が1基発掘されている。早期もこの時期までは遺跡数は限られているが、条痕文期になるとその増加は顕著に認められ、地藏院遺跡では、茅山下層式期の住居跡4軒の他多数の土壌や炉穴が検出され、集落の形成が認められる。他には金原遺跡で2軒、山崎遺跡で3軒の該期住居跡が調査されている。国納丸屋遺跡では、住居跡から黒曜石を主体とした800点以上の剥片類が検出され、石器製作跡と推定される。また、山崎北遺跡でも石器集中が1か所確認され、同様の遺構と考えられる。これらは集落内における石器製作を考える上で興味深い。

前期になると、早期に引き続き町南東部の台地を中心としながら、北西部の台地上にも集落が形成され始める。この時期の遺跡としては、身代神社遺跡(29)、地藏院遺跡、道仏北遺跡があげられる。身代神社遺跡では、花積下層式期の土壌11基と炉穴1基が検出され、現地表面下2mの埋没台地上で遺構が発見されたことが特筆される。地藏院遺跡では、諸磯a～b式期の住居跡6軒が調査され、同一住居跡内から出土した諸磯式土器と浮島式土器の高い共伴関係が確認された。道仏北遺跡では、今回の調査で黒浜～諸磯a式期にかけての住居跡5軒が検出されたが、平成17～20年度の宮代町教育委員会による発掘調査では、早期後半から前期後半の住居跡が35軒調査され、この時期の一大集落であった可能性が高い。また、前期は縄文海進が最も進んだ時期であり、中川低地を臨む台地縁辺部には多くの貝塚が形成されたが、宮代町には貝塚を伴う前期の遺跡は確認されていない。

一般に中期、特に後半の加曽利E式期に入ると

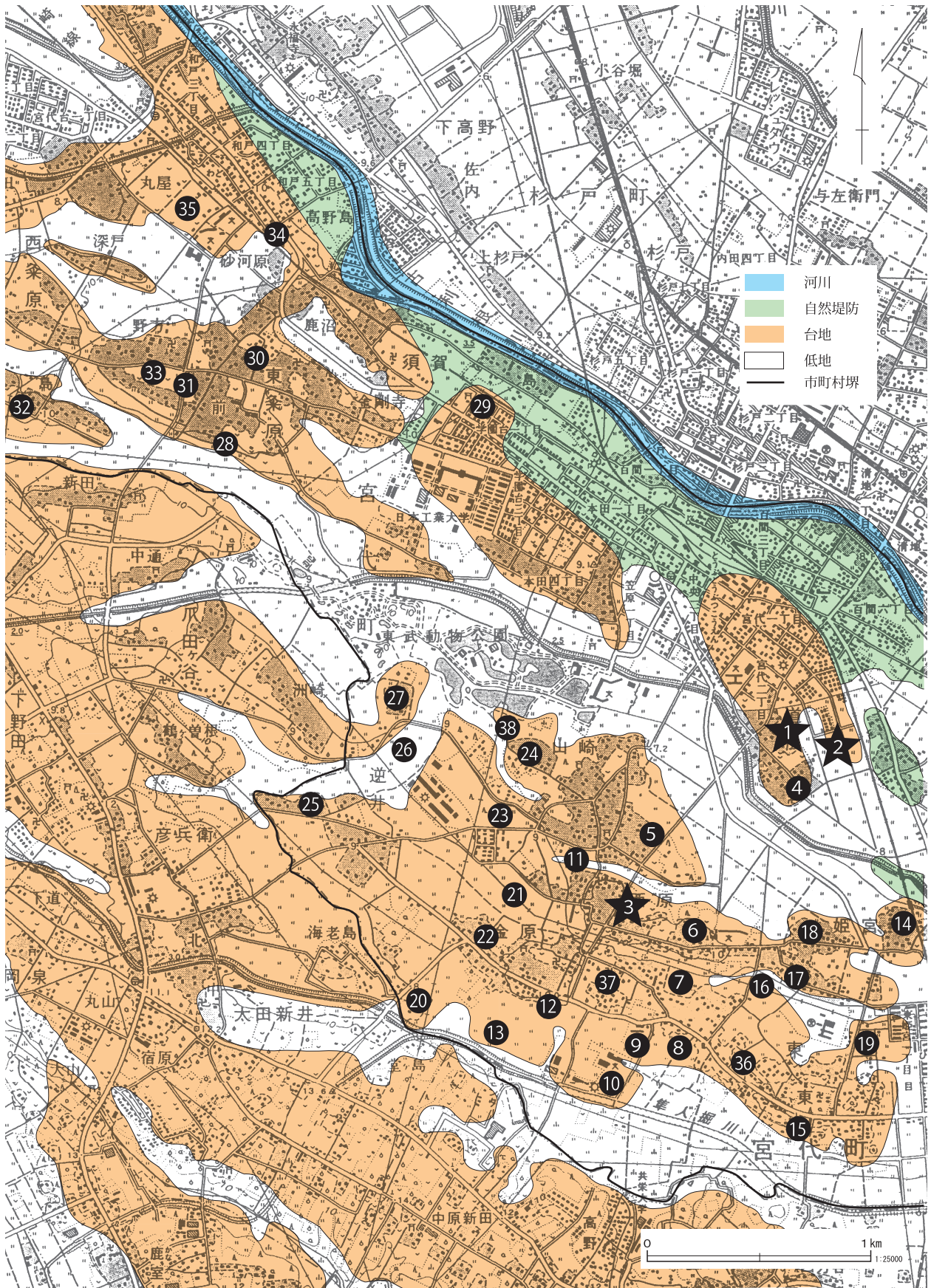
遺跡数は急増し、拠点集落が形成される傾向がみられるが、宮代町域ではこの期を迎えても遺跡数の増加はみられず、遺跡数の増加は後期の到来を待たねばならない。中期では、加曽利E式期の住居跡が地藏院遺跡と金原遺跡で検出されたのみである。このような状況の背景は不明であるが、集落を形成、維持する上で生産力の問題など何らかの障害があったと考えられる。

後期になると、遺跡数は飛躍的な増加を示すがそれも堀之内式期までで、後期中葉の加曽利B式期以降は集落規模も縮小し、後期後半以降は、山崎山遺跡(26)の包含層から安行II式土器が1点出土しているのみである。後期の遺跡は、前原遺跡、山崎山遺跡、金原遺跡で称明寺式期の住居跡が検出されている。特に金原遺跡では、18軒の住居跡が台地縁辺部に沿って半弧状に並び、その内側に方形柱穴列と多数の土壌が配置されるという集落が確認された。堀之内式期は最も安定して集落が営まれていたと考えられ、多数の遺跡で遺構が検出されている。またこの時期、町内で唯一の

第1表 周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	道仏上遺跡	縄文、近世	20	金原西遺跡	縄文(中)
2	道仏北遺跡	縄文(早・前・中・後)、平安	21	乗山遺跡	縄文(中・後)
3	伝承旗本服部氏屋敷跡	縄文、南北朝、戦国、江戸	22	金原稻荷神社遺跡	室町、戦国、江戸
4	道仏遺跡	縄文、古墳(後)	23	山崎南遺跡	縄文(早・前・中・後)
5	宿・源太山遺跡	奈良	24	山崎遺跡	縄文(早・前・中・後)
6	地藏院遺跡	縄文(中)、室町～江戸	25	逆井遺跡	旧石器、縄文(中)、奈良
7	中北遺跡	縄文(前・中)	26	山崎山遺跡	縄文(早・前・後)、古墳(前)
8	弥勒院遺跡	奈良	27	平島遺跡	縄文(早・前・中・後)
9	前原遺跡	旧石器、縄文(早・前・中・後)	28	東桑原前遺跡	縄文(後)、奈良
10	中遺跡	縄文(中・後)、奈良、室町～江戸	29	身代神社遺跡	縄文(早・前・後)、奈良
11	星谷遺跡	縄文	30	大崎遺跡	縄文(早・前・中・後)
12	金原東遺跡	縄文(後)、古墳	31	東桑原宿屋敷遺跡	平安、鎌倉、南北朝、戦国、江戸
13	金原遺跡	旧石器、縄文(草創・早・前・中・後)	32	西桑原遺跡	旧石器、縄文(早・前・中)
14	姫宮神社遺跡	古墳(後)	33	宝光寺遺跡	縄文(後)
15	西光院遺跡	縄文(中・後)、鎌倉、南北朝、室町、戦国、江戸	34	須賀遺跡	縄文(早・前・中・後)、奈良
16	中東遺跡	縄文(中・後)	35	国納丸屋敷遺跡	縄文、古墳
17	藤曾根遺跡	縄文(後)	36	中寺遺跡	縄文(中・後)、奈良、室町～江戸
18	台越遺跡	縄文(早・前・中)	37	宝生院遺跡	縄文(中)、古墳(後)、室町～江戸
19	東遺跡	縄文(早・後)	38	山崎北遺跡	旧石器、縄文(早・後)、古墳、平安





第2図 周辺の遺跡



貝塚である西光院貝塚が形成されており、シジミ貝を主体とした小規模貝塚であることが確認されている。星谷遺跡(11)では堀之内II式期の住居跡1軒、山崎南遺跡(23)では堀之内式期の住居跡2軒、土壙30基、山崎山遺跡では住居跡2軒、土壙40基、山崎遺跡では住居跡1軒、土壙1基、逆井遺跡では住居跡4軒、竪穴状遺構1基、金原遺跡では住居跡3軒、藤曾根遺跡(17)では住居跡7軒、土壙4基である。特に、山崎遺跡で検出された住居跡は焼失住居で、住居跡内からは上屋材と思われる多量の炭化材が検出された。また、藤曾根遺跡では狭い範囲から7軒もの住居跡が密集して検出された。

### 弥生時代

縄文時代後期までにこの地に定着した多くの遺跡群は、縄文時代晩期～弥生時代に入ると姿を消しほとんど見られなくみられなくなり、その後もしばらくの間は、一部の遺跡で人々の生活痕跡が断片的に垣間見られる程度である。今までのところ、弥生時代の遺跡は確認されていない。

### 古墳時代

この地域では、古墳時代前期になり再び集落が営まれるようになる。宿・源太山遺跡(5)、山崎山遺跡、地蔵院遺跡で古墳時代前期の住居跡などの遺構が発見されている。特に山崎山遺跡では、7軒の住居跡や井戸跡などと共に、4世紀後半の鍛冶工房が1基発見された。鍛冶工房は約2.5m四方の正方形で、内部に用途が異なると思われる2基の鍛冶炉を備える。この時期の鍛冶工房は類例が少なく、県内では最古のものであり、鉄生産の歴史を考える上で非常に貴重な資料である。

古墳時代後期に入ると、山崎北遺跡で4軒、道仏遺跡で7軒の住居跡が調査され、集落が確認された。また、同時期の土器の破片が地蔵院遺跡、山崎遺跡、山崎山遺跡、山崎南遺跡、宿・源太山遺跡、金原東遺跡(12)などから採取されている。町域南部に該期の集落が広がっていたことが窺われる。

また、6世紀に築造されたと考えられる姫宮神社古墳群(14)は大宮台地東端の古墳でもあり、下総台地と対峙する立地としてそのあり方が注目される。三条突帯を持つ朝顔形埴輪も出土し、前方後円墳である可能性も指摘されている。

### 奈良・平安時代

奈良時代・平安時代の遺跡は、町内で発掘調査が行われた例はないが、須賀遺跡(34)、身代神社遺跡、山崎山遺跡、宿・源太山遺跡、道仏北遺跡、道仏遺跡、中遺跡(10)、弥勒院遺跡(8)、西光院遺跡(15)の9遺跡で土器片などが採取されている。

奈良時代、この地域一帯は武蔵国埼玉郡太田郷に属していたと考えられ、平安時代末期には八条院に寄進された荘園の一つである太田荘となり、武蔵国最大の荘園として機能していた。

### 中・近世

中世の遺跡は、中遺跡、地蔵院遺跡、中寺遺跡(36)、伝承旗本服部氏屋敷跡遺跡などで発掘調査が行われている。地蔵院遺跡では15世紀の堀や工房跡が見つかり、瀬戸美濃産や常滑産の陶磁器や、板碑などが出土している。中寺遺跡では平成10年、14年に発掘調査が行われ、戦国時代後半の掘立柱建物跡や井戸跡が調査された。伝承旗本服部氏屋敷跡遺跡では戦国時代の堀跡や建物跡が発掘され、板碑片、瀬戸美濃産や常滑産の播鉢、天目茶碗、志野焼の皿、土鍋や焙烙、銅鏡が出土している。戦国時代後半から江戸時代初頭にかけての在地土豪や旗本服部氏の屋敷として機能したものと推定される。服部氏屋敷跡遺跡から地蔵院遺跡は一連の遺跡である可能性がある。

以上の様に、発掘調査で明らかになった埋蔵文化財は縄文時代を除けば必ずしも多くはないが、西光院の阿弥陀如来像及び両脇侍像や、地蔵院の阿弥陀如来座像の様に、平安時代末頃の貴重な仏像の存在などからも豊かな村落の様子が窺える。今後の発掘調査の進展により町の歴史がますます明らかになるであろう。

### III 遺跡の概要

本書で報告する3遺跡は、南埼玉郡宮代町に所在し、新橋通り線（県道蓮田杉戸線）改築工事に伴い発掘調査が行われた。現在の宮代町域は、概して起伏の少ない平坦な地形を呈しているが、地形区分では大宮台地の東端部、慈恩寺支台にあたり、3遺跡ともその台地上に立地する。

#### 道仏上遺跡（第3・4図）

道仏上遺跡は、南埼玉郡宮代町大字道仏に所在し、東武伊勢崎線東武動物公園駅の南東約1kmに位置する。町域を北西から南東方向に島状に点々と延びる台地の中で、中央部東端寄りの南北約1.1km、東西約0.45kmの小さな島状台地に位置する。道仏上遺跡をのせる台地は南端部が二股に分かれ、南側から谷が入り込んでおり、遺跡はその谷に面した西側のつけ根付近に立地している。

道仏上遺跡の調査は、今回が初めてで第1次調査となる。調査区は概ね平坦であるが、東側に所在する谷部に向かって緩やかに傾斜しており、標高は7.2～7.6mを測る。

検出された遺構は、縄文時代の遺構として土壇5基、近世の遺構として土壇80基、溝跡22条、竪穴状遺構3基である。遺跡の主体となる時期は近世であるが、わずかながら縄文時代の遺構や遺物も検出された。同一台地上に立地する、道仏北遺跡や道仏遺跡などで縄文時代の遺構や遺物が多数発見されていることから、それらの遺跡との関連性が伺える。

遺構は調査区全体にわたって検出された。土壇、竪穴状遺構の配置については、特に規則性などはみられなかった。溝跡は、調査区西側で激しい重複をみせており、走行方向を北東から南西にとるものとそれに直交するものとに分類できる。その様相から恐らく屋敷地などの区画に使用されたものと推定される。また、調査区中央部で検出された第15・22号、および第18号溝跡は、約3.3mの幅

をもって並行に検出されており、道路状遺構の可能性も考えられるが、溝跡間に明確な硬化面は確認できなかった。

#### 道仏北遺跡（第3・5図）

道仏北遺跡は、道仏上遺跡と同じ台地上に所在しており、南から入り込んだ谷を隔てて道仏上遺跡とちょうど対峙した位置関係にある。両遺跡をのせる台地は、南から入り込む谷によって南端部が二股に分かれているが、道仏北遺跡が所在する東側は西側に比べて極端に幅が狭く、広い部分でもわずか70m程である。この狭小な台地上に遺跡は展開している。道仏北遺跡が栄えた縄文時代前期中葉は、言うまでもなく縄文海進が最も進んだ時期であり、遺跡周辺には奥東京湾の入江が形成されていたと考えられる。道仏北遺跡はまさしく半島状に海に突き出した台地先端部に形成された遺跡である。

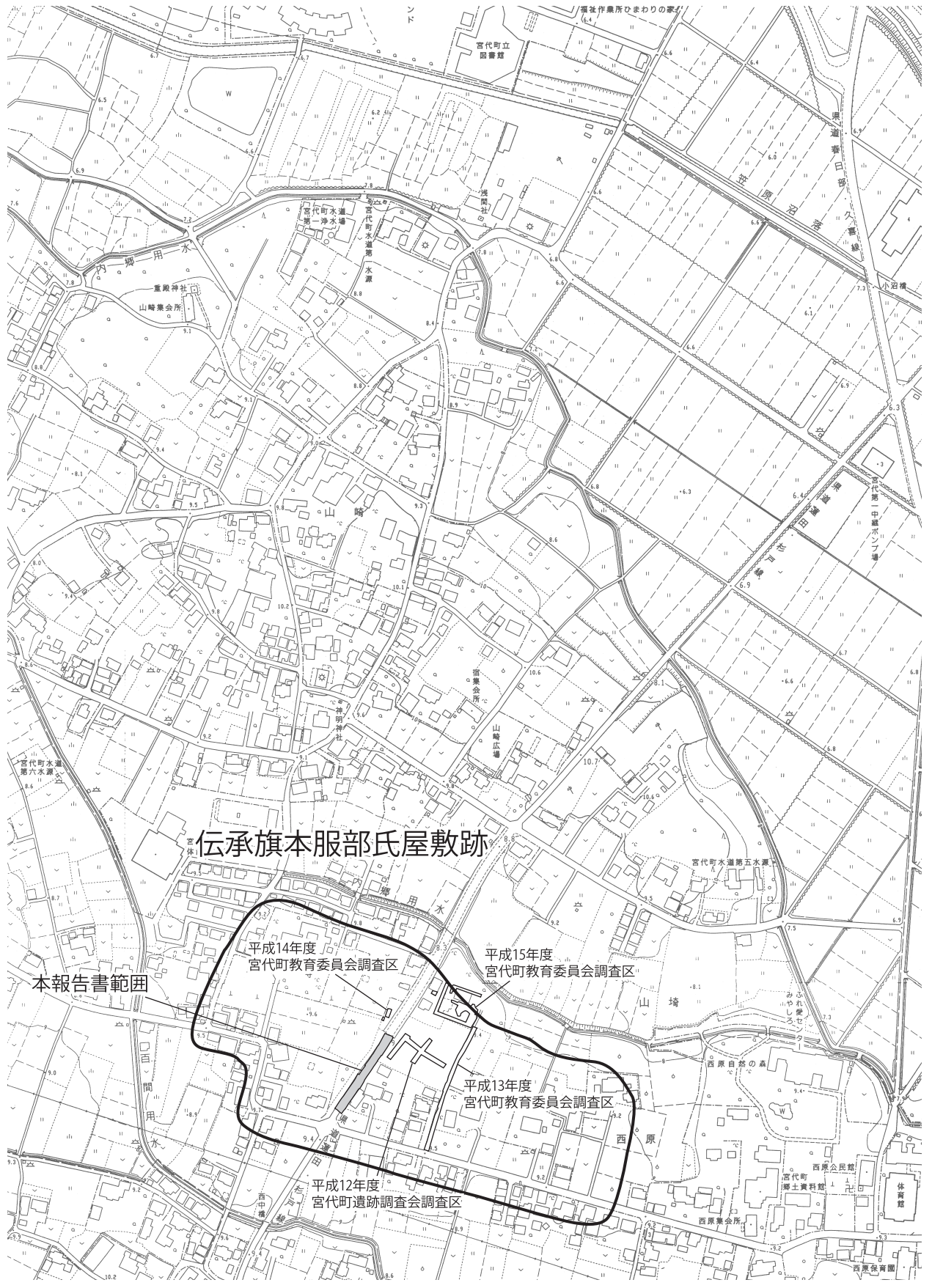
道仏北遺跡の調査は、今回の平成15年度の発掘調査が第1次調査となる。その後、宮代町教育委員会によって、道仏土地区画整理事業に伴う発掘調査が計3回行われている。平成17年度に第2次調査、平成18～19年度に第3次調査、平成20年度に第4次調査となっている。

今回の調査は、遺跡中央部の幅の最も広い部分の2,100m<sup>2</sup>を対象に行った。調査区は、中央部分の標高が最も高く7.0～7.2mで、それぞれ東西へ行くに従い標高は減じ6.4～6.5mとなる。

検出された遺構は、縄文時代前期中葉の住居跡5軒、縄文時代の土壇35基、炉跡2基、近世の井戸跡1基である。

住居跡は、調査区東側の台地縁辺部で3軒（うち2軒は重複する）、中央部で2軒検出された。南に隣接する宮代町教育委員会の第3次調査区（平成18～19年度調査）と合わせると台地縁辺部に沿って直線的に配置されていたと推定される。





伝承旗本服部氏屋敷跡

本報告書範囲

平成14年度  
宮代町教育委員会調査区

平成15年度  
宮代町教育委員会調査区

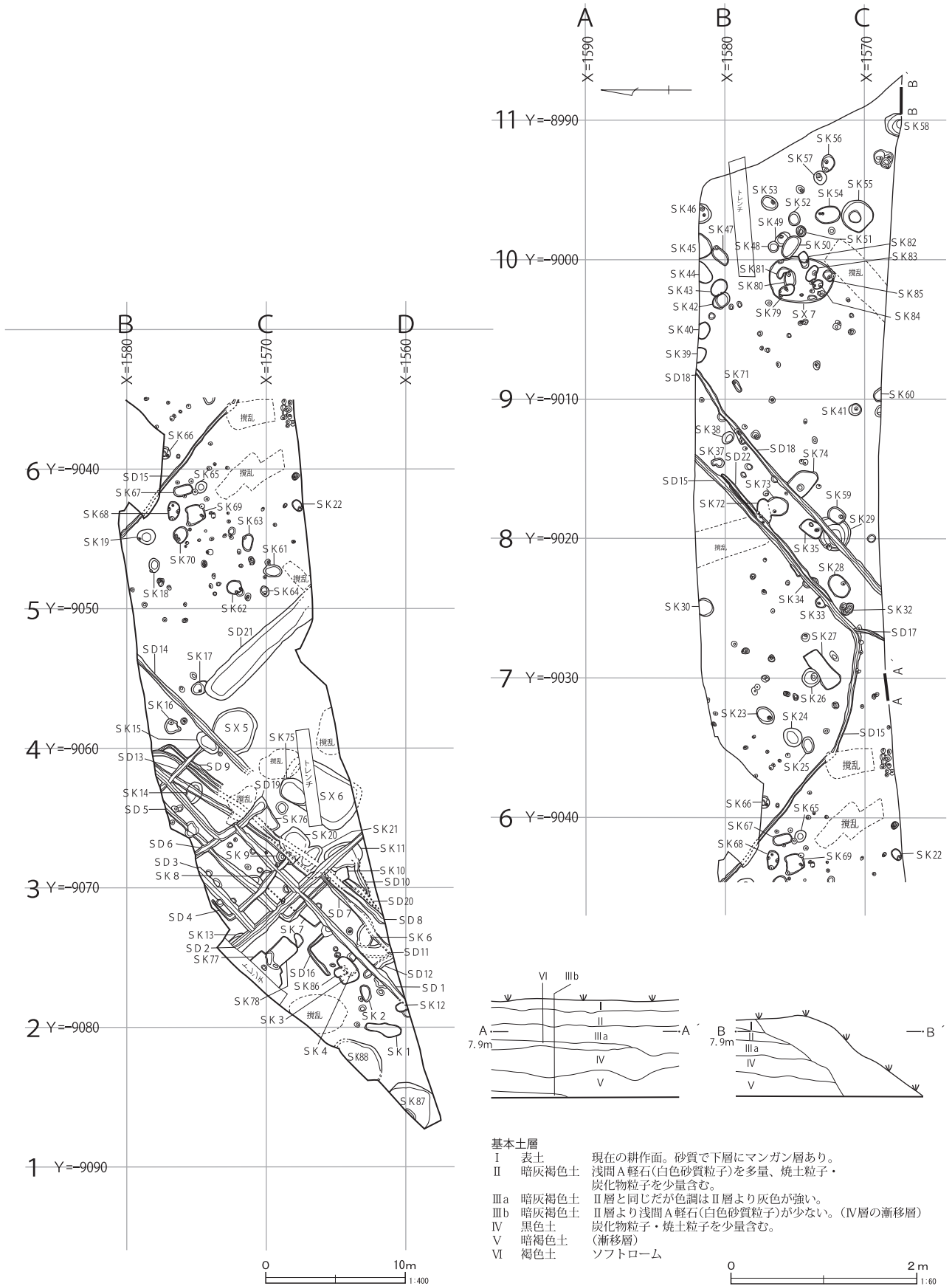
平成13年度  
宮代町教育委員会調査区

平成12年度  
宮代町遺跡調査会調査区

第3図 遺跡位置図







第4図 道仏上遺跡調査区全体図



第 5 図 道仏北遺跡調査区全体図



住居跡の出土土器は、黒浜式中段階から諸磯b式にかけてであり、第4号住居跡からはとりわけ多くの遺物が出土した。また、調査区内では、縄文時代早期から後期にわたる多時期の土器が採集されており、遺構こそ検出されていないが、長期間にわたり人々の生活の痕跡が窺えることが本遺跡の特徴として挙げられよう。調査区東側から検出された3軒の住居跡の周辺からは、多くの土壌が発見され、その中の第36号土壌は、形状から落とし穴状遺構と考えられる。2基の炉跡は調査区西側から検出された。

宮代町教育委員会が発掘調査を行った第2～4次調査の概要についてであるが、平成17年度の第2次調査では、土壌が2基、平成18～19年度の第3次調査では、縄文時代早期後半から前期後半にかけての住居跡21軒、土壌183基、炉穴9基が検出された。また、古墳時代中期の住居跡も1軒発見されており、今後古墳時代の集落が検出される可能性も高い。平成20年度の第4次調査では、縄文時代前期中葉、黒浜式から諸磯b式期を中心とした住居跡14軒などが検出され、多量の遺物が出土した。なお、現在整理作業中のため正式な内容については報告書の刊行を待ちたい。

#### 伝承旗本服部氏屋敷跡（第3・6図）

伝承旗本服部氏屋敷跡は、南埼玉郡宮代町西原に所在し、道仏上、道仏北遺跡の南西約1kmの地点にある。両遺跡とは姫宮落川を挟んで対岸の台地にあたる。この台地は、白岡町や春日部市、さいたま市岩槻区へ続く慈恩寺支台の本体部分であり、宮代町では最も安定した台地である。標高8～11mを測り、数多くの遺跡をのせる。伝承旗本服部氏屋敷跡は、その台地のほぼ中央部、東から西に向かって延びる細い谷の南側に展開する。

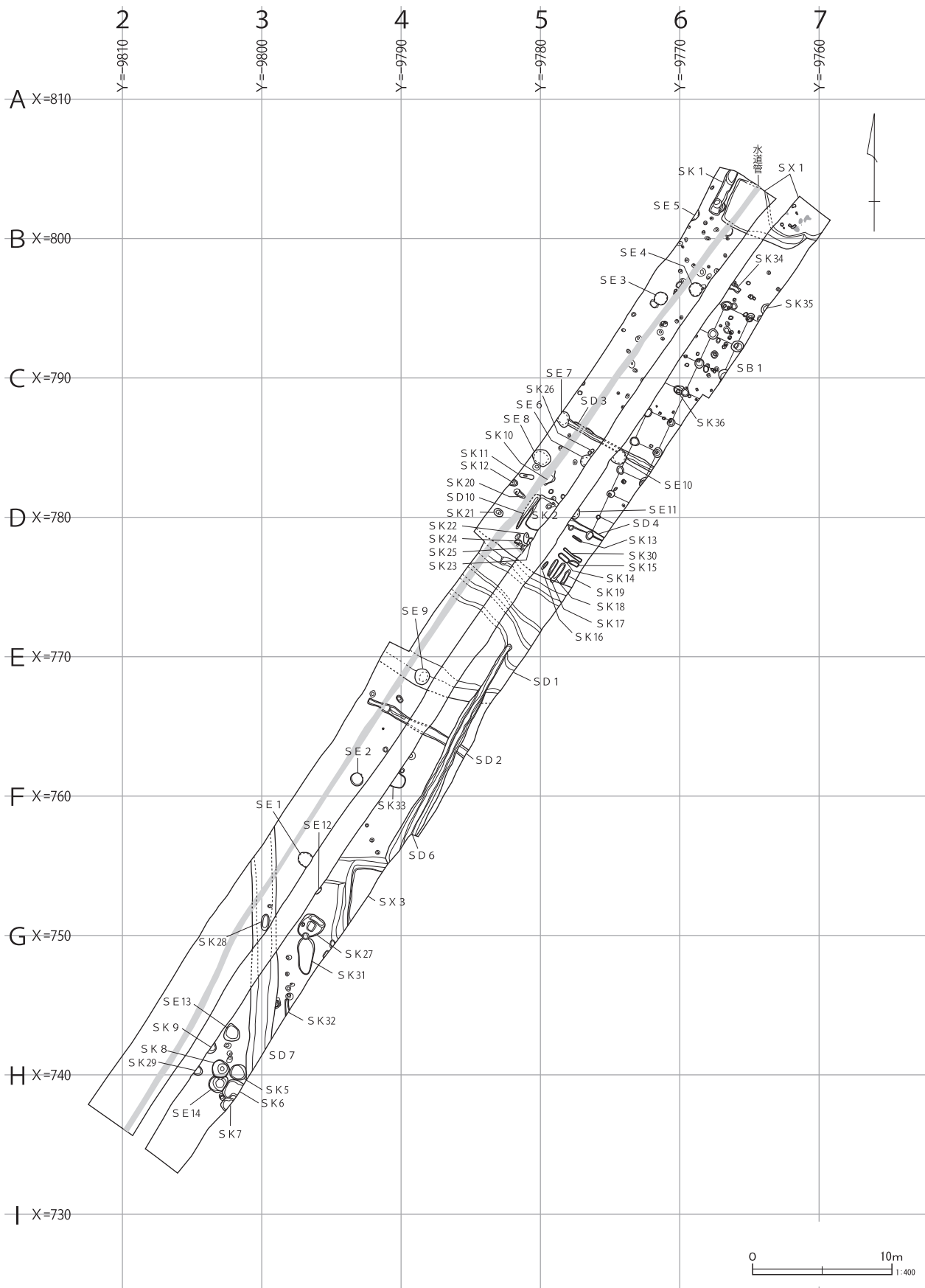
伝承旗本服部氏屋敷跡は、今回の新橋通り線（県道蓮田杉戸線）拡幅工事に先立つ埼玉県教育委員会の試掘調査（平成11年度）で、堀や溝跡などが検出され、その所在が初めて確認された。その翌

年の平成12年度に当事業団で発掘調査が行われ、第1次調査となる。それを受け、宮代町教育委員会では遺跡の範囲確認および性格把握のための学術調査として第2次調査を平成12年度に実施した。平成13年度には宮代町遺跡調査会による町道拡幅工事に伴う第3次調査が、平成15年度には個人住宅建設に先立つ第4次調査が宮代町教育委員会により行われている。これまでの調査では、中世から近世にかけての堀跡や溝跡、土塁、竪穴状遺構、土壌、井戸跡など、多数の遺構が検出され、12世紀後半から18世紀に至る遺物が出土しているが、その中心は、15世紀後半から17世紀と考えられる。

今回の調査は、県道の拡幅に伴うもので、調査区は東西に2分され、便宜上東側調査区、西側調査区と呼称した。検出された遺構は、中・近世の土壌34基、井戸跡14基、掘立柱建物跡1棟、堀跡を含めた溝跡7条、竪穴状遺構2基である。

調査区中央部から発見された第1号溝跡は、上幅約11.8mを測り、旗本服部氏の屋敷を区画していた堀割の一部と推定され、溝跡からは、15世紀後半から16世紀の陶器の破片が出土している。宮代町教育委員会が地籍図をもとに推定した堀割と長方形の区画では、この溝跡は堀割南辺の西寄り部分に当たる。区画の内側と考えられる東西両調査区の北半部からは、第1号掘立柱建物跡や鍛冶工房跡と考えられる第1号竪穴状遺構、他に多くの井戸跡が検出されている。掘立柱建物跡からは、遺物が出土しなかったため建物の時期は不明であるが、第1号竪穴状遺構からは、瀬戸産の皿や播鉢が出土しており16世紀と考えられる。

伝承旗本服部氏屋敷跡は、これまでの調査成果から東西に隣接して立地していた西原遺跡、青林寺遺跡と同一遺跡とされ、両遺跡を統合して現在の範囲に至っている。また、現在東に隣接する地藏院遺跡からも中・近世の遺構や遺物が多数検出されており、同一の遺跡と考えられる。



第 6 図 伝承旗本服部氏屋敷跡調査区全体図

第2表 遺構番号新旧対照表

道仏上遺跡						道仏北遺跡			伝承旗本服部氏屋敷跡		
新	時期	旧	新	時期	旧	新	時期	旧	新	時期	旧
SK 1	近世	SK 1	SK68	近世	SK68	SJ 1	縄文	SJ 1	SK 1	中近世	SK 1
SK 2	近世	SK 2	SK69	近世	SK69	SJ 2	縄文	SJ 2	SK 2	中近世	SK 2
SK 3	近世	SK 3	SK70	近世	SK70	SJ 3	縄文	SJ 3	欠番		SK 3
SK 4	近世	SK 4	SK71	近世	SK71	SJ 4	縄文	SJ 4	欠番		SK 4
欠番		SK 5	SK72	近世	SK72	SJ 5	縄文	SJ 1	SK 5	中近世	SK 5
SK 6	近世	SK 6	SK73	近世	SK73	SK 1	縄文	SK 1	SK 6	中近世	SK 6
SK 7	近世	SK 7	SK74	近世	SK74	SK 2	縄文	SK 2	SK 7	中近世	SK 7
SK 8	近世	SK 8	SK75	近世	SK75	SK 3	縄文	SK 3	SK 8	中近世	SK 8
SK 9	近世	SK 9	SK76	近世	SK76	SK 4	縄文	SK 4	SK 9	中近世	SK 9
SK10	近世	SK10	SK77	近世	SX 3	SK 5	縄文	SK 5	SK10	中近世	無名土壇
SK11	近世	SK11	SK78	近世	SX 3	SK 6	縄文	SK 6	SK11	中近世	無名土壇
SK12	近世	SK12	SK79	近世	SK79	SK 7	縄文	SK 7	SK12	中近世	無名土壇
SK13	縄文	SK13	SK80	近世	SK80	SK 8	縄文	SK 8	SK13	中近世	無名土壇
SK14	縄文	SK14	SK81	近世	SK81	SK 9	縄文	SK 9	SK14	中近世	無名土壇
SK15	近世	SK15	SK82	近世	SK82	SK10	縄文	SK10	SK15	中近世	無名土壇
SK16	近世	SK16	SK83	近世	SK83	SK11	縄文	SK11	SK16	中近世	無名土壇
SK17	近世	SK17	SK84	近世	SK84	SK12	縄文	SK12	SK17	中近世	無名土壇
SK18	近世	SK18	SK85	近世	SK85	SK13	縄文	SK13	SK18	中近世	無名土壇
SK19	近世	SK19	SK86	近世	P 9	SK14	縄文	SK14	SK19	中近世	無名土壇
SK20	近世	SK20	SK87	近世	SX 1	SK15	縄文	SK15	SK20	中近世	無名土壇
SK21	近世	SK21	SK88	近世	SX 2	SK16	縄文	SK16	SK21	中近世	無名土壇
SK22	近世	SK22	B-7G P16	不明	SK31	SK17	縄文	SK17	SK22	中近世	無名土壇
SK23	近世	SK23	C-5G P 5	不明	SK36	SK18	縄文	SK18	SK23	中近世	無名土壇
SK24	近世	SK24	SD 1	近世	SD 1	SK19	縄文	SK19	SK24	中近世	無名土壇
SK25	近世	SK25	SD 2	近世	SD 2	SK20	縄文	SK20	SK25	中近世	無名土壇
SK26	近世	SK26	SD 3	近世	SD 3	SK21	縄文	SK21	SK26	中近世	無名土壇
SK27	近世	SK27	SD 4	近世	SD 4	SK22	縄文	SK22	SK27	中近世	無名土壇
SK28	近世	SK28	SD 5	近世	SD 5	SK23	縄文	SK23	SK28	中近世	無名土壇
SK29	縄文	SK29	SD 6	近世	SD 6	SK24	縄文	SK24	SK29	中近世	無名土壇
SK30	縄文	SK30	SD 7	近世	SD 7	SK25	縄文	SK25	SK30	中近世	無名土壇
SK32	近世	SK32	SD 8	近世	SD 8	SK26	縄文	SK26	SK31	中近世	無名土壇
SK33	近世	SK33	SD 9	近世	SD 9	SK27	縄文	SK27	SK32	中近世	無名土壇
SK34	近世	SK34	SD10	近世	SD10	SK28	縄文	SK28	SK33	中近世	無名土壇
SK35	近世	SK35	SD11	近世	SD11	欠番		SK29	SK34	中近世	無名土壇
SK37	近世	SK37	SD12	近世	SD12	SK30	縄文	SK30	SK35	中近世	無名土壇
SK38	近世	SK38	SD13	近世	SD13	SK31	縄文	SK31	SK36	中近世	無名土壇
SK39	近世	SK39	SD14	近世	SD14	SK32	縄文	SK32	SE 1	中近世	SE 1
SK40	近世	SK40	SD15	近世	SD15	SK33	縄文	SK33	SE 2	中近世	SE 2
SK41	近世	SK41	SD16	近世	SD16	SK34	縄文	SK34	SE 3	中近世	SE 3
SK42	近世	SK42	SD17	近世	SD17	SK35	縄文	SK35	SE 4	中近世	SE 4
SK43	近世	SK43	SD18	近世	SD18	SK36	縄文	SK36	SE 5	中近世	SE 5
SK44	近世	SK44	SD19	近世	SD 6	炉跡 1	縄文	炉跡 1	SE 6	中近世	SE 6
SK45	近世	SK45	SD20	近世	SD 9	炉跡 2	縄文	炉跡 2	SE 7	中近世	SE 7
SK46	近世	SK46	SD21	近世	SX 4	SE 1	近世	SE 1	SE 8	中近世	SE 8
SK47	近世	SK47	SD22	近世	SD15				SE 9	中近世	SE 9
SK48	近世	SK48							SE10	中近世	SE10
SK49	近世	SK49	SX 5	近世	SX 5				SE11	中近世	SE11
SK50	近世	SK50	SX 6	近世	SX 6				SE12	中近世	SE12
SK51	近世	SK51	SX 7	近世	SX 7				SE13	中近世	SE13
SK52	近世	SK52							SE14	中近世	SE14
SK53	近世	SK53							SB 1	中近世	SB 1
SK54	近世	SK54							ピット	中近世	SB 2
SK55	近世	SK55							SD 1	中近世	SD 1
SK56	近世	SK56							SD 2	中近世	SD 2
SK57	近世	SK57							SD 3	中近世	SD 3
SK58	縄文	SK58							SD 4	中近世	SD 4
SK59	近世	SK59							SD 3	中近世	SD 5
SK60	近世	SK60							SD 6	中近世	SD 6
SK61	近世	SK61							SD 7	中近世	SD 7
SK62	近世	SK62							SX 3	中近世	SD 8
SK63	近世	SK63							SD 2	中近世	SD 9
SK64	近世	SK64							SD10	中近世	無名溝跡
SK65	近世	SK65							SX 1	中近世	SX 1
SK66	近世	SK66							欠番		SX 2
SK67	近世	SK67							SX 3	中近世	SX 3



# Ⅳ 道仏上遺跡の遺構と遺物

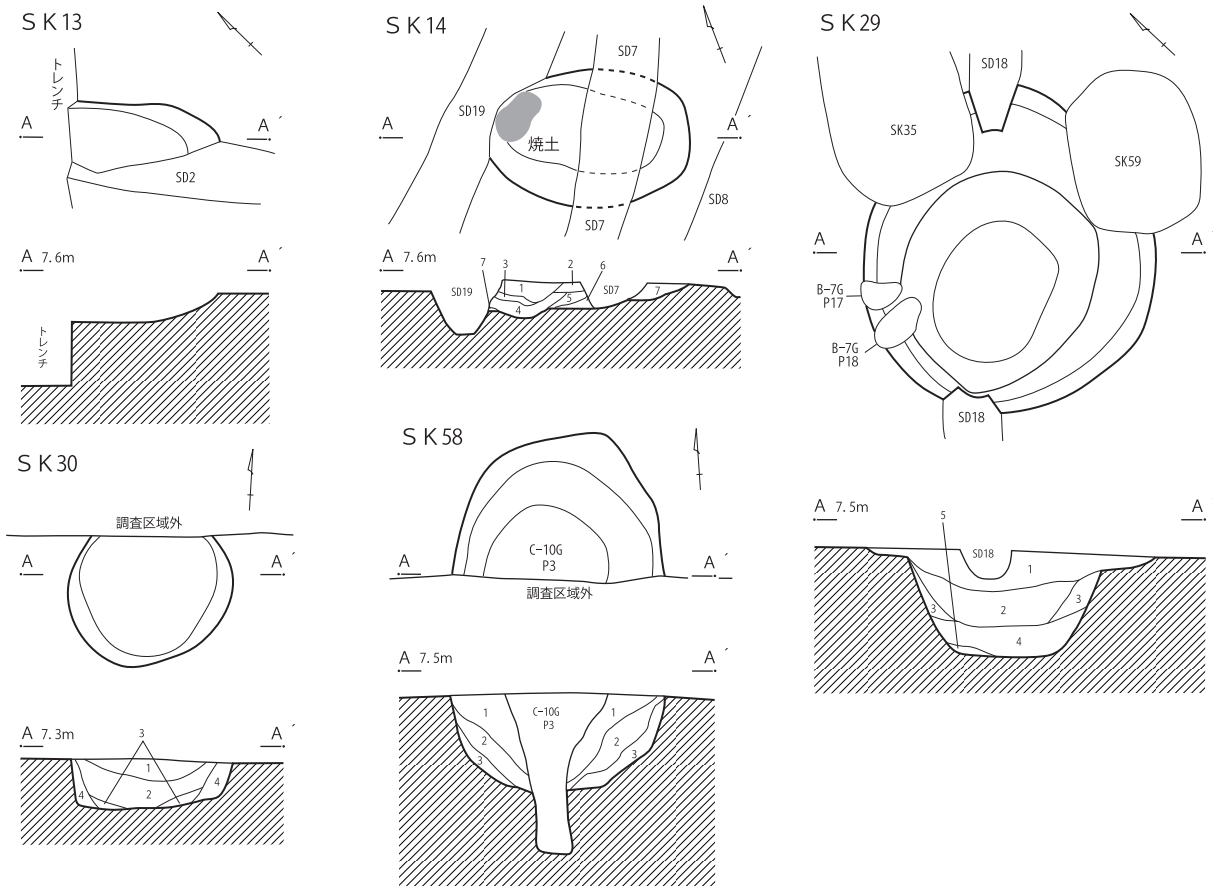
## 1. 縄文時代の遺構と遺物

### (1) 土壌

縄文時代の土壌は5基検出された。検出グリッド、規模などは第3表を参照されたい。

第13号土壌は、調査区北西端のB-2グリッドに位置する。平面形態は楕円形と思われるが、第2号溝跡に壊されており全容は把握できない。遺物は縄文土器が6点出土したが、小片のため時期

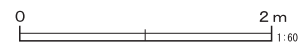
第13号土壌 (第7図)



- SK-14
- 1 黒褐色土 炭化物粒子を微量、白色微粒子を少量含む。
  - 2 黒褐色土 炭化物粒子を微量に含む。
  - 3 暗褐色土 ロームブロック、焼土粒子・白色微粒子を微量に含む。
  - 4 暗褐色土 ロームブロック、焼土粒子・焼土ブロックを少量、炭化物粒子を微量に含む。
  - 5 黒褐色土 炭化物粒子を少量、焼土粒子を微量に含む。
  - 6 暗褐色土 ローム粒子を多量、焼土粒子を微量に含む。
  - 7 黒褐色土 ロームブロック、炭化物粒子を少量含む。
- SK-29
- 1 黒褐色土 白色微粒子を微量、酸化鉄を多量に含む。しまりあり
  - 2 黒褐色土 酸化鉄を多量に含む。
  - 3 黄褐色土 ローム粒子・酸化鉄を少量含む。
  - 4 暗褐色土 ローム粒子・酸化鉄を多量に含む。
  - 5 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。

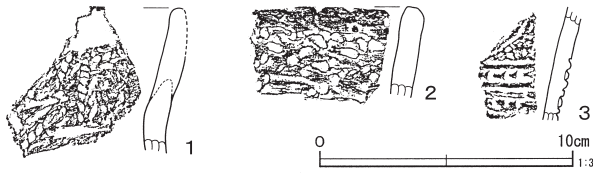
- SK-30
- 1 暗褐色土 ロームブロックを微量、白色微粒子を少量、酸化鉄をやや多量に含む。
  - 2 灰色暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子・炭化物粒子・白色微粒子・酸化鉄を少量含む。
  - 3 暗褐色土 ロームブロック・酸化鉄を少量、白色微粒子を微量に含む。しまりなし
  - 4 黄褐色土 ロームブロックを多量、暗褐色土・酸化鉄を少量含む。しまりなし
- SK-58
- 1 灰褐色土 炭化物粒子・酸化鉄を少量、白色微粒子を微量に含む。
  - 2 褐色土 ローム粒子・炭化物粒子・酸化鉄を少量含む。
  - 3 黄褐色土 ローム粒子を多量に含む。粘性あり

第7図 縄文時代の土壌



第3表 縄文時代の土壌計測表

遺構名	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方位	形状	備考
SK13	B-2	(1.20)	(0.48)	0.21	N-44°-W	(楕円形)	
SK14	B-3	(1.55)	1.12	0.30	N-59°-W	楕円形	
SK29	B-7・8	2.61	2.32	0.81	N-40°-E	円形	
SK30	A-7	1.32	(1.02)	0.20	N-87°-E	円形	
SK58	C-10・11	1.66	(1.16)	0.72	N-85°-W	(楕円形)	



第8図 第29号土壙出土遺物

不明である。

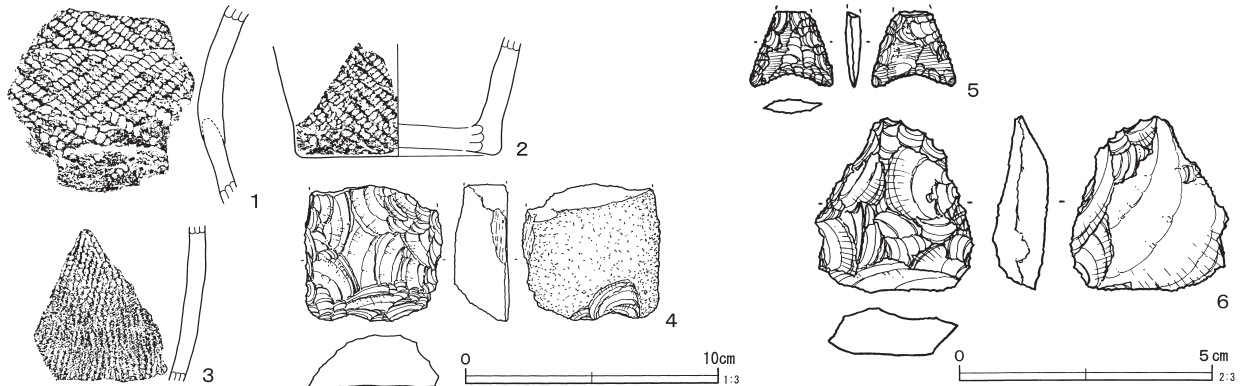
#### 第14号土壙 (第7図)

第14号土壙は、B-3グリッドに位置し、西部と中央部をそれぞれ第7、19号溝跡に壊されている。土壙西寄りの中層から焼土が検出されており、底面はわずかに凹み、焼けていた。炉穴と考えられる。遺物は、縄文土器小片が1点出土したのみである。

#### 第29号土壙 (第7・8図)

第29号土壙は、B-7・8グリッドに位置する。中央部を第18号溝跡が貫通し、一部を第35、59号土壙に壊されている。平面形態は円形を呈し、掘り方は0.8mあまりと深く、底面は平坦である。覆土下層は、ロームを多量に含み人為的に埋め戻され、上層は自然堆積と考えられる。

遺物は黒浜式土器が17点出土したが、小片で摩耗が著しいため、図示できたのは3点のみである。1、2は口縁部の破片で、1は単節RLを横位と斜位に施文する。2は縄文施文と思われるが判然としない。3は半截竹管を使用した爪形文を施す。



第9図 遺構外出土遺物 (1)

第4表 石器計測表

挿図番号	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	
9	4	表採	打製石斧	ホルンフェルス	5.4	5.4	2.2	81.5	上部欠損
9	5	B-3	石鏃	黒曜石	1.5	1.7	0.3	0.6	
9	6	B-8	石鏃	玉髄	3.5	3.1	1.0	10.8	未製品

#### 第30号土壙 (第7図)

第30号土壙は、A-7グリッドに位置する。北端部が調査区外であるが、ほぼ円形を呈する。底面は概ね平坦で、覆土の様相は自然堆積と考えられる。遺物は、早期条痕文系土器が4点出土した。

#### 第58号土壙 (第7図)

第58号土壙は、調査区南東端のC-10・11グリッドに位置する。南半部が調査区外のため全容は不明であるが、平面形態は円形もしくは楕円形を呈すると思われる。掘り方は第29号土壙に近似するが、若干播鉢型を呈する。覆土は自然堆積と考えられる。遺物は、黒浜式土器が1点出土した。

#### (2) 遺構外出土遺物 (第9図)

遺構外からわずかであるが、縄文時代の遺物が採集された。土器、石器ともに3点ずつ図示した。

1、2は、関山式と思われる破片である。1は胴部で、単節RLとLRで羽状構成をとる。下半には成形痕が確認できる。3は、諸磯a式土器の胴部破片である。

4は、打製石斧である。上半部を欠損する。裏面に自然面を残し、正面が側縁からの剝離によって横断面が蒲鉾状を呈している。5は、石鏃である。先端部を欠損する。基部に浅い抉りが入っており、両面に研磨が施されている。6は、石鏃の未製品と思われる。

## 2. 近世の遺構と遺物

### (1) 土壌

近世の土壌は、調査区全域から合計80基検出されたが、その検出位置などに際立った特徴はみられなかった。

また、検出されたこれら80基の土壌は、近世の所産としたが、遺物の出土がみられた土壌はわずか14基のみで、残り66基からは遺物が確認されなかった。遺物の出土がみられた14基の土壌のうち、近世の遺物が確認できたのは、第11号土壌、第20号土壌、第87号土壌、第88号土壌の4基のみであった。他の10基（第2号土壌、第7号土壌、第22号土壌、第49号土壌、第50号土壌、第52号土壌、第55号土壌、第59号土壌、第66号土壌、第67号土壌）からは、縄文土器の破片が出土した。これら10基の土壌は、平面形態や堆積土の様相から縄文時代の遺構ではなく、検出された遺物は流れ込みによるものと判断した。

このように、確実に近世に所属する土壌は、4基のみであるが、平面形態や堆積土層の様子から、他の土壌も恐らく近世以降の所産と考えてよいだろう。

今回は、近世の遺物を出土した土壌についてふれることとする。なお、他の土壌については、第5表の計測表を参照されたい。

#### 第11号土壌（第10・17図）

C-3グリッドに位置し、第10号土壌、および第2、10号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態は、隅丸長方形に近い楕円形を呈する。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。長軸2.64m、短軸1.72mと規模は大きく、深さが0.46mと浅いが、室の可能性が考えられる。

出土遺物は、第17図1、2に図示した肥前系の磁器丸皿と焙烙の2点である。年代は、1が18世紀から19世紀代、2が18世紀末から19世紀にかけてである。

#### 第20号土壌（第11・17図）

C-3グリッドに位置し、第9、21号土壌、および第7、8号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態は、やや歪みはあるもののほぼ隅丸方形を呈する。底面は概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物は、第17図3～6に示した陶磁器類が出土した。5の陶器播鉢と6の陶器製甕は、19世紀代の所産である。

#### 第87号土壌（第16・17・18・19図）

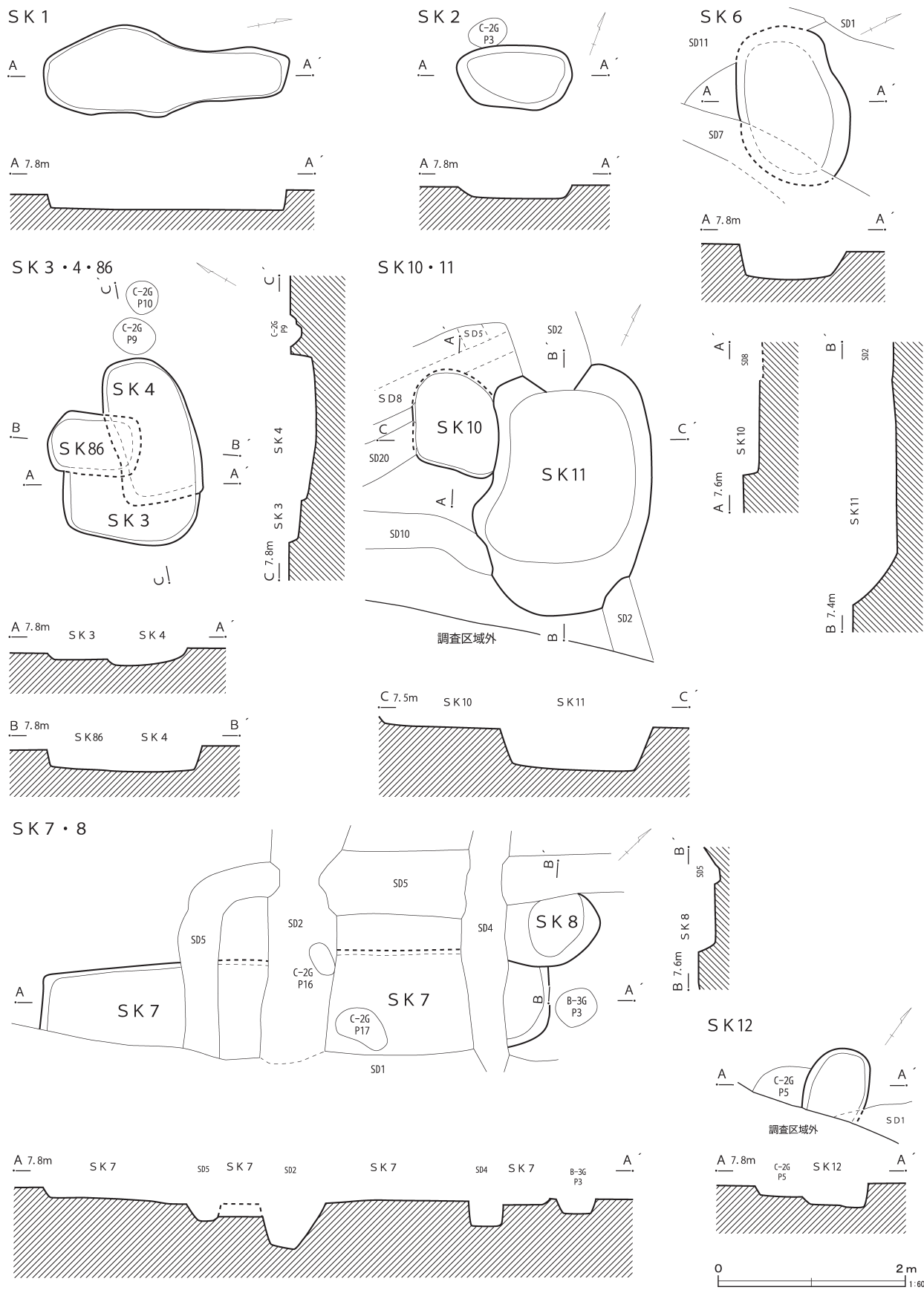
調査区南西端のC・D-1グリッドに位置する。西および南側が調査区域外にあたるため、全容は不明であるが、平面形態は円形あるいは楕円形を呈すると思われる。確認できた範囲の規模だけでも、長軸3.84m、短軸2.18mと非常に大規模で、掘り込みの深さも中央部の段差分を含めると1m近くを測る。底面は平坦で、中央部と思われる部分に長軸1.0m、短軸0.3m以上、深さ0.2mの楕円形の段差を持つ。壁の立ち上がりは、北東と南東部分がほぼ直立するが、その間は緩やかに立ち上がる。用途は、その規模から室の可能性が考えられるが、出土遺物の多さから廃棄土壌とも推定される。

出土遺物は、第17、18、19図7～27に図示した21点が出土した。今回検出された土壌の中で最もまとまった出土量を誇り、種類も陶磁器類、焙烙、瓦、石製品と多種多様にわたる。11の燈明皿、12～14の陶器製甕・鉢、15の播鉢、22の火鉢は18から19世紀代、16～21の焙烙は18世紀末から19世紀代、23～25の瓦は江戸期の所産である。

#### 第88号土壌（第16・19図）

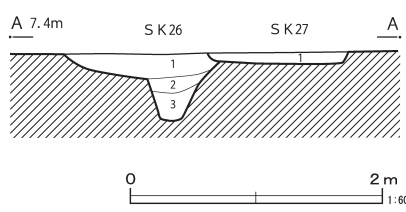
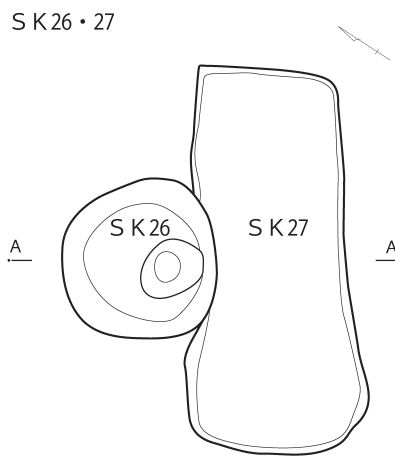
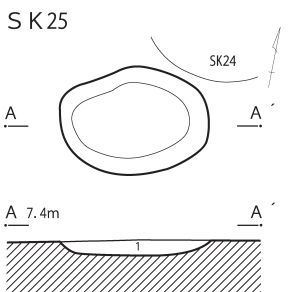
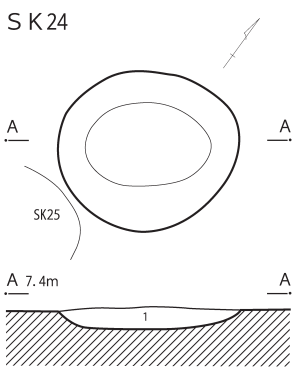
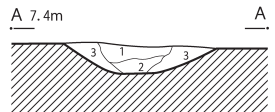
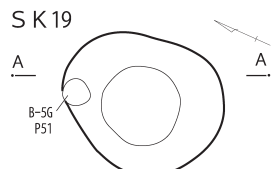
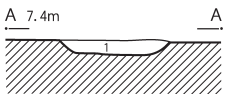
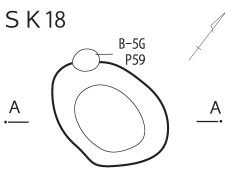
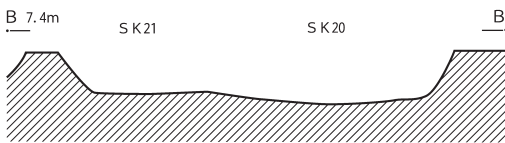
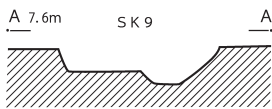
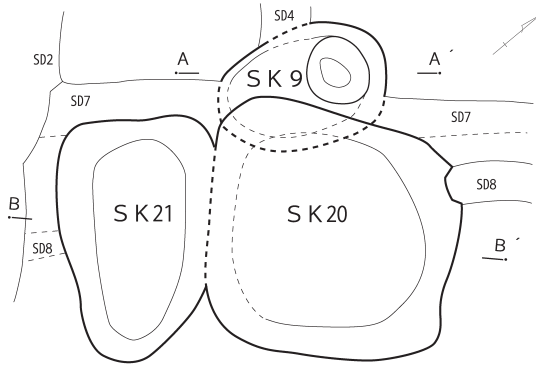
C-1グリッドに位置し、第87号土壌のすぐ北東部で検出された。第87号土壌同様、西半部が調査区域外となるため、全容は不明であるが、概ね楕円形を呈するものと考えられる。規模は、長軸4.04m以上、短軸1.90m以上、深さ0.28mを測る。



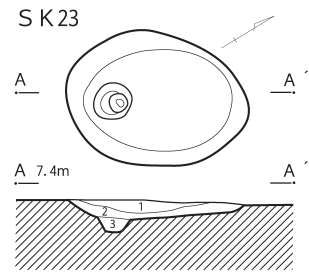
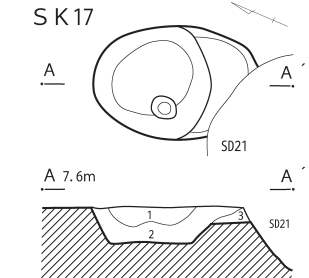
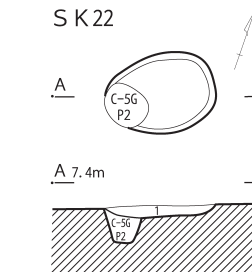
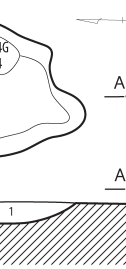
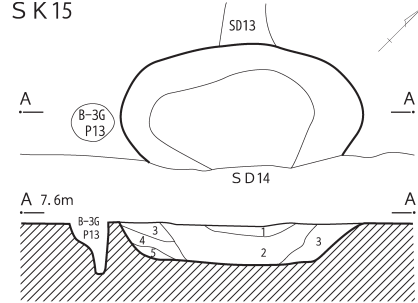


第10図 近世の土壌 (1)

SK 9・20・21

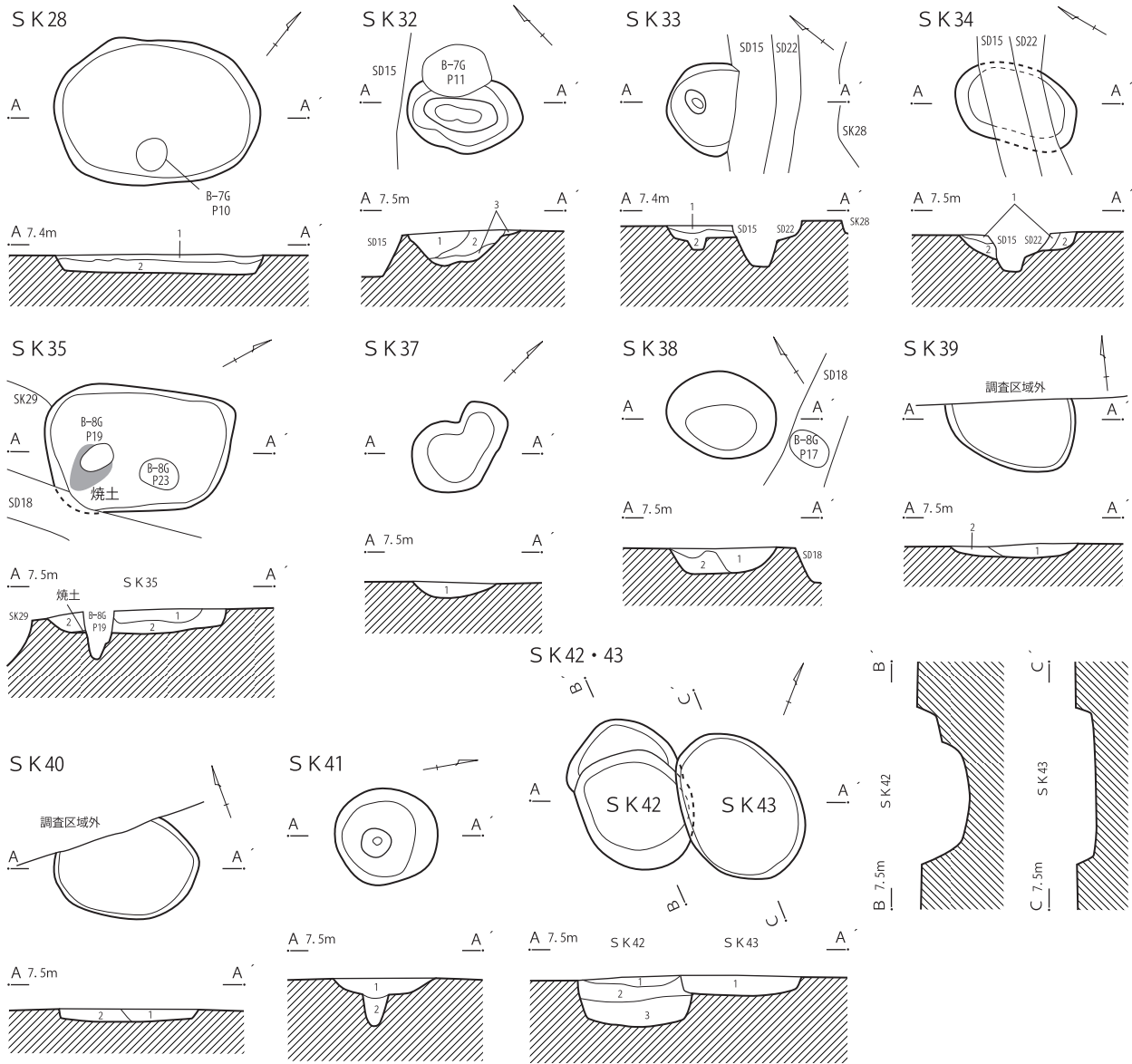


SK 15



- SK-15
  - 1 暗褐色土 炭化物粒子を微量、白色微粒子を少量含む。しまりなし
  - 2 暗褐色土 炭化物粒子を少量、白色微粒子を微量に含む。しまりあり
  - 3 褐色土 ローム粒子を多量、白色微粒子を微量に含む。しまりあり
  - 4 褐色土 しまりあり
  - 5 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- SK-16
  - 1 褐色土 白色微粒子を少量、酸化鉄を多量に含む。
- SK-17
  - 1 暗褐色土 白色微粒子を少量、酸化鉄を含む。しまりあり
  - 2 褐色土 ロームブロックを少量、炭化物粒子を少量含む。
  - 3 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- SK-18
  - 1 暗褐色土 ロームブロック・白色微粒子を少量、炭化物粒子を微量に含む。
- SK-19
  - 1 暗褐色土 炭化物粒子を少量、白色微粒子を微量に含む。
  - 2 褐色土 炭化物粒子を微量、黄褐色土粒子を少量含む。
  - 3 黄褐色土 ロームブロックを少量、炭化物粒子を微量に含む。
- SK-22
  - 1 褐色土 ロームブロックを多量、白色微粒子を微量、酸化鉄を多量に含む。しまりあり
- SK-23
  - 1 暗褐色土 ローム粒子、炭化物粒子・白色微粒子を少量、酸化鉄を多量に含む。
  - 2 暗褐色土 ロームブロック・酸化鉄を少量、白色微粒子を微量に含む。しまりなし
  - 3 褐色土 ロームブロック・酸化鉄を少量含む。しまりなし
- SK-24
  - 1 暗褐色土 炭化物粒子を微量、白色微粒子を少量、酸化鉄を多量に含む。しまりなし
- SK-25
  - 1 黄褐色土 ロームブロックを多量、白色微粒子・酸化鉄を少量含む。
- SK-26
  - 1 暗褐色土 ローム粒子・白色微粒子を微量、酸化鉄を多量に含む。しまりなし
  - 2 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子を少量、酸化鉄を多量に含む。しまりなし
  - 3 暗褐色土 酸化鉄を少量含む。しまりなし
- SK-27
  - 1 暗褐色土 白色微粒子を微量に含む。

第11図 近世の土壌 (2)



SK-28

- 1 黒褐色土 黒褐色砂質土を主体として、炭化物粒子を微量、白色砂微粒子を少量、酸化鉄をやや多量に含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを多量、白色微粒子を少量、酸化鉄をやや多量に含む。しまりなし

SK-32

- 1 黒褐色土 白色微粒子を少量、酸化鉄をやや多量に含む。しまり弱
- 2 灰褐色土 ロームブロック・白色微粒子・酸化鉄を少量含む。しまりあり
- 3 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロックを多量、酸化鉄を少量含む。しまり・粘性あり

SK-33

- 1 暗褐色土 暗褐色砂質土を主体として、白色微粒子を少量、酸化鉄をやや多量に含む。
- 2 黄褐色土 ロームブロックを主体として、暗褐色土、酸化鉄を少量含む。しまりなし

SK-34

- 1 灰褐色土 灰褐色砂質土を主体として、酸化鉄を微量に含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを少量、酸化鉄を微量に含む。

SK-35

- 1 暗褐色土 白色微粒子を少量、酸化鉄をやや少量含む。しまりあり
- 2 暗褐色土 ローム粒子・白色微粒子を少量、酸化鉄をやや少量含む。粘性あり

SK-37

- 1 暗褐色土 ローム粒子を多量、白色微粒子・酸化鉄を少量含む。しまりあり

SK-38

- 1 暗褐色土 ロームブロック・酸化鉄を少量、白色微粒子を微量に含む。
- 2 黄褐色土 ローム粒子を多量、白色微粒子・酸化鉄を微量に含む。しまりなし

SK-39

- 1 暗褐色土 ローム粒子を少量、白色微粒子を微量、酸化鉄を多量に含む。しまりあり
- 2 暗褐色土 ローム粒子・酸化鉄を少量、白色微粒子を微量に含む。

SK-40

- 1 黒褐色土 炭化物粒子・酸化鉄を少量、白色微粒子を微量に含む。しまりあり
- 2 黄褐色土 ローム粒子を多量、白色微粒子を微量、酸化鉄を少量含む。しまりあり

SK-41

- 1 褐色土 炭化物粒子・白色微粒子を微量、酸化鉄をやや多量に含む。しまりあり
- 2 暗褐色土 白色微粒子を微量に含む。しまりなし

SK-42

- 1 暗褐色土 白色微粒子を微量、酸化鉄をやや多量に含む。しまりあり
- 2 暗褐色土 白色微粒子・黒色土を微量、酸化鉄をやや多量に含む。
- 3 暗黄褐色土 暗褐色土ブロック・黄褐色土微粒子を少量含む。しまりなし

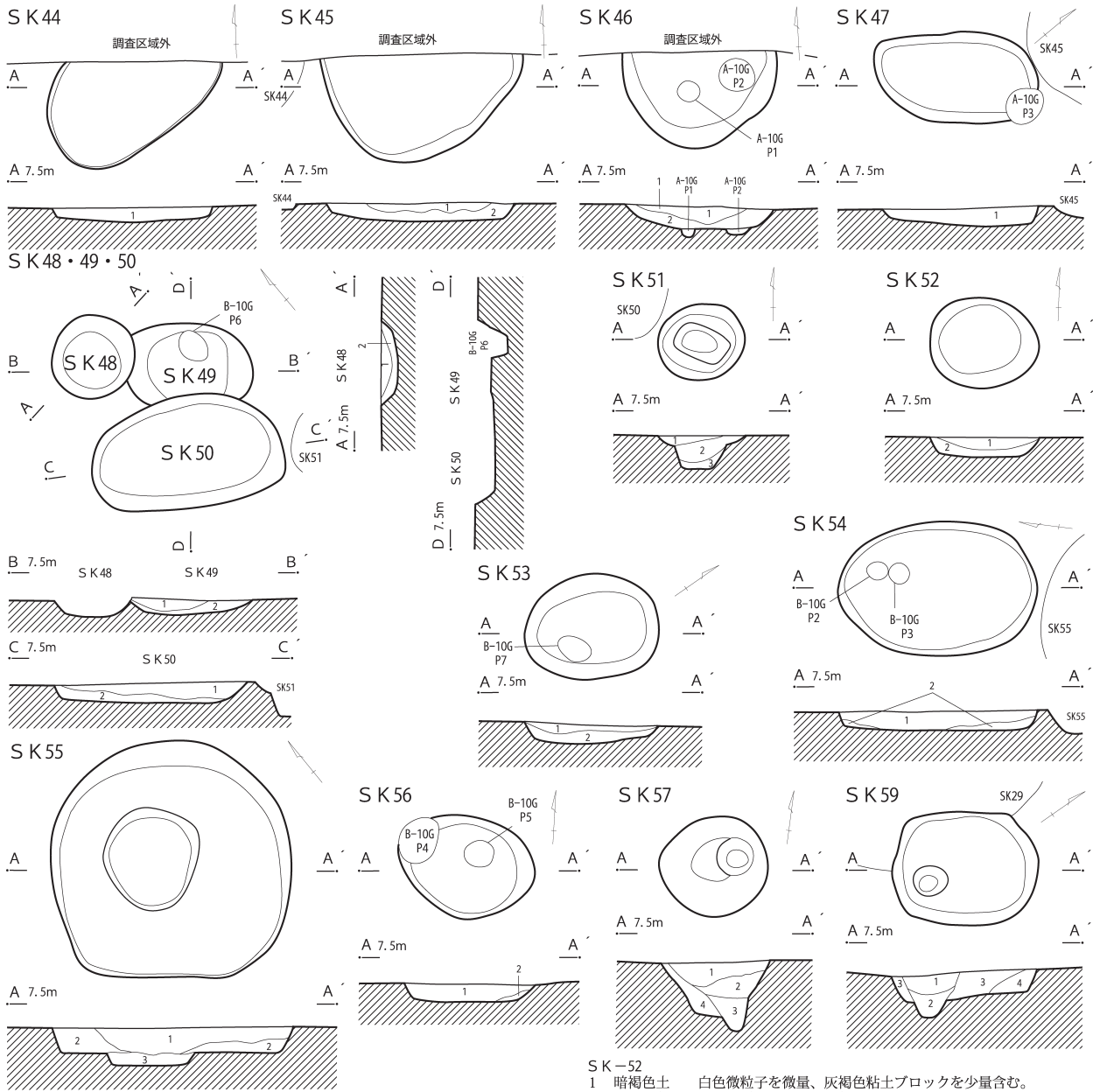
SK-43

- 1 黄褐色土 ロームブロックを多量・酸化鉄をやや多量、白色微粒子を微量に含む。しまりあり



第12図 近世の土壌 (3)

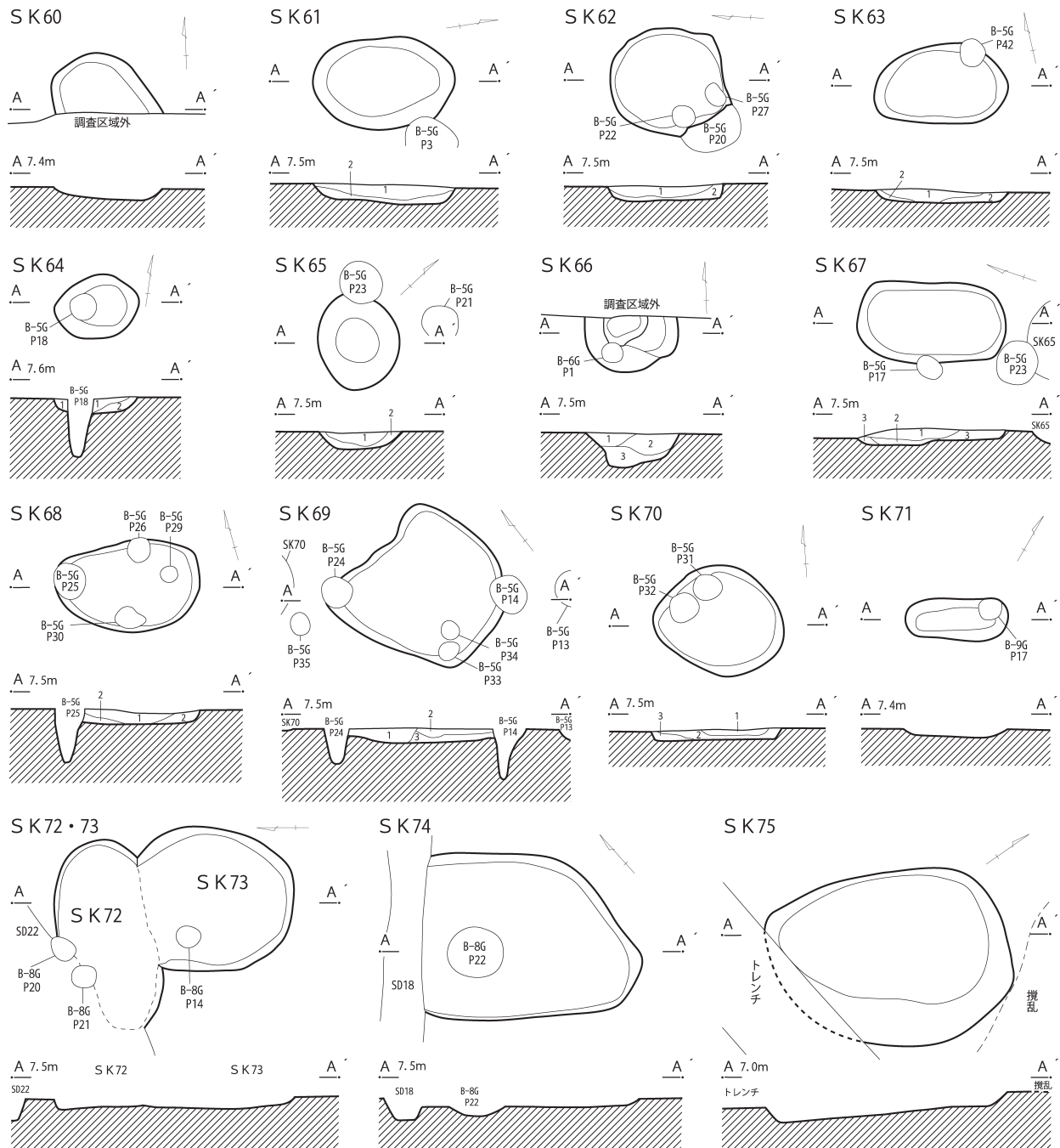




- SK-44  
1 暗褐色土 白色微粒子・褐色土ブロックを少量含む。
- SK-45  
1 暗褐色土 炭化物粒子を微量、白色微粒子を少量含む。  
2 暗黄褐色土 ローム粒子を多量に含む。
- SK-46  
1 暗褐色土 白色微粒子・褐色土ブロックを少量含む。  
2 暗褐色土 灰褐色粘土ブロックを少量含む。
- SK-47  
1 暗褐色土 炭化物粒子を微量、白色微粒子を少量含む。
- SK-48  
1 暗褐色土 白色微粒子・褐色土ブロックを少量含む。  
2 暗黄褐色土 ローム粒子を多量、白色微粒子を微量に含む。
- SK-49  
1 暗褐色土 炭化物粒子・白色微粒子を少量含む。  
2 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- SK-50  
1 暗褐色土 炭化物粒子を微量、白色微粒子・褐色土ブロックを少量含む。  
2 暗黄褐色土 ロームブロックを少量含む。
- SK-51  
1 暗褐色土 白色微粒子を少量含む。  
2 暗褐色土 炭化物粒子を少量、白色微粒子を微量に含む。  
3 暗褐色土 暗褐色土ブロックを少量含む。

- SK-52  
1 暗褐色土 白色微粒子を微量、灰褐色粘土ブロックを少量含む。  
2 暗黄褐色土 ロームブロック・黄褐色土微粒子を少量含む。
- SK-53  
1 暗褐色土 白色微粒子を少量、褐色土粒子を多量に含む。  
2 暗褐色土 ローム粒子を少量、灰褐色粒子を多量に含む。
- SK-54  
1 暗褐色土 炭化物粒子を微量、白色微粒子を少量含む。  
2 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- SK-55  
1 暗褐色土 炭化物粒子を微量、白色微粒子を少量含む。  
2 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。  
3 暗褐色土 ロームブロックを少量、炭化物粒子を微量に含む。
- SK-56  
1 暗褐色土 炭化物粒子・白色微粒子を少量含む。  
2 暗黄褐色土 灰褐色粘土ブロックを少量、黄褐色土粒子を多量に含む。
- SK-57  
1 暗褐色土 炭化物粒子を微量、白色微粒子を少量含む。  
2 暗褐色土 ロームブロック・灰褐色粘土ブロックを少量含む。  
3 暗褐色土 ロームブロックを少量、褐色土ブロックを多量に含む。  
4 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- SK-59  
1 暗褐色土 白色微粒子・暗褐色土粒子・黄褐色微粒子を少量含む。  
2 暗褐色土 暗褐色土ブロック多量、灰褐色粘土ブロックを少量含む。  
3 暗褐色土 ローム粒子・暗褐色土ブロックを少量含む。  
4 暗黄褐色土 ロームブロックを多量、灰褐色粘土を少量含む。

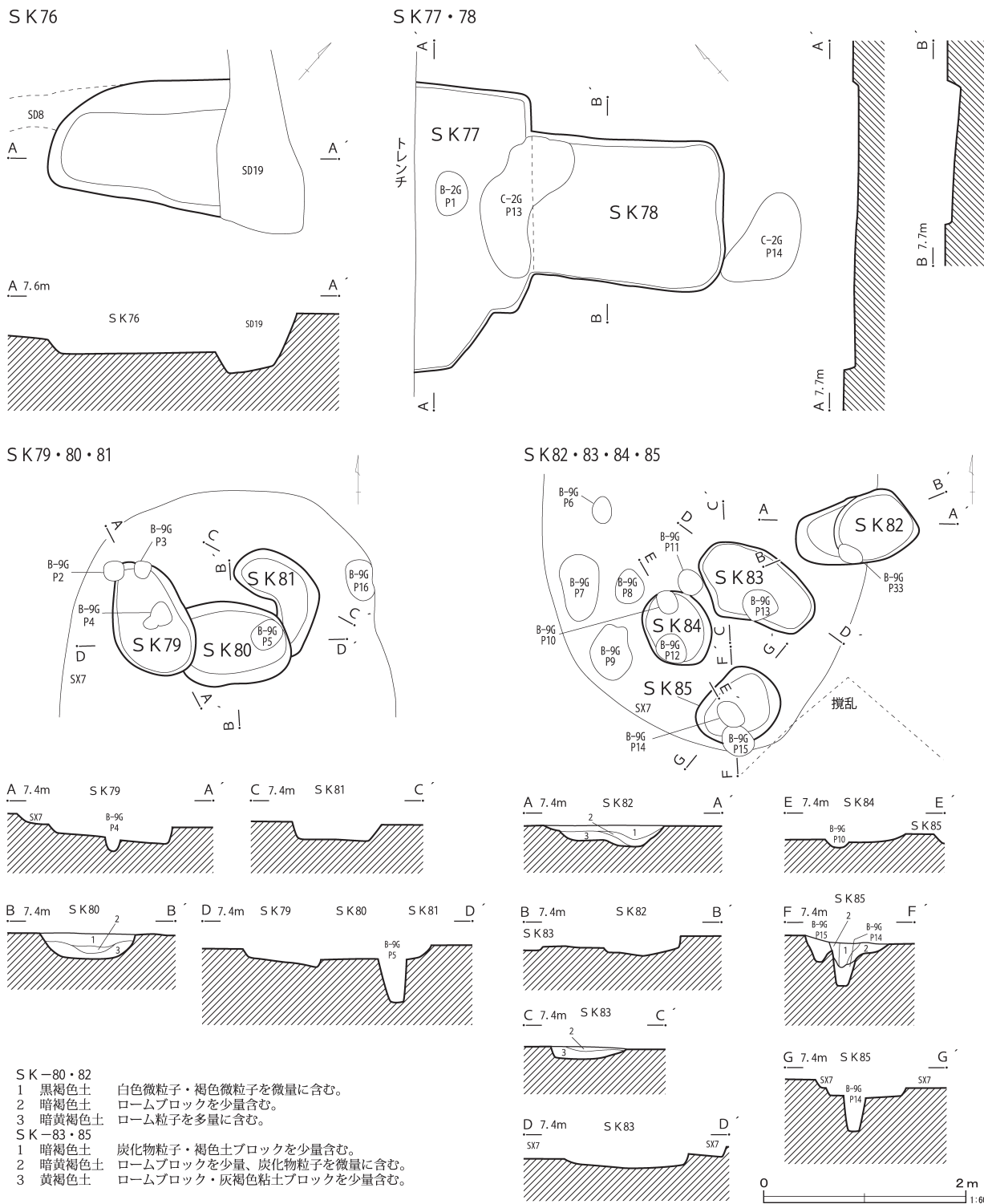
第13図 近世の土壌 (4)



- SK-61  
 1 暗褐色土 炭化物粒子を微量、白色微粒子を少量含む。  
 2 暗黄褐色土 ロームブロックを少量含む。
- SK-62  
 1 暗褐色土 炭化物粒子・焼土粒子を微量、白色微粒子を少量含む。  
 2 暗黄褐色土 ローム粒子を多量、褐色土粒子を少量含む。
- SK-63  
 1 暗褐色土 焼土粒子・白色微粒子を少量含む。  
 2 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。
- SK-64  
 1 暗褐色土 炭化物粒子を少量、焼土粒子を微量に含む。  
 2 暗黄褐色土 ローム粒子を多量、炭化物粒子・焼土粒子を微量に含む。
- SK-65  
 1 暗褐色土 炭化物粒子・焼土粒子を微量、白色微粒子を少量含む。  
 2 暗黄褐色土 ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。
- SK-66  
 1 暗褐色土 炭化物粒子・焼土粒子を微量に含む。  
 2 暗褐色土 白色微粒子・暗褐色土ブロックを少量含む。  
 3 暗黄褐色土 ロームブロックを少量含む。

- SK-67  
 1 暗褐色土 炭化物粒子・焼土粒子を少量含む。  
 2 暗褐色土 暗褐色土ブロックを少量含む。  
 3 暗黄褐色土 ロームブロックを少量含む。
- SK-68  
 1 暗褐色土 白色微粒子少量含む。  
 2 暗黄褐色土 ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。
- SK-69  
 1 暗褐色土 ローム粒子・白色微粒子を少量含む。  
 2 暗褐色土 ローム粒子・酸化鉄を少量、炭化物粒子・白色微粒子を微量に含む。しまりあり
- SK-70  
 1 暗褐色土 焼土粒子・白色微粒子を少量含む。  
 2 暗褐色土 褐色土粒子を多量に含む。  
 3 暗褐色土 ローム粒子を多量、酸化鉄を少量含む。

第14図 近世の土壌 (5)

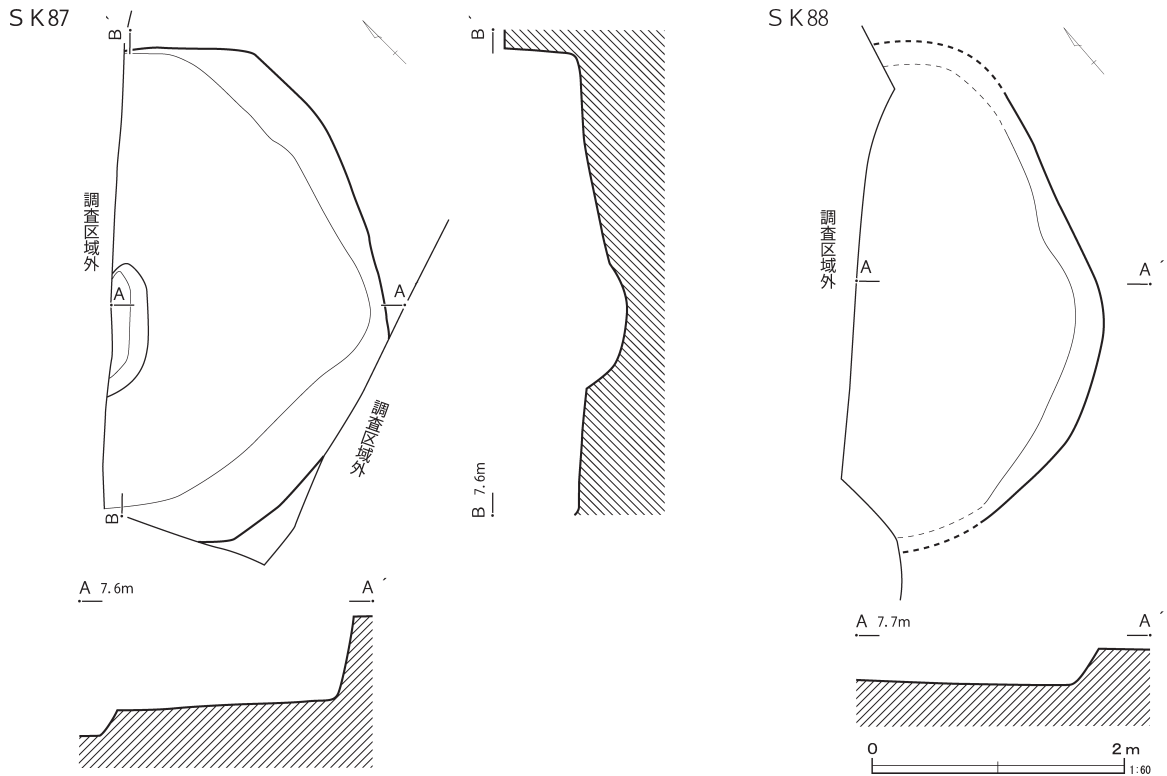


第15図 近世の土壌（6）

底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。この第88号土壌は、その検出位置や規模、平面形態などにおいて第87号土壌と共通する部分が多いことから、これら2基の土壌は同様の機能を有すると考えられ、室あるいは廃棄土壌と推定される。

遺物は第19図28～31の4点が出土した。第87号土壌と比較するとその出土量は少ない。28の肥前系磁器の染付皿は、17世紀に遡ると考えられる。29の唐津系の陶器碗は18世紀、31の焙烙は18から19世紀代のものである。





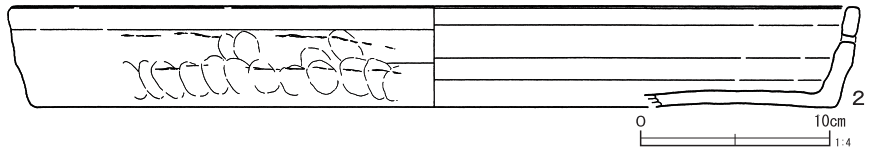
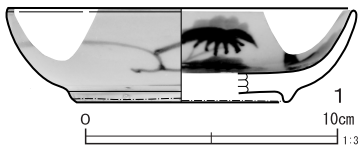
第16図 近世の土壌（7）

第5表 近世の土壌計測表

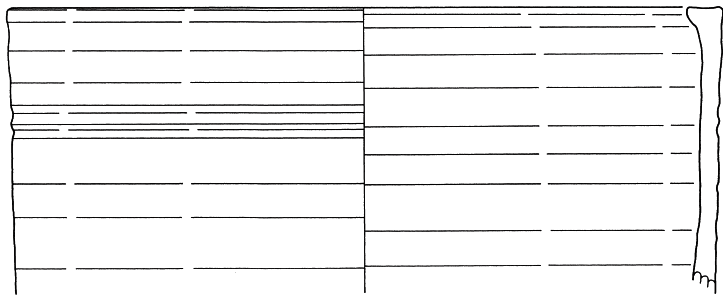
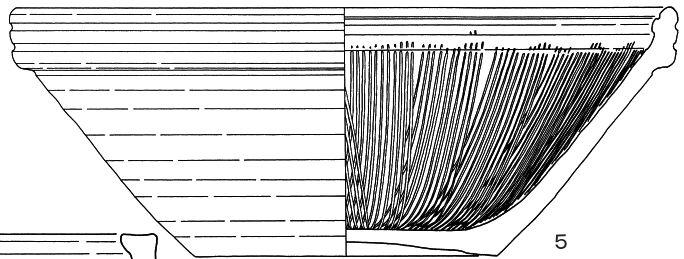
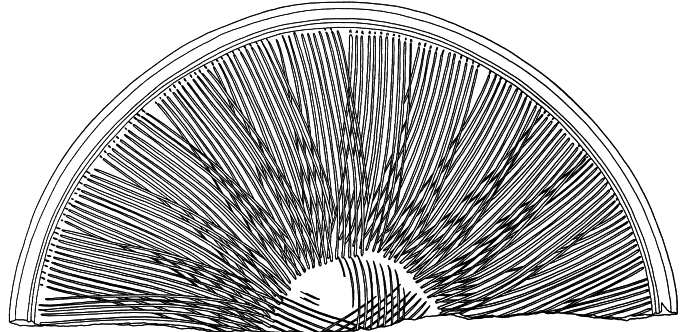
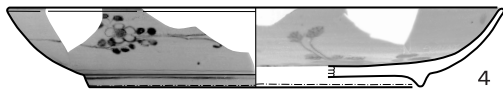
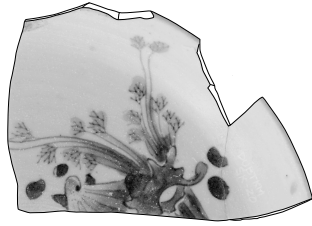
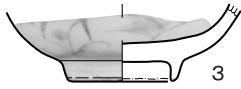
遺構名	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方位	形状	備考
SK 1	C-1・2	2.60	0.96	0.20	N-10°-E	不整形	
SK 2	C-2	1.24	0.68	0.14	N-77°-E	楕円形	
SK 3	C-2	1.43	(0.66)	0.12	N-23°-W	(長方形)	
SK 4	C-2	(1.58)	(0.95)	0.28	N-44°-E	長方形	
SK 6	C-2	(1.76)	1.08	0.34	N-76°-W	楕円形	
SK 7	B-3, C-2・3	5.38	(1.12)	0.16	N-44°-E	長方形	
SK 8	B-3	(1.00)	(0.72)	0.18	N-44°-E	(楕円形)	
SK 9	C-3	(1.34)	(0.96)	0.30	N-29°-E	楕円形	
SK10	C-3	(1.04)	(0.90)	0.18	N-23°-W	楕円形	
SK11	C-3	(2.64)	1.72	0.46	N-25°-W	楕円形	
SK12	C・D-2	(0.76)	0.68	0.26	N-19°-W	楕円形	
SK15	B-3・4	(1.96)	(0.98)	0.28	N-45°-E	不整形	
SK16	B-4	1.08	1.00	0.16	N-22°-E	不整形	
SK17	B-4	(1.28)	0.92	0.28	N-17°-W	楕円形	
SK18	B-5	1.02	0.74	0.12	N-88°-W	楕円形	
SK19	B-5	1.28	1.08	0.22	N-7°-E	楕円形	
SK20	C-3	1.96	(1.96)	0.40	N-47°-W	隅丸方形	
SK21	C-3	1.94	(1.18)	0.32	N-48°-W	不整楕円形	
SK22	C-5	0.88	0.64	0.10	N-53°-E	楕円形	
SK23	B-6	1.46	1.04	0.26	N-42°-E	楕円形	
SK24	B-6	1.44	1.28	0.18	N-54°-E	円形	
SK25	B-6	1.20	0.86	0.12	N-79°-E	楕円形	
SK26	B-6・7	1.28	1.22	0.52	N-57°-E	円形	
SK27	B-7・8	3.06	(1.02)	0.08	N-56°-E	長方形	
SK28	B-7	1.82	1.28	0.19	N-56°-E	楕円形	
SK32	B-7	1.00	(0.66)	0.30	N-41°-W	楕円形	

遺構名	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方位	形状	備考
SK33	B-7	0.82	(0.60)	0.22	N-52°-E	(円形)	
SK34	B-7	1.08	0.68	0.16	N-13°-W	楕円形	
SK35	B-8	1.60	1.10	0.22	N-30°-E	長方形	
SK37	A-8	0.94	0.60	0.12	N-5°-E	不整形	
SK38	A・B-8	0.96	0.76	0.22	N-43°-W	楕円形	
SK39	A-9	1.12	(0.62)	0.12	N-87°-W	(楕円形)	
SK40	A-9	1.28	(0.76)	0.12	N-72°-W	不整楕円形	
SK41	B-8	0.88	0.84	0.42	N-10°-E	円形	
SK42	A・B-9	1.36	(0.92)	0.44	N-44°-W	不整円形	
SK43	A・B-9	1.36	1.02	0.18	N-46°-W	楕円形	
SK44	A-9	(1.18)	(0.86)	0.12	N-40°-E	(楕円形)	
SK45	A-10	1.80	(0.98)	0.16	N-89°-W	(隅丸方形)	
SK46	A-10	1.40	(0.88)	0.22	N-88°-W	(円形)	
SK47	A・B-9・10	1.44	0.84	0.16	N-41°-E	楕円形	
SK48	B-10	0.78	0.74	0.16	N-82°-E	円形	
SK49	B-10	(1.08)	(0.64)	0.14	N-47°-W	楕円形	
SK50	B-10	1.72	1.02	0.20	N-61°-W	楕円形	
SK51	B-10	0.78	0.70	0.32	N-89°-E	円形	
SK52	B-10	0.98	0.82	0.18	N-88°-E	円形	
SK53	B-10	1.22	0.94	0.18	N-25°-E	楕円形	
SK54	B-10	1.80	1.22	0.18	N-8°-W	楕円形	
SK55	B・C-10	2.18	2.18	0.34	N-39°-W	円形	
SK56	B-10	(1.22)	0.92	0.16	N-67°-W	楕円形	
SK57	B-10	0.98	0.92	0.64	N-88°-E	円形	
SK59	B-8	1.32	1.04	0.38	N-31°-E	不整楕円形	
SK60	C-8・9	(0.58)	(0.62)	0.10	N-31°-W	(長方形)	
SK61	B・C-5	1.32	0.84	0.18	N-3°-E	楕円形	
SK62	B-5	1.04	1.00	0.14	N-4°-W	不整円形	
SK63	B-5	1.22	0.74	0.12	N-77°-W	楕円形	
SK64	B・C-5	0.80	0.60	0.14	N-75°-E	不整円形	
SK65	B-5	0.84	0.76	0.14	N-81°-W	円形	
SK66	B-6	0.84	(0.52)	0.32	N-87°-W	(円形)	
SK67	B-5	1.36	(0.72)	0.16	N-18°-W	長方形	
SK68	B-5	1.36	0.86	0.14	N-71°-W	不整楕円形	
SK69	B-5	1.32	1.34	0.14	N-17°-W	不整形	
SK70	B-5	1.12	1.00	0.10	N-48°-W	円形	
SK71	B-9	0.96	0.40	0.08	N-60°-E	長方形	
SK72	B-8	(1.80)	(0.84)	0.10	N-73°-E	楕円形	
SK73	B-8	(1.38)	1.36	0.10	N-0°-E	円形	
SK74	B-8	(2.04)	1.56	0.08	N-49°-W	(楕円形)	
SK75	C-3	(2.18)	1.66	0.12	N-25°-E	不整円形	
SK76	B・C-3	(1.64)	1.20	0.14	N-53°-E	長方形	
SK77	B・C-2	2.84	(1.16)	0.12	N-42°-E	(不整形)	旧 SX 3
SK78	C-2	(1.86)	1.44	0.12	N-45°-W	長方形	旧 SX 3
SK79	B-9	1.20	0.76	0.18	N-24°-W	楕円形	
SK80	B-9	(0.88)	0.82	0.24	N-90°-E	楕円形	
SK81	B-9	1.08	0.50	0.16	N-19°-W	不整形	
SK82	B-9・10	1.16	0.68	0.20	N-73°-E	長方形	
SK83	B-9	1.24	0.72	0.12	N-57°-W	不整楕円形	
SK84	B-9	0.80	0.64	0.08	N-31°-W	楕円形	
SK85	B-9	0.92	0.66	0.24	N-38°-E	不整円形	
SK86	C-2	(0.99)	(0.65)	0.24	N-27°-W	長方形	旧 P 9
SK87	C・D-1	(3.84)	(2.18)	0.94	N-44°-E	(円形)	旧 SX 1
SK88	C-1	(4.04)	(1.90)	0.28	N-41°-E	(楕円形)	旧 SX 2

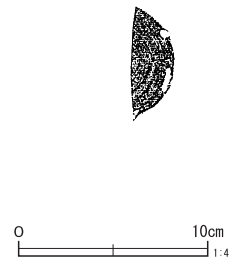
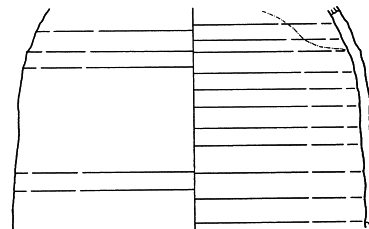
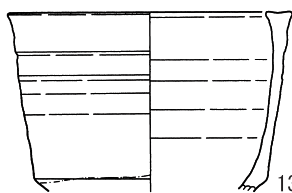
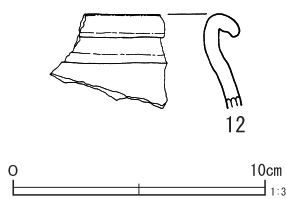
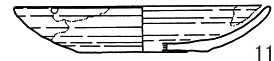
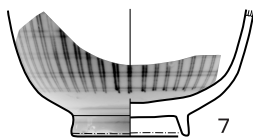
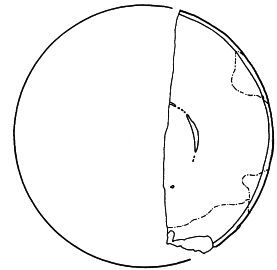
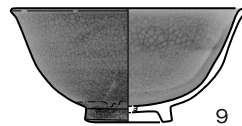
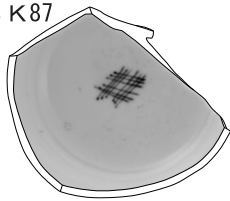
S K11



S K20

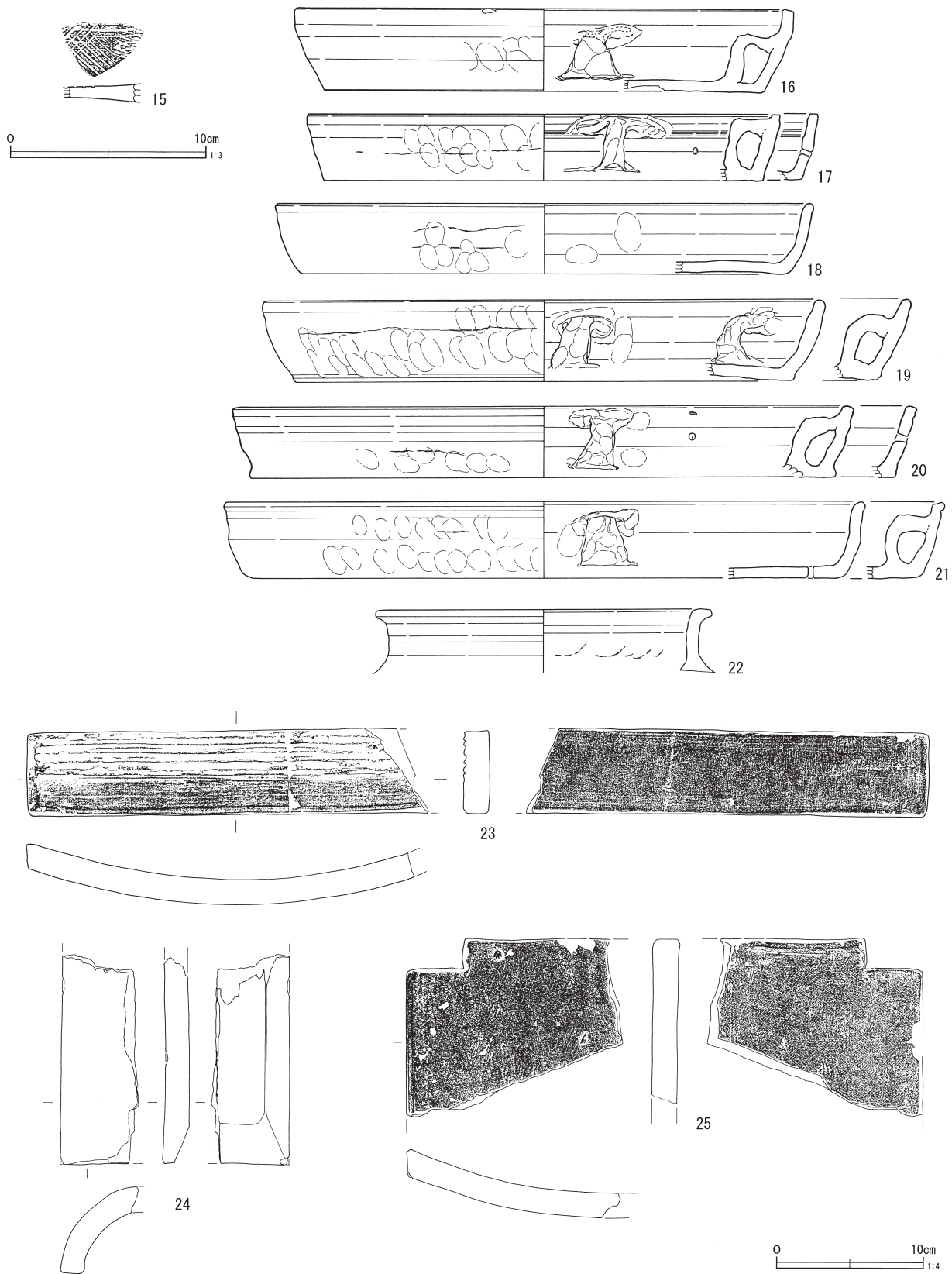


S K87

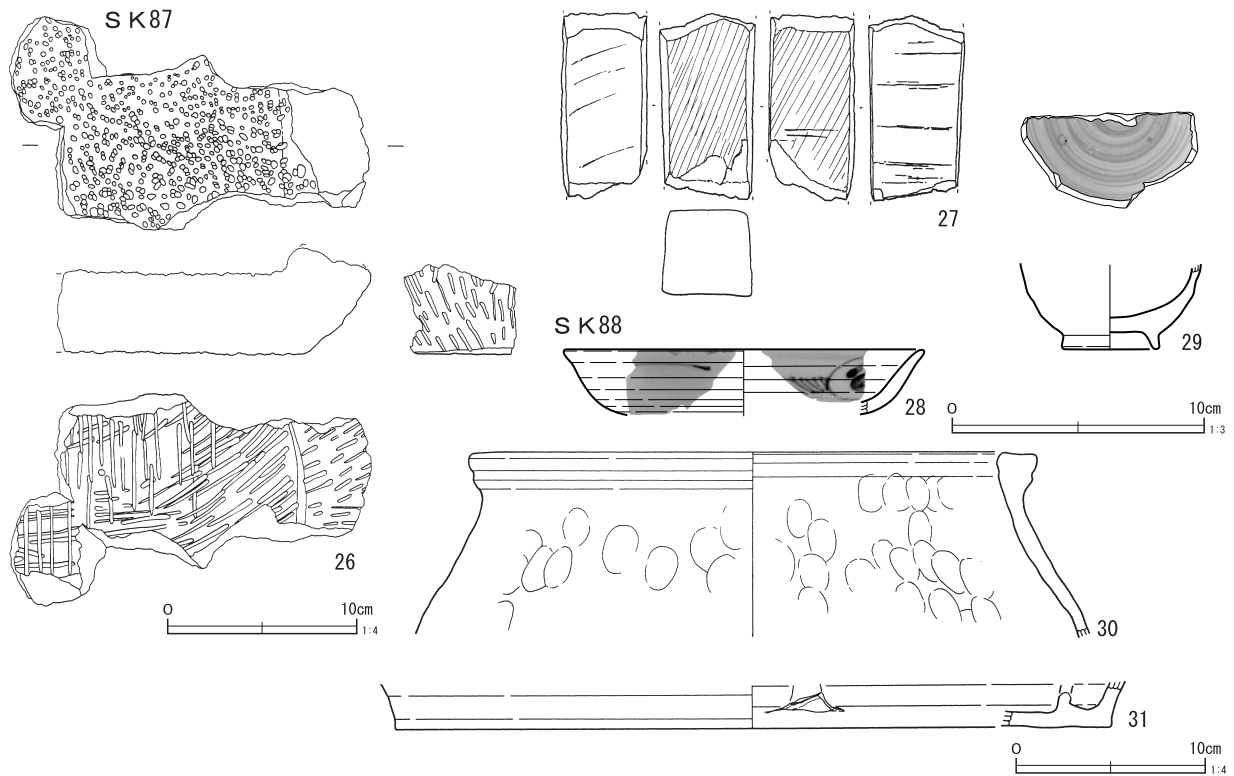


第17図 近世の土壇出土遺物 (1)





第18図 近世の土壙出土遺物（2）



第19図 近世の土壇出土遺物（3）

第6表 近世の土壇出土遺物観察表

図版	番号	遺構名	種別	器種	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	焼成	釉薬装飾	成型技法	備考
17	1	SK11	磁器	丸皿	20	(13.6)	(8.2)	3.7	灰白	良好	染付草花文		肥前系 (18C?)
17	2	SK11	土器	焙烙	10	(45.0)	(42.6)	5.3	にぶい赤褐	普通		体部粘土紐	器壁に補修用の穿孔あり 体部内面ヨコナデ 外面上半部ヨコナデ 下半部指頭痕
17	3	SK20	磁器	丸碗	40	—	4.1	[3.0]	灰白	良好	染付草花文	轆轤	肥前系 (18C?)
17	4	SK20	磁器	丸皿	25	(19.5)	(13.0)	3.1	灰白	良好	染付	轆轤	肥前系 (17C後半?)
17	5	SK20	陶器	播鉢	50	(34.7)	(16.0)	13.2	橙	良好			卸目は11本 (志戸呂か?)
17	6	SK20	陶器	甕?	20	(38.0)	—	[15.1]	灰黄	良好	内外面鉄釉	輪積?	瀬戸
17	7	SK87	磁器	丸碗	—	—	4.5	[4.9]	灰白	良好	染付	轆轤	肥前系 (19C)
17	8	SK87	磁器	広東碗	40	(10.2)	(5.4)	6.5	灰白	良好	染付	轆轤	肥前系 (19C)
17	9	SK87	磁器	丸碗	40	9.0	3.4	4.4	灰黄	良好	内外面透明釉	轆轤	釉は細かい貫入あり 高台及び高台内露胎 瀬戸美濃系 (19C)
17	10	SK87	磁器	広東碗	30	(11.4)	(5.6)	6.8	灰白	良好	染付	轆轤	肥前系 (19C)
17	11	SK87	陶器	灯明皿	40	(10.2)	(5.1)	1.8	灰	良好	鉄釉	轆轤	内外面に煤が付着 瀬戸美濃系
17	12	SK87	陶器	甕	5	—	—	[3.7]	灰白	良好	内外面鉄釉	轆轤	瀬戸美濃系
17	13	SK87	陶器	鉢	25	(14.8)	—	[9.4]	灰黄	良好	鉄釉	轆轤	瀬戸系
17	14	SK87	陶器	甕	20	—	—	[11.7]	褐灰	良好	外面鉄釉	轆轤	内面上端部に釉あり 内面全体に煤が付着し、断面にも胎土の変色が見られる 割れた跡に被熱したのか?
18	15	SK87	陶器	播鉢	5	—	—	—	橙	普通			播鉢底部破片 卸目は8本以上

図版	番号	遺構名	種別	器種	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	焼成	釉薬装飾	成型技法	備考
18	16	SK87	土器	焙烙	5	(33.8)	(30.0)	5.5	にぶい 橙	普通		粘土紐	体部内面ヨコナデ 外面上半部ヨコナデ 下半部指頭痕
18	17	SK87	土器	焙烙	10	(32.2)	(30.2)	4.5	灰黄	普通		粘土紐	器壁に補修用の穿孔あり 体部内面ヨコナデ 外面指押え後下半部までヨコナデ
18	18	SK87	土器	焙烙	15	(36.2)	(33.0)	4.8	にぶい 橙	普通		粘土紐	体部内面ヨコナデ 外面上半部ヨコナデ 下半部指頭痕
18	19	SK87	土器	焙烙	20	(38.0)	(34.0)	[5.6]	灰黄橙	普通		粘土紐	体部内面ヨコナデ 外面上半部ヨコナデ 下半部指頭痕
18	20	SK87	土器	焙烙	10	(41.6)	(40.0)	4.8	灰黄	普通		粘土紐	器壁に補修用の穿孔あり 体部内面ヨコナデ 外面上半部ヨコナデ 下半部指頭痕
18	21	SK87	土器	焙烙	30	(43.4)	(40.9)	5.2	にぶい 黄橙	普通		粘土紐	底部に穿孔あり 補修用は2ヶ所以上 体部内面ヨコナデ 外面上半部ヨコナデ 下半部指頭痕
18	22	SK87	土器	火鉢?	20	(22.6)	—	[4.3]	黄橙	普通		粘土紐	内外面ヨコナデ
18	23	SK87	瓦	軒平瓦	90	縦5.8 横(27.5) 厚さ1.7~1.8			灰~黒 灰	普通			剝離した顎部 いぶし焼成 器面は丁寧なナデ
18	24	SK87	瓦	丸瓦	20	縦[14.2] 横[5.3] 厚さ1.6~1.7			灰~黒 灰	普通			いぶし焼成 器面は丁寧なナデ 凹面は僅かに布目痕残る
18	25	SK87	瓦	平瓦	30	縦[11.5] 横[14.8] 厚さ1.7			灰~黒 灰	普通			いぶし焼成 器面は丁寧なナデ 隅部は成型時の切り落し
19	26	SK87	石製品	容器		底径(20.6) 器高[5.7] 重さ800.0g 安山岩							上面は、ノミ先による整形と思われる 径2~3mmの小穴多数 側面と底面はノミによる整形(長さ1~5cm) 底面の中心部に径3mmの小穴あり 容器の縁部欠損
19	27	SK87	石製品	砥石		長さ7.4 幅3.8 厚さ3.4 重さ157.9g 凝灰岩							上面が最もよく使用されており下面是切断痕が残る
19	28	SK88	磁器	皿	5	(14.2)	—	[2.6]	褐灰	普通	染付	轆轤	肥前系 (17C?)
19	29	SK88	陶器	碗	50	—	(3.8)	[3.3]	灰黄	良好		轆轤	白土による刷毛塗り 唐津系
19	30	SK88	土器	甕?	10	(29.9)	—	[9.7]	にぶい 橙	普通		粘土紐	雲母を多量に含む
19	31	SK88	土器	焙烙	5	—	(37.8)	[2.4]	にぶい 黄橙	普通		粘土紐	体部内面ヨコナデ 外面上半部ヨコナデ 下半部指頭痕 底部に補修用の穿孔あり

## (2) 溝跡

### 第1号溝跡 (第20・23図)

調査区西部のB-3、C-2・3グリッドに位置し、北東から南西方向に直線的に進路をとる。断面形は箱型を呈し、掘り込みは約0.6mと、検出された溝の中で最も深い。東から、第19、4、2、5、12号溝跡と直交するが、新旧関係は不明である。遺物は、近世の陶磁器3点、焙烙7点が出土した。そのうち焙烙2点を第23図1、2に示した。

### 第2号溝跡 (第20図)

B-2、C-2・3グリッドに位置する。北西から南東方向に走り、北から第3、5、1、7号溝跡と直交するが新旧関係は不明である。北半部では東側に段差を持つことから、並行する溝が存在したと考えられる。遺物は、近世の磁器、焙烙が1点ずつ出土した。

### 第3号溝跡 (第20図)

B-2・3グリッドに位置し、第1、5号溝跡と平行する。断面形は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

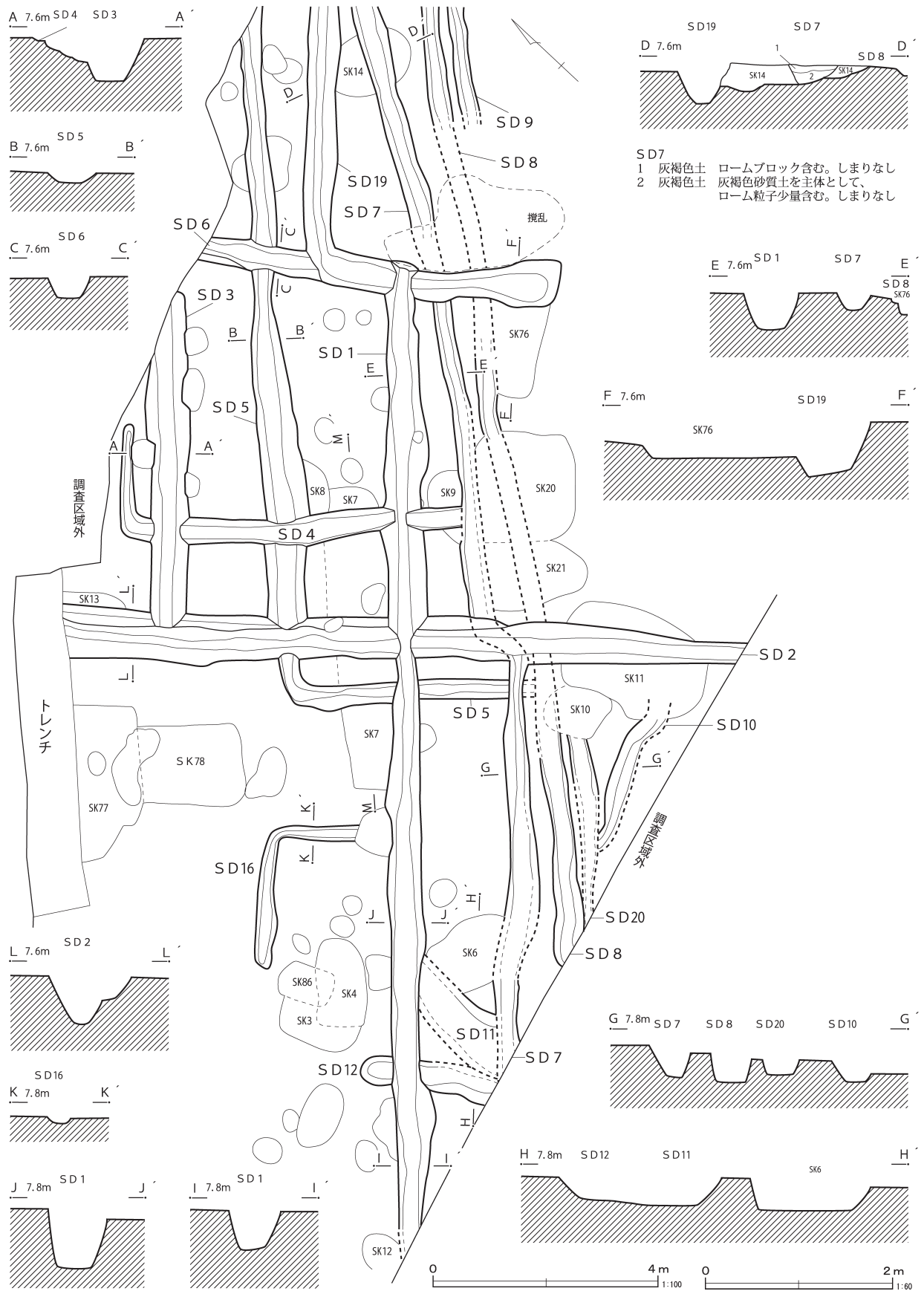
### 第4号溝跡 (第20・23図)

B-2・3、C-3グリッドに位置する。第2号溝跡と平行し、B-2グリッドで北東方向に直角に折れる。北から第3、5、1、7号溝跡と直交するが、新旧関係は不明である。断面形は、箱型を呈する。遺物は、第23図3の硯が1点出土した。

### 第5号溝跡 (第20図)

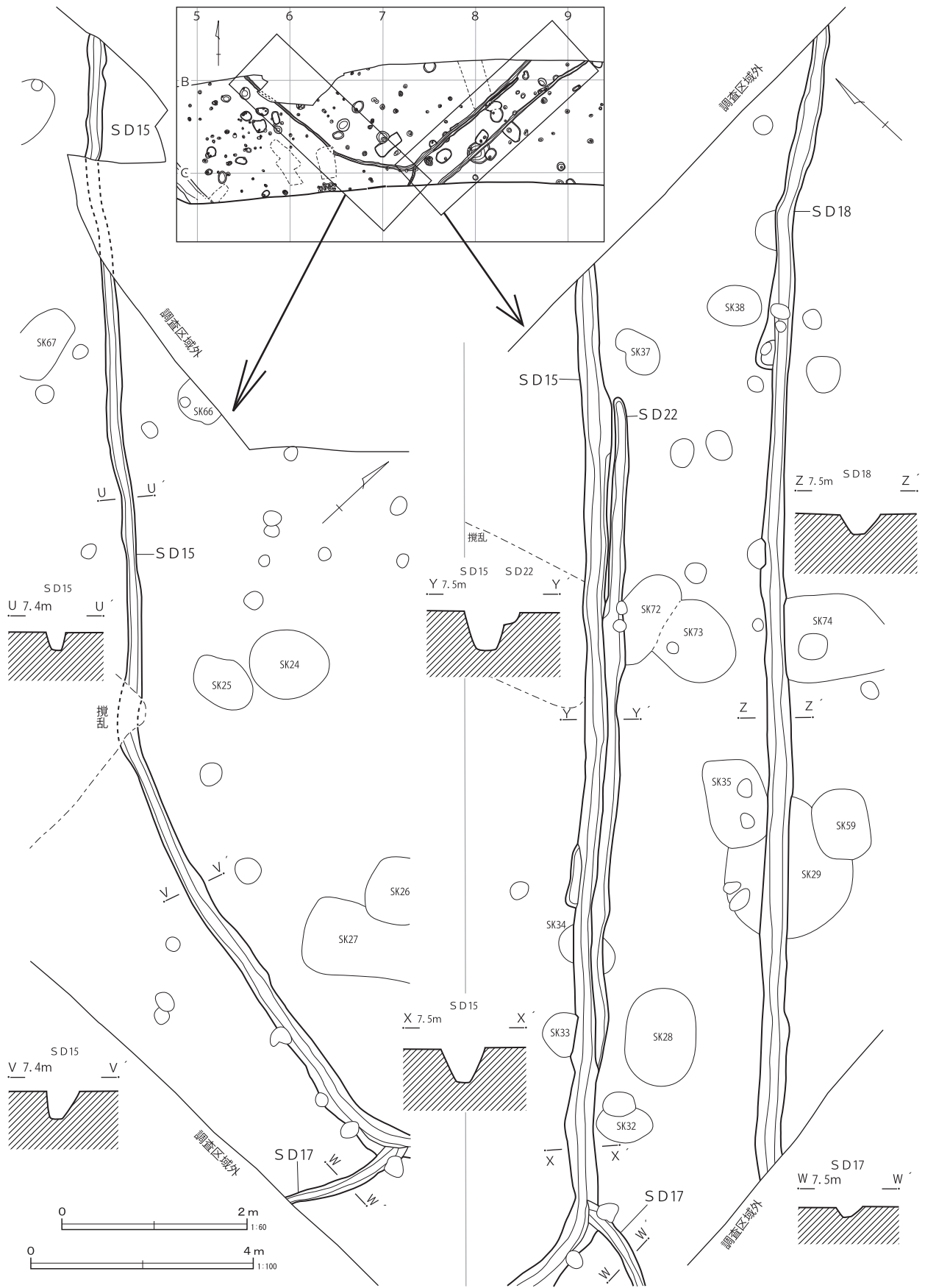
B・C-2・3グリッドにかけて位置する。第1号溝跡と並行し、C-2グリッドで南東方向に直角に屈曲する。第13号溝跡(第21図)と合わせ、コの字形の区画溝と考えられる。遺物は、近世の陶磁器や焙烙が出土している。





第20図 溝跡 (1)



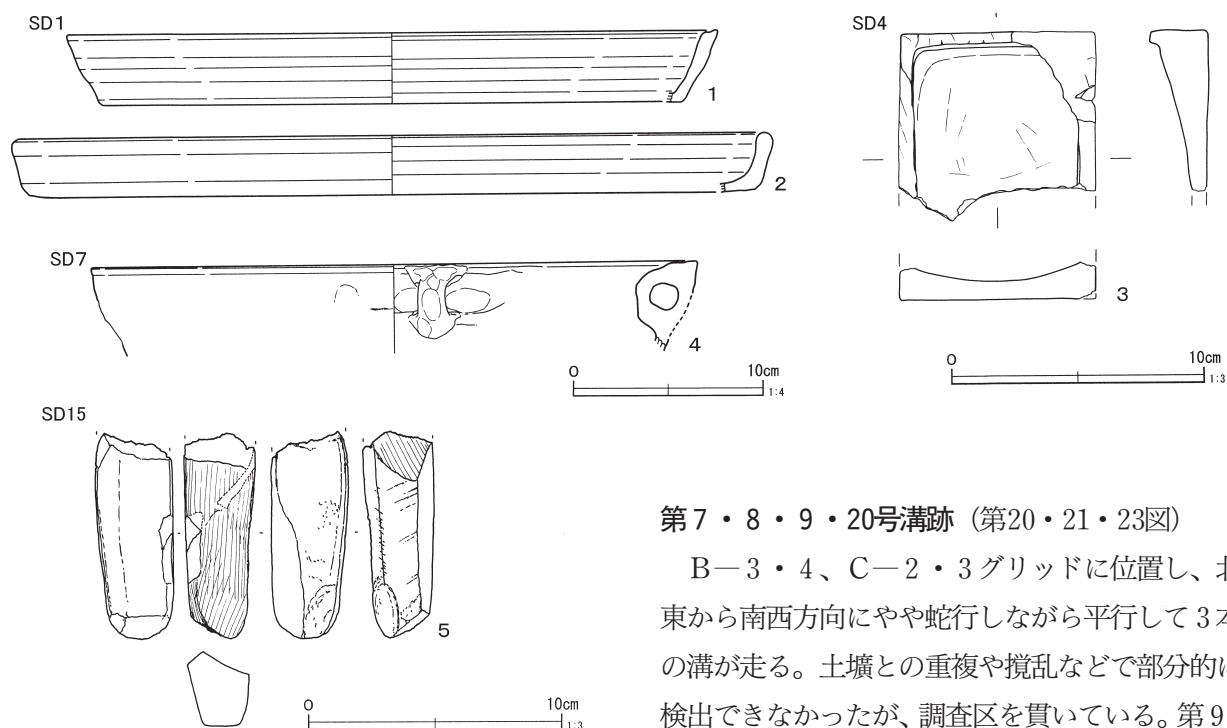


第22図 溝跡 (3)



第7表 溝跡計測表

遺構名	グリッド	全長(m)	幅(m)	深さ(m)	主軸方位	備考
SD 1	B-3, C-2・3	(17.85)	0.76	0.60	N-45°-E	
SD 2	B-2, C-2・3	(12.14)	0.95	0.51	N-43°-W	
SD 3	B-2・3	5.99	0.78	0.46	N-45°-E	
SD 4	B-2・3, C-3	(7.80)	0.52	0.25	N-47°-W N-48°-E	
SD 5	B・C-2・3	(15.84)	0.77	0.18	N-41°-E N-47°-W	
SD 6	B-3	(2.21)	0.54	0.26	N-36°-W	
SD 7	B-3, C-2・3	(22.25)	0.60	0.27	N-35°-E N-47°-E	
SD 8	B-3, C-2・3	(20.88)	0.55	0.28	N-37°-E N-4°-E	
SD 9	B-3・4	(5.64)	0.32	0.16	N-37°-E N-40°-W	
SD10	C-2・3	(2.70)	(0.41)	0.17	N-67°-E	
SD11	C-2	(1.67)	(0.94)	0.30	N-0°-E	
SD12	C-2	(2.40)	0.51	0.24	N-38°-W	
SD13	B-3・4	(4.35)	0.48	0.20	N-47°-W	
SD14	B-3・4	(11.42)	0.59	0.46	N-45°-E	
SD15	A・B-5~8	(39.07)	0.58	0.43	N-49°-W N-79°-W	
SD16	C-2	(4.02)	0.39	0.06	N-52°-E N-46°-W	
SD17	B・C-7	(1.91)	0.37	0.12	N-12°-E	
SD18	A-8・9, B-7・8, C-7	(20.90)	0.49	0.30	N-49°-E	
SD19	B-3	(10.68)	0.83	0.59	N-45°-E N-38°-W	SD 6 より分離
SD20	C-2・3	(3.47)	0.40	0.16	N-42°-E	SD 9 より分離
SD21	B-4, C-4・5	(10.53)	2.03	0.74	N-45°-W	旧 SX 4
SD22	A-8, B-7・8	12.15	(0.38)	0.15	N-48°-E	SD15より分離



第23図 溝跡出土遺物

## 第6号溝跡 (第20図)

B-3グリッドに位置し、第19号溝跡が南東方向へ屈曲する部分に取りつく。断面形は、逆台形を呈する。遺物は、近世の磁器や焙烙が出土した。

## 第7・8・9・20号溝跡 (第20・21・23図)

B-3・4、C-2・3グリッドに位置し、北東から南西方向にやや蛇行しながら平行して3本の溝が走る。土壌との重複や攪乱などで部分的に検出できなかったが、調査区を貫いている。第9、20号溝跡は一連の溝と考えられる。第7号溝跡は、第2号溝跡との重複部分でクランク状に屈曲しており、第8、9号溝跡は、B-3グリッドで北西方向に曲がり、調査区域外へ続く。遺物は、第7号溝跡から第23図4に示した焙烙が、第8号溝跡から播鉢が出土している。

第8表 溝跡出土遺物観察表

図版	番号	遺構名	種別	器種	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	焼成	釉薬装飾	成型技法	備考
23	1	SD 1	土器	焙烙	5	(34.4)	(30.6)	4.7	褐灰	良好			体部内面ヨコナデ 外面上半部ヨコナデ 下半部指頭痕
23	2	SD 1	土器	焙烙	10	(39.4)	(38.4)	3.1	にぶい橙	普通			体部内面ヨコナデ 外面上半部ヨコナデ 下半部指頭痕
23	3	SD 4	石製品	硯	50	長さ[7.3] 幅7.8 厚さ0.6~2.3 重さ130.8g							色調は灰黄色を呈する 外底面は釘状のものによる沈線が数本見られるが名や記号状のものはない
23	4	SD 7	土器	焙烙	5	(31.8)	—	[4.7]	にぶい黄橙	普通		粘土紐	体部内面ヨコナデ 外面上半部ヨコナデ 下半部指頭痕
23	5	SD15	石製品	砥石		長さ8.2 幅2.8 厚さ3.3 重さ87.3g							凝灰岩 上面、下面とも端部程よく使用され製作時の原形を残していない

第10・11・12号溝跡 (第20図)

C-2・3グリッドに位置し第10号溝跡は、第20号溝跡と第11号土壇の間で、第11、12号溝跡は、第1、7号溝跡間でそれぞれ検出された。遺物は、第10号溝跡から、近世の磁器と焙烙が出土したのみで、第11、12号溝跡からは出土していない。

第13号溝跡 (第21図)

B-3・4グリッドに位置し、北から第19、7、8、9号溝跡と直交する。断面形は、逆台形を呈する。調査区域外で、南西方向に折れ第5号溝跡に続くと考えられる。遺物は、出土していない。

第14号溝跡 (第21図)

B-3・4グリッドに位置し、北東から南西方向に直線的に延びるが、B-3グリッドから先は確認できなかった。第15号土壇と第5号竪穴状遺構と重複するが、新旧関係は不明である。断面形は逆台形を呈し、底部幅が細い部分もある。遺物は出土していない。

第15・18・22号溝跡 (第22・23図)

第15号溝跡は、A-5・8、B-5~8グリッドに位置する。北東から南西方向に延び、B-7グリッドで北西方向に緩やかに向きを変える。断面形は逆台形を呈し、掘り込みも深く、区画溝と考えられる。B-7・8グリッドでは、第22号溝跡と平行に重複するが、新旧関係は不明である。遺物は、第23図5に示した砥石が1点出土した。

第18号溝跡は、A-8・9、B-7・8、C-7グリッドに位置する。第15号溝跡と約3.3mの間隔をもって平行することから、道路状遺構の可能性も考えられるが、溝間では硬化面などは確認できなかった。遺物は出土していない。

第22号溝跡は、A-8、B-7・8グリッドに位置し、第15号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。

第16号溝跡 (第20図)

C-2グリッド中央部に位置する。掘り込みは非常に浅く遺物は出土していない。

第17号溝跡 (第22図)

B・C-7グリッドに位置する。第15号溝跡が北西に向きを変える地点から南南西方向に延びる。掘り込みは非常に浅く遺物も出土していない。

第19号溝跡 (第20・21図)

B-3グリッドに位置する。北東から南西方向に延び、B-3グリッドの中央部で直角に南東方向に折れ、その部分で第6号溝跡と接する。断面形は逆台形を呈し、掘り込みも深いが、遺物は出土していない。

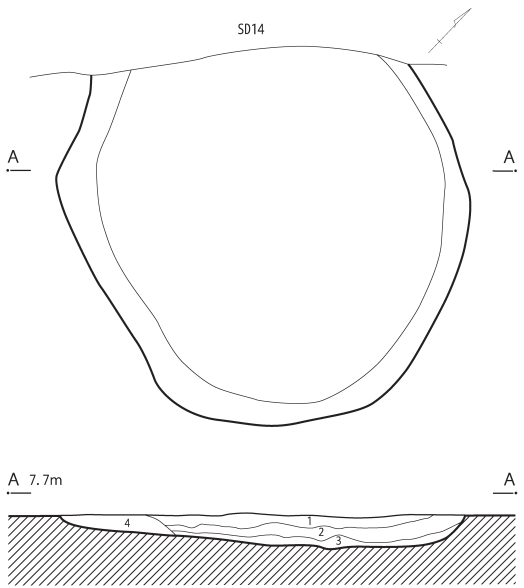
第21号溝跡 (第21図)

B-4、C-4・5グリッドに位置する。上幅が2m以上あり、他の溝とは様相が異なる。断面形は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

第9表 竪穴状遺構計測表

遺構名	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方位	形状	備考
SX 5	B-3・4	(3.22)	(3.04)	0.26	N-47°-E	楕円形	
SX 6	C-3	(5.72)	3.44	0.44	N-33°-E	隅丸長方形	
SX 7	B-9・10	4.72	(3.24)	0.14	N-1°-E	楕円形	

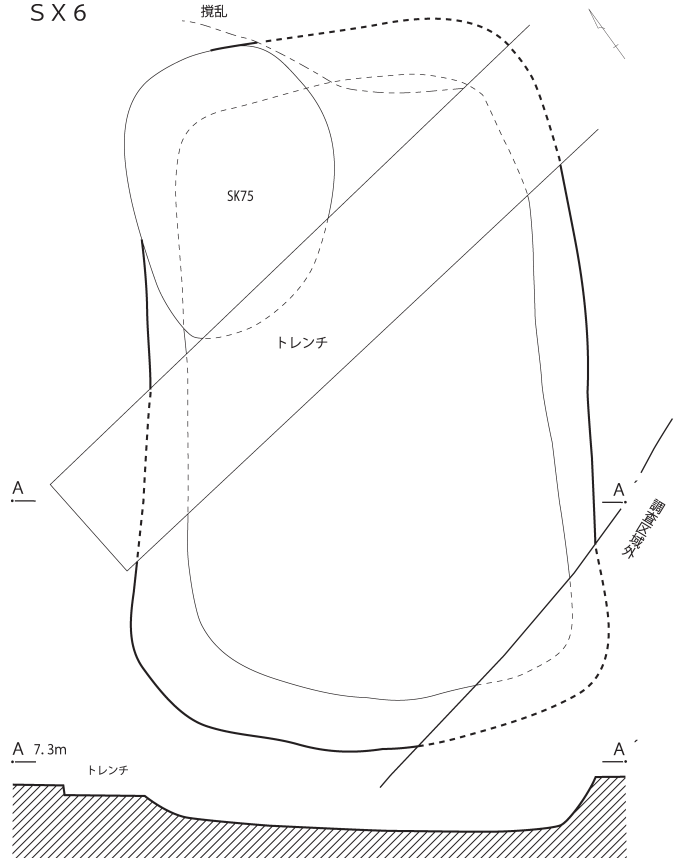
SX 5



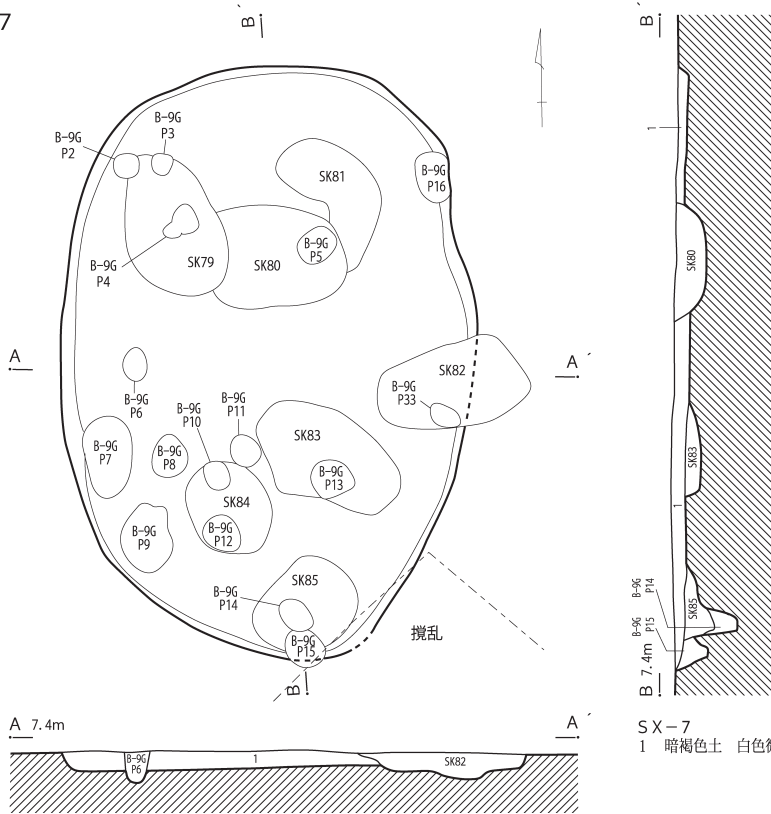
SX-5

- 1 暗褐色土 白色微粒子・酸化鉄を微量に含む。しまりなし
- 2 褐色土 ローム粒子を少量、白色微粒子・酸化鉄を微量に含む。しまりなし
- 3 黄褐色土 ローム粒子を多量、白色微粒子を微量に含む。粘性あり
- 4 黄褐色土 ローム粒子を多量、白色微粒子を微量、酸化鉄を少量含む。粘性あり

SX 6

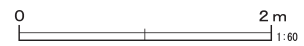


SX 7

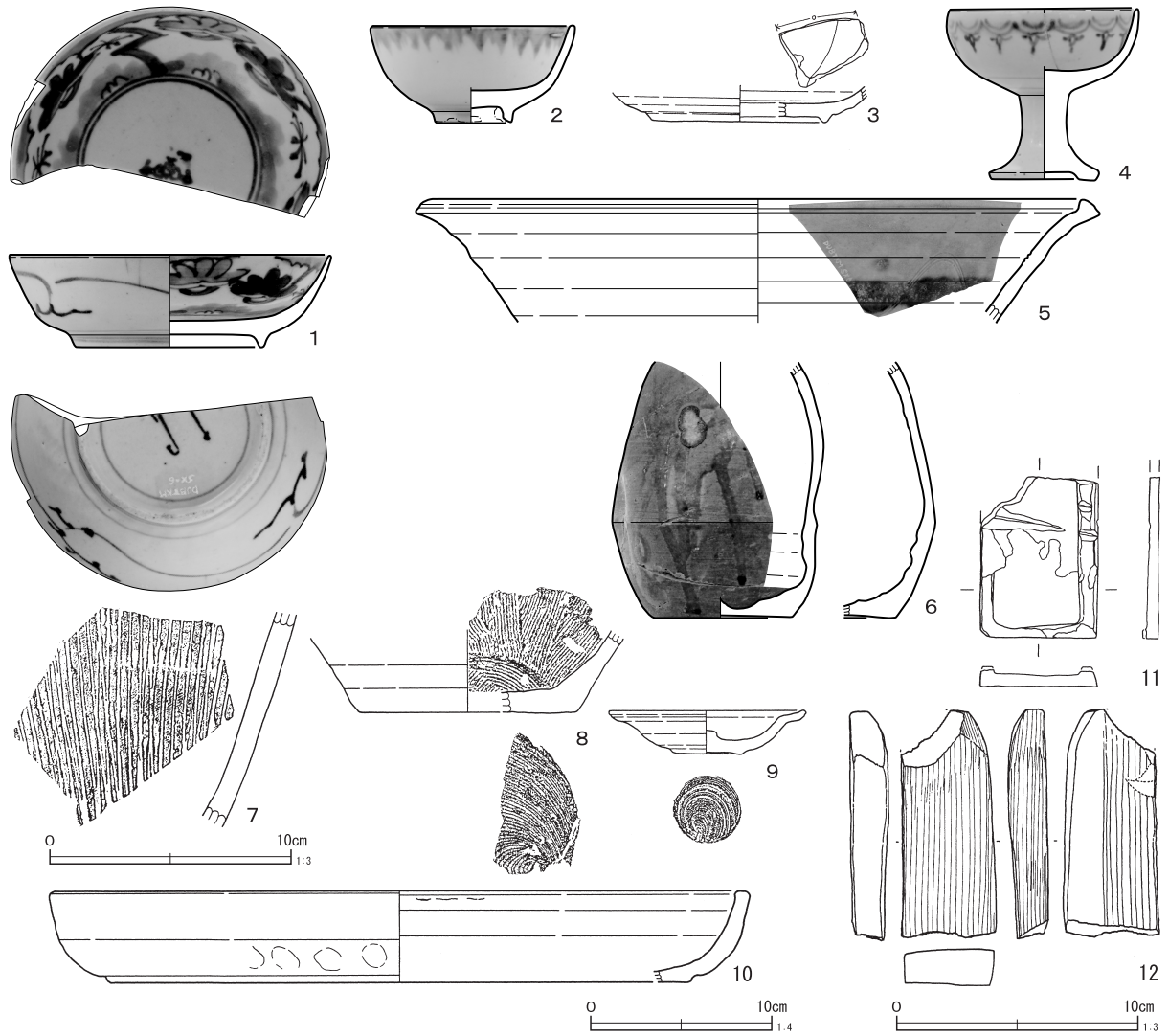


SX-7

- 1 暗褐色土 白色微粒子・灰褐色粘土小ブロックを少量含む。



第24図 竪穴状遺構



第25図 第6号竖穴状遺構出土遺物

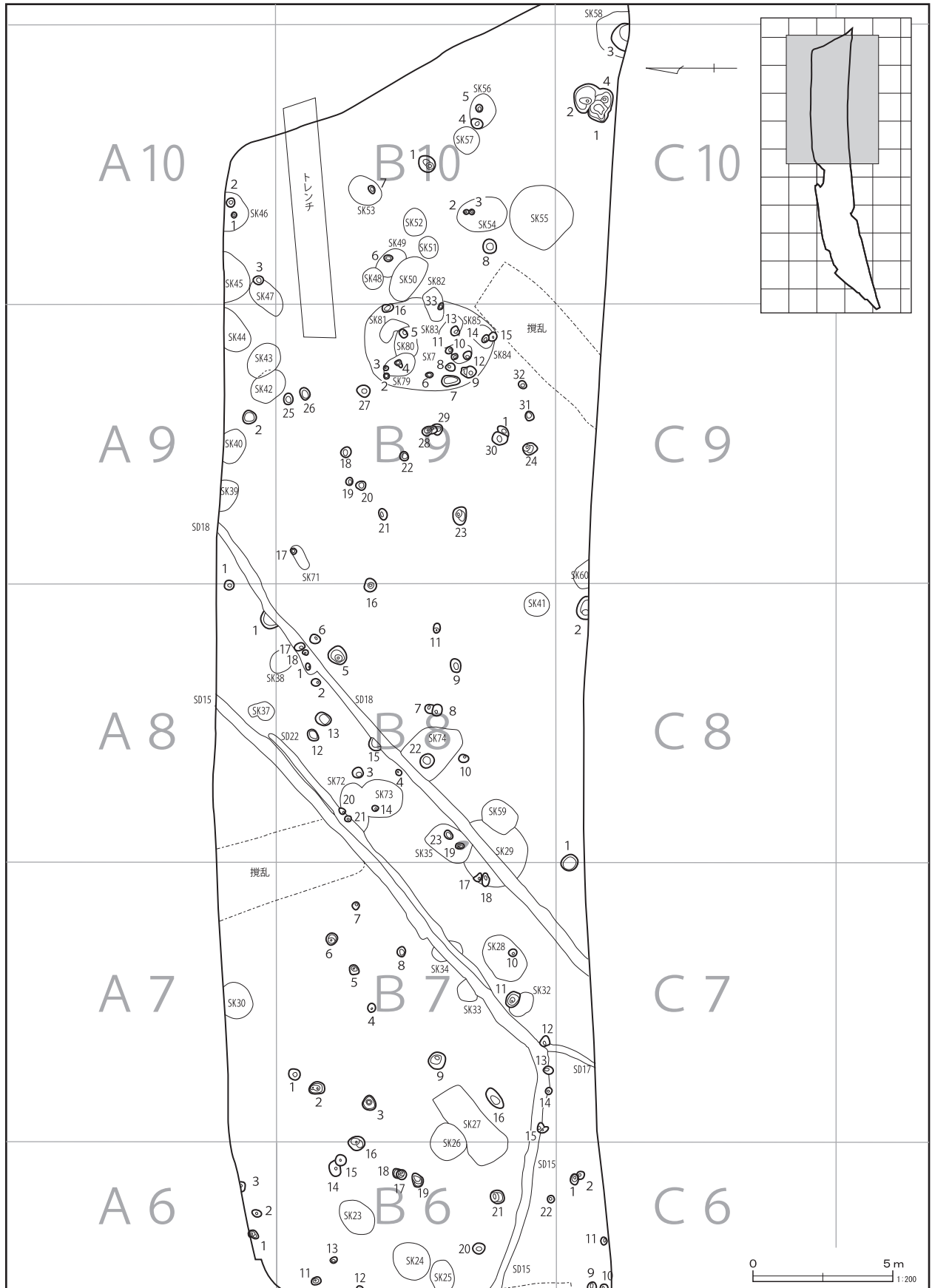
第10表 第6号竖穴状遺構出土遺物観察表

図版	番号	遺構名	種別	器種	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	焼成	釉薬装飾	成型技法	備考
25	1	SX 6	磁器	丸皿	60	(13.2)	7.6	3.8	灰白	良好	染付	轆轤	肥前系
25	2	SX 6	磁器	丸碗	70	(8.3)	3.2	4.0	灰白	良好	染付	轆轤	肥前系 雨降文
25	3	SX 6	磁器	皿	5	—	(7.2)	[1.5]	褐灰	良好		轆轤	割れ口の一部に黒い物質付着、接着の痕跡か？ 断面を砥石として使っている
25	4	SX 6	磁器	仏飯具 か	85	7.8	4.3	7.0	灰白	良好	染付	轆轤	肥前系
25	5	SX 6	陶器	鉢か 皿か	10	(26.6)	—	[5.1]	褐	良好	緑釉 灰釉	轆轤	内面に3本櫛目状の波状文あり 瀬戸美濃系
25	6	SX 6	陶器	徳利	30	—	6.0	[10.5]	灰	良好	鉄釉	轆轤	べこかん形の徳利である 瀬戸美濃系
25	7	SX 6	陶器	播鉢	10	—	—	—	にぶい 橙	良好			卸目は7本(志戸呂か?)
25	8	SX 6	陶器	播鉢	25	—	(12.0)	[4.6]	灰黄	良好	鉄釉		卸目は19本以上 瀬戸系(16C?)
25	9	SX 6	土器	蓋	70	(10.8)	3.8	2.3	にぶい 橙	良好			
25	10	SX 6	土器	焙烙	10	(38.2)	(32.0)	5.0	灰黄褐	普通			雲母を多量に含む 体部内面ヨコナデ 外面上半部ヨコナデ 下半部指頭痕
25	11	SX 6	石製品	硯	70	長さ[6.6] 幅4.9 厚さ0.35~0.65 重さ31.2g 粘板岩							裏面全面剥離 表面剥離顕著
25	12	SX 6	石製品	砥石		長さ9.4 幅3.9 厚さ1.6 重さ91.0g 砂岩							下面は切断痕が残る





第26図 ピット (1)



第27図 ピット (2)

第11表 ピット一覧表

グリッド	番号	長軸	短軸	深さ	備考	グリッド	番号	長軸	短軸	深さ	備考	グリッド	番号	長軸	短軸	深さ	備考	
A-6	1	0.35	0.22	0.31		B-5	37	0.30	(0.27)	0.40		B-8	5	0.66	0.59	0.70		
	2	0.30	0.24	0.13			38	0.21	0.21	0.12			6	0.37	0.33	0.45		
	3	0.36	0.18	0.10			39	0.54	0.52	0.13			7	(0.32)	0.28	0.36		
A-8	1	0.77	(0.37)	0.14			40	0.25	(0.14)	0.11			8	0.42	0.41	0.31		
	2	0.40	0.40	0.14			41	0.28	0.27	0.21			9	0.48	0.36	0.13		
A-9	1	0.20	0.19	0.12			42	0.26	0.23	0.38			10	0.33	0.28	0.21		
	2	0.31	0.29	0.19			43	0.38	0.31	0.22			11	0.36	0.27	0.26		
	3	0.36	0.30	0.40			44	0.32	0.27	0.16			12	0.51	0.42	0.10		
B-2	1	0.45	0.32	0.09			45	0.24	0.18	0.36			13	0.55	0.46	0.14		
	2	0.53	(0.43)	0.16			46	0.52	0.40	0.30			14	0.22	0.22	0.30		
	3	0.43	(0.27)	0.21			47	0.19	0.16	0.42			15	0.26	(0.33)	0.17		
B-3	1	0.60	(0.43)	0.17			48	0.21	0.15	0.15			16	0.49	0.44	0.33		
	2	0.56	(0.48)	0.16			49	0.69	0.38	0.52			17	0.37	0.26	0.18		
	3	0.44	0.37	0.17			50	0.36	0.28	0.16			18	0.22	0.16	0.17		
	4	0.47	0.37	0.17			51	0.21	0.21	0.50			19	0.30	0.20	0.25		
	5	0.43	(0.32)	0.15			52	0.32	0.30	0.11	旧SB-1 P-8		20	0.26	0.19	0.24		
	6	0.40	0.39	0.11			53	0.40	0.38	0.22	旧SB-1 P-7		21	0.22	0.21	0.17		
	7	0.28	0.25	0.04			54	0.30	0.22	0.28	旧SB-1 P-4		22	0.53	0.48	0.11		
	8	0.64	(0.40)	0.16			55	0.37	0.30	0.25	旧SB-1 P-3		23	0.35	0.26	0.11		
	9	0.35	0.31	0.04			56	(0.30)	(0.26)	0.20	旧SB-1 P-2		B-9	1	0.49	(0.23)	0.17	
	10	0.98	(0.63)	0.24			57	0.29	0.18	0.24	旧SB-1 P-2			2	0.22	0.20	0.36	
	11	0.51	0.39	0.16			58	0.37	0.23	0.33	旧SB-1 P-2			3	0.18	0.17	0.27	
	12	0.52	(0.36)	0.11			59	0.21	0.17	0.04	旧SB-1 P-1			4	0.29	0.13	0.31	
	13	0.32	0.31	0.40			B-6	1	0.20	0.19	0.13			5	0.32	0.25	0.46	
	14	0.22	0.21	0.17				2	0.34	0.32	0.79			6	0.28	0.20	0.11	
B-4	1	0.50	0.45	1.14				3	0.19	0.19	0.09			7	0.66	0.36	0.09	
	2	0.47	0.35	0.20				4	0.25	0.24	0.11			8	0.35	0.26	0.60	
	3	0.58	0.43	0.14				5	0.29	0.24	0.09			9	0.54	0.40	0.18	
	4	0.40	0.31	0.65				6	0.27	0.23	0.20			10	0.24	0.19	0.09	
	5	0.34	0.31	0.27	旧SB-1 P-6			7	0.34	(0.26)	0.46		11	0.24	0.19	0.15		
	6	0.43	0.36	0.37	旧SB-1 P-5	8		0.28	(0.22)	0.13		12	0.33	0.28	0.11			
B-5	1	0.28	0.24	0.45		9		0.21	0.20	0.09		13	0.35	0.30	0.35			
	2	0.26	0.26	0.33		10		0.36	0.34	0.30		14	0.30	0.22	0.34			
	3	(0.52)	0.50	0.44		11	0.36	0.28	0.66		15	0.35	0.28	0.11				
	4	0.41	0.28	0.28		12	0.25	0.23	0.22		16	0.40	0.27	0.11				
	5	0.27	0.26	0.28		13	0.26	0.23	0.08		17	0.21	0.20	0.15				
	6	0.36	0.29	0.31		14	0.46	0.42	0.50		18	0.38	0.34	0.22				
	7	0.44	0.29	0.28		15	0.38	(0.35)	0.42		19	0.28	0.25	0.32				
	8	0.50	0.41	0.58		16	0.63	0.47	0.30		20	0.33	0.29	0.39				
	9	0.29	0.25	0.11		17	0.39	0.33	0.73		21	0.41	0.26	0.24				
	10	0.29	0.28	0.31		18	0.41	(0.17)	0.25		22	0.30	0.27	0.22				
	11	0.24	0.21	0.06		19	0.60	0.40	0.54		23	0.57	0.45	0.31				
	12	0.31	0.23	0.24		20	0.43	0.39	0.48		24	0.51	0.41	0.15				
	13	0.35	0.33	0.12		21	0.47	0.46	0.45		25	0.44	0.39	0.16				
	14	0.36	0.31	0.67		22	0.25	0.24	0.34		26	0.43	0.34	0.12				
	15	0.25	0.20	0.14		23	0.32	0.25	0.09		27	0.44	0.43	0.24				
	16	0.19	0.19	0.20		B-7	1	0.37	0.39	0.13		28	0.48	0.34	0.38			
	17	0.26	0.19	0.48			2	0.54	0.40	0.48		29	0.42	0.41	0.17			
	18	0.26	0.25	0.46			3	0.59	0.53	0.31		30	0.51	0.44	0.24			
	19	0.61	0.44	0.49			4	0.38	0.35	0.47		31	0.32	0.27	0.15			
	20	0.57	(0.30)	0.21			5	0.42	0.40	0.51		32	0.32	0.28	0.36			
	21	0.34	0.32	0.55			6	0.41	0.34	0.27		33	0.26	0.16	0.09			
	22	0.22	0.23	0.11			7	0.32	0.29	0.30		B-10	1	0.60	0.53	0.42		
	23	0.41	0.38	0.42			8	0.37	0.29	0.08			2	0.19	0.17	0.24		
	24	0.29	0.29	0.40			9	0.69	0.52	0.52			3	0.19	0.19	0.22		
	25	0.36	0.30	0.50			10	0.30	0.27	0.33			4	0.45	0.35	0.35		
	26	0.24	0.22	0.37		11	0.58	(0.45)	0.26		5		0.27	0.24	0.24			
	27	0.23	0.16	0.22		12	(0.39)	0.38	0.38		6		0.30	0.23	0.17			
	28	0.27	0.25	0.17		13	(0.32)	0.28	0.26		7		0.31	0.21	0.18			
	29	0.16	0.15	0.17		14	0.23	0.21	0.11		8		0.55	0.50	0.18			
	30	0.23	0.20	0.22		15	(0.34)	0.29	0.20		C-2	1	0.40	0.38	0.20			
	31	0.28	0.23	0.26		16	0.84	0.41	0.26	旧SK-31		2	0.53	0.46	0.14			
	32	0.27	0.27	0.38		17	0.32	0.18	0.49			3	0.43	(0.30)	0.06			
	33	0.21	0.17	0.32		18	0.47	0.26	0.46			4	0.58	0.41	0.13			
	34	0.18	0.17	0.14		B-8	1	0.26	0.16	0.09			5	(0.50)	(0.40)	0.16		
	35	0.21	0.19	0.11			2	0.33	0.26	0.25			6	1.10	(0.43)	0.12		
	36	0.18	0.14	0.15			3	0.38	0.36	0.62			7	0.61	(0.40)	0.23		
					4		0.23	0.19	0.32			8	0.43	0.26	0.06			

グリッド	番号	長軸	短軸	深さ	備考	グリッド	番号	長軸	短軸	深さ	備考	グリッド	番号	長軸	短軸	深さ	備考
C-2	9	0.46	0.39	0.11		C-5	3	0.24	0.23	0.29		C-6	11	0.30	0.25	0.08	
	10	0.36	0.34	0.06			4	0.33	0.23	0.32			12	0.32	(0.27)	0.26	
	11	0.84	(0.63)	0.49			5	0.55	0.48	0.30	旧SK-36		13	0.48	0.22	0.33	
	12	0.54	0.46	0.21		C-6	1	0.40	0.28	0.38			14	0.32	0.24	0.17	
	13	1.41	0.62	0.22			2	(0.28)	0.27	0.13			15	0.38	0.36	0.42	
	14	0.87	0.69	0.15			3	0.41	(0.27)	0.09		C-8	1	0.73	0.50	0.14	
	15	0.51	(0.31)	0.20			4	0.27	(0.20)	0.10			2	0.75	(0.42)	0.14	
	C-3	1	0.28	0.24	0.09		5	0.37	0.25	0.35		C-10	1	(0.73)	(0.70)	0.66	
2		0.88	0.85	0.12		6	0.35	0.32	0.44		2		1.03	(0.71)	0.55		
C-5	1	0.33	0.31	0.40		7	0.45	(0.27)	0.26		3		1.01	(0.55)	0.71		
	2	0.38	0.31	0.49		8	(0.41)	0.40	0.28		4	0.75	(0.42)	0.30			
						9	(0.41)	0.32	0.25								
						10	0.41	0.28	0.27								

### (3) 竪穴状遺構

#### 第5号竪穴状遺構 (第24図)

B-3・4グリッドに位置し、北西部分で第14号溝跡と重複関係にあるが、その新旧は不明である。平面形態は、やや歪んだ楕円形を呈し、底面は概ね平坦である。掘り込みは、0.3m弱で北東側がやや深く壁は緩やかに立ち上がる。

遺物は出土していない。

#### 第6号竪穴状遺構 (第24・25図)

C-3グリッドに位置する。平面形態は、隅丸長方形を呈すると思われるが、南隅部は調査区域外に、北から北東部は第75号土壌と木根による攪乱で定かではない。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物は、第25図に図示した陶磁器の皿や碗、徳利、播鉢、焙烙の他、硯や砥石などの石製品が出土している。出土した陶磁器・土器類は、概ね18世紀のものであるが、8の播鉢は16世紀まで遡るであろう。

#### 第7号竪穴状遺構 (第24図)

B-9・10グリッドに位置し、多数の土壌やピットと重複する。長軸4.72mの楕円形を呈し、掘り込みは非常に浅い。当初は縄文時代の住居跡かと思われたが、縄文土器の出土はみられず、炉跡も検出できなかったため竪穴状遺構とした。

遺物は、近世の焙烙と磁器碗の破片が1点ずつ検出されたのみである。

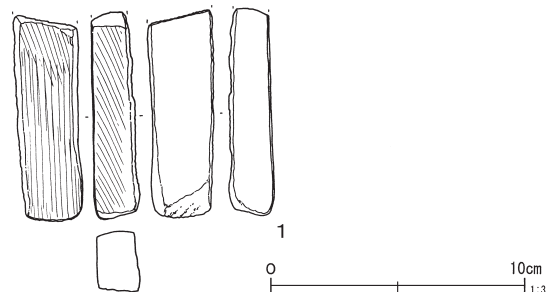
### (4) ピット (第26、27図)

調査区のほぼ全域から多数のピットが検出された。ここでは、グリッドごとに通し番号を付し、グリッドピットとして整理した。各ピットの計測値は第11表に示した。

ピットは、B-5グリッド、およびB-9グリッド付近で集中して検出された。出土遺物もほとんどなく、その配置から掘立柱建物跡となる柱穴も確認できなかった。

### (5) 遺構外出土遺物 (第28図)

遺構外からは第28図1の砥石が検出された。上部を欠損するが、上面、左側面には使用痕跡が顕著に認められる。



第28図 遺構外出土遺物 (2)

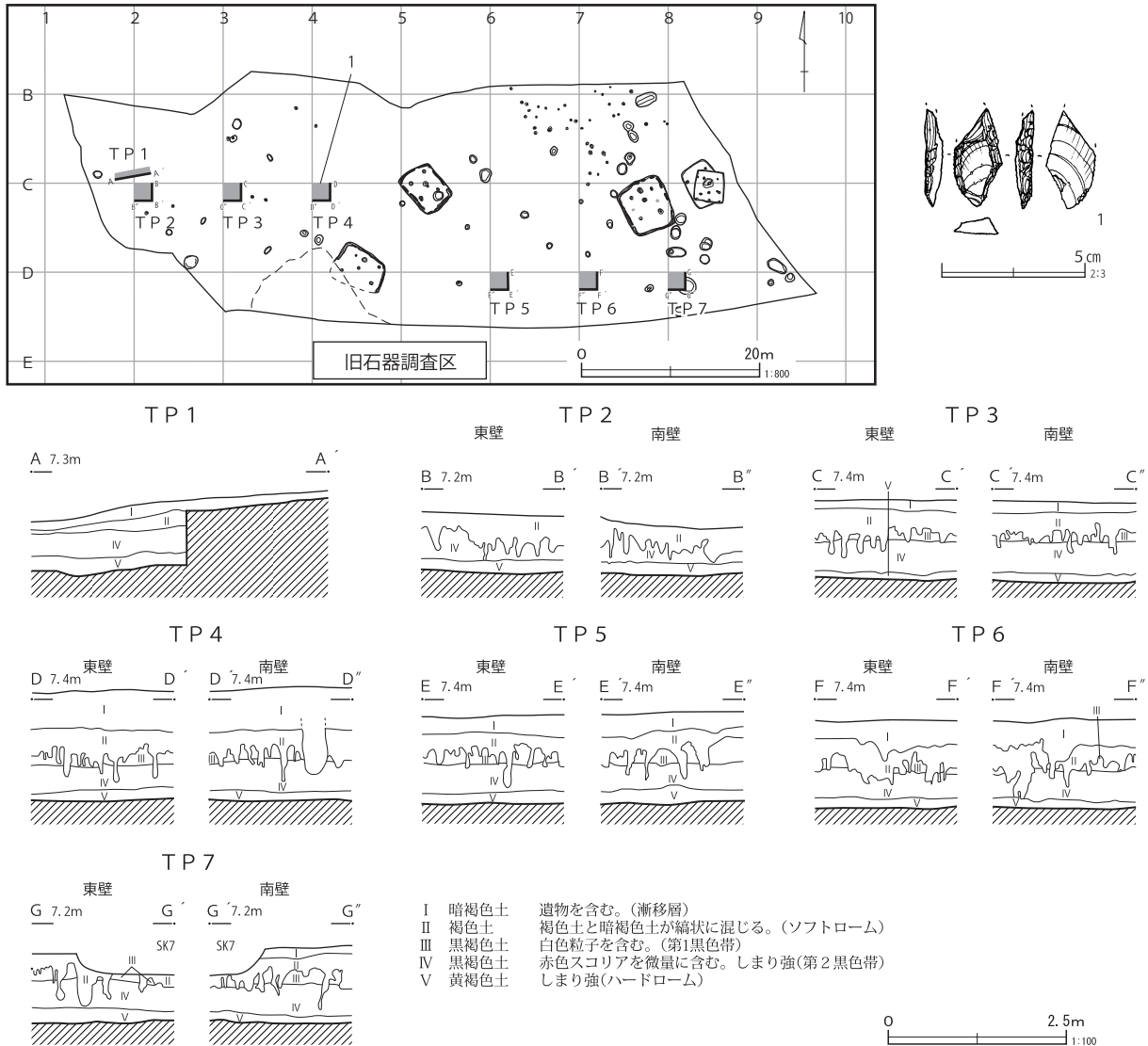
第12表 遺構外出土遺物観察表

図版	番号	遺構名	種別	器種	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	焼成	釉薬装飾	成型技法	備考
28	1	表採	石製品	砥石		長さ8.1	幅1.7	厚さ2.7	重さ55.0g	砂岩			



# V 道仏北遺跡の遺構と遺物

## 1. 旧石器時代の調査と遺物



旧石器時代の調査は、グリッドの北西隅に2mグリッドを6箇所と、調査区西側にトレンチを1箇所設定し、立川ローム層最下部(第V層)まで掘り下げた(第29図)。調査の結果、旧石器時代の石器集中等は検出されなかったが、C-4グリッドからナイフ形石器が1点出土した(第29図1)。

ローム層の堆積状況は、第II層(ソフトローム)が厚く、第IV層(第2黒色帯)まで部分的に達している。第III層(第1黒色帯)は土層断面ではブロック状にしか確認できないが、平面的には黒味

があるハードローム層として、縄文時代以降の遺構確認面である。第V層は黄褐色土で、湧水するためそれ以上の調査はできなかった。

第29図1は、ナイフ形石器である。上半部を裏面からの力によって欠損するが外形は、左右対称に近い尖頭器状になると思われる。素材剥片は右下位からの縦長剥片を用いており、打面は右側縁の調整加工によって除去されている。調整加工は、裏面からの規格的剥離が現状では両側縁に施されているが、刃部は左刃になると思われる。

## 2. 縄文時代の遺構と遺物

### (1) 住居跡

#### 第1・5号住居跡 (第31図)

第1・5号住居跡は、調査区最東端のB・C-8グリッドに位置し、土層観察の結果、第1号住居跡を第5号住居跡が壊して構築している。

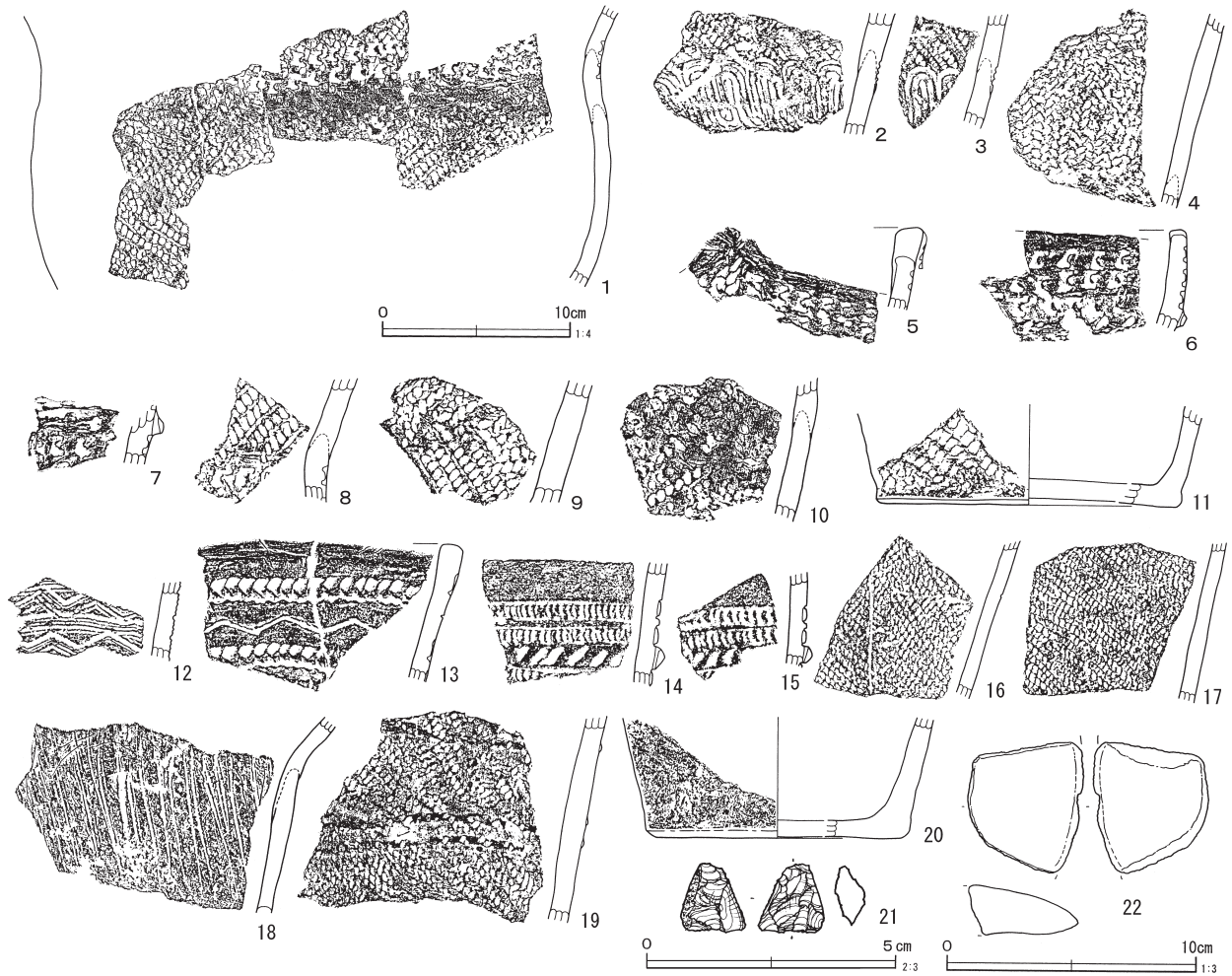
第1号住居跡の平面形態は、長方形に近い台形を呈する。規模は、長軸4.94m、短軸3.83m、深さ0.45mを測り、主軸方位はN-33°-Wを指す。柱穴は4本 (SJ1 P 1~P 4) 検出されており、4本柱の住居跡である。炉跡は第5号住居跡に壊されたため、検出できなかった。

第5号住居跡は、平面方形を呈し、その規模は長軸3.52m、短軸3.30m、深さ0.63mを測る。主軸方位はN-6°-Eを指す。床面からは、8本の柱穴 (SJ5 P 1~P 8) が検出され、その配置か

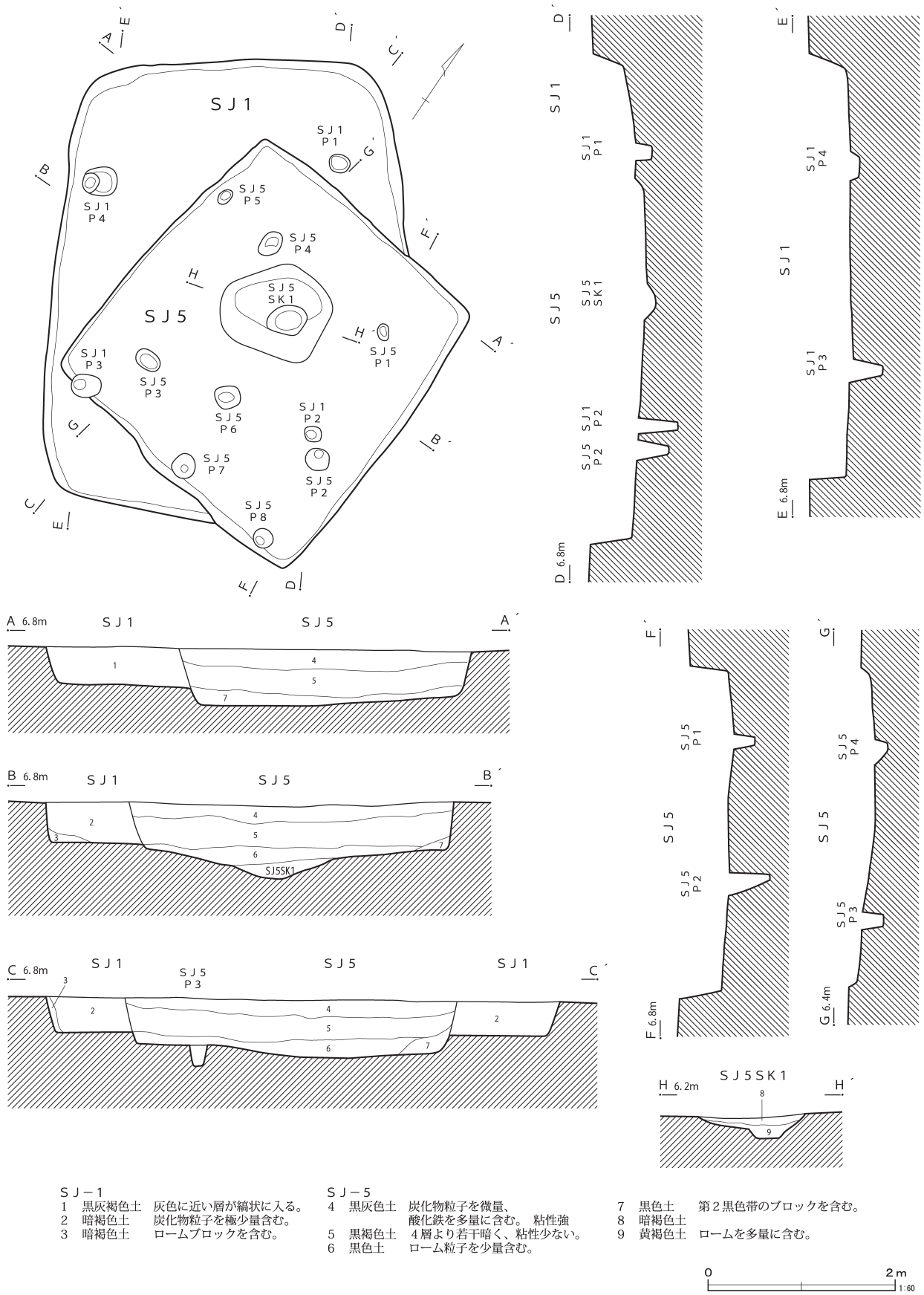
ら、P 1、P 2、P 3、P 4が支柱穴を構成すると考えられる。また、住居跡やや北寄り、P 1とP 4の間から住居に伴う土壌 (SJ5 SK 1) が1基検出された。炉跡は確認できなかった。

この第1・5号住居跡が所在する調査区東端部は、台地の東側縁辺部にあたり、標高約6.6mと、調査区中央部の最も高く安定している部分より約0.8mも低い。そのため、地下水の滞水による土層の変色により遺構確認が非常に困難であった。

この2軒の住居跡からは、関山II式から諸磯b式期の土器が出土しており、その主体をなすのは、黒浜式中段階と諸磯a式段階である。そのことから、各住居跡の所属時期は、第1号住居跡が黒浜式期、第5号住居跡が諸磯a式期と考えられる。関山II、諸磯b式土器は流れ込みであろう。



第30図 第1号住居跡出土遺物



第31図 第1号・第5号住居跡

第13表 第1・5号住居跡 柱穴計測表

番号	長軸	短軸	深さ	番号	長軸	短軸	深さ	番号	長軸	短軸	深さ
SJ1-P1	0.22	0.20	0.20	SJ5-P1	0.18	0.12	0.22	SJ5-P5	0.20	0.12	0.14
SJ1-P2	0.18	0.16	0.44	SJ5-P2	0.26	0.24	0.24	SJ5-P6	0.26	0.24	0.08
SJ1-P3	0.32	0.24	0.34	SJ5-P3	0.30	0.18	0.22	SJ5-P7	0.26	0.24	0.22
SJ1-P4	0.38	0.30	0.20	SJ5-P4	0.30	0.22	0.14	SJ5-P8	0.22	0.20	0.20

### 第1号住居跡出土遺物 (第30図)

第1・5号住居跡より出土した遺物は、調査過程でその帰属を明確に判別することが不可能であったため、第1号住居跡出土遺物として一括した。

図示できた土器は器形の復元できるものも含めて20点、石器は2点である。

2～4は、関山II式である。2、3は地文として、直前段合摺、いわゆる一般的な正反の合であるA種Rを施文し、2は4本櫛、3は3本櫛による縦長のコンパス文を施す。4は、組紐RRLを施文する。

1、5～11は、黒浜式であり、同一個体と考えられる。口縁部は4単位の波状口縁で、胴部上半で括れ、一旦膨らみ、底部にかけて緩やかにすばまる器形の土器と考えられる。口縁部と括れ部に、半截竹管でC字状文を施す。半截竹管を器面に左から右方向へ押しつけるようにして施文したと考えられる。5、6にみられるように口縁部直下には、3段、括れ部には1のように2段のC字状施文がなされ、口縁部施文の下位には7にあるように刻みのついた隆帯を挟んで、さらにC字状文が施文される。地文は附加条で、2段の単節LRに0段の1とRLにrをそれぞれ正方向に附加したものを羽状に施文する。11は底部で、わずかに上げ底状を呈する。

12～20は諸磯式である。12は、櫛を用いた波状文の土器で、5本櫛で平行線を引いた間に波状文を施す諸磯a式である。13～15は、半截竹管による爪形文を施したものである。13は、2段にわた

る連続爪形文の間に、沈線で山形文を施す。14、15は同一個体で、半截竹管で平行沈線を引き、爪形文のガイドラインとしている。その爪形文の間には、刻みを有した隆帯を貼り付けている。諸磯a式終末からb式初頭である。16～18は地文のみの土器で、16、17は単節縄文RLの横位施文である。16は中央部に縦位沈線が引かれている。18は条線の土器である。19は浮線文の付いた土器で、諸磯b式である。浮線文を貼り付けた後、単節縄文RLを施文する。20は無文の底部である。

21、22は出土した石器である。21は、楔形石器で、厚手不定形の小形剥片を用いており、上下両端に潰れ状の剥離が見られる。22は軽石である。円盤状であったと思われるが、右側を大きく欠損している。

### 第2号住居跡 (第32図)

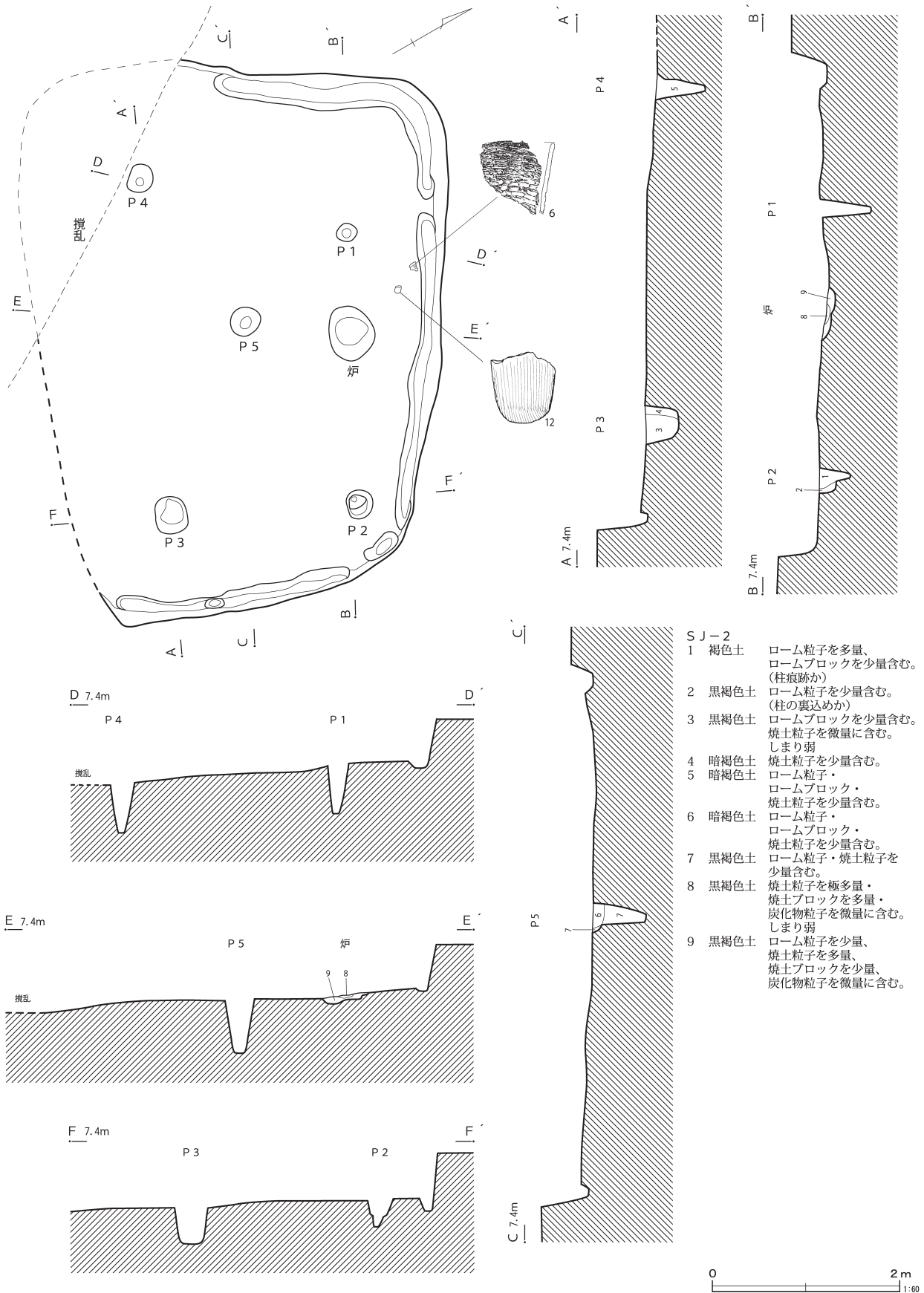
第2号住居跡は、C・D-4グリッドに位置する。調査区中央部の標高約7.3mの安定した台地上に構築されているが、南西部分を攪乱に壊され、住居跡南側の壁の立ち上がりは確認できなかった。平面形態は、台形を呈すると思われる、その規模は長軸5.82m、短軸4.28m、深さ0.58mを測る。主軸方位はN-65°-Wを指す。住居跡床面は、緩やかな凹凸はあるものの概ね平坦である。壁の立ち上がりは直立に近い角度をもっており、壁が確認できた西、北、東側の床面からは途切れながらではあるが周溝が検出された。

柱穴は5本検出され、その配置から、P1、P2、P3、P4が支柱穴と考えられる。住居跡北寄り中央部のP1、P2の間から炉跡が1基検出

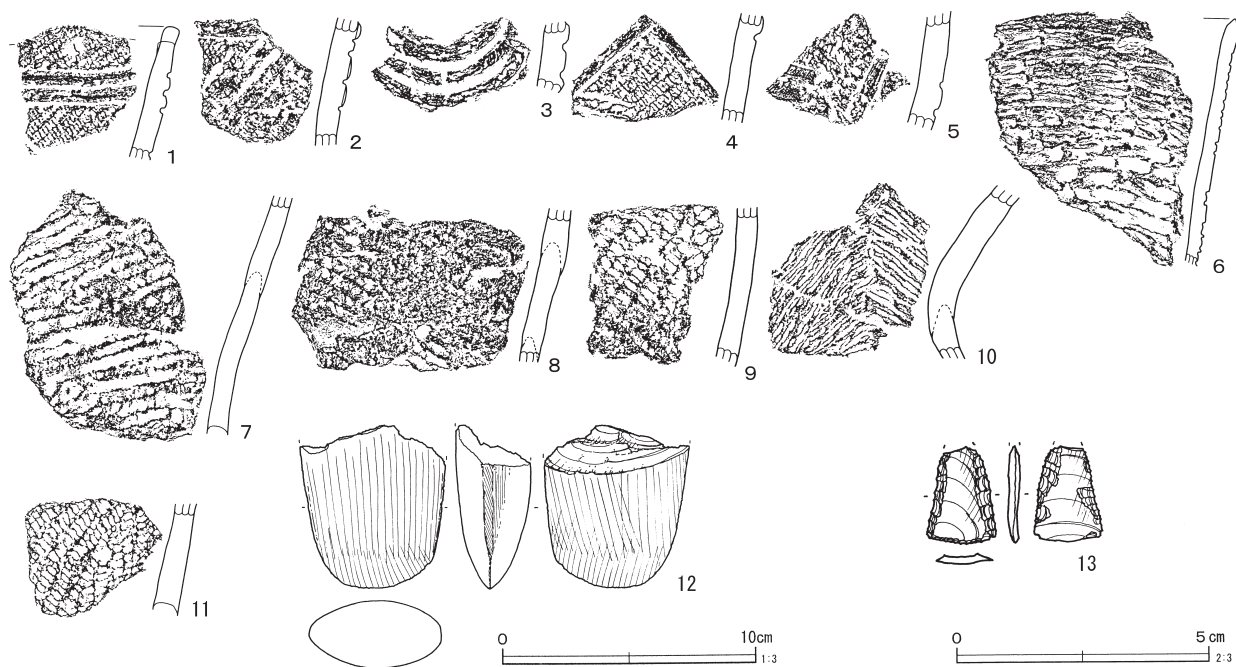
第14表 第2号住居跡 柱穴・炉跡計測表

番号	長軸	短軸	深さ	番号	長軸	短軸	深さ	番号	長軸	短軸	深さ
P1	0.22	0.20	0.52	P3	0.40	0.34	0.40	P5	0.32	0.32	0.56
P2	0.30	0.28	0.32	P4	0.30	0.26	0.52	炉跡	0.58	0.48	0.08





第32図 第2号住居跡



第33図 第2号住居跡出土遺物

された。平面形態は不整形な楕円形で、底面は焼けていなかったが、覆土中には多量の焼土を含む。

本住居跡の所属時期は、出土土器から黒浜式期と考えられる。

### 第2号住居跡出土遺物（第33図）

本住居跡は、攪乱に壊されていたこともあり出土遺物は多くなかった。図示した遺物は、石器を含め13点である。

1～5は、関山II式の口縁部文様帯を持つ土器で、半截竹管を用いた重平行沈線で区画や円形、山形などの文様を描いている。全て地文があり、1、2、4は単節LR、5は判然としないがループ文のようである。6～10は、黒浜式である。6は、器面に半截竹管を左から右方向へ押し引きする。恐らく器面が柔らかい段階で施文したと思われ、粘土のたわみが残されている。7、8は無節の縄文で、7はL、8はRである。9は、単節LR、RLを羽状施文する。10は無節縄文を施す。条が細くよれていることから、単節を撚り戻して作った無節と考えられる。11は、単節LRを施文するが、多条の

縄を使用することから、花積下層式と考えられる。

12、13は出土した石器である。12は磨製石斧で、基部を大きく欠損している。刃部は円刃である。13は石鏃の未成品と考えられる。先端は尖っていないが両側縁に加工が施されている。

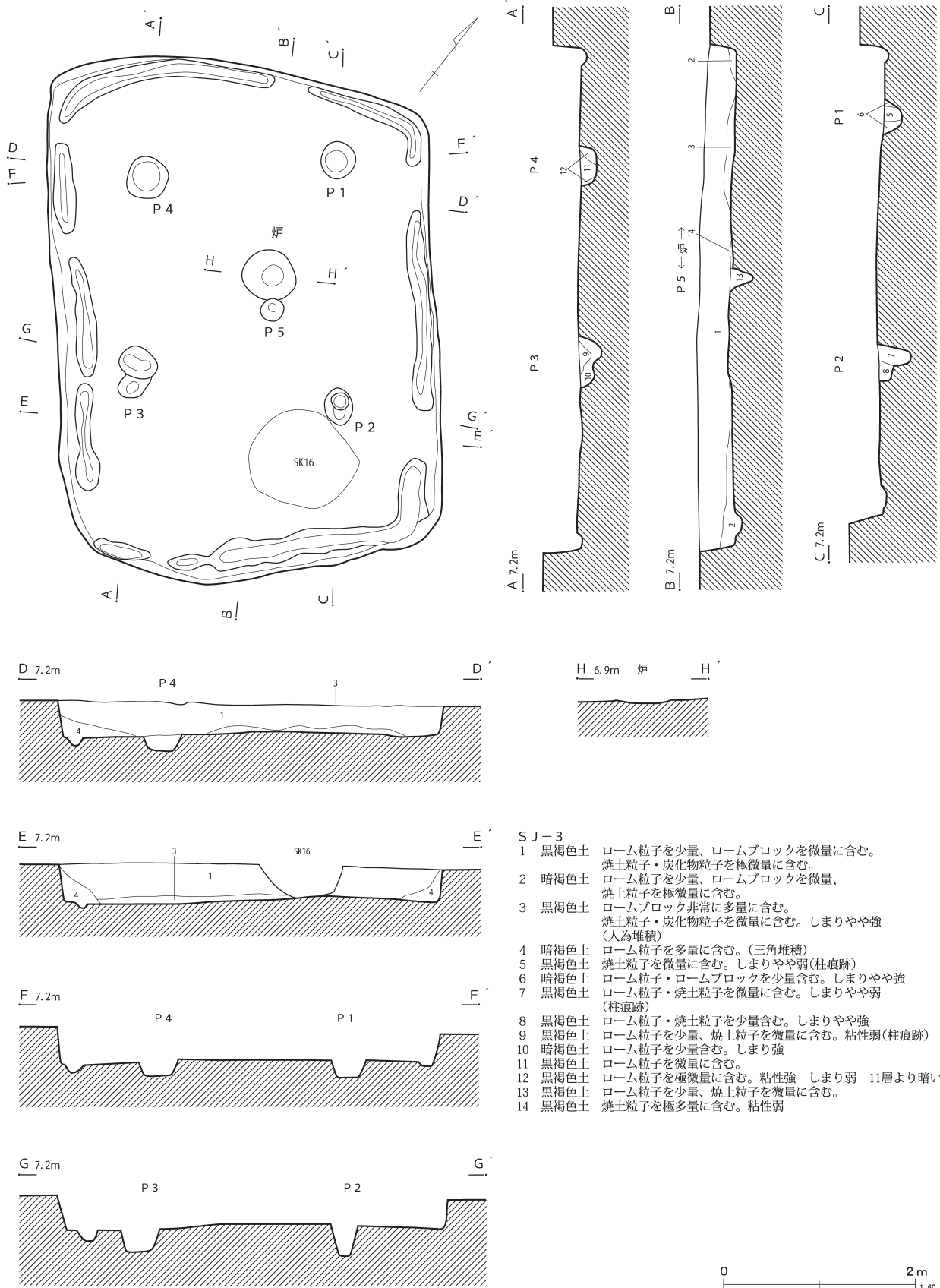
### 第3号住居跡（第34図）

第3号住居跡は、調査区の中央部、B・C-4・5グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形を呈し、その規模は、長軸5.40m、短軸3.97m、深さ0.43mを測る。主軸方位はN-39°-Wを指す。住居跡床面は、緩やかな凹凸はあるものの概ね平坦で、壁は直立に近い角度をもって立ち上がる。壁際床面からは、途切れながらも全周する周溝が検出された。柱穴は5本検出され、その配置からP1、P2、P3、P4が支柱穴と考えられる。炉跡は、中央部から1基検出された。平面形態は円形で、底面はそれほど焼けてはいなかったが、覆土中からは多量の焼土が検出された。

本住居跡の所属時期は、出土土器から黒浜式期と考えられる。

第15表 第3号住居跡 柱穴・炉跡計測表

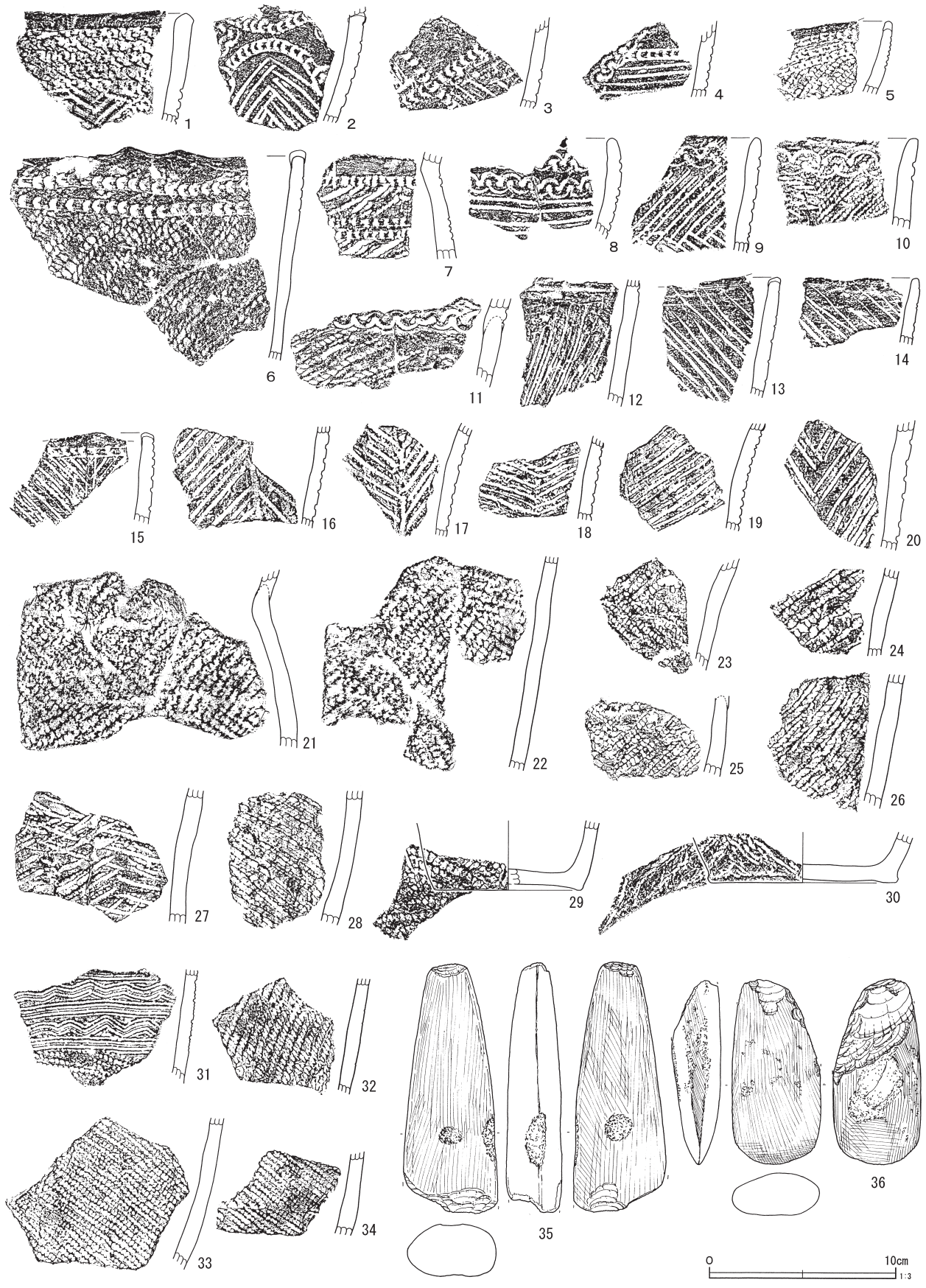
番号	長軸	短軸	深さ	番号	長軸	短軸	深さ	番号	長軸	短軸	深さ
P 1	0.38	0.36	0.18	P 3	0.54	0.30	0.24	P 5	0.24	0.24	0.24
P 2	0.38	0.30	0.34	P 4	0.44	0.44	0.18	炉跡	0.56	0.52	0.04



- S J-3
- 1 黒褐色土 ローム粒子を少量、ロームブロックを微量に含む。焼土粒子・炭化物粒子を極微量に含む。
  - 2 暗褐色土 ローム粒子を少量、ロームブロックを微量、焼土粒子を極微量に含む。
  - 3 黒褐色土 ロームブロック非常に多量に含む。焼土粒子・炭化物粒子を微量に含む。しまりやや強(人為堆積)
  - 4 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。(三角堆積)
  - 5 黒褐色土 焼土粒子を微量に含む。しまりやや弱(柱痕跡)
  - 6 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックを少量含む。しまりやや強
  - 7 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子を微量に含む。しまりやや弱(柱痕跡)
  - 8 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子を少量含む。しまりやや強
  - 9 黒褐色土 ローム粒子を少量、焼土粒子を微量に含む。粘性弱(柱痕跡)
  - 10 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。しまり強
  - 11 黒褐色土 ローム粒子を微量に含む。
  - 12 黒褐色土 ローム粒子を極微量に含む。粘性強 しまり弱 11層より暗い
  - 13 黒褐色土 ローム粒子を少量、焼土粒子を微量に含む。
  - 14 黒褐色土 焼土粒子を極多量に含む。粘性弱

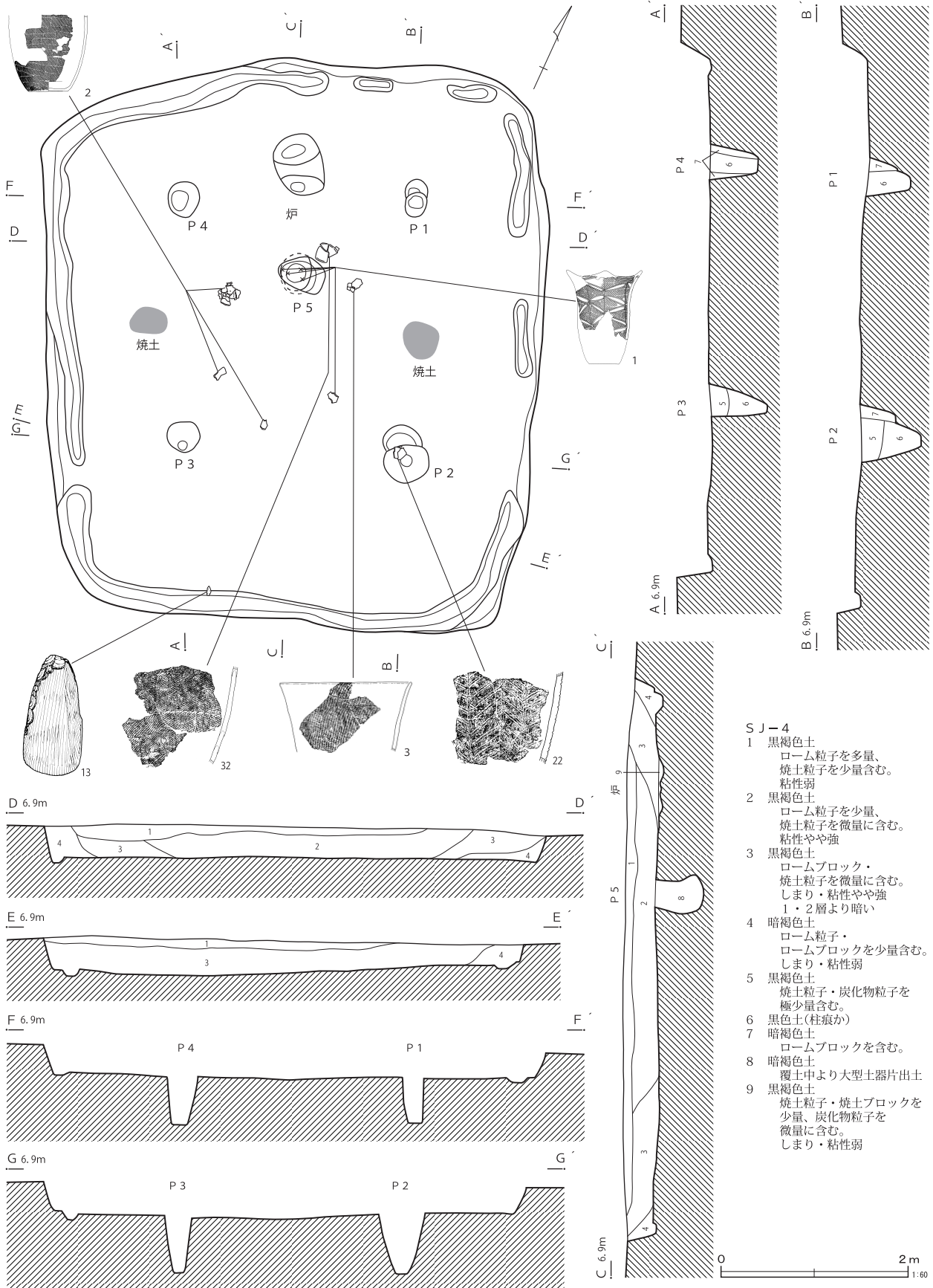
第34図 第3号住居跡



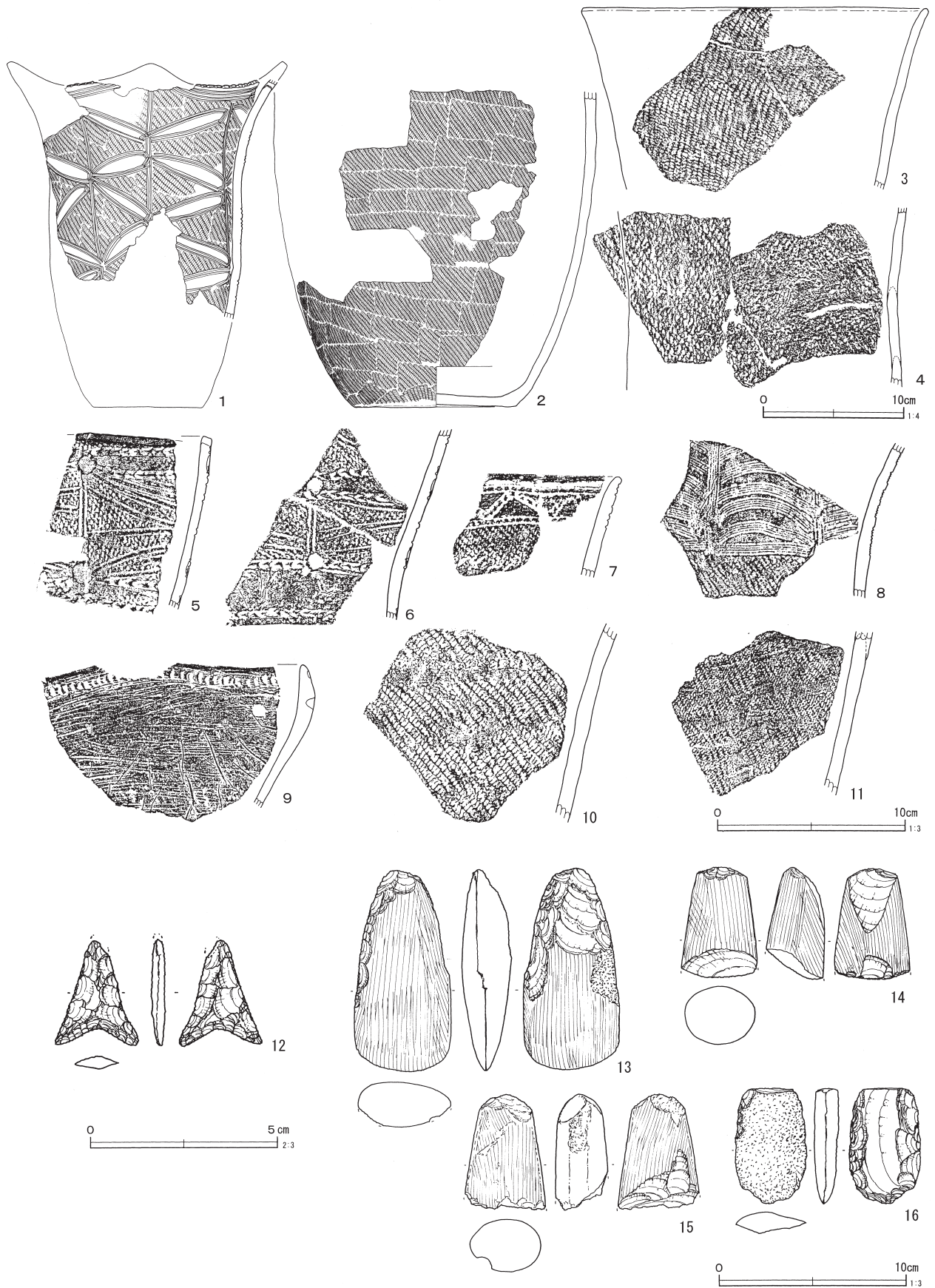


第35图 第3号住居跡出土遺物



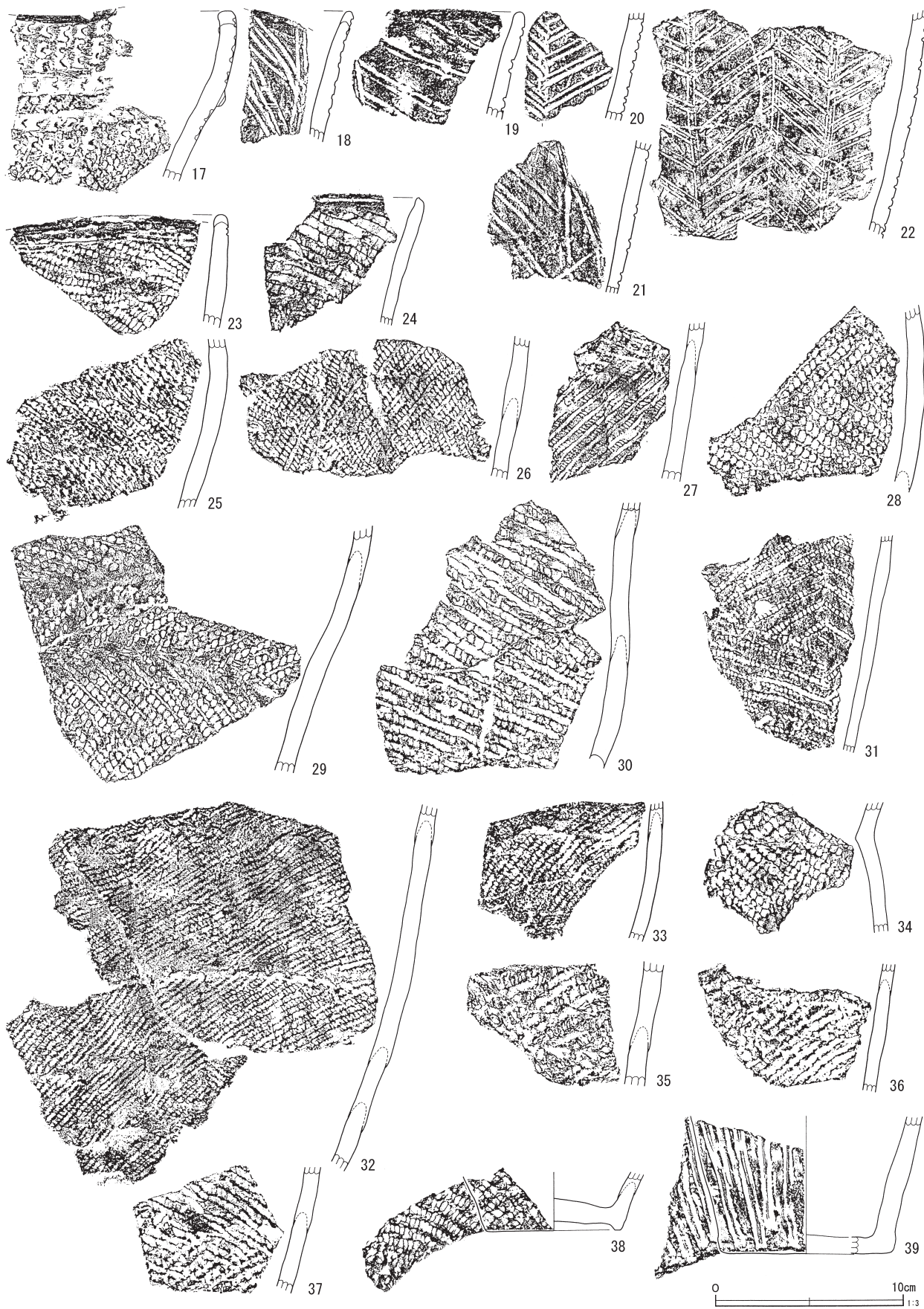


第36図 第4号住居跡



第37图 第4号住居跡出土遺物(1)





第38図 第4号住居跡出土遺物(2)

### 第3号住居跡出土遺物 (第35図)

本住居跡から出土した遺物は、石器を含め36点である。1は関山II式である。多段ループ文を地文とし、平行沈線でV字文を描く。2～30は黒浜式である。2～4は、半截竹管で爪形文や平行沈線文、コンパス文を施し、口縁部文様帯を構成する。2は第46図112と同一個体である。5～7は、口縁部もしくは地文の間に爪形文を施文する。5は波状口縁で、6は角状突起を持つが一つ欠損する。8～11はコンパス文を施す。9は、平行沈線を羽状に施文しており、菱形を構成する土器と推定される。12は櫛による条線が施され、上端部には爪形文が施文される。13～20は肋骨文を施す。13、14は同一個体で、15は口縁部に爪形文を施文し、わずかな突起を持つ。21～30は地文のみの土器である。21～23は、単節 RL と LR を羽状に施文する。24は、太さの異なる1段の縄 R 2本を撚り合わせて作った単節 LR を横位施文したため、異なる幅の条が1本おきに出てくる。25～28は附加条である。25は、2段の単節 LR に1段の無節 R をS字方向に附加したものと単節 RL に無節 L をZ字方向に附加したものを羽状に施文する。26は、1段の無節 L に、同じく無節 L をS字方向に附加したものを施文する。27は、軸縄に1段の無節 L をZ字方向に附加したものと、無節 R をS字方向に附加したものを羽状に施文する。軸縄は圧痕が浅いため判然としない。28は、2段の単節 RL と1段の無節 L を撚り合わせる際、2段の RL を反撚りにして絡めている。29、30は底部で、29は単節 RL を、30は無節 R・L を施文する。31～34は諸磯 a 式である。31は、櫛で口縁部文様帯を描出する土器で、5本櫛で平行線を引き、その間に波状文を施す。32～34は縄文のみの土器で、32は、0段多条の単節 LR を、33、34は単節 RL をそれ

ぞれ横位施文する。

35、36は磨製石斧である。35は刃部を欠損している。外形は基端部が細くなり、横断面は凸レンズ状になる。基部の両面に凹がみられる。36は基端部を欠損し、刃部は円刃である。

### 第4号住居跡 (第36図)

第4号住居跡は、B-7、C-7・8グリッドに位置し、第1・5号住居跡の西側に隣接する。平面形態は長方形で、その規模は、長軸6.01m、短軸5.30m、深さ0.40mを測る。主軸方位はN-25°-Wを指す。住居跡床面は、ほぼ平坦で、壁は緩やかな角度をもって立ち上がる。壁際床面からは、途切れるものの全周する周溝が検出された。柱穴は5本検出され、その配置からP1、P2、P3、P4が支柱穴と考えられる。P1とP4の間の床面から、炉跡が1基検出された。平面形態は楕円形で、底面は赤褐色の硬化面が確認された。また、P1とP2の間、P3とP4の間の2か所の床面からも焼土が検出された。

本住居跡の所属時期は、出土土器から諸磯 a 式期と考えられる。

### 第4号住居跡出土遺物 (第37・38図)

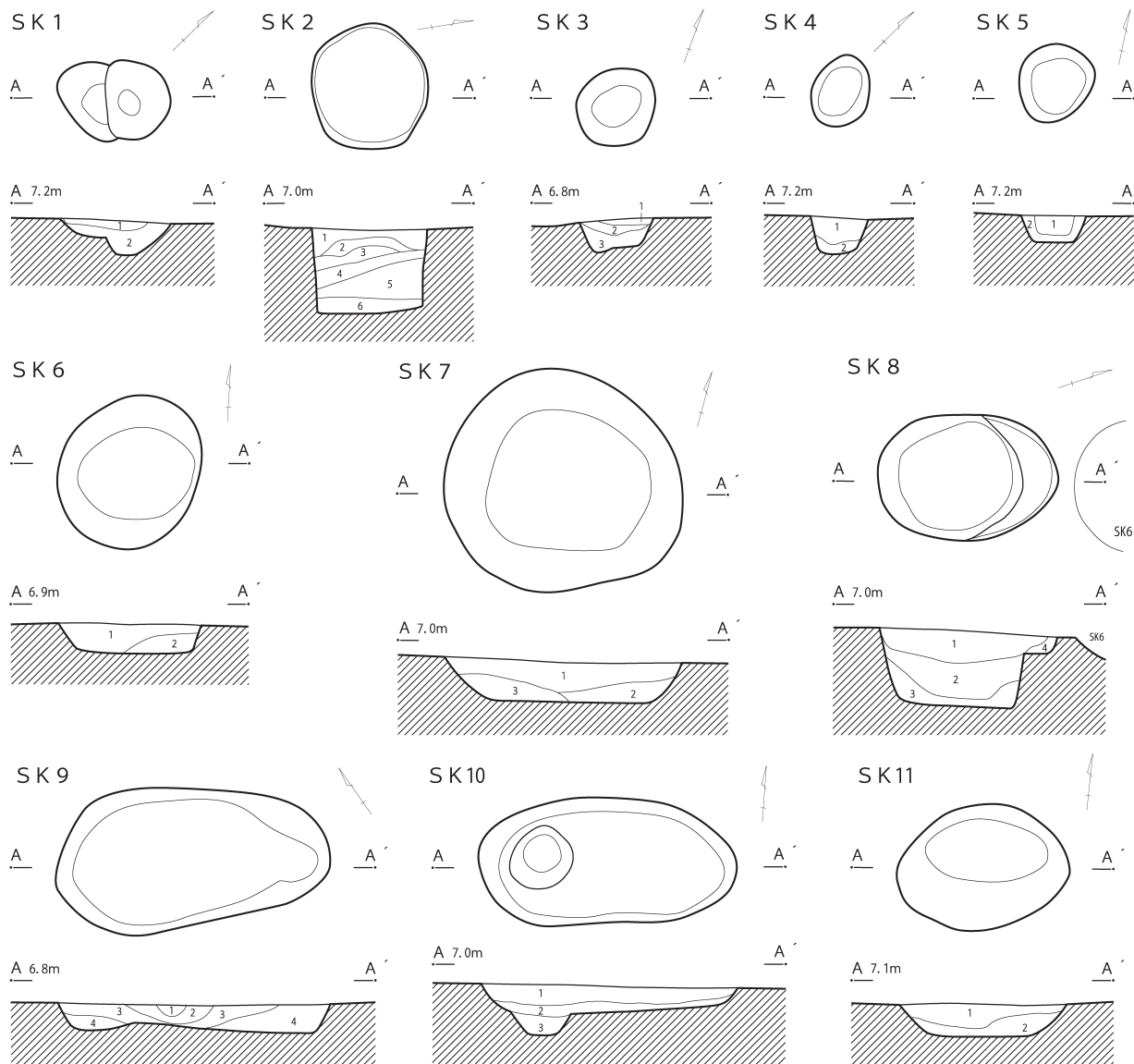
本住居跡からは、他の住居跡より比較的多くの遺物が出土した。図示した遺物は39点である。1～11は諸磯 a 式、12～16は石器、17～39は黒浜式である。

1は、半截竹管で対角線文を施す土器である。縦位区画後、花卉状の弧線を平行沈線で描き対角に配置する。弧線間は地文を磨り消す。波頂部を欠損するが、4単位の波状口縁で、口唇部には刻みを有する。地文は、単節 RL を横位施文する。黒浜式から諸磯 a 式への過渡期の様相を持つ。2は、直前段多条の縄文を施文する。1段の無節 L、3本をR方向に撚り合わせているため、2本おき

第16表 第4号住居跡 柱穴・炉跡計測表

番号	長軸	短軸	深さ	番号	長軸	短軸	深さ	番号	長軸	短軸	深さ
P 1	0.40	0.22	0.44	P 3	0.34	0.34	0.60	P 5	0.50	0.36	0.52
P 2	0.62	0.46	0.64	P 4	0.38	0.34	0.50	炉跡	0.66	0.50	0.06



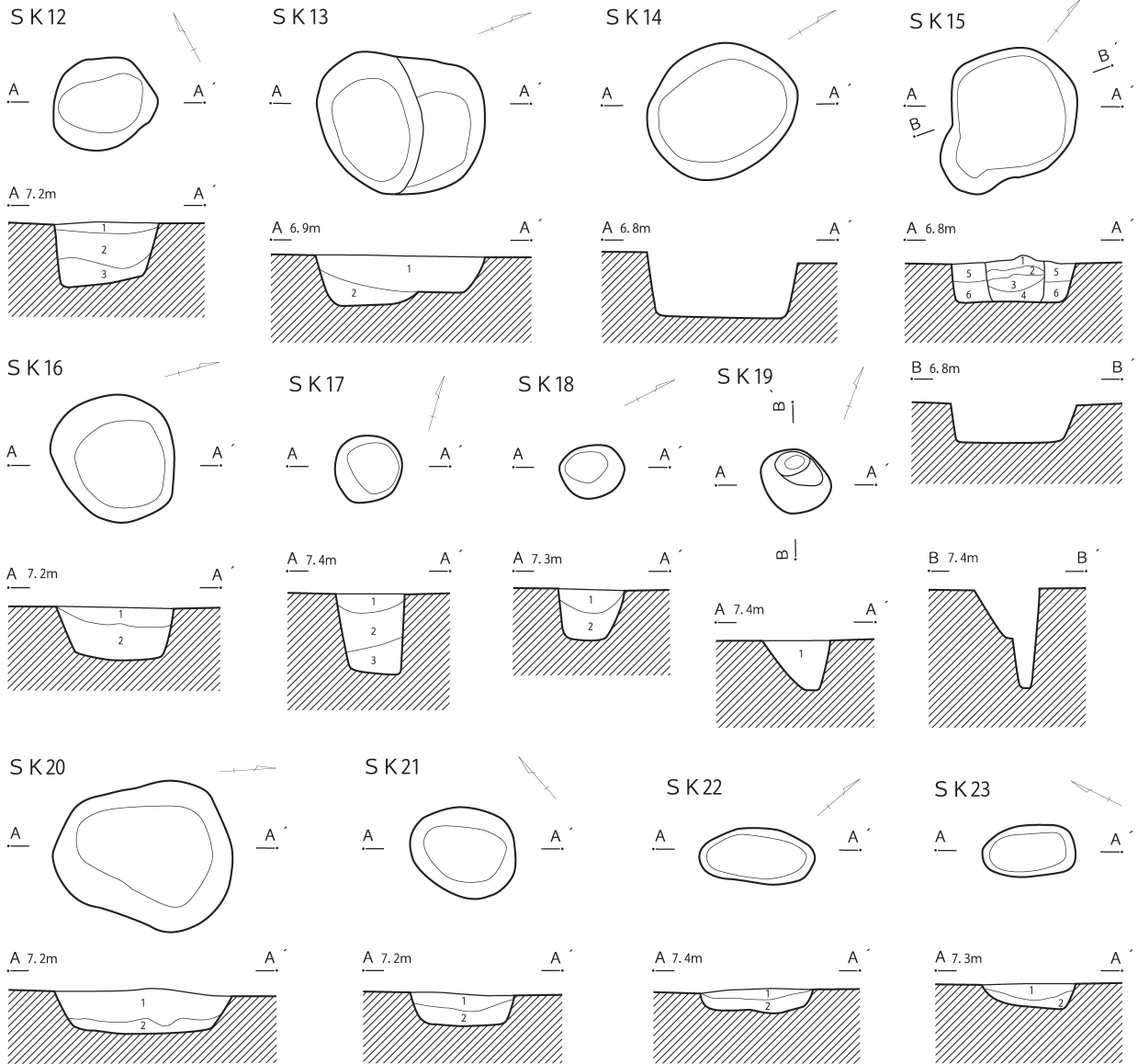


- SK-1**  
 1 黒褐色土 炭化物粒子を微量、白色粒子を少量含む。  
 2 暗黄褐色土 炭化物粒子を微量、酸化鉄を多量に含む。しまり強 粘性強
- SK-2**  
 1 黒褐色土 炭化物粒子を極微量に含む。しまりやや強  
 2 灰白色土 灰白色粘質土を主体とする。しまり非常に強 粘性強  
 下層には3層が竊状に入る。  
 3 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子を微量に含む。しまり弱  
 4 灰褐色土 しまり非常に弱 粘性やや強  
 5 黒褐色土 ローム粒子を少量含む。焼土粒子・炭化物粒子を微量に含む。  
 6 暗黄褐色土 しまり強 粘性弱
- SK-3**  
 1 暗褐色土 焼土粒子を少量含む。  
 2 暗黄褐色土 ロームブロック(1cm)を少量含む。  
 3 黒褐色土 炭化物粒子を極微量、黒褐色ブロック(2~3cm、硬質)を少量含む。粘性強
- SK-4**  
 1 黒褐色土 ロームブロック(1~2cm、硬質)を少量含む。  
 焼土粒子・白色粒子を微量に含む。しまり強  
 2 暗褐色土 焼土粒子を極微量に含む。
- SK-5**  
 1 黒褐色土 焼土粒子を微量に含む。しまりやや強 粘性弱  
 2 暗黄褐色土 しまり1層より強
- SK-6**  
 1 黒褐色土 ロームブロック(1cm、硬質)を少量、焼土粒子を微量に含む。  
 2 暗黄褐色土 ロームブロック(3cm、硬質)を少量、焼土粒子を微量に含む。しまり非常に強(人為堆積)

- SK-7**  
 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量含む。しまりやや強  
 2 暗褐色土 炭化物粒子を微量に含む。しまりやや強 1層より暗い  
 3 暗褐色土 ロームブロック(2~3cm、硬質)を少量含む。しまり弱 2層と同色
- SK-8**  
 1 黒褐色土 焼土ブロック(0.5~1cm)を少量、酸化鉄を多量に含む。粘性弱  
 2 黒褐色土 炭化物粒子を微量、灰褐色粘土ブロック(3~4cm)を多量に含む。しまりやや弱 1層よりやや明るい  
 3 黒色土 炭化物粒子を微量に含む。粘性弱  
 4 暗黄褐色土 しまり強
- SK-9**  
 1 褐色土 焼土ブロック(2~3cm)を多量に含む。しまり非常に弱 粘性弱  
 2 褐色土 ロームブロック(2~3cm硬質)・焼土粒子を少量含む。しまり弱 粘性弱  
 3 暗黄褐色土 焼土粒子を微量に含む。  
 4 暗黄褐色土 酸化鉄を多量に含む。しまり強 3層よりやや暗い
- SK-10**  
 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を極微量、粘土粒子(0.5cm)を少量含む。  
 2 暗黄褐色土 粘土ブロック(2~3cm)を少量含む。(SK-2の2層の粘土と同じ)  
 3 暗黄褐色土 炭化物粒子を少量含む。しまり強 2層より暗い
- SK-11**  
 1 黒褐色土 炭化物粒子を少量、粘土ブロック(1cm)を微量に含む。(SK-2の2層の粘土と同じ)  
 2 暗黄褐色土 炭化物粒子を微量に含む。



第39図 土壌(1)

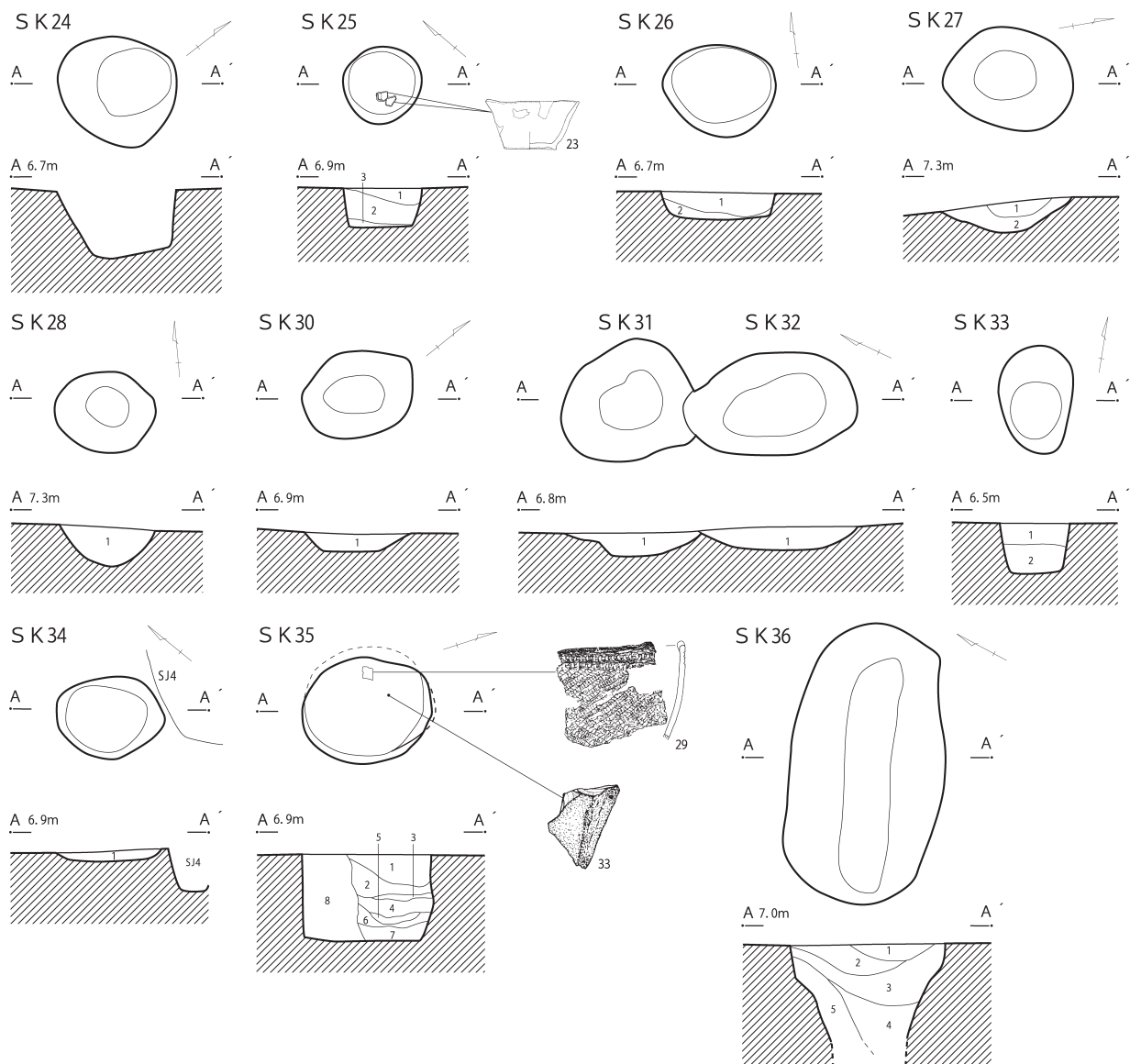


- SK-12  
 1 黒褐色土 焼土粒子を少量、炭化物粒子を微量に含む。しまり強 粘性弱  
 2 黒褐色土 焼土粒子を微量に含む。しまり強  
 3 黒褐色土 炭化物粒子・灰白色粘土ブロック(0.5~1cm)を少量含む。
- SK-13  
 1 暗褐色土 ロームブロック(2cm)を少量含む。  
 2 暗褐色土 炭化物粒子を極微量に含む。しまり強 1層より暗い
- SK-15  
 1 灰白色土 灰白色粘土を主体とする。下層には2層が縞状に入る。しまり強 粘性強(SK-2の2層の粘土と同じ)  
 2 黒褐色土 ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化物粒子を極微量、1層の灰白色粘土粒子・灰白色粘土ブロック(1cm)を微量に含む。  
 3 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量、灰白色粘土ブロック(0.5cm)を多量に含む。粘性強  
 4 黒褐色土 ローム粒子を少量、焼土粒子・灰白色粘土ブロック(0.5cm)を微量に含む。2層より暗い  
 5 暗褐色土 焼土粒子(0.5cm)を少量、灰白色粘土粒子(0.5cm)を微量に含む。しまりやや強  
 6 黒褐色土 ローム粒子を微量に含む。しまりやや強
- SK-16  
 1 褐色土 焼土粒子を微量に含む。しまり強  
 2 暗褐色土 ロームブロック(0.5~1cm)を微量、焼土ブロック(1.5cm)を極微量に含む。

- SK-17  
 1 黒褐色土 炭化物粒子を微量に含む。しまり強  
 2 暗褐色土 焼土粒子・焼土ブロック(1cm)を少量含む。  
 3 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を微量に含む。しまり・粘性弱
- SK-18  
 1 黒褐色土 灰白色粘土粒子を多量に含む。(SK-2の2層の粘土と同じ)  
 2 暗褐色土 炭化物粒子を微量に含む。しまりやや強
- SK-19  
 1 暗褐色土 焼土粒子を少量含む。しまり強 粘性弱
- SK-20  
 1 黒褐色土 ロームブロック(1cm)を微量、焼土粒子・炭化物粒子を少量含む。しまり強  
 2 暗褐色土 焼土粒子を微量に含む。しまり強 粘性やや強
- SK-21  
 1 暗褐色土 焼土粒子を微量に含む。しまり強  
 2 黒褐色土 ロームブロック(1~1.5cm)・焼土粒子を少量含む。
- SK-22  
 1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子を微量に含む。粘性弱  
 2 黒褐色土 ローム粒子を少量含む。しまりやや強
- SK-23  
 1 黒褐色土 焼土粒子を微量に含む。しまり強  
 2 暗褐色土 粘性やや弱



第40図 土壌(2)



- SK-25  
 1 褐色土 鉄分の酸化が激しい。ほとんどサビと高師小僧で埋め尽くされている。  
 2 黒褐色土 ローム粒子を少量、焼土粒子を微量に含む。しまりやや強  
 3 黒褐色土 ローム粒子を少量含む。しまり強 粘性やや強
- SK-26  
 1 黒褐色土 ローム粒子を少量、焼土粒子を微量に含む。しまり強  
 2 暗褐色土 しまりやや強
- SK-27  
 1 黒褐色土 炭化物粒子を微量、灰白色粘土ブロック(1~1.5cm)を少量含む。しまり強  
 2 暗褐色土 炭化物粒子・焼土粒子を微量に含む。しまり強 粘性弱
- SK-28  
 1 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。ロームブロック(1.5cm)を微量に含む。
- SK-30  
 1 暗褐色土 ローム粒子を少量、ロームブロック(1cm)を微量に含む。しまりやや強
- SK-31  
 1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック(0.5~1cm)を少量含む。粘性弱
- SK-32  
 1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック(2~3cm)・ロームブロック(0.5cm)を少量含む。しまりやや強(SK-31の1層より明るい色調)
- SK-33  
 1 暗褐色土 ローム粒子を微量に含む。粘性弱  
 2 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック(0.5cm)を微量、焼土粒子を極微量に含む。粘性・しまりやや強

- SK-34  
 1 暗褐色土 ローム粒子を多量、焼土粒子を微量に含む。粘性やや弱
- SK-35  
 1 暗褐色土 ローム粒子を微量、ロームブロック(0.5~1cm)を微量に含む。しまりやや弱 南側からの流れ込みによる堆積。  
 2 黒褐色土 灰褐色粘土が主体。焼土粒子・炭化物粒子を少量含む。粘性非常に強 しまりやや強  
 3 灰褐色土 ローム粒子を少量含む。粘性弱  
 4 褐色土 ローム主体。(人為堆積) しまり弱  
 5 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック(1~2cm)を少量含む。しまり・粘性弱  
 6 暗褐色土 ローム粒子を微量、ロームブロック(0.5cm)を少量含む。しまりやや強  
 7 暗褐色土 ローム粒子をやや多量、炭化物粒子を微量に含む。しまりやや強  
 8 暗褐色土 ローム粒子を多量、炭化物粒子を微量に含む。しまりやや強
- SK-36  
 1 暗褐色土 ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化物粒子を微量に含む。粘性強  
 2 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子を多量、茶褐色粘土ブロック(2~3cm)を少量含む。しまりやや強  
 3 暗褐色土 ローム粒子を少量、焼土粒子を微量に含む。粘性やや強 しまり弱  
 4 黒色土 ローム粒子を少量、焼土粒子を微量に含む。粘性やや強 しまり非常に弱  
 5 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を微量に含む。しまり強



第41図 土壌 (3)

第17表 土壙計測表

遺構名	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方位	形状	備考
SK 1	D-7	0.98	0.72	0.30	N-58°-E	不整楕円形	
SK 2	C-8	1.08	1.00	0.72	N-77°-W	円形	
SK 3	D-9	0.74	0.66	0.28	N-23°-E	円形	
SK 4	C-7	0.62	0.48	0.32	N-34°-W	楕円形	
SK 5	C-6	0.70	0.62	0.24	N-8°-E	不整円形	
SK 6	C-8	1.36	1.18	0.24	N-26°-E	楕円形	
SK 7	D-8	2.08	1.90	0.36	N-80°-W	円形	
SK 8	C-8	1.54	1.08	0.64	N-19°-E	楕円形	
SK 9	C・D-9	2.36	1.18	0.22	N-63°-W	楕円形	
SK10	C-7・8	2.22	1.08	0.44	N-90°-E	楕円形	
SK11	D-8	1.48	1.08	0.28	N-85°-E	楕円形	
SK12	C-6	0.88	0.80	0.56	N-90°-E	不整円形	
SK13	C-8	1.48	1.28	0.44	N-48°-E	不整円形	
SK14	B-7	1.34	1.12	0.54	N-12°-E	楕円形	
SK15	B-7	1.38	1.14	0.40	N-1°-W	不整楕円形	
SK16	C-5	1.12	1.02	0.46	N-76°-E	不整円形	
SK17	C-4・5	0.60	0.58	0.70	N-37°-E	円形	
SK18	C-5	0.56	0.46	0.44	N-29°-E	円形	
SK19	D-5	0.58	0.52	0.42	N-54°-W	不整円形	
SK20	B-5・6	1.56	1.18	0.40	N-2°-E	不整楕円形	
SK21	B-5	0.94	0.76	0.28	N-25°-W	楕円形	
SK22	C-3	1.00	0.48	0.22	N-42°-E	楕円形	
SK23	B-3	0.80	0.44	0.22	N-26°-W	楕円形	
SK24	D-9	1.04	0.90	0.60	N-62°-E	不整円形	
SK25	C-2	0.68	0.68	0.34	N-40°-E	円形	
SK26	B-1	0.98	0.80	0.24	N-82°-W	不整円形	
SK27	C-4	1.12	0.88	0.26	N-9°-E	楕円形	
SK28	C-3	0.88	0.70	0.34	N-83°-W	不整円形	
SK30	B-6	1.00	0.78	0.16	N-7°-E	不整楕円形	
SK31	B-7	1.08	0.96	0.20	N-55°-W	不整円形	
SK32	B-7	1.50	0.88	0.20	N-26°-W	楕円形	
SK33	C-7	0.94	0.60	0.44	N-8°-W	楕円形	
SK34	C-7	0.92	0.72	0.08	N-38°-W	楕円形	
SK35	B-3	1.12	0.92	0.76	N-18°-E	不整円形	
SK36	A・B-7	2.44	1.34	(0.84)	N-66°-E	長方形	

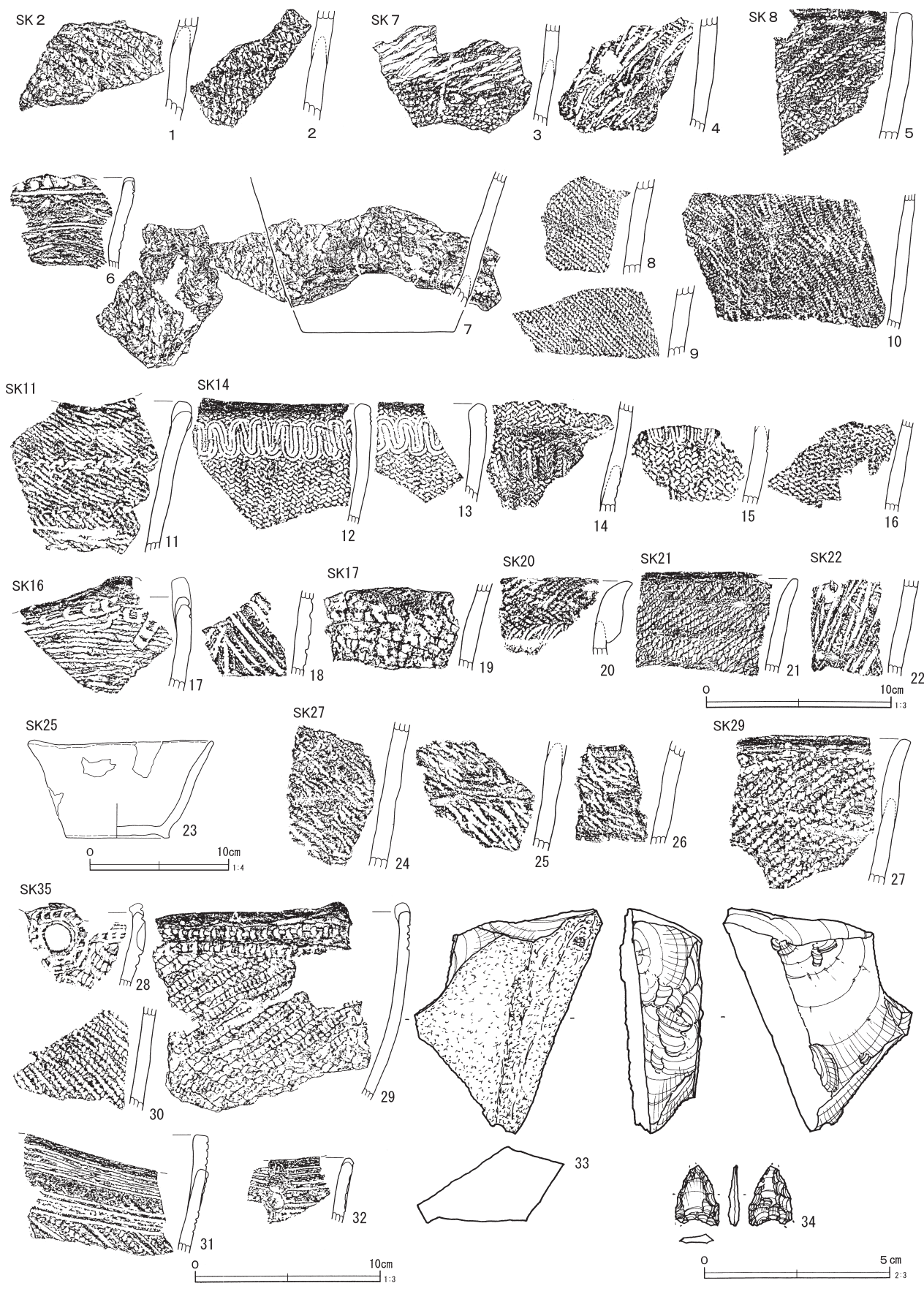
に太い条が確認できる。5～8は文様帯を持つ。  
5、6は同一個体で、半截竹管による縦位区画内に、平行沈線や爪形文で弧線を施す。縦位区画線と弧線の交点に円形刺突文を配する。7は口縁部に爪形文で山形を描出する。8は、5本櫛で肋骨文を描く。9は胴部上半に括れを持つ器形と考えられ、口縁部には爪形文を配し、器面は横方向の条線を施す。3、4、10、11は縄文のみの土器である。3は単節LRで、それ以外は単節RLを施文するが、4点とも節が細長いことから、0段多条であろう。

12は石鏃である。先端部を若干欠損している。基部の挟りは三角形で脚部の先端は尖っている。

13～15は磨製石斧である。13は正面の全面に研磨が施されており、裏面は基部上半部に剝離面及び敲打痕が残されている。横断面は凸レンズ状で、刃部は円刃である。14、15は基端部の破片である。16は打製石斧である。正面に自然面、裏面に打割面を大きく残している。

17は、第1号住居跡の1と同一個体と考えられるC字状爪形文を持つ土器である。18～22は肋骨文を施す。23～38は縄文を施文する土器である。24、30、35～37は無節の縄文で、24、30はR、35、36はL、37はR・Lを羽状に施文する。23、32～34、38は単節縄文で、23はRL、32、33はLR、34、38はLR・RLを羽状に施文する。25は正反の合で、





第42図 土壙出土遺物

1 段の R を正撚りにした LR と反撚りにした RR を更に R 方向に撚り合わせたものである。26、28、29 は附加条である。26 は、2 段の単節 LR に 0 段の l と RL に r をそれぞれ正方向に附加したものを羽状に施文する。28、29 は同一個体で、2 段の単節 LR と RL に 0 段の r をそれぞれ正方向に附加したものを羽状に施文する。27、31 は附加条風の単節で、太い撚りと細い撚りの 2 種類の 1 段の縄を用いて、太い縄に細い縄を巻きつけるように撚り合わせる。そのため軸縄となる太い縄の圧痕はほとんど見えない。2 点とも撚り方向の異なる 2 種類の原体を使用し、羽状に施文する。39 は底部で、半截竹管で縦位の平行沈線を施す。

## (2) 土壙

### 土壙出土遺物 (第42図)

1、2 は、第 2 号土壙から出土した。黒浜式で無節縄文の R を施文する。同一個体の可能性がある。

3、4 は、第 7 号土壙から出土した。同一個体とみられ、花積下層式と考えられる。3 の下半には、貝殻文が、上半には左撚りの反の縄が施文される。

5～10 は、第 8 号土壙から出土した。5～7 は黒浜式で、5 は附加条である。上下で異なる原体を用いており、上段は 2 段の単節 LR に 1 段の無節 L を S 字方向に附加したものを、下段は 2 段の RL に 0 段の r を Z 字方向に附加したものを施文する。6 は、半截竹管で口縁部に爪形文を施し、その下部には横方向の平行沈線を引く。7 は無節縄文の L を施文する。8～10 は諸磯 a 式で、単節 RL を施文する。

11 は、第 11 号土壙から出土した。黒浜式の波状口縁部で、無節縄文 R を横位施文する。

12～16 は、第 14 号土壙から出土した。関山 II 式で、地文には組紐 LLRR を施す。12、13 は同一個

体で、3 本櫛のコンパス文を口縁部に施す。

17、18 は第 16 号土壙から出土した。ともに黒浜式で、17 は波状口縁で波頂部に突起を持つ。口縁部には、半截竹管の押引きで爪形文を施し、地文は 1 段の無節 R に同じく R を Z 字方向に附加したものを施文する。18 は肋骨文を施す。

19 は、第 17 号土壙から出土した。撚りの粗い単節縄文 RL を斜位に施文する。

20 は、第 20 号土壙から出土した。花積下層式の口縁部で、肥厚部分には単節縄文 LR・RL を羽状に施文する。縄文下部には貝殻腹縁文を施す。

21 は、第 21 号土壙から出土した。黒浜式の口縁部で、無節縄文 L を横位施文する。

22 は、第 22 号土壙から出土した。黒浜式で、半截竹管による平行沈線で肋骨文を施す。

23 は、第 25 号土壙から出土した小型の鉢形土器である。無文で、器面を丁寧に磨いて整形を行っている。底部はわずかな上げ底状を呈する。

24～26 は、第 27 号土壙から出土した。黒浜式で、3 点とも同一個体で接点はみられない。無節縄文 R を横位施文する。

27 は、第 29 号土壙から出土した。黒浜式の口縁部で、単節縄文 LR を横位施文する。原体端部がループ状に施文されている。

28～34 は、第 35 号土壙から出土した。28～30 は黒浜式、31、32 は諸磯 a 式、33、34 は石器である。28 は口縁部に突起を持ち、その下部に円形押圧文を配する。口縁部及び円形押圧文の周囲には半截竹管で爪形文を配す。地文には単節 RL を施文する。29 は角状突起を持ち、口縁部に 2 段の爪形文を施す。地文は、附加条風の単節で、撚りの太さが異なる 1 段の縄を撚りの進む方向に撚り合わせたものを羽状に施文する。その際、太い縄に細い縄を絡ませるようにして撚る。30 は単節 RL を施

第18表 炉跡計測表

遺構名	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方位	形状	備考
炉跡 1	C-2	0.83	0.23	0.06	N-32°-E	楕円形	
炉跡 2	B-3	0.84	0.57	0.04	N-60°-E	不整楕円形	

文する。31は半截竹管で平行沈線を引く。地文は複節部分が観察できるが、平行沈線と重なって判然としない。32は米字文を描出する土器で、交点に円形押圧文がみられる。33は黒曜石の大形厚手の剥片である。石鏃等小形石器を作るための素材として、遺跡に持ち込まれたものと考えられる。34は小形の石鏃で、基部の抉りは浅い。

### (3) 炉跡

#### 第1号炉跡 (第43図)

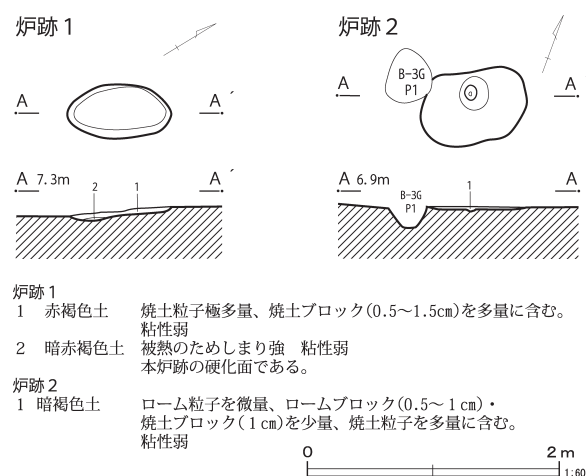
第1号炉跡は、調査区西部のC-2グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈し、掘り込みはわずか6cm程である。覆土は焼土を多量に含み、底面も赤褐色に変色し、硬化面が確認できた。

遺物は、出土していない。

#### 第2号炉跡 (第43図)

第2号炉跡は、第1号炉跡の北東約10mのB-3グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈する。掘り込みは非常に浅いが、覆土には焼土を多量に含む。底面は焼けていなかった。

遺物は、出土していない。



第43図 炉跡

### (4) 遺構外出土遺物

#### (a) 土器

#### 第I群土器 (第44図)

早期前半の燃糸文系土器を一括する。1~14は

口縁部で、15~29、31~35は胴部、30は丸底の底部と思われる。口唇部は肥厚して丸みを帯び、わずかに外販するが、12は折り返し状の口縁部を持つ。1~10、12は、口唇部に縄文が横位施文される。口縁部破片のうち、9、11を除く全ての口唇直下に絡条体の押圧痕及び指先の刺突(7、12)が確認できた。2、4は絡条体の端部を斜めに押し当てたものであろう。

#### 第II群土器 (第45図36~65)

早期前半の沈線文系土器を一括する。36~57は田戸下層式である。36~38は口唇部に刻みを有する。36は爪形文、37は矢羽状文、38は列点文である。40は縦位の矢羽状沈線、41は横位の集合沈線の上に斜位の沈線、42は縦位の集合沈線を施す。40~42は沈線の描き方が浅く、やや古い様相が窺える。43、44は同一個体で、横位の集合沈線を施文する。45、46は横位沈線の上に矢羽状沈線を施す同一個体の土器である。47は横位沈線間に縦位の刻みを、48は縦位区画内に格子目状沈線を施す。49は縦沈線を引いた際の粘土のたわみを器面に残している。52~55はひとときわ太い沈線で横位、斜位、弧状の文様を描く。56、57は底部で、器壁の厚い尖底を呈する。

58~65は田戸上層式である。刻みを有した沈線で文様を描く。65の右端には縦位に3か所の刺突がみられる。

#### 第III群土器 (第45図66~83)

早期後半の条痕文系土器を一括する。細隆起線や沈線で文様帯を描き、土器の表裏を貝殻条痕文で整形する野島式である。66~74は文様帯を持つ土器で、66~70は細隆起線、71~74は沈線で描出する。66、67は口唇部に刻みを持つ。文様は区画内を斜位に施すものが多いが、68のように縦位や67の縦位と斜位の組み合わせもみられる。71、72は2条の斜位沈線が施されており、嚮状文のモチーフを描出するものと思われる。72の横位区画隆帯上には刻みが入る。75~83は地文のみで、75、



76の口唇部には刻みが入る。

#### 第IV群土器 (第46図84~99)

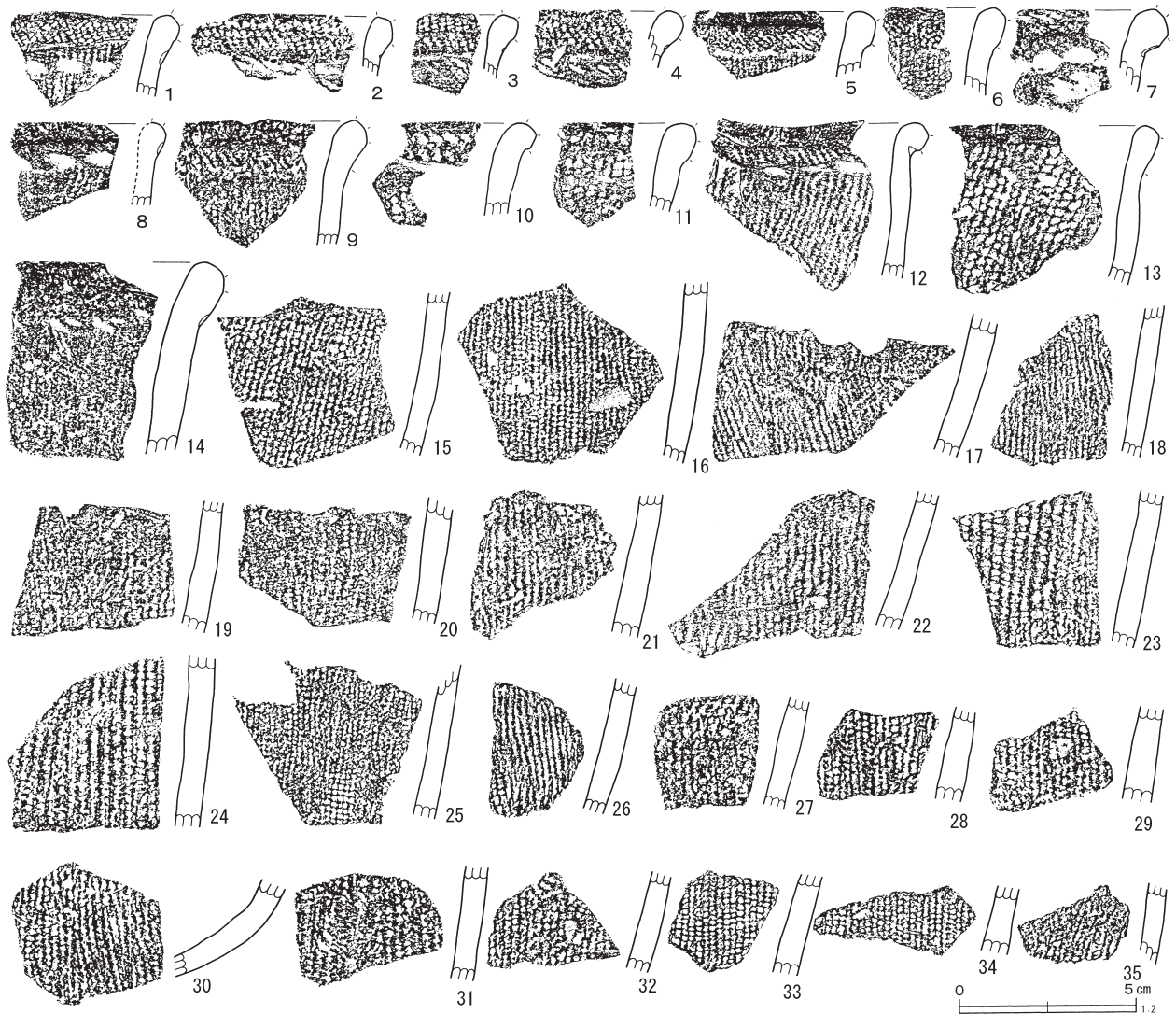
前期の花積下層式土器を一括する。84~86は燃糸側面圧痕文を施文し、85は弧状モチーフの一部と考えられる。87~90は縄文施文の土器で、87、89は単節縄文 RL、90は LR、88は無節縄文の L を施文する。87、88のように口縁部は厚く肥厚するものが多い。91は半截竹管、あるいは櫛状工具で平行沈線を施す。92~99は貝殻背圧痕文を施文する。96は上端部に縄文がみられることから、縄文施文後、貝殻文を施したのであろう。99は上げ底を呈する底部で、底面にも全面貝殻文を施す。側面最下端の底面直上には、貝殻側面の背部寄りを縦に押しつけているのが確認できる。

#### 第V群土器 (第46図100~111)

前期の関山式土器を一括する。100、101は関山 I 式と考えられる。100は、地文として単節縄文 LR・RL を羽状施文した上に、梯子状沈線文で文様を描き、円形貼付文を配す。101は注口状装飾とみられる。注口部が貫通していないことから実用ではなく、土器を飾る装飾用と考えられる。上部は欠損しているが、筒状を呈すると思われ、端部には刻みを有する。側面には単節縄文 LR を施し、器面との接着部には円形貼付文を2つ配す。

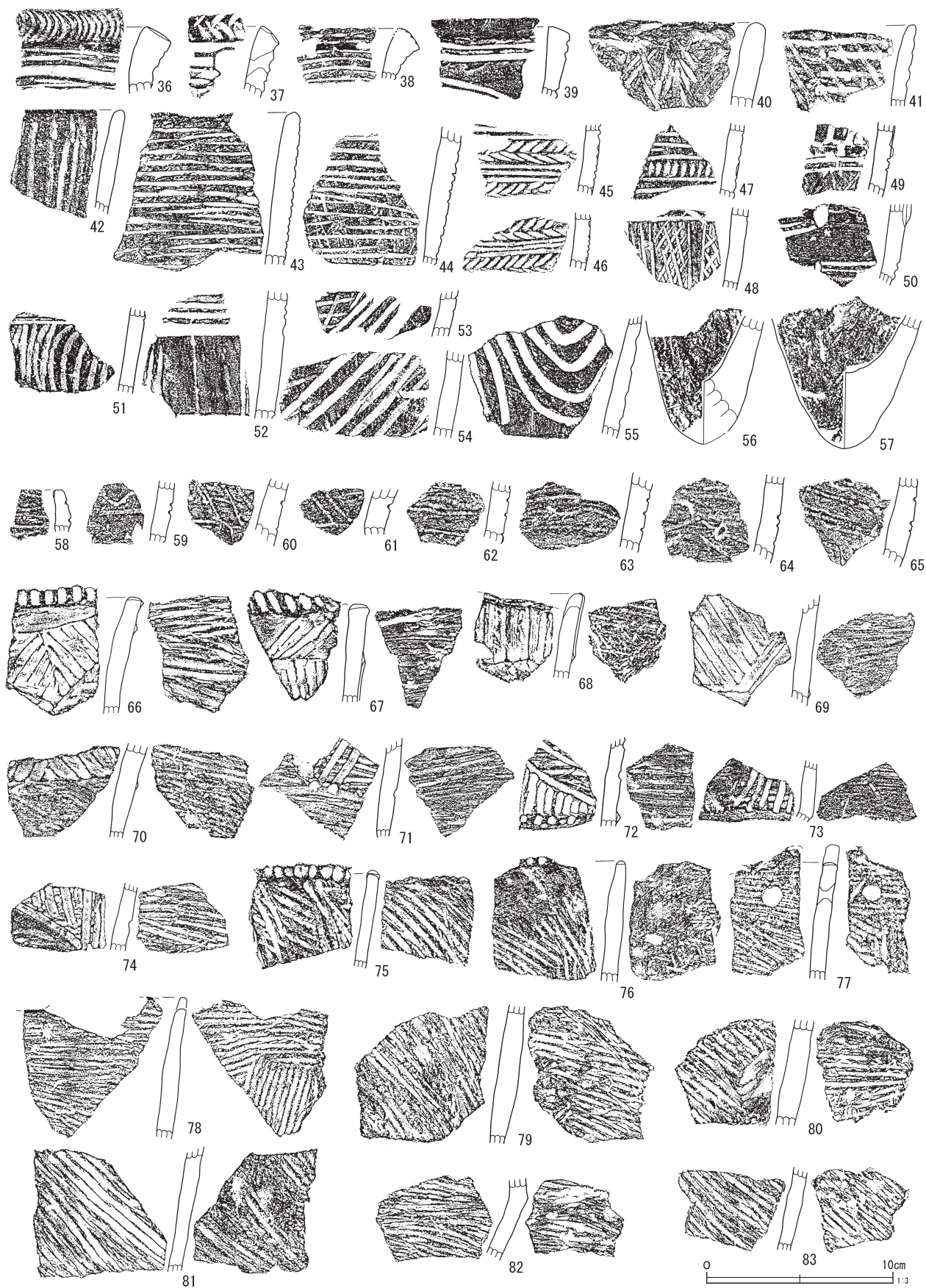
102~105は関山 I ~ II 式の縄文施文の土器で、単節縄文 LR・RL を羽状施文する。103、104は同一個体で、105は緩やかな上げ底状底部である。

106~111は関山 II 式である。106、107はループ



第44図 遺構外出土遺物 (1)





第45図 遺構外出土遺物(2)

文を多段に施文する。108～111は組紐を施文し、111以外はコンパス文を施す。組紐の細節は、108、110がRRL、111がLLRRで、109は不明である。

#### 第VI群土器 (第46図112～130、第47図131～136)

前期の黒浜式土器を一括する。112～114は、爪形文や平行沈線で文様を描出する。112は突起を有する波状口縁の土器で、爪形文を波頂下でクロスさせ、その交点に穿孔する。穿孔上部には半截竹管で円形刺突、左端にはコンパス文を配す。第3号住居跡出土遺物(35図2)と同一個体である。115は、C字状爪形文を施文し、第1号住居跡(30図1)や第4号住居跡(38図17)出土遺物と同一個体と考えられる。116は半截竹管で横位の平行沈線文を施す。117～120は肋骨文を施し、117、119は同一個体である。121～124は附加条である。121は2段の単節LRに0段の1、2本をS字方向に附加したものを施文し、口縁部には半截竹管のコンパス文を施す。122は2段の単節LRに、強い燃りかけた1段の無節RをS字方向に附加したものを施文する。123は無節L2本をZ字方向に附加していると考えられるが、軸繩は圧痕が表出していないため不明である。124は2段の単節RLに、1段の無節LをZ字方向に附加したものを施文する。125～130は単節縄文を施文する。126、127は単節RL・LRを羽状に、128、130はLRを、129はRLをそれぞれ施文する。131～135は無節縄文を施文する。131の上半は単節縄文RLを、下半は無節縄文Lを施文する。132～134は無節Rを、135はLを施す。134は条間が開いていることから附加条の可能性も考えられる。136は底部で、平行沈線文を施し、底面は無文である。

#### 第VII群土器 (第47図137～162)

前期の諸磯式土器を一括する。137～145は諸磯a式である。137～139、141は爪形文を施文する土器で、137～139は口縁部に、141は文様帯の区画に配す。137、141は平行沈線で米字文を描出し、交点に円形刺突文を施す。142は平行沈線で木葉

文を描く。140、143～145は縄文のみの土器で、140、145は単節縄文LRを、143、144はRLを施文する。

146～159は諸磯b式である。146は口縁部文様帯の破片で、木葉文や円形刺突が半截竹管で描かれる。147は文様帯の下位区画として、斜位の刻みを有した隆帯を貼り付けている。148～151は幅広の爪形文で文様を描く。152、153はやや扁平な浮線文に刻みを有し、地の部分に円形刺突を施す。154の浮線文上には縄文が施文される。155～159は幅狭の浮線文上に爪形文を施す。浮線文には土器の胎土と異なる粘土を使用しており色調の違いという視覚的効果を狙ったものと考えられる。

160～162は諸磯c式で、縦位や横位、鋸歯状の集合沈線を施す。

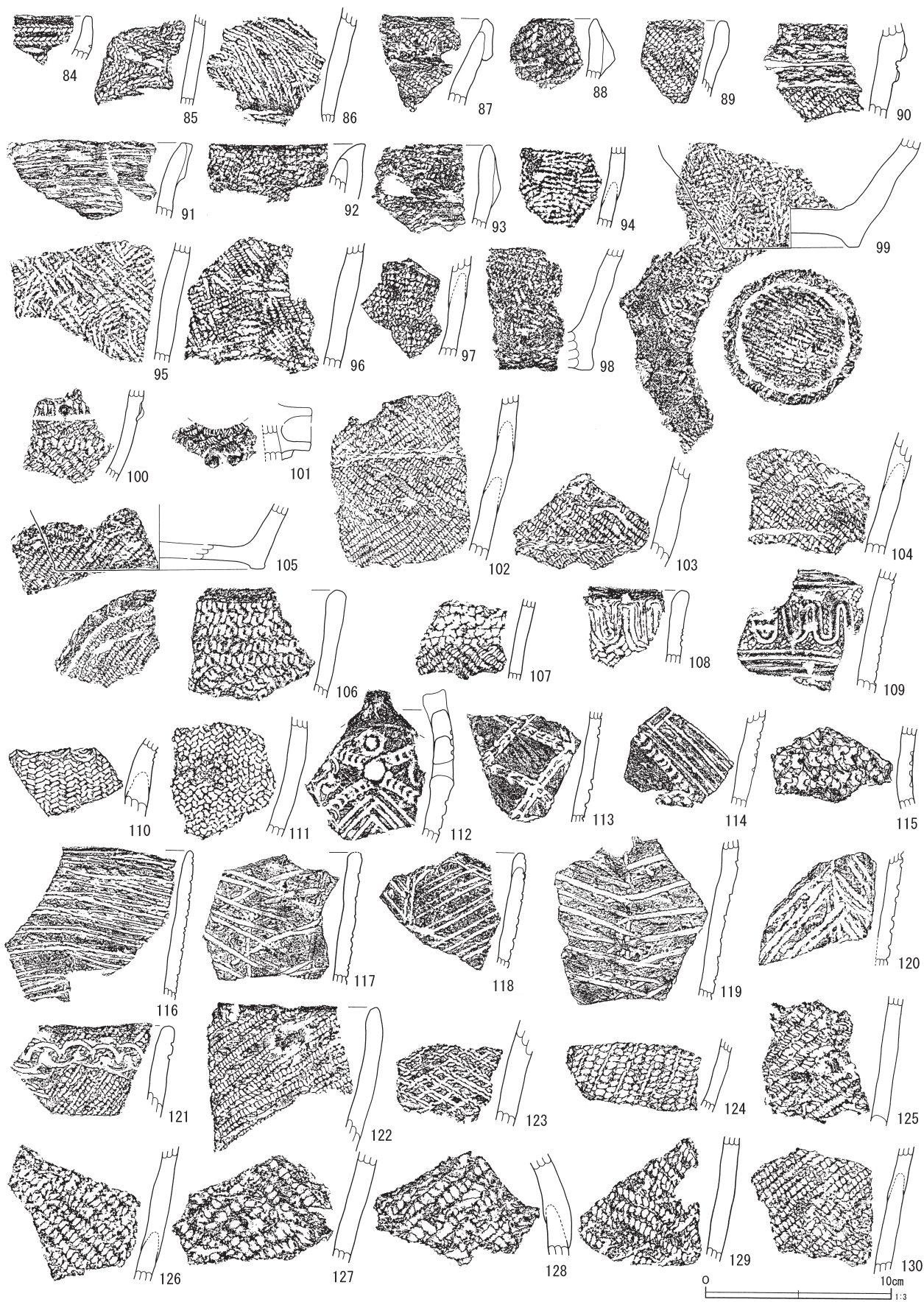
#### 第VIII群土器 (第47図163～175)

前期の浮島式・興津式土器を一括する。163～167は口縁部で、口唇部には刻みあるいは条線を施す。163、164は長さ0.5cm程の等間隔の刻み、165、166は2本刃工具による斜位条線、167は櫛状工具による密で長い縦位条線である。163～165、167は口縁部直下に横位区画を持ち、163～165は変形爪形文、167はD字形爪形文と細い半截竹管の押し引きにより描く。168は口縁部直下の破片と考えられ、変形爪形文により横位区画される。166、169～175は貝殻文を施すもので、166、169～171は貝殻腹縁を器面に押し当て支点を上下交互にずらすロッキング手法で施文している。172、173は同一個体で、貝殻腹縁部からやや背部にかけてを、174、175は貝殻背部を押し当てロッキングする。175の上端部には爪形文がみられる。

#### 第IX群土器 (第48図176～183)

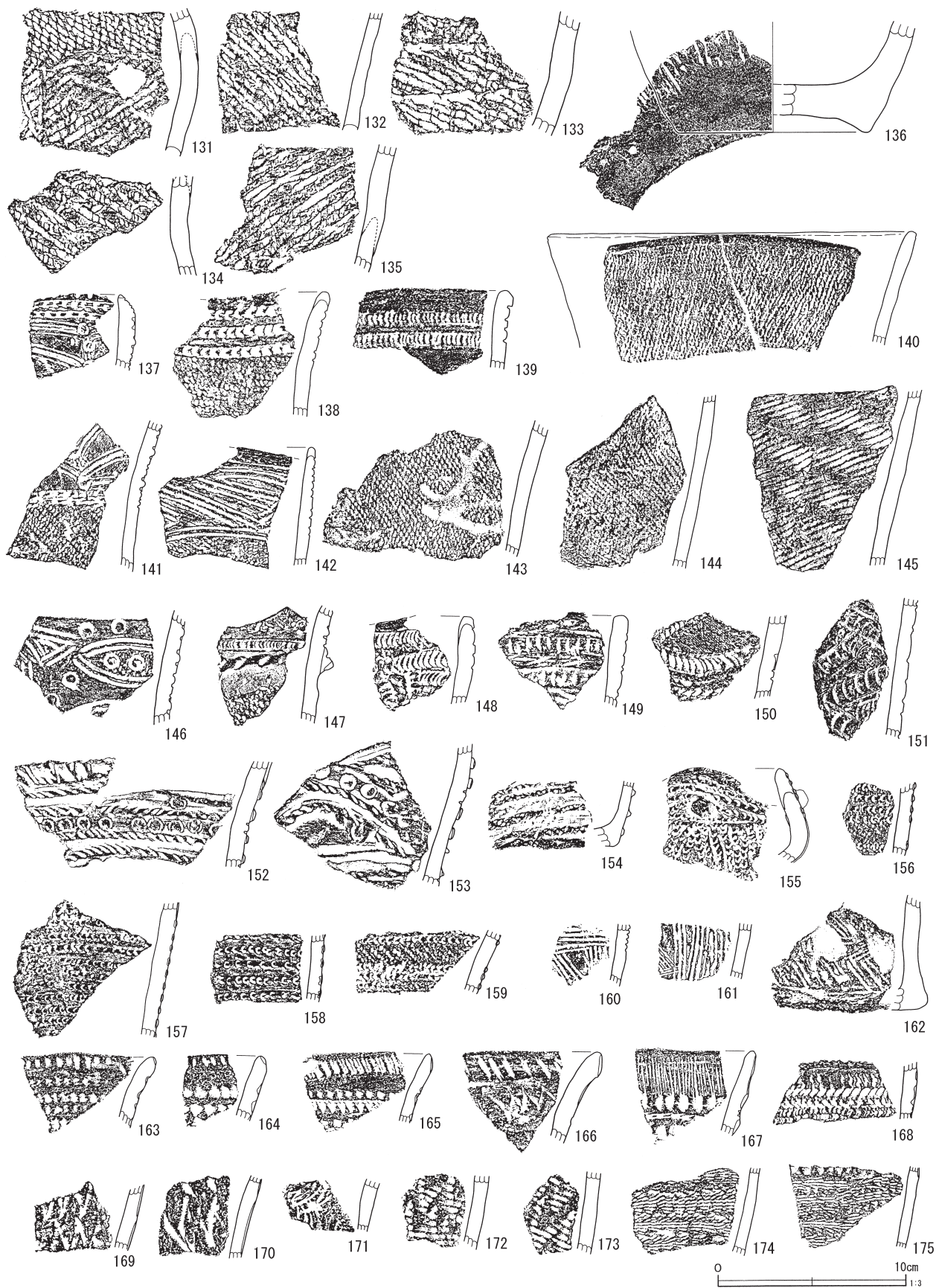
中期の五領ケ台式土器を一括する。176、177は口縁部で、同一個体の可能性がある。176は頂部に刻みのある角状突起を持ち、その下部には欠損するが橋状把手が貼付されていたと思われる。沈線と隆帯で区画された口縁部文様帯には、三角形状





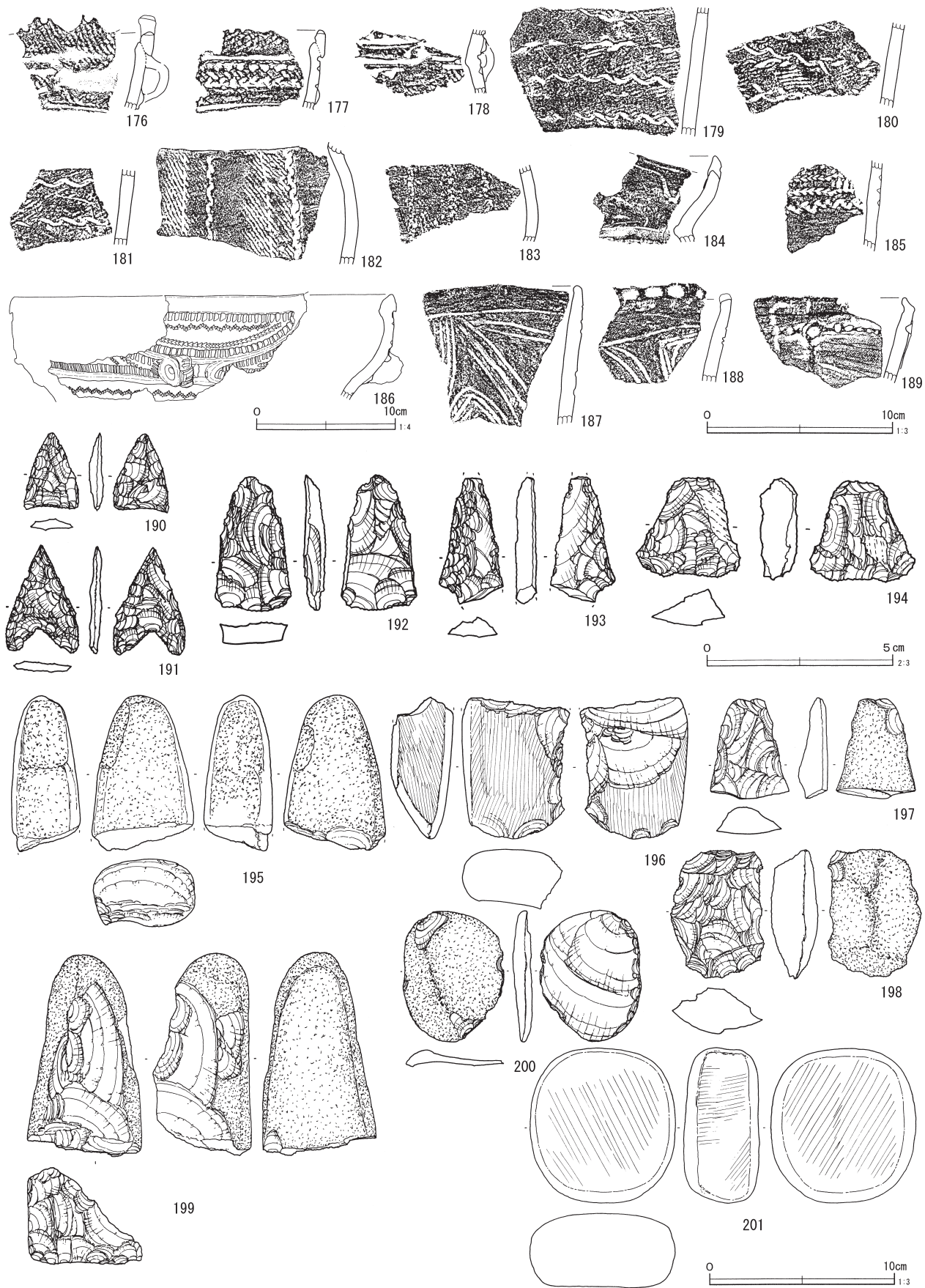
第46図 遺構外出土遺物(3)



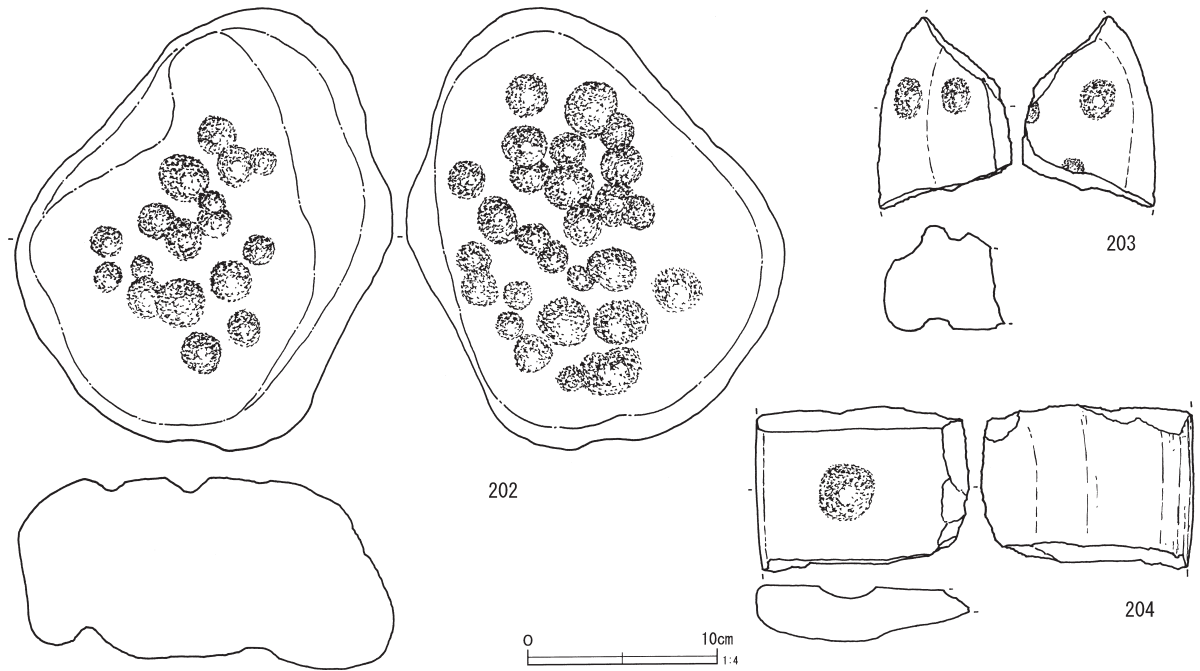


第47図 遺構外出土遺物（4）





第48図 遺構外出土遺物 (5)



第49図 遺構外出土遺物（6）

第19表 石器計測表

挿図番号	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	
29	1	C-4	ナイフ形石器	黒曜石	2.0	1.0	0.4	0.6	分析
30	21	SJ1	楔形石器	黒曜石	1.4	1.3	0.6	1.0	分析
30	22	SJ1	浮き?	安山岩	5.2	4.6	2.0	27.0	
33	12	SJ2	磨製石斧	緑色岩?蛇紋岩?	6.4	5.7	2.9	137.2	基部欠損
33	13	SJ2	石鏃	チャート	1.9	1.4	0.3	0.7	
35	35	SJ3	磨製石斧	緑色岩	13.4	5.0	3.0	234.0	基部、刃部欠損
35	36	SJ3	磨製石斧	緑色岩	9.9	4.7	2.8	180.0	基部欠損
37	12	SJ4	石鏃	安山岩	2.9	2.2	0.4	1.6	
37	13	SJ4	磨製石斧	緑色岩	10.7	5.1	2.7	201.2	基部欠損
37	14	SJ4	磨製石斧	緑色岩?	5.9	4.0	3.1	95.7	基部・刃部欠損
37	15	SJ4	磨製石斧	角閃石岩	6.1	4.3	2.8	109.6	基部・刃部欠損
37	16	SJ4	打製石斧	ホルンフェルス	6.2	3.9	1.3	38.9	
42	33	SK35	剝片	黒曜石	6.1	5.1	2.3	45.6	分析
42	34	SK35	石鏃	黒曜石	1.7	1.2	0.3	0.5	分析
48	190	C-8	石鏃	チャート	2.1	1.4	0.4	1.0	
48	191	C-5	石鏃	黒曜石	2.9	2.0	0.3	1.3	分析
48	192	B-3	石鏃	チャート	3.6	2.1	0.7	4.9	未製品
48	193	B-3	石鏃	チャート	3.4	1.8	0.6	3.2	未製品
48	194	B-7	石鏃	赤玉石	2.7	2.8	1.1	7.7	未製品
48	195	D-5	磨製石斧	砂岩	8.4	5.5	3.8	222.0	刃部欠損
48	196	B-7	磨製石斧	ホルンフェルス	7.7	5.8	3.4	199.1	基部欠損
48	197	C-6	打製石斧	ホルンフェルス	5.4	4.3	1.6	31.3	
48	198	C-4	打製石斧	ホルンフェルス	6.9	5.0	2.6	84.6	
48	199	D-7	スタンプ形石器	礫岩?	10.9	6.1	5.3	411.1	
48	200	B-5	搔器	ホルンフェルス	7.0	5.4	1.0	34.4	
48	201	一括	磨石	安山岩	8.3	7.8	4.1	472.0	
49	202	D-6	凹石	安山岩	23.4	20.0	10.2	5377.8	
49	203	試掘	石皿	安山岩	10.1	7.0	5.7	366.5	
49	204	試掘	石皿	緑泥片岩	8.7	11.2	3.1	504.5	

工具による刺突文が2条巡り、地文には無節縄文がR、Lが施文される。178は口縁部下位の器形屈曲部分で橋状把手が貼付されていた痕跡が残る。179～183は胴部破片で、179～181は無節Lの横位施文、182、183は無節Lの縦位施文である。施文間には自縛および他縛痕を綾繰り状に施す。

**第X群土器** (第48図184)

中期の阿玉台式土器を一括する。184は波状口縁の土器で、角押文で文様を描く。下部に括れを持つ。阿玉台I a式と考えられる。

**第XI群土器** (第48図185、186)

中期の勝坂式土器を一括する。185、186は同一個体で、キャリパー形の深鉢と考えられる。口縁部文様帯を隆帯で区画し、その内側にキャタピラー文を沿わせ、連続三角押文で鋸歯状に加飾する。何らかの動物を模したと思われる単環状突起が付く。口縁部右端にも突起が付くと思われる。

**第XII群土器** (第48図187～189)

後期の堀之内2式土器を一括する。187、188は沈線によって文様が描出され、地文は施されない。188の口唇部には指頭による刻みが施される。189は隆帯により文様を作出し、隆帯の交点部分には円形刺突を施す。横位隆帯上には押圧が加えられ、波状を呈する。口縁部内側には、3点とも明瞭な稜線がみられ、口縁部はわずかに内傾する。

(b) **石器** (第48図190～201、第49図)

遺構外から出土した石器は15点である。石鏃や磨製・打製石斧などで、詳細は第19表に示した。

第20表 ピット一覧表

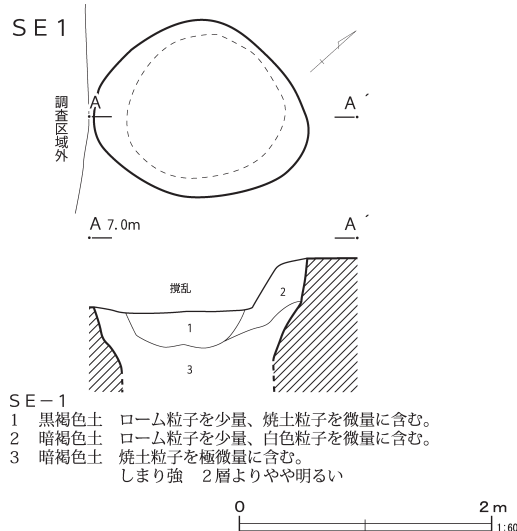
グリッド	No	長軸	短軸	深さ	備考	グリッド	No	長軸	短軸	深さ	備考	グリッド	No	長軸	短軸	深さ	備考
A-6	1	0.29	0.25	0.29		B-6	9	0.24	0.24	0.25		B-7	9	0.25	0.17	0.14	
A-7	1	0.20	0.17	0.26			10	0.33	0.28	0.27			10	0.35	0.33	0.14	
	2	0.18	0.14	0.16			11	0.35	0.30	0.43			11	0.16	0.16	0.54	
	3	0.37	0.38	0.34			12	0.52	0.40	0.43			12	0.22	0.22	0.28	
B-3	1	0.41	0.35	0.49			13	0.27	0.25	0.26			13	0.37	0.27	0.20	
	2	0.36	0.28	0.50			14	0.28	0.26	0.35			14	0.46	0.34	0.10	
B-4	1	0.29	0.24	0.16		15	0.36	0.31	0.26		15		0.29	0.29	0.35		
B-6	1	0.35	0.30	0.22		B-7	1	0.48	0.35	0.35		16	0.26	0.26	0.40		
	2	0.35	0.29	0.82			2	0.63	0.36	0.29		17	0.26	0.16	0.11		
	3	0.31	0.22	0.73			3	0.25	0.23	0.38		C-2	1	0.28	0.26	0.11	
	4	0.34	0.31	0.41			4	0.26	0.23	0.08			2	0.27	0.26	0.18	
	5	0.21	0.18	0.70			5	0.32	0.28	0.51		C-3	1	0.33	0.31	0.18	
	6	0.22	0.18	0.30			6	0.19	0.18	0.11			2	0.31	0.3	0.33	
	7	0.22	0.20	0.62			7	0.30	0.27	0.20		C-7	1	0.28	0.28	0.36	
	8	0.18	0.17	0.32			8	0.20	0.19	0.29			2	0.50	0.45	0.10	

**3. 近世の遺構と遺物**

(1) **井戸跡**

**第1号井戸跡** (第50図)

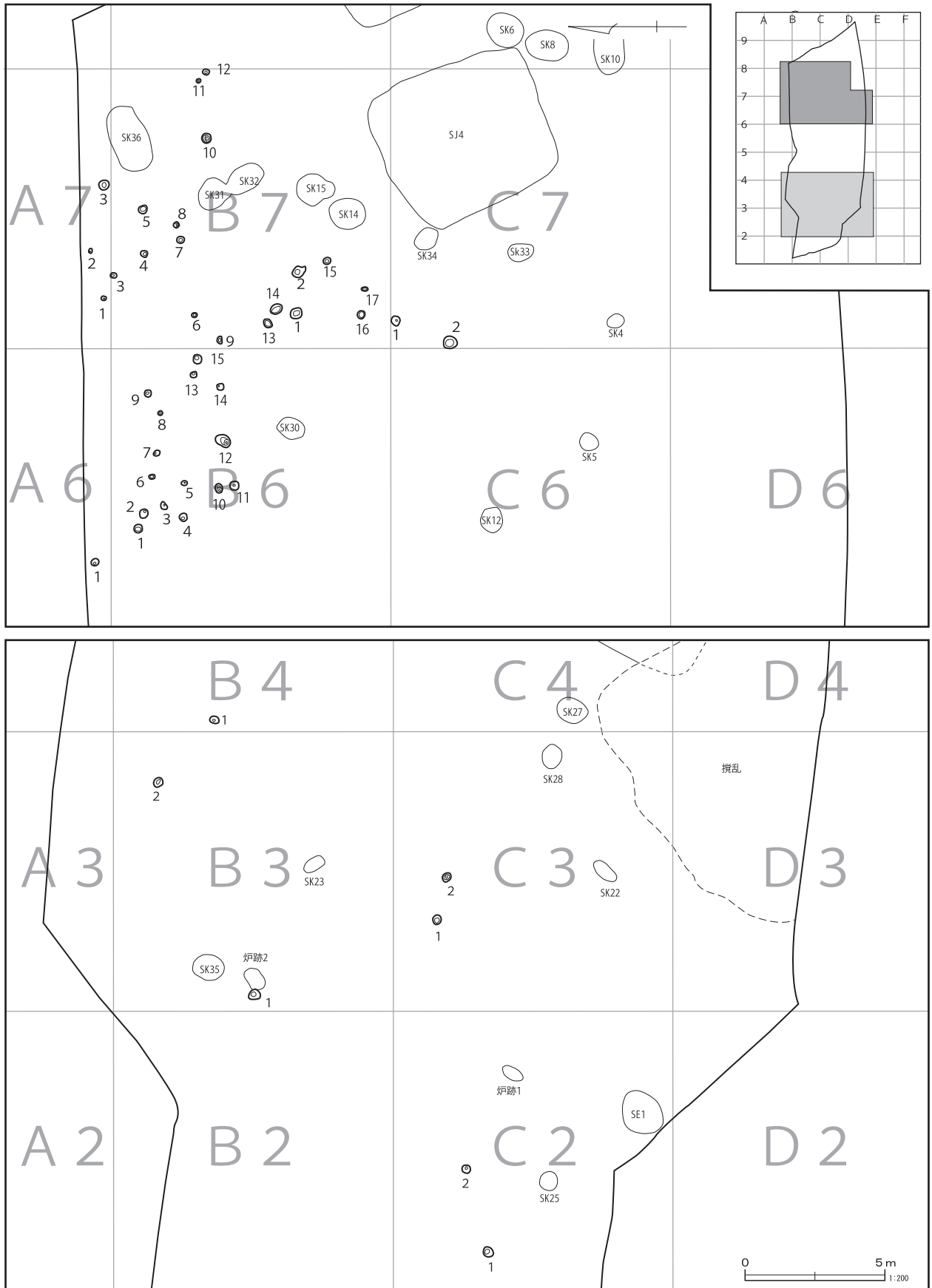
第1号井戸跡は、調査区南西隅のC-2グリッドに位置する。平面形態は、楕円形に近い円形で、その規模は長軸1.68m、短軸1.41mを測る。確認面から0.8m程掘り込んだところで湧水がみられ、完掘には至らなかった。主軸方位はN-49°-Wを指す。遺物は出土しなかったが、恐らく近世以降の井戸跡と考えられる。



第50図 第1号井戸跡

(2) **ピット**

ピットは、調査区北東部でまとまって検出されたが、配置から掘立柱建物跡の柱穴に比定できるものはなかった。遺物が出土していないため、所属時期は不明であり、縄文時代に属するものもあると考えられるが、ここでは近世としてまとめた。



第51図 ピット



## VI 伝承旗本服部氏屋敷跡の遺構と遺物

### 1. 中・近世の遺構と遺物

#### (1) 土壌 (第52～54図)

土壌は34基が検出された。集中的に検出された地点が2か所ある。調査区南端のG・H-2グリッド付近と、調査区中央付近のC・D-4・5グリッド付近である。

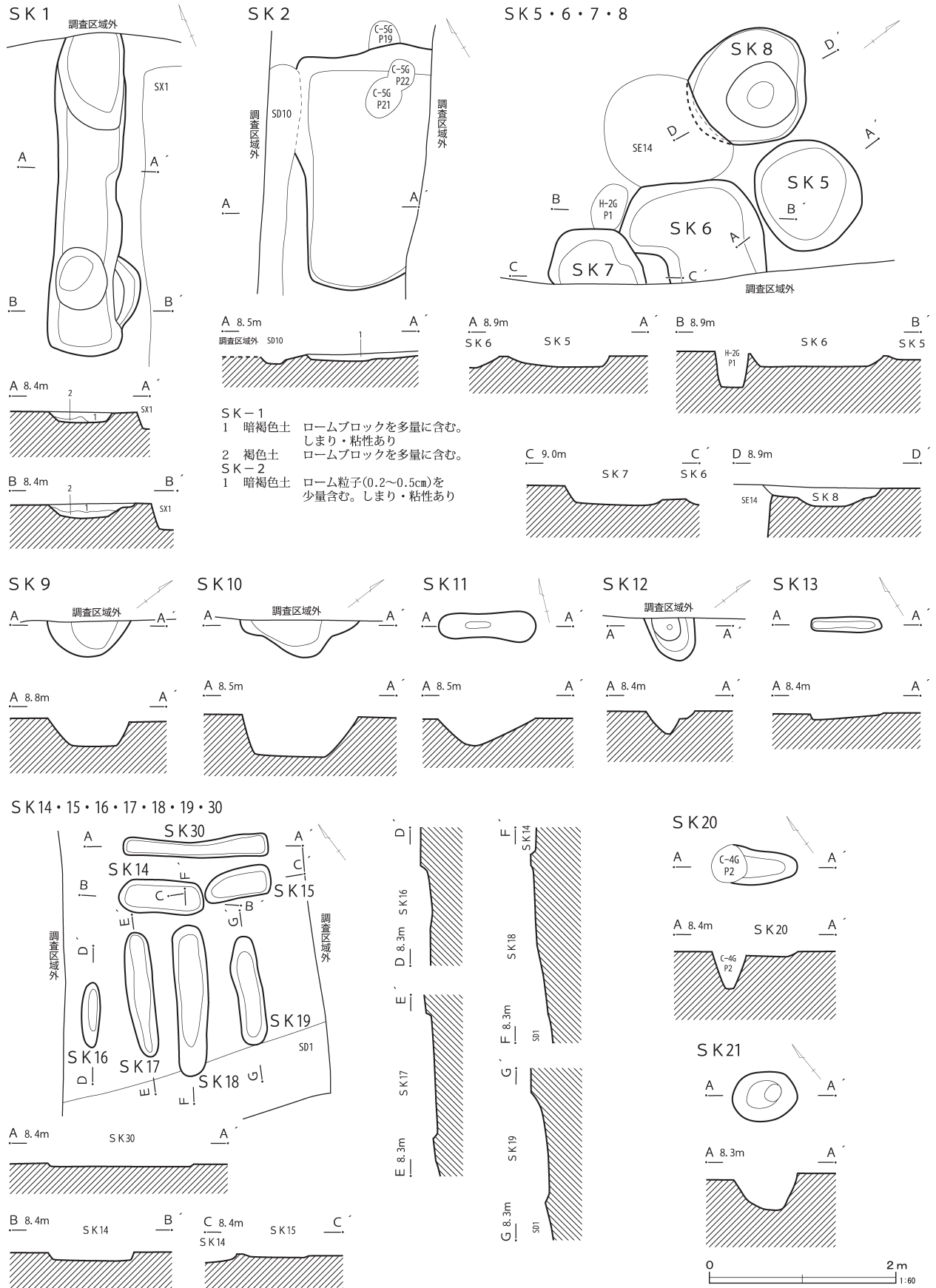
前者に属する土壌は、第5～9、29号土壌の6基である。平面形態は比較的円形に近く、深さは最も深い第9号土壌でも0.28mと浅い。いずれも底面はほぼ平坦で壁は緩やかに立ち上がる。第8号土壌は第14号井戸跡と重複関係にあり、第8号土壌の方が新しい。

一方、後者に属する土壌は、第2、10～26、30号土壌の19基である。そのうち、第13～19、30号土壌は溝状の平面形態で約4～5m四方の範囲内にお互いに平行・直角に検出されている。一連の遺構であると考えられる。第18号土壌は第1号溝跡と重複しており、第18号土壌の方が新しい。

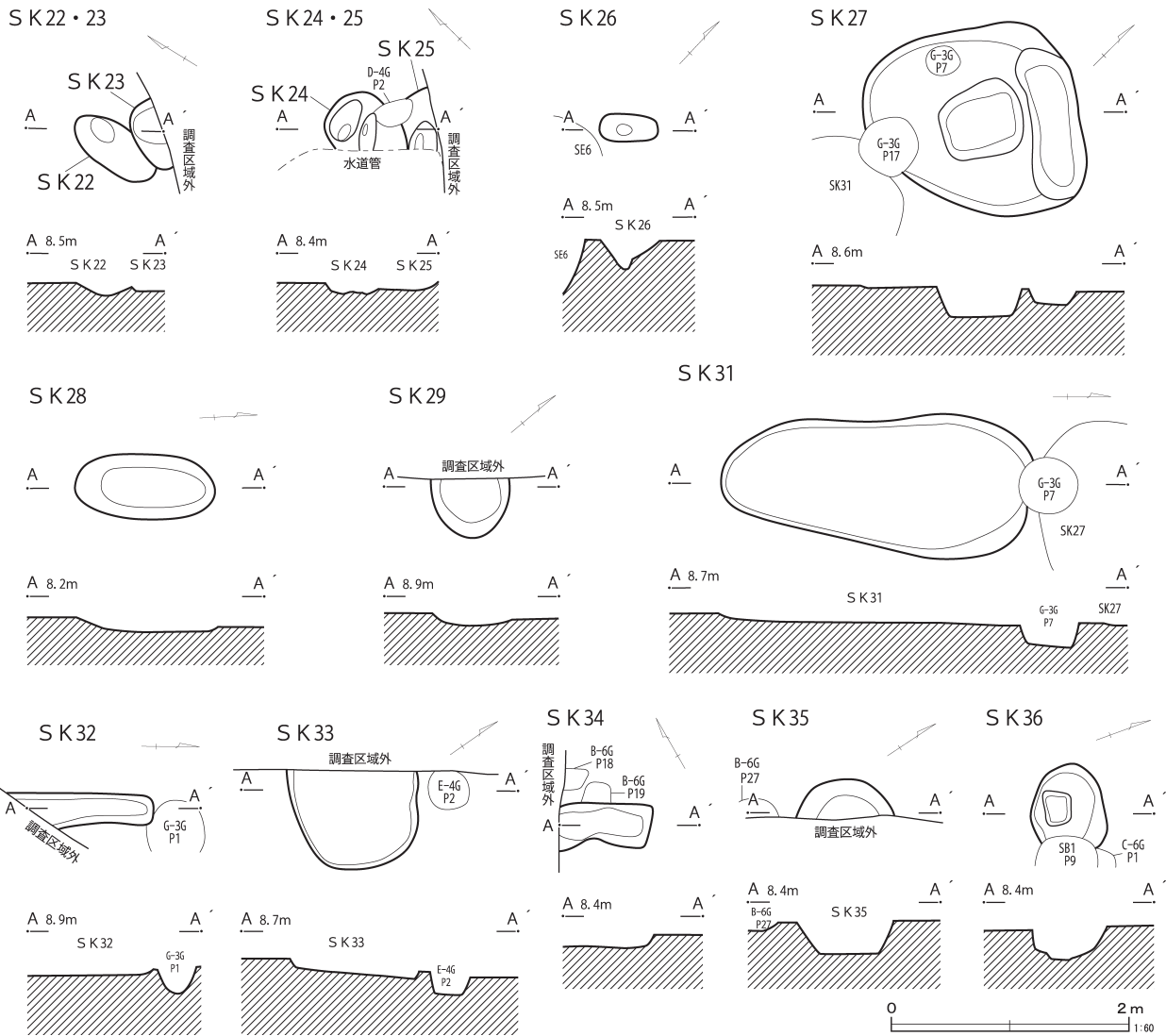
他の散在する土壌に関しては計測表に譲り、特徴的なものに関してのみ記述する。第1号土壌は溝状の土壌である。調査区の北端に位置し一部は調査区外へ延びる。覆土はロームブロックが目立ち、埋め戻した可能性が考えられる。第27、31号

第21表 土壌計測表

遺構名	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方位	形状	備考
SK 1	A-6	(3.48)	0.64	0.16	N-23°-E	長方形	
SK 2	C・D-4・5	2.60	(1.30)	0.08	N-33°-E	長方形	
SK 5	G・H-2	1.20	1.16	0.12	N-41°-W	円形	
SK 6	H-2	1.44	(1.08)	0.14	N-36°-E	不整形	
SK 7	H-2	1.04	0.60	0.16	N-39°-E	(楕円形)	
SK 8	G・H-2	(1.36)	1.24	0.20	N-4°-E	不整形円形	
SK 9	G-2	0.86	(0.38)	0.28	N-38°-E	(楕円形)	
SK10	C-5	1.26	(0.40)	0.42	N-38°-E	(不整形楕円形)	
SK11	C-4	1.04	0.26	0.30	N-77°-W	楕円形	
SK12	C-4	0.52	(0.42)	0.24	N-39°-E	(楕円形)	
SK13	D-5	0.68	0.16	0.03	N-58°-W	長方形	
SK14	D-5	0.92	0.36	0.10	N-53°-W	長方形	
SK15	D-5	0.74	0.32	0.04	N-69°-W	長方形	
SK16	D-5	0.70	0.20	0.12	N-38°-E	楕円形	
SK17	D-5	1.34	0.28	0.12	N-30°-E	楕円形	
SK18	D-5	1.62	0.36	0.18	N-36°-E	長方形	
SK19	D-5	1.16	0.28	0.18	N-30°-E	楕円形	
SK20	C-4	(0.54)	0.36	0.06	N-55°-W	楕円形	
SK21	C-4	0.70	0.54	0.36	N-50°-W	円形	
SK22	D-4	0.78	0.38	0.10	N-9°-E	楕円形	
SK23	D-4	0.62	(0.24)	0.08	N-40°-E	(楕円形)	
SK24	D-4	(0.56)	(0.56)	0.10	N-10°-E	(楕円形)	
SK25	D-4	(0.48)	(0.26)	0.06	N-27°-E	(楕円形)	
SK26	C-5	0.48	0.24	0.24	N-48°-E	長方形	
SK27	F・G-3	1.80	1.58	0.24	N-43°-E	不整形円形	
SK28	F-3	1.18	0.56	0.10	N-4°-E	楕円形	
SK29	G-2	0.66	(0.50)	0.08	N-40°-E	(楕円形)	
SK30	D-5	1.56	0.18	0.04	N-54°-W	長方形	
SK31	G-3	(2.60)	1.06	0.08	N-2°-E	楕円形	
SK32	G-3	(1.06)	0.28	0.06	N-0°-E	(長方形)	
SK33	E-3・4	1.10	(0.84)	0.18	N-35°-E	(隅丸方形)	
SK34	B-6	(0.76)	0.32	0.12	N-60°-W	(不整形長方形)	
SK35	B-6	0.82	(0.34)	0.28	N-34°-E	(円形)	
SK36	C-5・6	(0.78)	0.62	0.26	N-71°-W	(楕円形)	



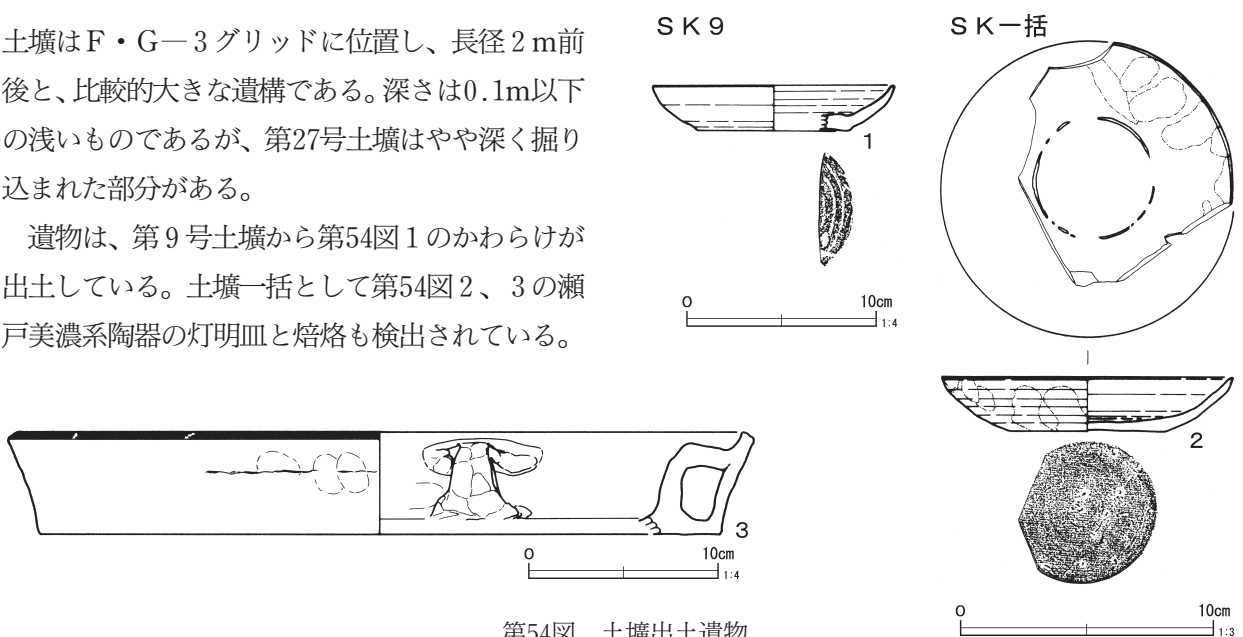
第52図 土壌 (1)



第53図 土壇 (2)

土壇はF・G-3グリッドに位置し、長径2m前後と、比較的大きな遺構である。深さは0.1m以下の浅いものであるが、第27号土壇はやや深く掘り込まれた部分がある。

遺物は、第9号土壇から第54図1のかわらけが出土している。土壇一括として第54図2、3の瀬戸美濃系陶器の灯明皿と焙烙も検出されている。



第54図 土壇出土遺物

第22表 土壌出土遺物観察表

図版	番号	遺構名	種別	器種	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	焼成	釉薬装飾	成型技法	備考
54	1	SK 9	土器	かわらけ	30	(12.7)	(8.0)	2.4	橙	普通		轆轤	胎土に赤色粒子を多量に含み、軟質。底部は厚く、体部は直線的にひらいて立ち上り口唇部は直立気味で薄い。
54	2	一括	陶器	灯明皿	50	(11.5)	6.2	2.1	暗褐	良好	鉄釉	轆轤	内面に焼成時の重ね焼きの痕跡あり。瀬戸美濃系。
54	3	一括	土器	焙烙	5	(38.2)	(36.0)	5.3	褐灰	普通		粘土紐	体部内面ヨコナデ。外面上半部ヨコナデ。下半部押えとヨコナデ。

(2) 井戸跡

第1号井戸跡 (第55図)

F-3グリッドに位置し、東側は調査区域外へ続く。掘削した深さまで、壁はほぼ垂直である。

第2号井戸跡 (第55図)

E-3グリッドに位置する。壁は、掘削した深さまで底部に向かってやや北東方向に傾き、わずかにオーバーハングする。

第3号井戸跡 (第55・57図)

B-5グリッドに位置し、グリッドピットに壁の一部を壊されている。掘削した深さまで壁は垂直である。遺物は第57図1の播鉢が出土している。

第4号井戸跡 (第55図)

B-6グリッドに位置する。平面形態は円形を呈し、掘削した深さまで、壁は垂直である。

第5号井戸跡 (第55図)

A-6グリッドに位置し、半分以上が調査区域外へ続く。掘削した深さまで壁はほぼ垂直である。

第6号井戸跡 (第55・57図)

C-5グリッドに位置し、南東半分が調査区域

外へ続く。掘削した深さまで、壁は上部が開く漏斗状を呈する。第57図2の陶器皿が出土している。

第7号井戸跡 (第55図)

C-5グリッドに位置する。一部が調査区域外へ続き、第3号溝跡と重複するが、本遺構の方が新しい。掘削した深さまで、壁はほぼ垂直である。

第8号井戸跡 (第55図)

C-4・5グリッドに位置する。グリッドピットと一部重複するが、新旧関係は不明である。壁は上部がやや開き、下部はほぼ垂直である。

第9号井戸跡 (第55図)

E-4グリッドに位置する。第1号溝跡の斜面上に位置するが、新旧関係は不明である。壁は上部がやや開く漏斗状と推定される。

第10号井戸跡 (第55・57図)

C-5グリッドに位置し、北西部が調査区域外へ続く。第3号溝跡と重複し、溝跡の方が新しい。壁はほぼ垂直で、第57図3の鉄滓が出土している。

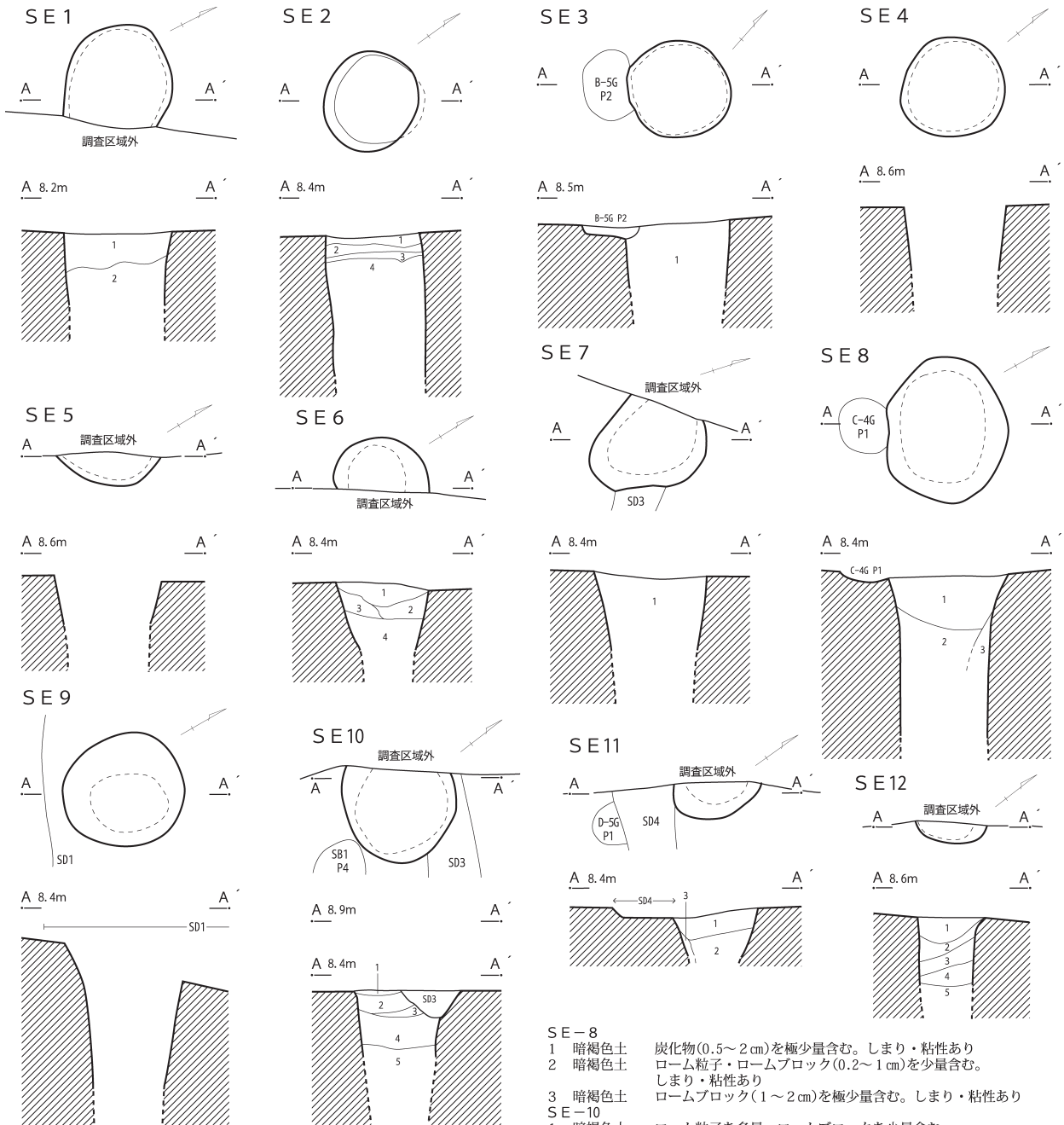
第11号井戸跡 (第55図)

C・D-5グリッドに位置し、北西半分が調査

第23表 井戸跡計測表

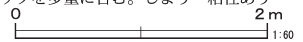
遺構名	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方位	形状	備考
SE1	F-3	1.00	(0.96)	(0.68)	N-36°-E	(楕円形)	
SE2	E-3	0.94	0.84	(1.34)	N-54°-W	円形	
SE3	B-5	1.16	0.90	(0.64)	N-48°-E	円形	
SE4	B-6	0.98	0.96	(0.62)	N-3°-W	円形	
SE5	A-6	0.92	(0.32)	(0.46)	N-32°-E	(円形)	
SE6	C-5	0.88	(0.50)	(0.62)	N-35°-E	(円形)	
SE7	C-5	(0.92)	0.90	(0.70)	N-36°-W	(不整楕円形)	
SE8	C-4・5	1.36	1.10	(1.50)	N-64°-W	楕円形	
SE9	E-4	1.14	1.06	(1.36)	N-32°-E	円形	
SE10	C-5	1.16	(0.88)	(0.62)	N-38°-E	(不整円形)	
SE11	C・D-5	0.80	(0.34)	(0.64)	N-36°-E	(円形)	
SE12	F-3	0.64	(0.20)	(0.84)	N-42°-E	(円形)	
SE13	G-2	1.26	1.08	(1.80)	N-6°-W	不整円形	
SE14	H-2	1.44	(1.24)	(1.18)	N-65°-E	(楕円形)	



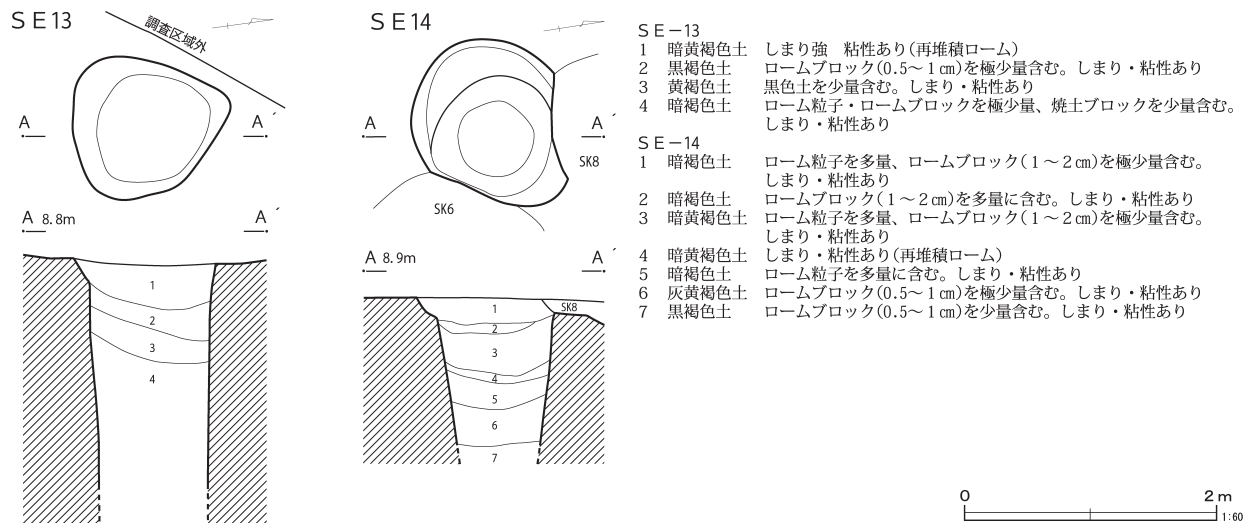


- SE-1  
 1 暗灰褐色土 ローム粒子を少量含む。しまり弱 粘性あり  
 2 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。しまり弱 粘性あり
- SE-2  
 1 極暗褐色土 ロームブロック(0.2~0.4cm)極少量、炭化物を少量含む。しまりなし 粘性あり  
 2 極暗褐色土 ローム粒子(0.2~0.4cm)を少量含む。しまりなし 粘性あり  
 3 極暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(0.2~1cm)を多量に含む。しまりなし 粘性あり  
 4 極暗褐色土 ローム粒子をやや多量に含む。しまりなし 粘性あり
- SE-3  
 1 暗灰褐色土 ロームブロックを多量、焼土粒子を少量含む。しまりあり
- SE-6  
 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(0.4~1cm)を極少量含む。  
 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(0.4~1cm)を少量含む。  
 3 暗褐色土  
 4 黒褐色土
- SE-7  
 1 暗褐色土 ロームブロック(1cm~3cm)を少量含む。しまり・粘性あり

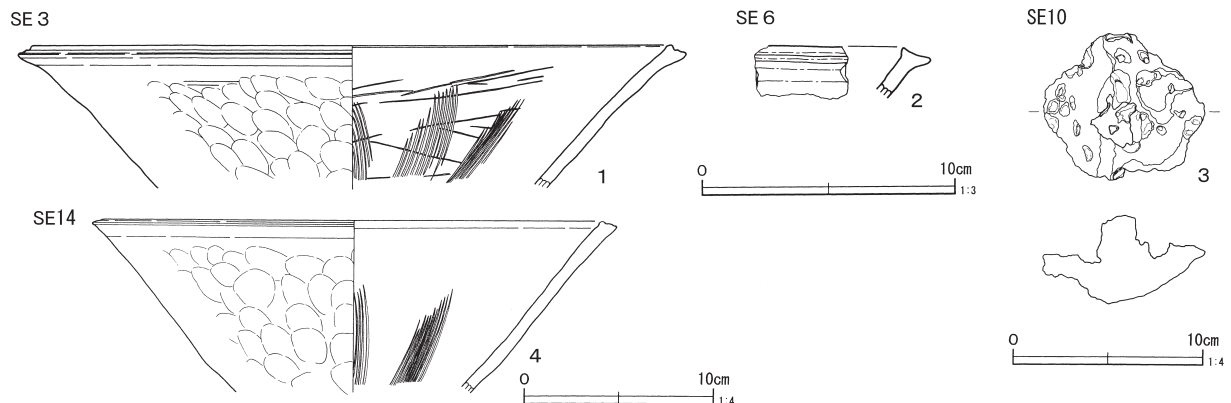
- SE-8  
 1 暗褐色土 炭化物(0.5~2cm)を極少量含む。しまり・粘性あり  
 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(0.2~1cm)を少量含む。しまり・粘性あり  
 3 暗褐色土 ロームブロック(1~2cm)を極少量含む。しまり・粘性あり
- SE-10  
 1 暗褐色土 ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。しまり・粘性あり  
 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。しまり・粘性あり  
 3 暗褐色土 ローム粒子を少量、ロームブロックを極少量含む。しまり・粘性あり  
 4 黒褐色土 ロームブロックを極少量含む。しまり・粘性あり  
 5 暗褐色土 ローム粒子をやや多量、ロームブロックを少量含む。しまり・粘性あり
- SE-11  
 1 暗褐色土 ロームブロックを極少量、灰色シルトブロックを少量含む。しまり・粘性あり  
 2 暗褐色土 ローム粒子を極少量含む。しまり・粘性あり  
 3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。しまり・粘性あり
- SE-12  
 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(0.5~2cm)を少量含む。しまり・粘性あり  
 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(0.5~2cm)をやや多量に含む。しまり・粘性あり  
 3 暗褐色土 ロームブロック(1~4cm)を多量に含む。しまり・粘性あり  
 4 暗黄褐色土 しまり・粘性あり(再堆積ローム)  
 5 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。しまり・粘性あり



第55図 井戸跡(1)



第56図 井戸跡(2)



第57図 井戸跡出土遺物

第24表 井戸跡出土遺物観察表

図版	番号	遺構名	種別	器種	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調	焼成	釉薬装飾	成型技法	備考
57	1	SE3	土器	播鉢	10	(33.6)	—	[7.5]	暗灰	良好		粘土紐	一単位に12本の卸目を間隔をあけて施す 外面指頭痕が顕著で、口縁部はヨコナデ
57	2	SE6	陶器	皿	5	—	—	[1.9]	灰白	良好	灰釉?	轆轤	瀬戸美濃系
57	3	SE10	鉄滓	碗形滓									表面に間隙多く、一部にスサ状の痕跡を認める 中央部滴下による盛り上がり顕著
57	4	SE14	土器	播鉢	10	(27.8)	—	[9.9]	暗褐	普通		粘土紐	一単位11本の卸目を間隔をあけて施す 外面は指頭痕が顕著で口縁部はヨコナデ 口縁部内側は二次的に摩滅している

区域外へ続く。第4号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。壁は底に向かってすぼまる様である。

第12号井戸跡(第55図)

F-3グリッドに位置し、北西の大部分が調査区域外へ続く。壁は垂直で、覆土にはロームブロックが多量に含まれ人為的埋め戻しと考えられる。

第13号井戸跡(第56図)

G-2グリッドに位置し、掘削調査した深さまで、壁はほぼ垂直である。

第14号井戸跡(第56・57図)

H-2グリッドに位置し、第6・8号土壇と重複する。第8号土壇は本遺構より新しいが、第6号土壇との新旧関係は不明である。壁はほぼ垂直で、上端でやや開く。第57図4の播鉢が出土している。



遺物は、常滑産陶器の壺やかわらけ、焙烙などが出土した。第59図1、2の常滑壺の口縁部は、溝底部付近から出土しており、この第1号溝跡に伴う遺物と考えられる。

### 第2号溝跡 (第61図)

第2号溝跡は、調査区のほぼ中央部E-3・4グリッドに位置し、北西から南東方向に延びており、第1号溝跡の南側に平行して走行する。遺物は、出土していない。

### 第3号溝跡 (第60図)

第3号溝跡は、調査区中央北東寄りC-5グリッドに位置する。第1号溝跡の北東約10mを北西から南東方向に延びており、第1号溝跡と平行している。断面形は逆台形を呈し、深さは0.32mとやや浅いが掘り込みはしっかりしている。遺物が出土していないため所属時期は不明であるが、その位置関係から第1号溝跡との関連が推定される。

### 第4号溝跡 (第60図)

第4号溝跡は、調査区中央D-5グリッドに位

置し、北西から南東方向に延びている。

### 第6号溝跡 (第61図)

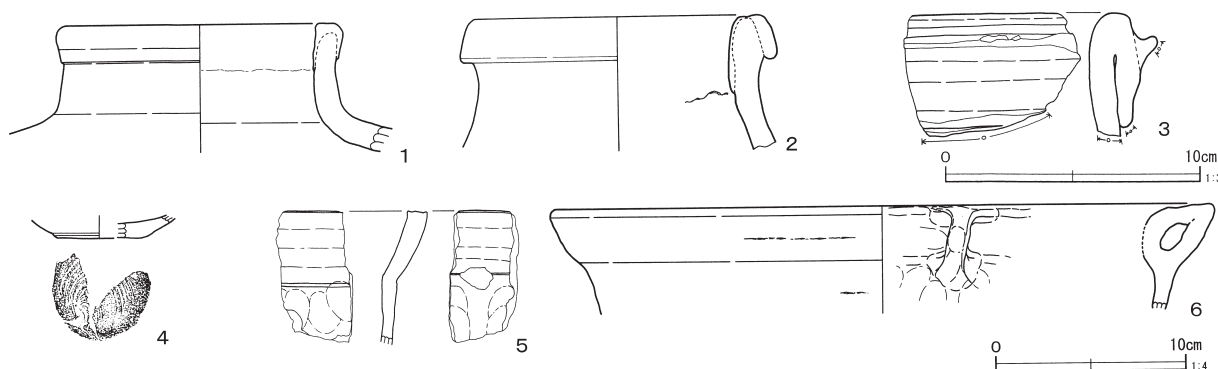
第6号溝跡は、調査区中央南西寄りD・E-4、F-3・4グリッドに位置し、北東から南西方向に延びている。第1～4号溝跡とほぼ垂直方向に走行し、第2号溝と交わるが、本遺構の方が新しい。

### 第7号溝跡 (第61～63図)

第7号溝跡は、調査区南西部のF・G-2・3、H-2グリッドに位置し、ほぼ南北方向に延びる。断面逆台形を呈し、深さ0.7mのしっかりした掘り込みを持つ溝跡である。今回検出された溝跡の中で唯一主軸方向を違える。遺物は、第62・63図に示した。美濃系緑釉陶器の皿、播鉢、かわらけ、内耳土器、板碑片などが数多く出土している。

### 第10号溝跡 (第60図)

第10号溝跡は、調査区中央C・D-4グリッドに位置し、北東から南西方向に延びている。第4号溝跡との位置関係や断面形などから、直角に接続する可能性もあろう。

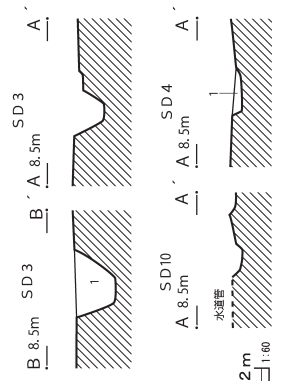
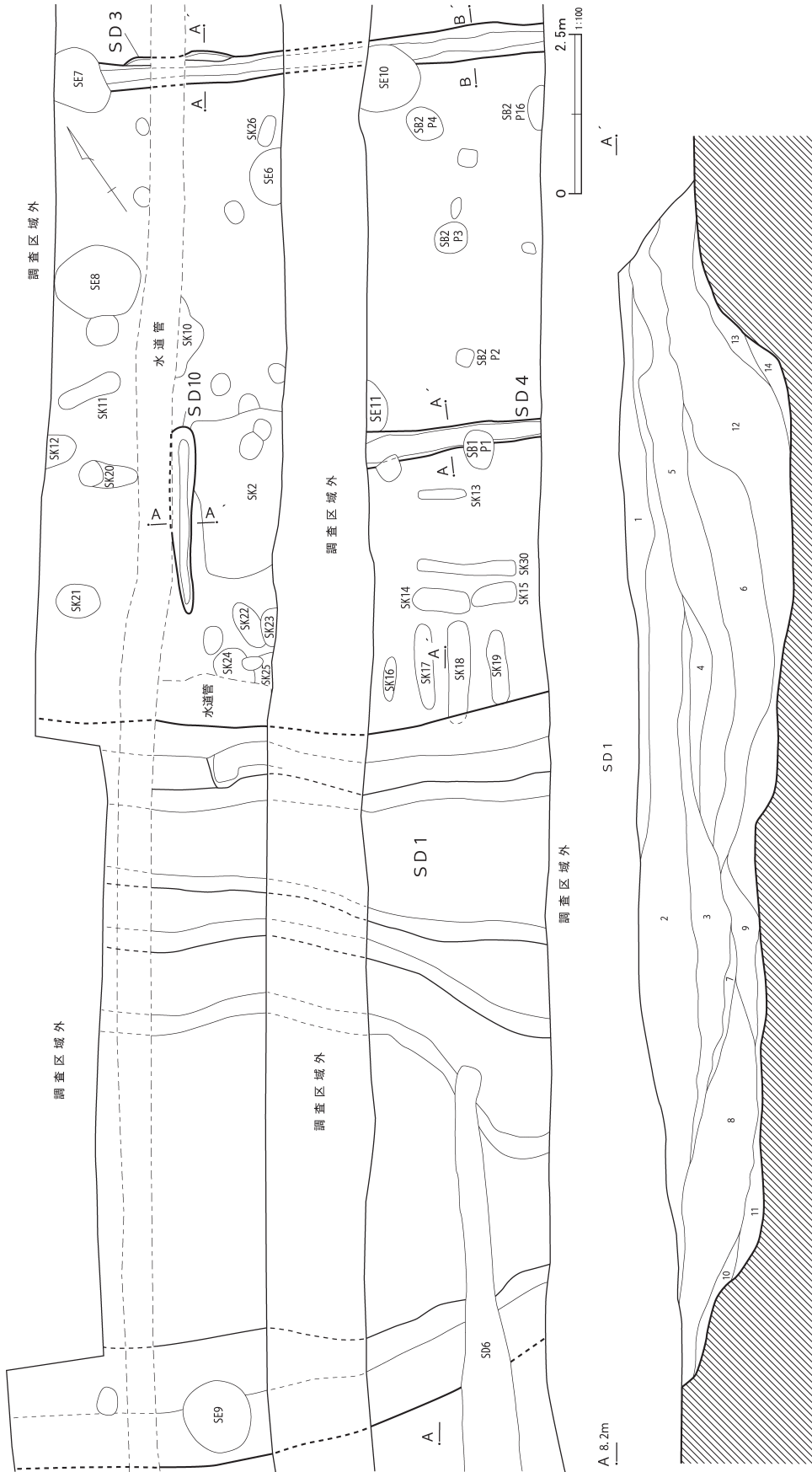


第59図 第1号溝跡出土遺物

第26表 第1号溝跡出土遺物観察表

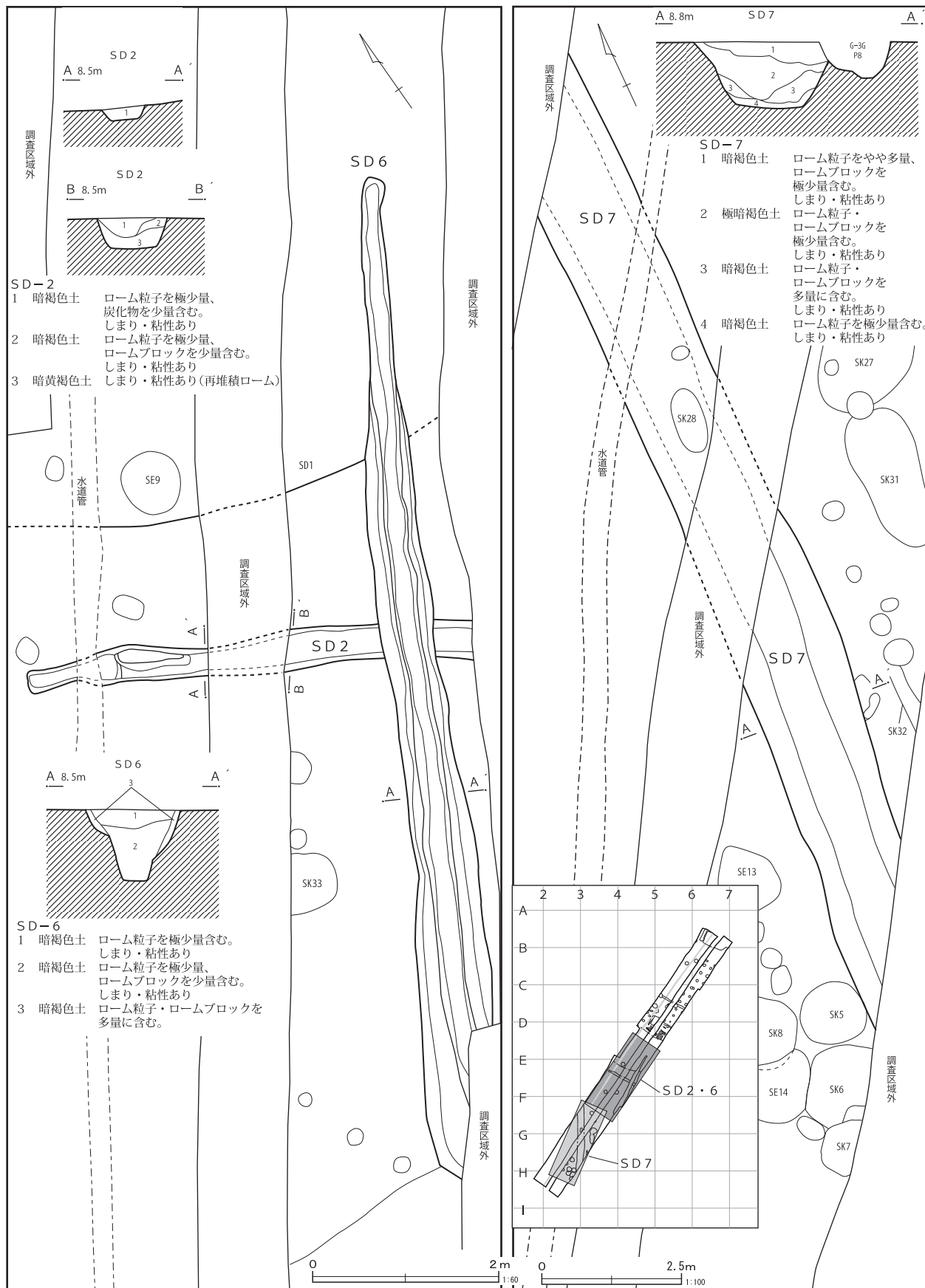
図版	番号	遺構名	種別	器種	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	焼成	釉薬装飾	成型技法	備考
59	1	SD 1	陶器	壺	25	(10.8)	—	[5.1]	灰	良好	鉄釉		胎土は暗灰色でキメが粗く白色粒子を含む 常滑 (16C)
59	2	SD 1	陶器	壺	25	(11.4)	—	[5.3]	灰	良好	鉄釉		胎土は1と同じ 温度の関係なのか黒っぽく発色している 常滑 (15C後半)
59	3	SD 1	陶器	甕?	5	(34.6)	—	[4.9]	暗灰	良好		轆轤	胎土は1と同じ ツバの部分と割れ口を砥石として再利用 (転用砥石)
59	4	SD 1	土器	かわらけ	30	—	(4.6)	[1.2]	黒褐	良好		轆轤	内外面僅かに自然釉付着 二次被熱
59	5	SD 1	土器	内耳土器	5	—	—	[7.1]	褐灰	普通		粘土紐	体部内面ヨコナデ 体部外面上半部ヨコナデ 下半部指頭痕
59	6	SD 1	土器	内耳土器	5	(34.6)	—	[5.5]	灰黄	普通		粘土紐	体部内面ヨコナデ 体部外面上半部ヨコナデ 下半部指頭痕



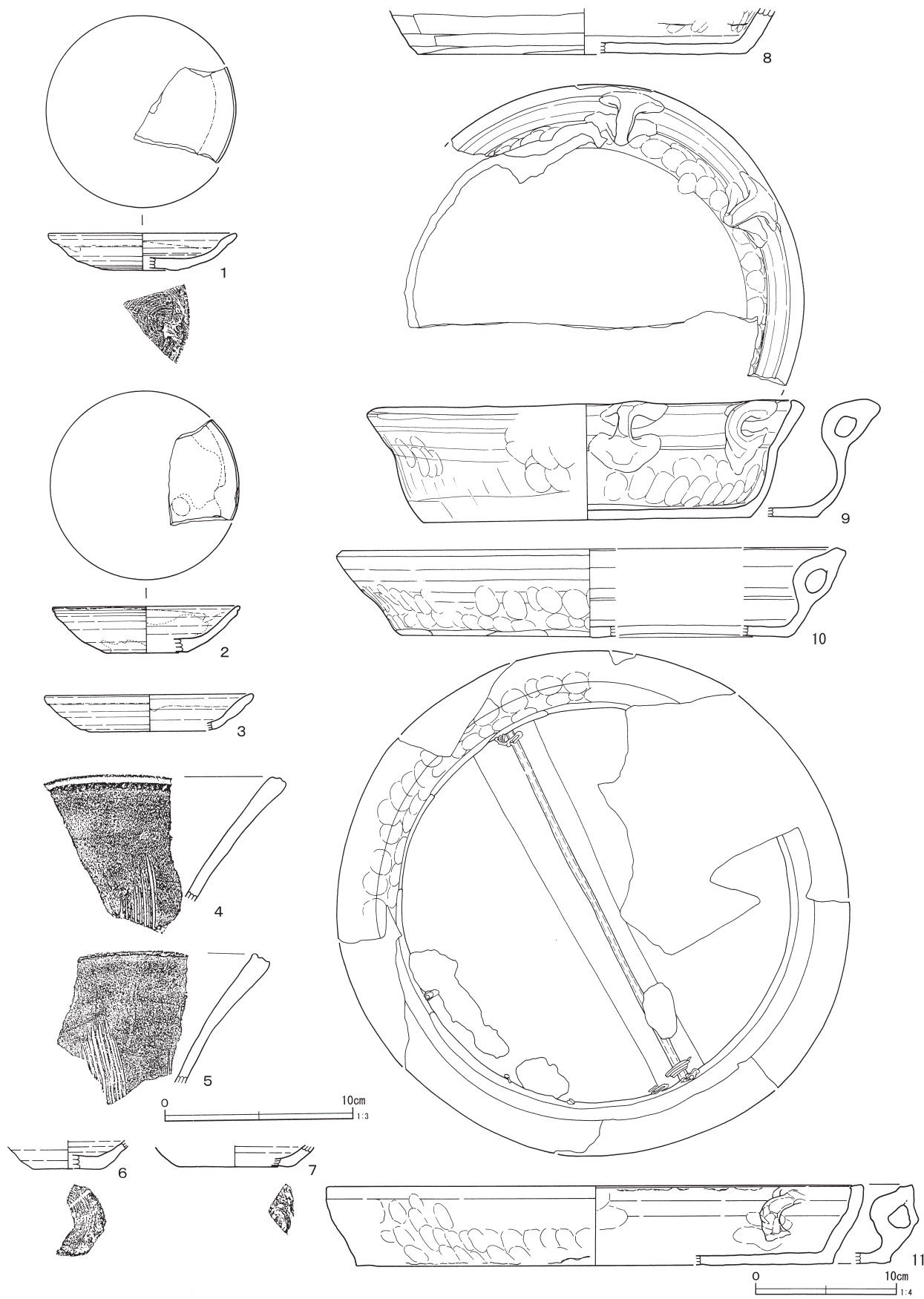


第60図 溝跡 (1)

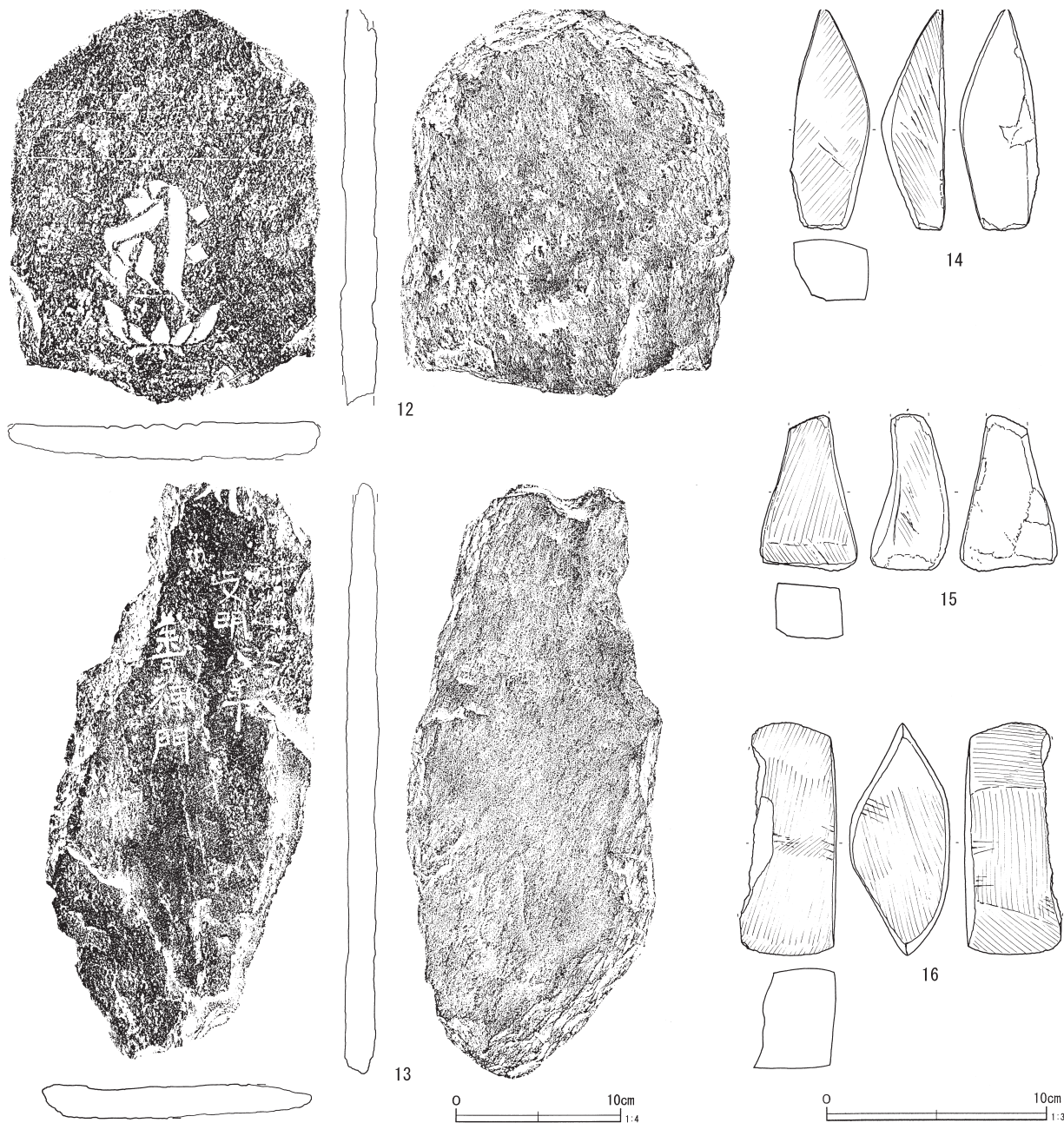
- SD-1
- 1 暗灰色土
  - 2 暗灰色土
  - 3 暗灰色土
  - 4 暗灰色土
  - 5 暗灰色土
  - 6 暗灰色土
  - 7 暗灰色土
  - 8 暗灰色土
- SD-3
- 1 暗褐色土
  - 2 暗褐色土
  - 3 暗褐色土
  - 4 暗褐色土
- SD-4
- 1 暗褐色土
  - 2 暗褐色土
  - 3 暗褐色土
  - 4 暗褐色土
- 9 ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。粘性・しまり強
- 10 ローム粒子・ロームブロック・白色微粒子を少量含む。粘性・しまり強 竹等の植物体を少量含む。
- 11 層下部は黒色腐植層が厚30.5cm堆積する部分あり。ローム粒子・酸化鉄を少量含む。植物質を含む。しまり・粘性あり
- 12 ローム粒子を少量含む。しまり・粘性あり
- 13 ローム粒子を少量含む。しまり・粘性あり
- 14 色調は4層よりやや暗い
- SD-3
- 1 ローム粒子・ロームブロックを少量含む。しまりやや弱
  - 2 ローム粒子・ロームブロックを少量含む。粘性あり
  - 3 ローム粒子・ロームブロックを少量含む。しまりやや弱
  - 4 ローム粒子・ロームブロックを少量含む。粘性あり
- SD-4
- 1 暗褐色土
  - 2 暗褐色土
  - 3 暗褐色土
  - 4 暗褐色土
- 9 暗黄褐色土
- 10 暗褐色土
- 11 暗赤褐色土
- 12 暗赤褐色土
- 13 暗赤褐色土
- 14 暗黄褐色土
- SD-3
- 1 ローム粒子・ロームブロックを極少量含む。
  - 2 ローム粒子・ロームブロックを少量含む。
  - 3 暗褐色土
  - 4 暗褐色土
- SD-4
- 1 暗褐色土
  - 2 暗褐色土
  - 3 暗褐色土
  - 4 暗褐色土
- 9 ロームブロックを多量に含む。しまりやや弱 粘性弱
- 10 ローム粒子を少量含む。しまりやや弱 粘性弱
- 11 ローム粒子・ロームブロックを少量含む。しまりやや弱 粘性弱
- 12 暗赤褐色土
- 13 ローム粒子・ロームブロックを少量含む。しまり・粘性あり
- 14 ローム粒子を少量含む。しまり・粘性弱
- SD-3
- 1 ローム粒子・ロームブロックを少量含む。
  - 2 ローム粒子・ロームブロックを少量含む。
  - 3 暗褐色土
  - 4 暗褐色土
- SD-4
- 1 暗褐色土
  - 2 暗褐色土
  - 3 暗褐色土
  - 4 暗褐色土



第61図 溝跡 (2)



第62図 第7号溝跡出土遺物(1)



第63図 第7号溝跡出土遺物(2)

第27表 第7号溝跡出土遺物観察表

図版	番号	遺構名	種別	器種	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	焼成	釉薬装飾	成型技法	備考
62	1	SD 7	陶器	皿	30	10.0	5.0	2.0	灰	良好	灰釉	轆轤	緑釉皿 釉厚く濃暗緑色に発色 美濃系(15C)
62	2	SD 7	陶器	皿	10	(10.0)	(4.5)	2.5	褐灰	良好	灰釉	轆轤	緑釉皿 二次被熱 美濃系(15C)
62	3	SD 7	陶器	皿	10	(11.0)	(6.4)	2.0	灰	普通	灰釉	轆轤	緑釉皿 釉厚く濃暗緑色に発色 二次被熱 美濃系(15C)
62	4	SD 7	土器	拵鉢	5	—	—	[6.1]	暗褐	良好			卸目は9本確認できる 間隔をあけて施される 外面は指押え後ナデ調整 口縁部はヨコナデ
62	5	SD 7	土器	拵鉢	5	—	—	[6.6]	暗褐	良好			一単位11本の卸目を間隔をあけて施す 外面は指押え後ナデ調整 口縁部内側は二次的に摩滅している
62	6	SD 7	土器	かわらけ	40	—	(4.9)	[2.0]	褐	良好		轆轤	胎土に角閃石を多量に含む 外面煤付着



図版	番号	遺構名	種別	器種	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	焼成	釉薬装飾	成型技法	備考
62	7	SD 7	土器	かわらけ	5	—	(8.0)	[1.5]	褐橙	普通		轆轤	胎土に角閃石を多量に含む
62	8	SD 7	土器	内耳土器	70	—	23.5	[3.3]	灰黄褐	良好		粘土紐	内面ヨコナデ 外面下端は横方向のヘラケズリ 胎土には角閃石を多量に含む
62	9	SD 7	土器	内耳土器	40	(29.6)	23.4	8.2	にぶい黄橙	普通		粘土紐	内面体部指頭痕 口縁部ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ 体部指押え後縦方向にナデ 体部下 端は横方向にヘラによるナデシケ 外底面ヘラ ケズリ 胎土に角閃石を多量に含む
62	10	SD 7	土器	内耳土器	70	35.4	27.6	6.3	にぶい黄橙	普通		粘土紐	胎土に角閃石多量に含む 底部中央部に帯状の 隆起あり 体部内面ヨコナデ 外面上半部ヨコ ナデ 下半部指頭痕
62	11	SD 7	土器	内耳土器	15	(38.0)	(34.0)	5.6	にぶい黄橙	良好			内面ヨコナデ 外面上半部ヨコナデ 下半部指 頭痕
63	12	SD 7	石製品	板碑	30	長さ[24.5] 幅[19.1] 厚さ2.4			種子キリーク 蓮台が表現される 二条線は刻 で表現される 種子は軸線に対して傾いている				
63	13	SD 7	石製品	板碑	50	長さ[36.0] 幅[16.4] 厚さ2.1			三尊型式と思われる 紀年銘あり (文明八年、 善禪門) 右側に界線が見られる 裏面はノミ 痕を殆ど残さない				
63	14	SD 7	石製品	砥石		長さ10.1	幅3.6	厚さ2.9	重さ103.0 g	下端部を欠失するが四面ともよく使用されてい る			
63	15	SD 7	石製品	砥石		長さ7.0	幅4.4	厚さ3.5	重さ105.5 g	撥形の砥石である 上半部を欠失する 端面を 除いてよく使用されている			
63	16	SD 7	石製品	砥石		長さ10.5	幅4.4	厚さ4.6	重さ236.6 g	一側面を欠失しているが全面よく使い込まれて いる 二次被熱あり			

第28表 溝跡計測表

遺構名	グリッド	全長(m)	幅(m)	深さ(m)	主軸方位	形状	備考
SD 1	D-3~5 E-3・4	(8.55)	11.65	1.62	N-60°-W		
SD 2	E-3・4	(8.00)	0.74	0.34	N-61°-W		
SD 3	C-5	(6.95)	0.55	0.32	N-60°-W		
SD 4	D-5	(2.79)	0.55	0.08	N-63°-W		
SD 6	D・E-4 F-3・4	(18.04)	1.28	0.76	N-37°-E		
SD 7	F・G-2・3 H-2	(15.60)	1.90	0.70	N-3°-E		
SD10	C・D-4	2.95	(0.40)	0.12	N-33°-E		

### (5) 竪穴状遺構

#### 第1号竪穴状遺構 (第64・65図)

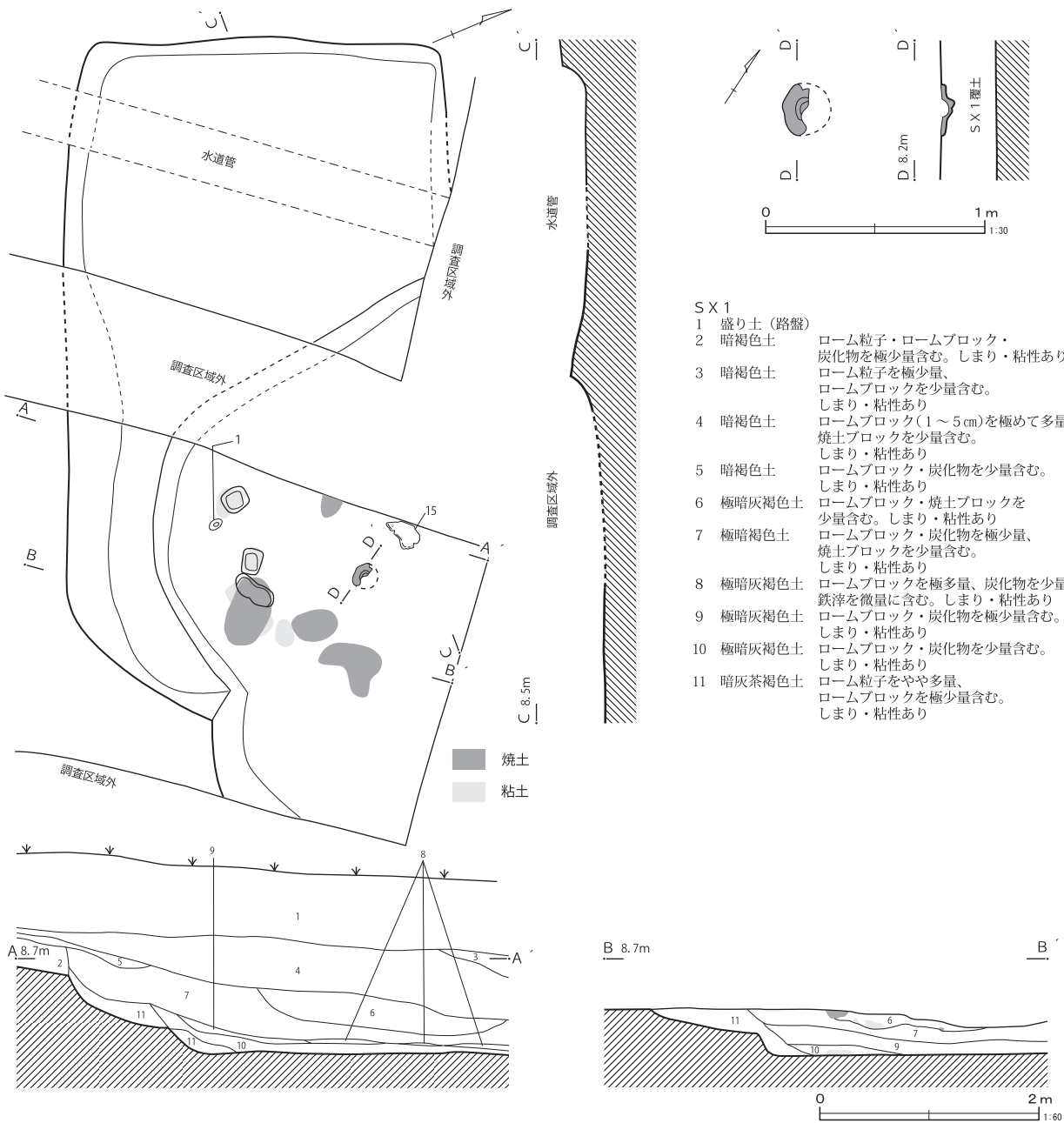
第1号竪穴状遺構は、調査区北端部のA-6・7、B-6グリッドに位置する。完掘状況から2基の重複とみられるが、新旧関係は不明である。平面形態は2基とも長方形を呈すると思われる。西側の遺構は、長軸6.2m、短軸3.3mで東西に長い形態をとる。東側のは、西側の遺構から主軸をややずらし、ほぼ東西方向を向くと考えられ、長軸4.5m以上、短軸2.6m以上を測る。確認面からの掘り込みは、深い部分で西側0.45m、東側0.65mである。東側調査区で確認した堆積状況から、掘り方を暗灰褐色土で充填後、暗灰色粘質土を貼り、床面を構築していることが確認できた。床面は、非常に堅く締まっていた。覆土中からは焼土ブロックが検出され、床面では遺存状態は悪いが、

赤褐色に硬化した炉跡状の遺構が確認された。また、床面直上からは第65図11の小形埴塼が出土しており、覆土中からは少量であるが鉄滓も検出されている。これらの出土状況から第1号竪穴状遺構の性格は、製鉄に係する工房と考えられる。

遺物は、陶器の皿や播鉢、土器の香炉や鉢、かわらけ、埴塼、石製品の板碑などが出土している。第65図1の瀬戸産陶器の灰釉小皿は掘り方の底面付近から、15の板碑は貼床直上で出土した。

#### 第3号竪穴状遺構 (第66・67図)

第3号竪穴状遺構は、調査区南部のF・G-3グリッドの東側調査区に位置する。調査区内に所在する遺構の北西部分を調査したが、主体は調査区域外へと延びており、平面形態は長方形を呈すると思われる。規模は、長軸6.0m以上、短軸3.4m以上で確認面からの深さは0.8mを測る。西辺

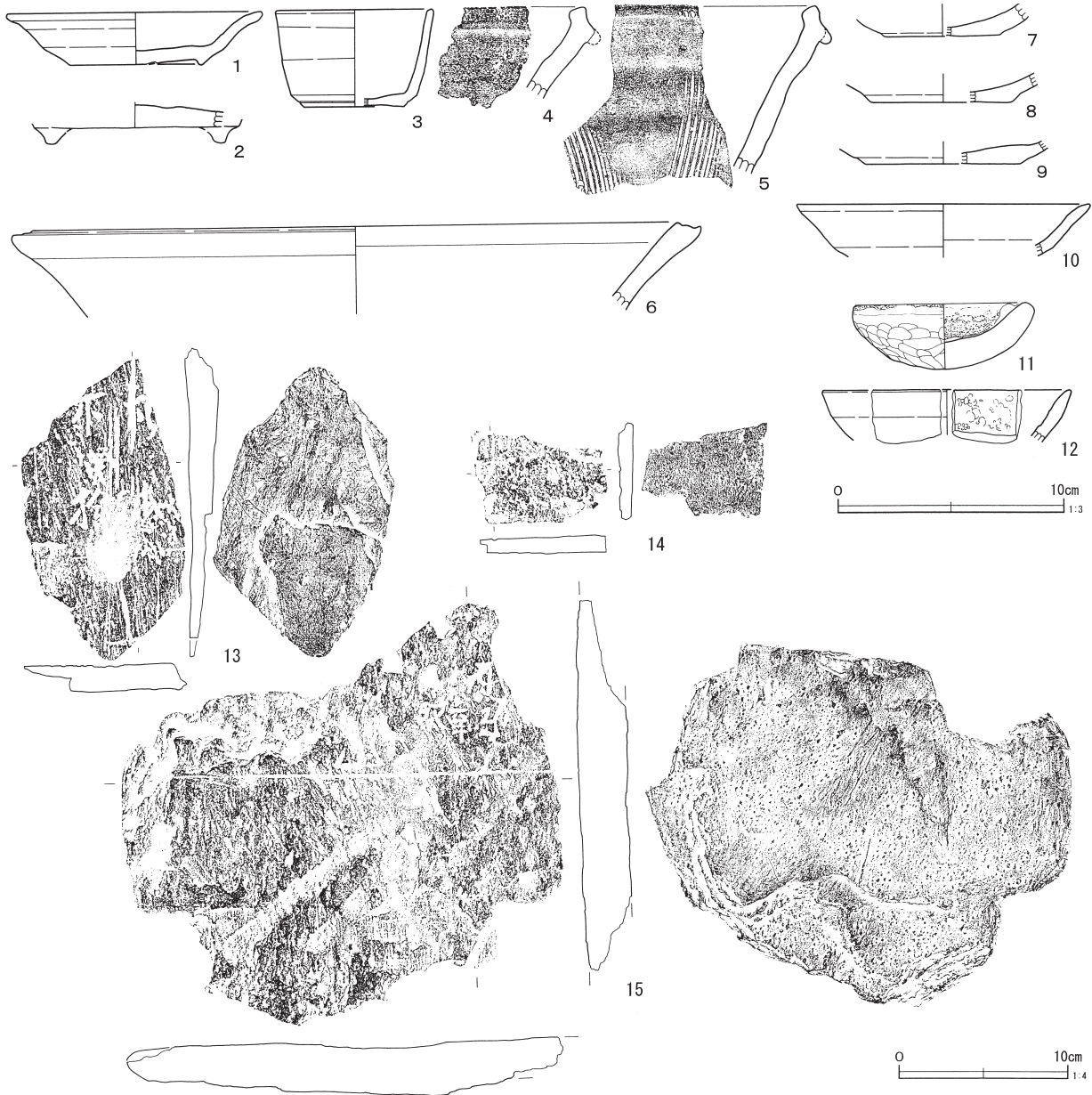


- SX1
- 1 盛り土 (路盤)
  - 2 暗褐色土
  - 3 暗褐色土
  - 4 暗褐色土
  - 5 暗褐色土
  - 6 極暗灰褐色土
  - 7 極暗褐色土
  - 8 極暗灰褐色土
  - 9 極暗灰褐色土
  - 10 極暗灰褐色土
  - 11 暗灰茶褐色土
- ローム粒子・ロームブロック・炭化物を極少量含む。しまり・粘性あり
  - ローム粒子を極少量、ロームブロックを少量含む。しまり・粘性あり
  - ロームブロック(1~5cm)を極めて多量、焼土ブロックを少量含む。しまり・粘性あり
  - ロームブロック・炭化物を少量含む。しまり・粘性あり
  - ロームブロック・焼土ブロックを少量含む。しまり・粘性あり
  - ロームブロック・炭化物を極少量、焼土ブロックを少量含む。しまり・粘性あり
  - ロームブロックを極多量、炭化物を少量、鉄滓を微量に含む。しまり・粘性あり
  - ロームブロック・炭化物を極少量含む。しまり・粘性あり
  - ロームブロック・炭化物を少量含む。しまり・粘性あり
  - ローム粒子をやや多量、ロームブロックを極少量含む。しまり・粘性あり

第64図 第1号竪穴状遺構

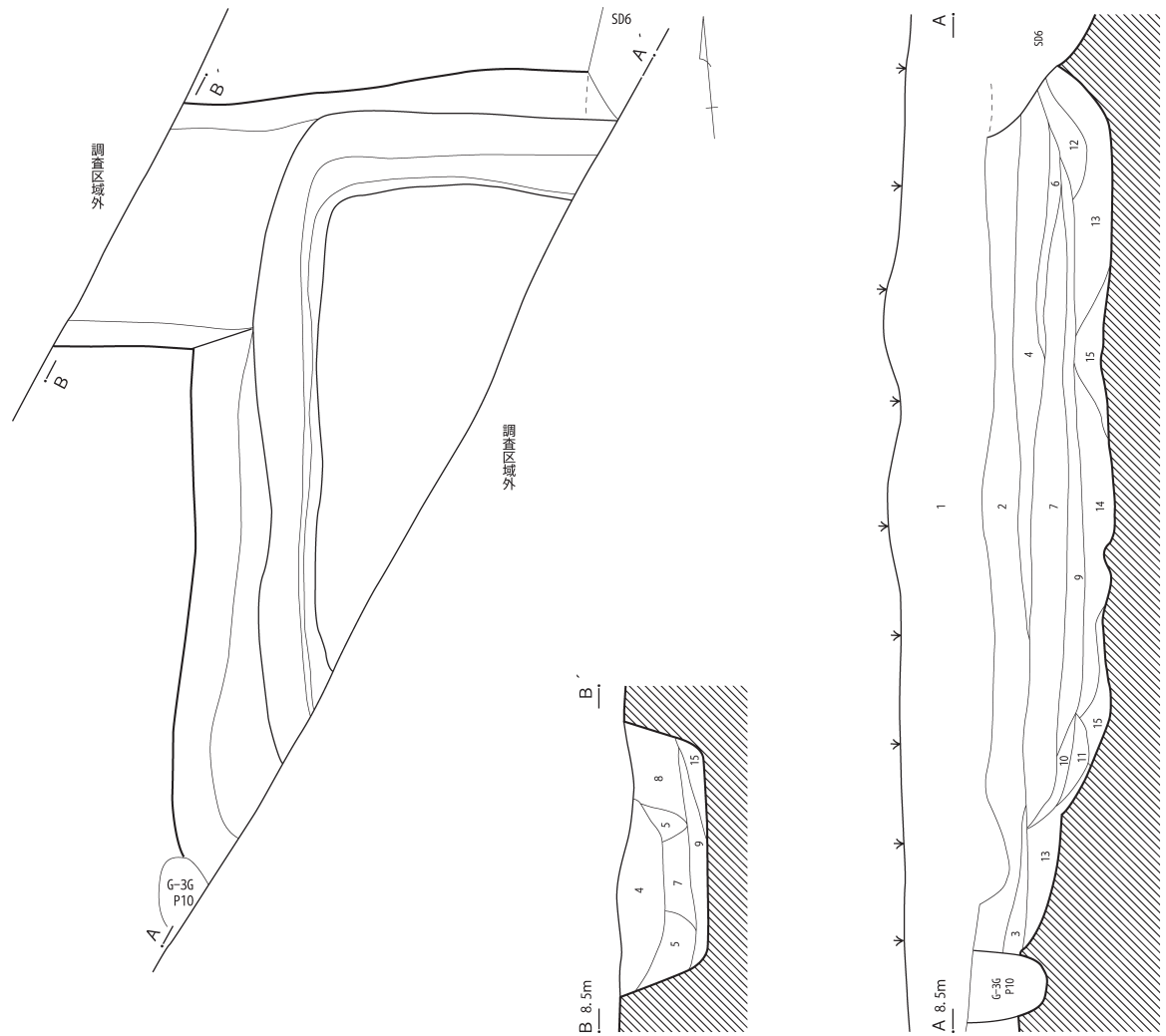
第29表 第1号竪穴状遺構出土遺物観察表

図版番号	遺構名	種別	器種	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	焼成	釉薬装飾	成型技法	備考
65 1	SX1	陶器	皿	100	11.3	5.7	3.3	黄白		鉄釉 灰釉	轆轤	外底面及び見込み部分に薄く鉄釉を塗り他は全面灰釉 瀬戸 (16C)
65 2	SX1	土器	香炉	5	—	—	[1.2]	赤褐色 内底面 黒灰色	良好			底部に三足がつく香炉になると思われる
65 3	SX1	陶器		40	(6.8)	(4.4)	4.3	灰	良好	鉄釉	轆轤	外面体部下半部回転ヘラケズリ 美濃系
65 4	SX1	陶器	播鉢		—	—	—	黄白		鉄釉	轆轤	卸目は11本以上と思われる 瀬戸系(16C後半) 5と同一個体
65 5	SX1	陶器	播鉢	10	—	—	[7.4]	灰黄	普通	鉄釉	轆轤	卸目は10本以上間隔をあけて施される 瀬戸系(16C後半) 4と同一個体
65 6	SX1	土器	鉢	10	(30.6)	—	[3.8]	淡い褐				砂粒子・赤色粒子を少量含む 内面比較的良好に擦れている 在地
65 7	SX1	土器	かわらけ	25	—	(5.0)	[1.4]	淡い橙	普通		轆轤か	赤色粒子を多量、雲母少量含む 軟質でキメ細かい



第65図 第1号竪穴状遺構出土遺物

図版	番号	遺構名	種別	器種	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	焼成	釉薬装飾	成型技法	備考
65	8	SX1	土器	かわらけ	15	—	(6.2)	[1.3]	淡い橙	普通		轆轤	赤色粒子を多量、雲母少量含む 軟質でキメ細かい
65	9	SX1	土器	かわらけ	20	—	(6.8)	[1.0]	淡い赤褐	普通		轆轤	赤色粒子を多量、雲母少量含む 軟質でキメ細かい
65	10	SX1	土器	かわらけ	10	(13.0)	—	[2.3]	淡い褐	普通		轆轤	軟質でキメ細かい
65	11	SX1	土器	坩堝	80	(8.0)		2.9	暗褐			手捏	器面の厚さ12mm 白色微粒子・砂粒子を多量に含む 内面滓多量に付着 黒色に光沢しているが口縁部は暗赤色を呈する 径2mm程の緑錆が見られる
65	12	SX1	土器	かわらけ(坩堝)	10	(11.0)	—	2.3	暗褐灰	良好		轆轤か	内面滓付着 かわらけの転用
65	13	SX1	石製品	板碑									□ □□(拾) 銘文の部分に縦方向の鋭い線状の刻みと点状の刺突あり 被熱している
65	14	SX1	石製品	板碑									表面被熱あり
65	15	SX1	石製品	板碑									□□(禪か) 中央下花瓶か 下限の界線が刻まれ基部を作り出す際の線が見られる



SX-3

- 1 盛り土(路盤)
- 2 暗褐色土 ロームブロック・灰色シルトブロックを少量含む。しまり・粘性あり
- 3 暗褐色土 ローム粒子を極少量、ロームブロックを少量含む。しまり・粘性あり
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックを少量含む。しまり・粘性あり
- 5 暗褐色土 ロームブロックを少量、灰色シルトを極少量含む。しまり・粘性あり
- 6 暗褐色土 ローム粒子を極少量、ロームブロック(1~2cm)を多量に含む。しまり・粘性あり
- 7 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。しまり・粘性あり
- 8 暗黄褐色土 ローム粒子を多量に含む。しまり・粘性あり

- 9 灰褐色土 ロームブロック・灰色シルトを少量、酸化鉄を多量に含む。しまり強
- 10 灰褐色土 ロームブロック・灰色シルト・酸化鉄を少量含む。しまり・粘性あり
- 11 暗褐色土 ロームブロックを少量、灰色シルトを極少量含む。しまり・粘性あり
- 12 暗褐色土 ロームブロックを多量、灰色シルトを極少量含む。しまり・粘性あり
- 13 暗褐色土 ロームブロックを少量、灰色シルトを極少量含む。しまり・粘性あり(多量の遺物を含む)
- 14 暗褐色土 ローム粒子を極少量、灰色シルトを少量含む。しまり・粘性あり
- 15 暗黄褐色土 ロームブロックを多量、灰色シルトを少量含む。しまり・粘性あり



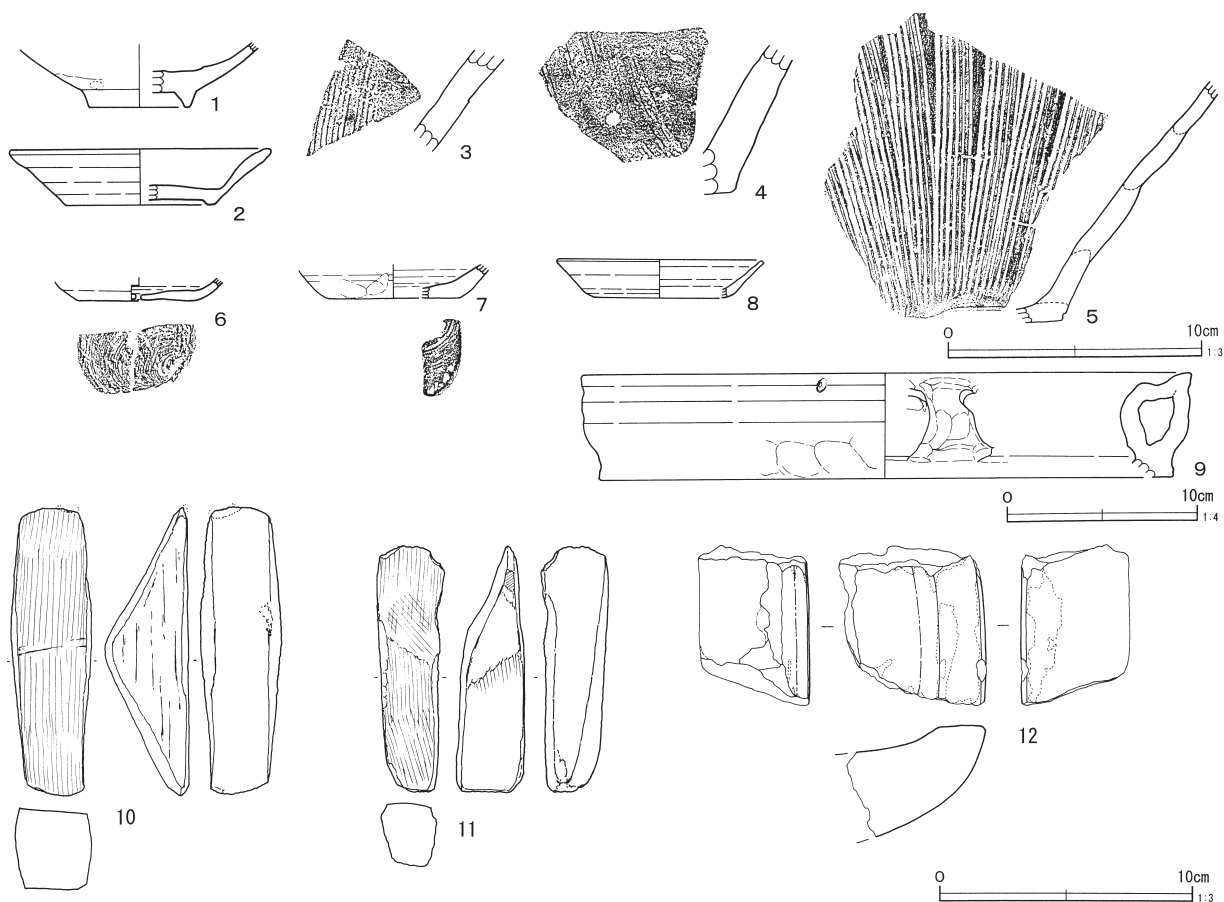
第66図 第3号竪穴状遺構

北端部に幅約2.0mの溝状の張出し部を持つ。調査時には他の溝跡との重複と考えたが、覆土の堆積状況から切り合い関係は確認できず、覆土の様相も遺構本体と同様であることから、張出し部であるとの結論に至った。なお、西側調査区では張出し部の延長は検出されていない。北東部の調査

区際では第6号溝跡と重複し、一部壊されている。床面は、第1号竪穴状遺構と同様、貼床が施されており堅く締まっていた。

遺物は、磁器碗や陶器皿、播鉢、かわらけ、焙烙、石製品の砥石などが出土した。





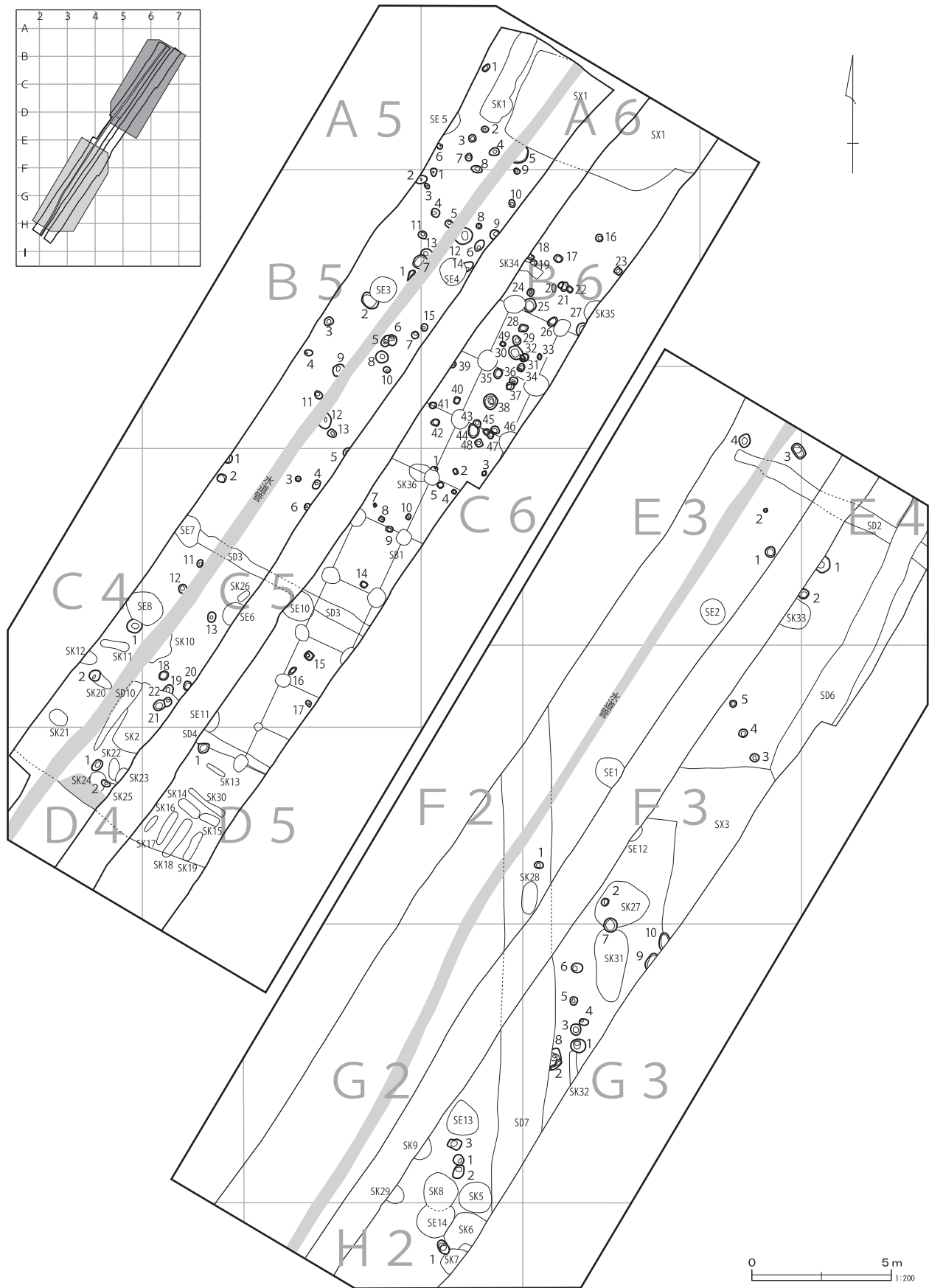
第67図 第3号竪穴状遺構出土遺物

第30表 第3号竪穴状遺構出土遺物観察表

図版番号	遺構名	種別	器種	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	焼成	釉薬装飾	成型技法	備考
67 1	SX 3	磁器	碗	15	—	(4.0)	[2.5]	灰白		白色釉	轆轤	見込み輪割ぎ 肥前系
67 2	SX 3	陶器	皿	50	(10.2)	(5.8)	2.2	淡黄白		鉄釉	轆轤	高台部削り出し 見込み目跡あり 瀬戸 (16C後半?)
67 3	SX 3	陶器	搦鉢	5	—	—	[4.1]	黄白		鉄釉		瀬戸 (16C後半) 4と同一個体
67 4	SX 3	陶器	搦鉢	10	—	—	[5.6]	黄白		鉄釉		使用により卸目が摩耗している 瀬戸 (16C後半) 3と同一個体
67 5	SX 3	陶器	搦鉢	15	—	—	[9.0]	灰	良好		粘土紐	卸目は6本 外面赤橙色～淡い橙色 内面灰色 外面ヨコナデ 常滑 (16C後半)
67 6	SX 3	土器	かわらけ	30	—	(6.4)	[1.2]	橙	普通		轆轤	底部中央に穿孔1カ所あり 赤色粒子を多量に含む キメ細かい
67 7	SX 3	土器	かわらけ	10	—	(7.0)	[1.7]	にぶい橙	普通		轆轤	内面に煤付着 軟質 キメ細かい
67 8	SX 3	土器	かわらけ	20	(10.8)	(7.0)	2.0	にぶい橙	普通		轆轤	軟質でキメ細かい
67 9	SX 3	土器	焙烙	5	(32.2)	(30.4)	5.5	褐灰	普通			内耳部分には使用による摩耗が顕著
67 10	SX 3	石製品	砥石		長さ11.3 幅3.2 厚さ3.3 重さ113.5g							凝灰岩
67 11	SX 3	石製品	砥石		長さ9.7 幅2.7 厚さ2.8 重さ77.5g							凝灰岩
67 12	SX 3	石製品	容器	10	—	—	[4.3]					安山岩 重さ152.1g 内面に布状物質が付着 断面に接着痕あり (漆あるいは柿渋によるものか?)

第31表 竪穴状遺構計測表

遺構名	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方位	形状	備考
SX 1	A-6・7 B-6	(7.08)	(3.58)	1.08	N-67°-W	(長方形)	
SX 3	F・G-3	(6.44)	(3.38)	1.04	N-5°-E	(長方形)	



第68図 ピット

(6) ピット (第68図)

調査区のほぼ全域からピットが検出され、特に北半部のB-5・6グリッドに集中していた。しかし、柱穴配置から掘立柱建物跡の可能性はあるものは認められなかった。

(7) 遺構外出土遺物 (第69図)

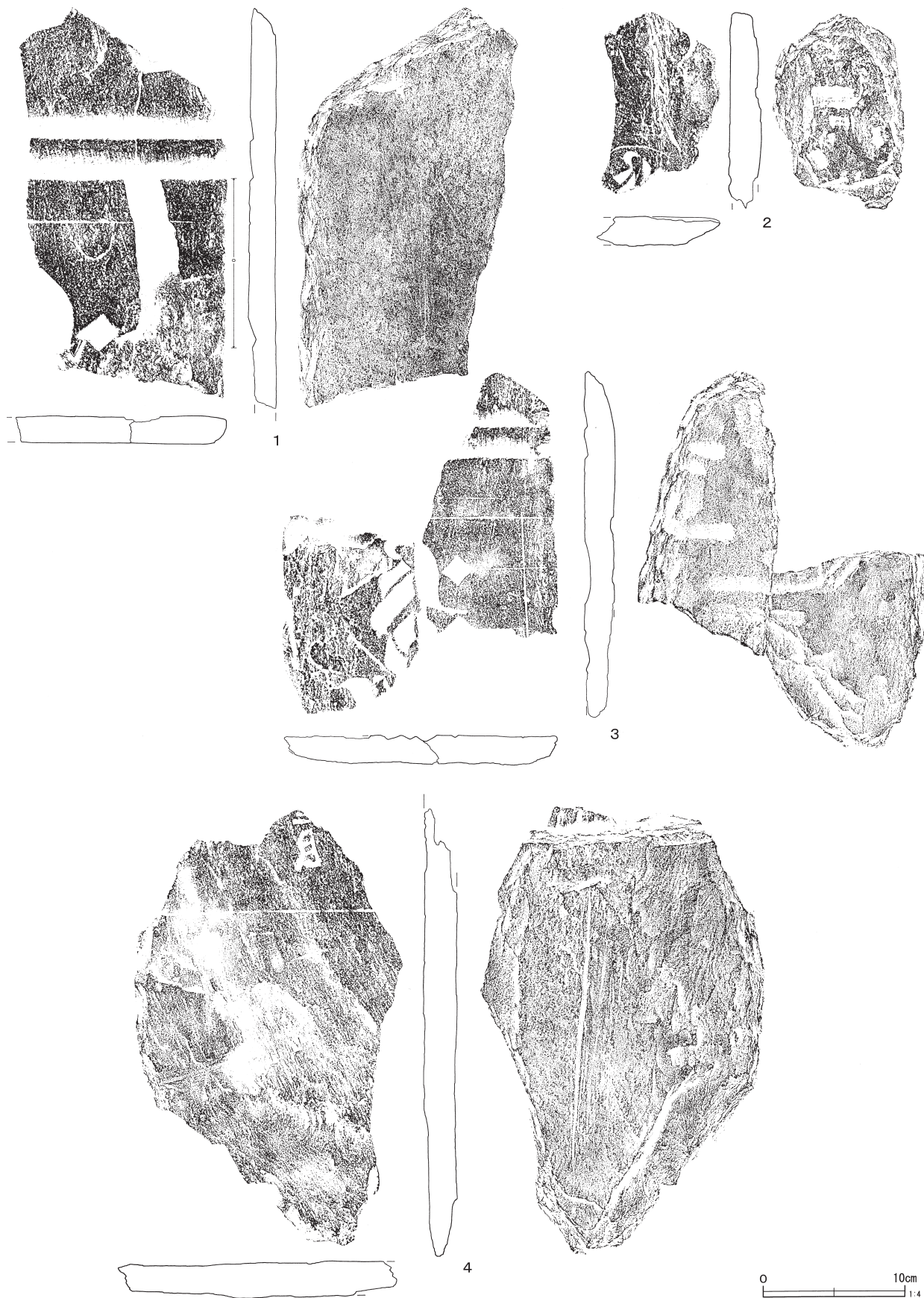
遺構外からは板碑が4点出土した。1～3は頭部、4は基部の破片で、いずれも全容は不明である。全体的に成形時のノミ痕が少ないのが特徴である。

第32表 ピット一覧表

グリッド	番号	長軸	短軸	深さ	備考	グリッド	番号	長軸	短軸	深さ	備考	グリッド	番号	長軸	短軸	深さ	備考	
A-6	1	0.31	0.19	—		B-6	22	0.23	0.20	0.06		C-5	14	0.25	0.20	0.10		
	2	0.24	0.21	0.15			23	0.25	0.23	0.42			15	0.31	0.28	0.07		
	3	0.26	0.25	0.31			24	0.25	0.23	0.14			16	0.35	0.17	0.09		
	4	0.37	0.28	0.25			25	0.50	(0.41)	0.12			17	0.21	0.18	0.07		
	5	0.70	(0.27)	—			26	0.40	0.27	0.17			18	0.37	0.30	0.05		
	6	0.20	0.18	0.24			27	0.45	(0.15)	0.08			19	0.34	(0.27)	0.04		
	7	0.26	0.21	0.37			28	0.30	0.25	0.17			20	0.34	(0.23)	0.07		
	8	0.34	0.28	0.21			29	0.34	0.28	0.07			21	(0.41)	0.36	0.12		
	9	0.26	0.23	0.23			30	0.53	0.44	0.11			22	0.34	0.28	0.16		
B-5	1	0.42	0.16	0.13			31	0.32	(0.08)	—			C-6	1	0.21	0.16	0.26	
	2	0.65	(0.40)	0.11			32	0.22	0.11	—				2	0.20	0.15	0.10	
	3	0.33	0.29	0.20			33	0.19	0.15	0.17				3	0.16	0.16	0.05	
	4	0.30	0.21	0.23			34	0.29	0.25	0.15				4	0.15	0.16	0.09	
	5	0.44	(0.38)	0.26			35	0.35	0.30	0.09		5		0.21	0.21	0.14		
	6	0.39	0.27	0.29			36	0.27	(0.22)	0.28		D-4	1	0.46	0.31	0.06		
	7	0.26	0.24	0.12			37	0.29	0.29	0.23			2	(0.33)	0.19	0.06		
	8	0.44	0.44	0.31			38	0.55	0.50	0.20		D-5	1	0.39	(0.28)	0.08		
	9	0.49	(0.36)	0.24			39	0.23	(0.09)	0.18			E-3	1	0.36	0.34	0.15	
	10	0.25	0.22	0.25			40	0.24	0.19	0.17				2	0.12	0.12	0.31	
	11	0.31	0.24	0.22			41	0.25	0.24	0.13		3		0.59	0.39	0.19		
	12	0.51	(0.32)	0.29			42	0.25	0.25	0.23		E-4	4	0.50	0.41	0.32		
	13	0.31	0.25	0.13		43	0.30	0.25	0.17		1		0.59	(0.40)	0.31			
B-6	1	0.35	0.19	0.13		44	0.50	0.38	0.13		2	0.33	(0.32)	0.22				
	2	(0.31)	0.29	0.22		45	0.21	(0.19)	0.34		F-3	1	0.32	0.24	0.28			
	3	0.20	0.09	0.17		46	0.34	0.28	0.45			2	0.28	0.25	0.21			
	4	0.29	0.28	0.41		47	0.24	0.22	0.27			3	0.32	0.29	0.38			
	5	0.25	0.23	0.12		48	0.27	0.24	0.33			4	0.32	0.29	0.70			
	6	0.46	0.29	0.27		49	0.18	0.16	0.06			5	0.24	0.24	0.19			
	7	0.50	(0.37)	0.17		C-4	1	0.54	0.45	0.10		G-2	1	0.38	0.36	0.32		
	8	0.20	0.20	0.12			2	0.41	0.35	0.40			2	0.52	0.36	0.29		
	9	0.36	0.27	0.23			C-5	1	0.32	0.16	0.12			3	0.45	0.34	0.17	
	10	0.28	0.21	0.10		2		0.31	(0.29)	0.29		G-3	1	0.53	0.49	0.32		
	11	0.31	0.25	0.04		3		0.21	0.19	0.17			2	0.53	0.18	0.18		
	12	0.53	(0.44)	0.23		4		0.34	0.23	0.32			3	0.41	0.37	0.48		
	13	(0.32)	(0.32)	0.16		5		0.33	0.13	0.12			4	0.32	0.23	0.35		
	14	0.32	(0.31)	0.33		6		0.24	0.18	0.28			5	0.29	0.27	0.30		
	15	0.26	0.24	0.14		7		0.14	0.09	0.10			6	0.40	0.34	0.17		
	16	0.27	0.24	0.10		8		0.19	0.17	0.38			7	0.49	0.47	0.25		
	17	0.29	0.25	0.10		9		0.24	0.18	0.12			8	0.68	(0.33)	0.38		
	18	(0.18)	0.18	0.11		10		0.20	0.15	0.27			9	0.51	(0.21)	0.14		
	19	0.23	(0.17)	0.26		11		0.23	0.20	0.09			10	(0.24)	0.19	0.16		
	20	0.24	0.16	0.13		12		0.32	(0.27)	0.08		H-2	1	0.55	0.34	0.38		
	21	0.30	(0.24)	0.09		13		0.37	0.29	0.25								

第33表 遺構外出土遺物観察表

図版	番号	遺構名	種別	器種	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	焼成	釉薬装飾	成型技法	備考
69	1	一括	石製品	板碑	30		縦[28.2]	幅[15.0]	厚さ2.0				種子はキリーク ケズリは深く鋭い 二条線も鋭く側面部は面取りしている 被熱しているが被熱後に側面を砥石に転用している 裏面はノミ痕をけして丁寧に仕上げている
69	2	一括	石製品	板碑	20		縦[13.8]	幅 [8.8]	厚さ2.4				小型の板碑である 種子はキリーク 二条線は省略されている 月輪あり
69	3	一括	石製品	板碑	30		縦[24.5]	幅[19.4]	厚さ2.2				種子はキリーク 二条線はしっかり削られ、種子の下には蓮台がある 割付のけがき線が見られる
69	4	一括	石製品	板碑	30		縦[31.7]	幅[19.8]	厚さ2.7				□(二)月 下限の界線が刻まれる



第69図 遺構外出土遺物



## VII 調査のまとめ

### 1. 調査の成果

道仏上遺跡、道仏北遺跡、伝承旗本服部氏屋敷跡は、南埼玉郡宮代町に所在し、新橋通り線（県道蓮田杉戸線）の拡幅工事に伴う今回の一連の発掘調査によってその様相が明らかにされた。

これら三遺跡は、大宮台地慈恩寺支台の東縁辺部に位置する。遺跡周辺は関東造盆地運動の影響で地盤沈降しており、ローム台地上に立地しているとはいえ標高6.5～8.5m、低地との比高差はわずか1～2m程で、低位台地上に位置する遺跡であるという特徴を持つ。

#### 道仏上遺跡

今回の調査では、縄文時代と近世の遺構が検出されたが、主体となるのは近世と考えられ、土壇80基、溝跡22条、竪穴状遺構3基を数える。

縄文時代の遺構は、早期から前期の土壇が5基検出されたのみで遺物量も少なかった。小谷を挟んだ東に位置する道仏北遺跡からは同時期の住居跡などが多数検出されており（第71図）、大規模な拠点集落であると考えられ、道仏上遺跡はそれに従ずる小規模集落としての性格が推定される。

遺跡の中心となる近世は、調査区全体から遺構が検出され、特に溝跡や土壇が多数重複していた。出土遺物は少なかったが、覆土の様相などから近世と判断した。溝跡は現在の地割と同じ方向で走行しており、地割の区画として機能していたと考えられ、道仏集落の起源が近世にまで求められることが今回の調査で判明した。

現在、道仏上遺跡のすぐ南側を北西から南東方向に延びる道路（第3図）は、近世の久喜粕壁道で、古くは鎌倉街道の間道として中世まで遡る可能性も推定されている。今回の調査では中世段階の遺構、遺物は検出されなかったが、近世の主要道沿いに展開された集落の一端を明らかにできた。

#### 道仏北遺跡

道仏北遺跡では今回の調査で、縄文時代前期中葉黒浜式から諸磯a式期の住居跡を5軒検出した。内訳は黒浜式期2軒、諸磯a式期3軒である。道仏北遺跡は半島状に突き出した台地の先端部に展開しており、その幅は広い部分でもわずか70mあまりである。南に隣接する町教育委員会調査と合わせ、該期の大規模拠点集落であることがわかってきた（第71図）。住居跡は、台地縁辺部に構築されており、狭い台地上での空間利用が窺える。

宮代町域では、縄文時代前期の貝塚の発見例はなく、今回の調査でも検出されていない。恐らく当時、遺跡周辺には海が広がっていたと考えられるがそれにもかかわらず貝塚の形成がみられないということは、周辺海域に貝の生息を可能にする環境がなかったためと考えられる。このことは当時の遺跡周辺の環境を推定する一助となりうるだろう。

#### 伝承旗本服部氏屋敷跡

伝承旗本服部氏屋敷跡では、中世から近世にかけての遺構や遺物が検出されたが、時期が特定できた遺構は多くはない。時期は15世紀代と16世紀～17世紀初頭にかけての二時期が認められた。

遺跡名に付されている服部氏は、伊賀国服部に出自が求められ、『寛政重修諸家譜』によると服部権太夫政光が「文禄元年二月朔日武蔵国太田庄のうちをいて采地三千石を宛行はる」とあり、文禄元（1592）年から政光とその子政信が遠江国へ配置替えになる元和五（1619）年までの間、二代にわたりこの地域を拝領していたことがわかる。

この旗本服部氏の屋敷跡は長年不明であったが、今回の調査で堀跡の一部が確認され、その所在地が明らかになり、大きな成果となった。それが調査区中央部から検出された第1号溝跡である。この調査成果をもとに、宮代町教育委員会が

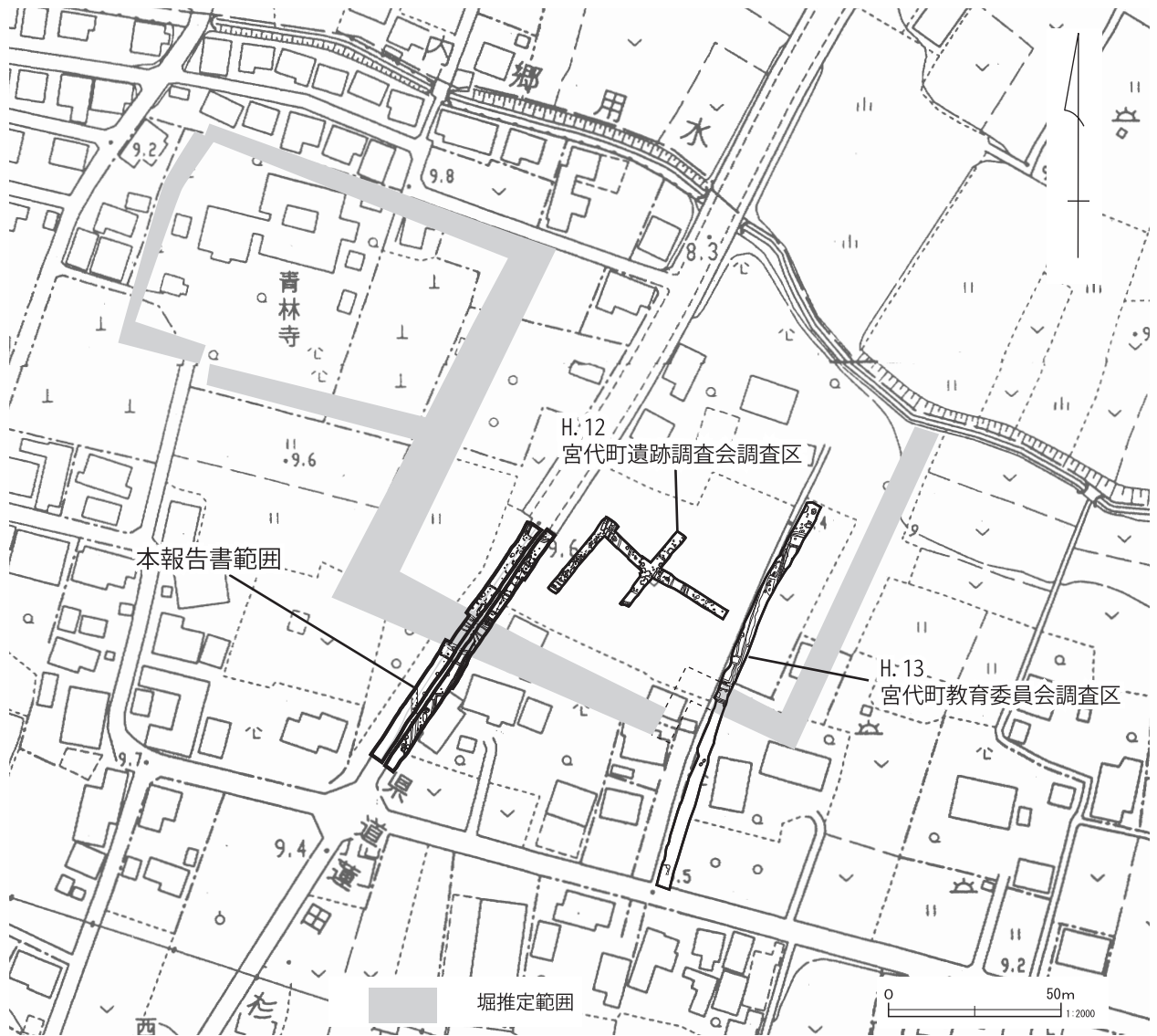
作成した掘区画の推定によると(第70図)、第1号溝跡は東側の大区画南辺西寄り部分に当たる。

今回の調査では、第1号溝跡を境に北側が屋敷区画の内側、南側が区画外に当たる。屋敷の区画内からは、掘立柱建物跡や竪穴状遺構、多数の井戸跡が検出されている。掘立柱建物跡からは遺物が出土していないため年代は不明であるが、第1号溝跡と主軸方位が直交することから、旗本服部氏の屋敷に関連する建物跡と考えられる。

第1号竪穴状遺構も第1号溝跡や掘立柱建物跡と主軸をほぼ揃え、遺物も16世紀代の瀬戸産灰釉小皿や播鉢が出土しており服部氏の知行時期と一致する。また、第1号竪穴状遺構の床面からは炉

跡状遺構や小形埴塼が検出されており、覆土や周辺遺構からも鉄滓が出土している。製鉄関係の工房跡と推定され、屋敷地内にこのような工房も備えていた様子が窺える。

また、服部氏が屋敷を構える以前の遺構として、第7号溝跡が挙げられる。この溝跡は主軸を南北にとり、第1号溝跡とは軸を違える。断面逆台形の深い掘り込みを持ち、遺物は15世紀後半と思われる美濃産陶器皿や16世紀後半の内耳土器が出土している。他の遺構からも15世紀段階に遡る遺物が検出されており、旗本服部氏がこの地に屋敷を構える前段階の、在地土豪らに関連する遺構と推定される。



第70図 伝承旗本服部氏屋敷跡掘推定図

## 2. 道仏北遺跡出土の縄文時代前期中葉の土器について

道仏北遺跡からは、縄文時代早期の撚糸文系土器をはじめとし、後期の堀之内式土器までが断続的に検出された。集落が形成されていた前期中葉は、住居跡や土壇などの遺構から土器が出土しており、ここでは、第1号住居跡、第4号住居跡より出土した土器について、周辺遺跡との比較により時間的位置づけを行いたいと思う。

第71図1～5は、第1号住居跡から出土した黒浜式土器である。すべて同一個体で、1は第1号住居跡南西に隣接する第8号土壇出土土器と接合した。なお、この土器の破片は、第4号住居跡(第38図17)や遺構外(第46図115)からも検出されている。断片的なため文様構成の全容は把握できないが、破片の情報を総合すると、胴部はわずかに膨らみ上半で緩やかに括れ、口縁部に向かって開く器形で、波状口縁を呈する。文様は、半截竹管によるC字状爪形文を口縁部から3～4条施し、斜位刻みを有する隆帯を挟み、更に2条の爪形文を巡らせる。胴部括れ部にも同様に爪形文を2条施す。この爪形文には、引きずり痕はみられない。地文は附加条縄文を羽状に施文する。

黒浜式土器は、新井和之氏の研究によって5段階区分が提示され、多様な地域性を有する土器であることが指摘された(新井1982)。その後、奥野麦生氏は、土器自体が内包する系統的変遷観に着目して3段階区分を示し(奥野1989)、更に小宮雪晴氏は奥野氏の第II段階を2期区分し、3段階4期区分を行っている(小宮1996)。黒浜式土器は、概ねこの3段階区分で定着をみている。

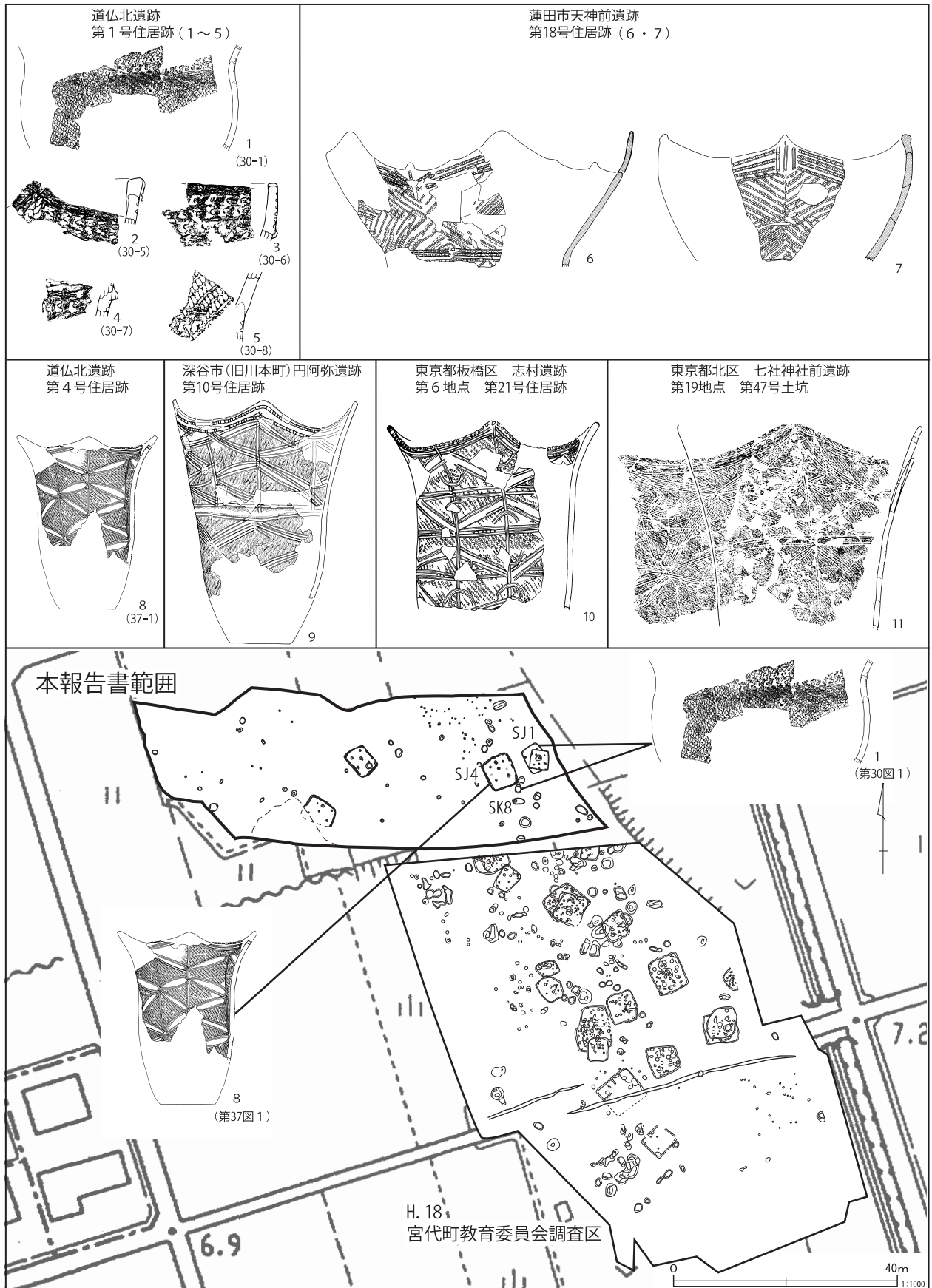
第1号住居跡出土土器は、小宮氏の「羽状(菱形)縄文系土器」に属し、その様相から「黒浜2式新段階」に相当すると考えられる。小宮氏は新段階の特徴として、波状口縁土器の出現、口唇部文様帯の縦位区画、口縁部文様帯の2段構成を挙げ、蓮田市天神前遺跡18号住居跡(第71図6、7)を提示している。第71図2の波頂部下からは、刻

みを有した隆帯が垂下しており、縦位区画と考えられる。口縁部文様帯の構成は確認できないが、胴部には附加条による羽状縄文が施文されていることから、同種の施文と考えられ、口縁部文様帯は2段構成の可能性が高く、よって「黒浜2式新段階」として差し支えないだろう。

第4号住居跡出土土器(第71図8)は、胴部上半から朝顔形に開く4単位の波状口縁で、文様は半截竹管による平行沈線で縦位8等分後、花卉状に膨らんだ斜位沈線を施す。沈線間は地文の磨消しを行っている。口縁部には2条の平行沈線を巡らせ、口唇部に刻みを有する無繊維の土器である。黒浜式終末から諸磯a式初頭と考えられる。

これまで黒浜式、諸磯式は、土器胎土に混入された繊維の有無で捉えられ、土器製作上の画期として位置づけられてきたが、近年の資料増加に伴い、その観点による分類では不十分であることが指摘されている。田中和之氏は、この時期に特徴的にみられる第4号住居跡出土土器のような文様を持つ土器群を「組合せ鋸歯状文土器群」と呼称し、2期3細分の変遷を考案されている(田中1990)。田中氏によると、この土器群は羽状縄文を重畳させ菱形文様を描出した大型菱形文土器(有尾系)に系譜が求められ、地文の附加条の軸縄部分を爪形文に置換させて、縦位・横位区画を施したものを重畳させることによって成立した土器である。第4号住居跡出土土器は、田中氏の分類の「第2期」に相当し、諸磯a式古段階と考えられる。「第2期」は朝顔状に開く器形、区画描出手法の爪形文から平行沈線文への移行、地文の単節縄文化が特徴である。第71図9～11は他遺跡の「第2期」土器群を提示した。第4号住居跡8は、それらと比較すると横帯区画を持たず、斜位沈線は花卉状に膨らませ沈線間の磨消しを行うなど、より菱形状モチーフを強調させていることから、若干新しい様相が看取される。





第71図 道仏北遺跡出土土器及び前期中葉の土器群



### 3. 道仏北遺跡出土の黒曜石について

道仏北遺跡の調査では、黒曜石の石器が44点検出された。第34表30のナイフ形石器のみが旧石器時代の所産で、他は縄文時代であるが遺構に伴うものが少なくその明確な時期は判じえない。しかし、集落が形成されていた前期中葉に前後する時期の所産と考えてもよいであろう。器種は石鏃や楔形石器、スクレイパーがわずかに確認されたのみで、多くは剥片であった。今回は、その全点を対象に産地推定を行った。(第34表)

結果、44点中40点が産地推定され、その内訳は恩馳島群(東京都神津島エリア)24点、恩馳島群の可能性のあるもの5点、星ヶ台群(長野県諏訪エ

リア)4点、星ヶ台群だが男女倉群の可能性のあるもの4点、和田峠群(長野県和田エリア)1点、男女倉群・星ヶ台群の可能性のあるもの1点、甘湯沢群(栃木県高原山エリア)1点であった。甘湯沢群の1点は、旧石器時代のナイフ形石器である。

特筆すべき点は、恩馳島群がその可能性のあるものも含め29点と、全体の72%を占めていたことである。道仏北遺跡より時期は下るが、前期終末期の集落が調査された川島町東野遺跡では、ほぼ長野県和田エリア男女倉群で構成されており(上野他2009)、その様相は全く異なる。周辺の同時期遺跡の産地推定資料が少ないため、道仏北遺跡の

第34表 黒曜石分析一覧表

番号	挿入番号	遺構	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	分析番号	誤差の目安	推定産地	
1		SJ 1	剥片	2.6	1.5	0.7	1.6	道仏北01-SJ 1	m-m±2σ	星ヶ台群	
2	30	21	SJ 1	楔形石器	1.4	1.3	0.6	1.0	道仏北51-SJ 1	m-m±5σ	星ヶ台群(男女倉群の可能性あり)
3			SK11	剥片	0.2	2.1	0.7	2.5	道仏北02-SK11		恩馳島群
4			SK12	剥片	1.2	1.8	0.8	1.6	道仏北03-SK12		恩馳島群
5	42	33	SK35	剥片	6.1	5.1	2.3	45.6	道仏北52-SK35-01	m-m±3σ	恩馳島群
6			SK35	剥片	3.9	2.5	1.7	9.8	道仏北04-SK35No.2		恩馳島群
7	42	34	SK35	石鏃	1.7	1.2	0.3	0.5	道仏北53-SK35		不明(恩馳島群の可能性あり)
8			SE 1	剥片	3.1	2.5	0.9	5.4	道仏北05-SE 1		恩馳島群
9			A-3	剥片	0.8	1.1	0.3	0.1	道仏北06-A 3		不明
10			B-3	剥片	5.1	1.6	1.1	3.7	道仏北08-B 3		恩馳島群
11			B-3	使用痕のある剥片	3.7	3.2	0.9	8.2	道仏北07-B 3		恩馳島群
12			B-3	剥片	2.1	2.2	0.4	1.5	道仏北09-B 3	m-m±4σ	恩馳島群
13			B-3	剥片	2.4	3.1	1.8	6.2	道仏北10-B 3	m-m±3σ	恩馳島群
14			B-3	剥片	2.5	1.7	1.1	2.1	道仏北11-B 3		恩馳島群
15			B-3	剥片	3.9	1.6	1.8	3.7	道仏北12-B 3		恩馳島群
16			B-3	剥片	0.6	0.6	0.2	0.1	道仏北13-B 4		不明
17			B-4	剥片	1.7	2.3	0.5	1.4	道仏北14-B 4	m-m±5σ	恩馳島群
18			B-4	スクレイパー	1.7	0.3	0.6	1.4	道仏北15-B 4	m-m±2σ	星ヶ台群(男女倉群の可能性あり)
19			C-1	剥片	1.7	0.2	0.6	0.7	道仏北16-C 1	m-m±5σ	恩馳島群
20			C-2	剥片	2.1	1.6	1.1	2.6	道仏北17-C 2		不明(恩馳島群の可能性あり)
21			C-2	剥片	3.0	3.0	1.3	7.6	道仏北18-C 2		不明(恩馳島群の可能性あり)
22			C-2	石鏃未製品	2.7	2.6	1.1	5.1	道仏北19-C 2	m-m±5σ	恩馳島群
23			C-2	剥片	3.3	1.7	0.7	2.6	道仏北20-C 2		恩馳島群
24			C-2	破片	0.4	0.8	0.2	0.0	道仏北21-C 3		不明
25			C-3	石核?	2.0	1.8	1.4	3.8	道仏北22-C 3	m-m±5σ	恩馳島群
26			C-3	剥片	1.2	1.8	0.9	1.5	道仏北23-C 3		恩馳島群
27			C-3	剥片	1.4	1.7	0.3	0.7	道仏北24-C 3		恩馳島群
28			C-4	剥片	1.1	1.3	0.2	0.2	道仏北25-C 4		不明(恩馳島群の可能性あり)
29			C-4	破片	0.6	1.1	0.2	0.0	道仏北26-C 4		不明
30	29	1	C-4	ナイフ形石器	2.0	1.0	0.4	0.6	道仏北54-C 4 Pre 1	m-m±5σ	甘湯沢群
31			C-5	剥片	1.8	1.7	0.5	1.2	道仏北27-C 5	m-m±4σ	星ヶ台群(男女倉群の可能性あり)
32	48	191	C-5	石鏃	2.9	2.0	0.3	1.3	道仏北55-C 5	m-m±4σ	星ヶ台群(男女倉群の可能性あり)
33			C-6	剥片	1.2	1.1	0.5	0.5	道仏北28-C 6		不明(恩馳島群の可能性あり)
34			C-7	剥片	2.9	1.3	0.4	1.4	道仏北30-C 7		恩馳島群
35			C-7	剥片	2.1	0.8	0.9	2.0	道仏北29-C 7	m-m±2σ	星ヶ台群
36			C-8	剥片	1.7	1.7	0.5	1.2	道仏北31-C 8		恩馳島群
37			C-8	剥片	1.5	1.4	0.5	0.6	道仏北32-C 8		恩馳島群
38			D-2	剥片	0.9	1.6	0.4	0.5	道仏北33-D 2		恩馳島群
39			D-7	剥片	1.8	2.4	0.4	1.3	道仏北34-D 7		不明(男女倉群、星ヶ台群の可能性あり)
40			D-7	剥片	2.2	1.9	1.1	3.2	道仏北35-D 7	m-m±4σ	和田峠群
41			D-8	剥片	1.2	1.3	0.3	0.5	道仏北36-D 8		星ヶ台群
42			表採	剥片	2.0	3.4	0.4	5.4	道仏北37-表採	m-m±4σ	恩馳島群
43			表採	剥片	1.6	2.5	0.6	2.1	道仏北38-表採	m-m±2σ	星ヶ台群
44			表採	剥片	1.2	1.5	0.2	0.2	道仏北39-表採取		恩馳島群

様相が特異なものであるという断定はできないが、恩馳島群の比率が高いということは、奥東京湾沿いに立地する道仏北遺跡の立地的環境と強い相関関係を持つものと指摘できよう。時期的な特性は、周辺地域の同時期の資料増加を待つて検討することとし、今後の課題としたい。

また、今回検出された石器類はわずかな欠損や、大型剝片にもかかわらず廃棄されている。夾雑物を多く含むという恩馳島群の材質上、思うような石器加工が困難であるという制約があるにしても、道仏北遺跡では石材の潤沢な供給が背景に存在していたことが窺えよう。

## 引用・参考文献

- 青木秀雄 1983『前原遺跡』宮代町文化財調査報告書第1集 宮代町教育委員会
- 青木秀雄 1984『山崎南遺跡・前原遺跡』宮代町文化財調査報告書第2集 宮代町教育委員会
- 青木秀雄 1986『山崎北遺跡』宮代町文化財調査報告書第4集 宮代町教育委員会
- 青木秀雄 1982『山崎山遺跡』宮代町遺跡調査会調査報告書 宮代町教育委員会
- 青木秀雄・河井伸一 1998『逆井遺跡・山崎山遺跡』宮代町文化財調査報告書第6集 宮代町教育委員会
- 青木秀雄・河井伸一 1999『中遺跡・星谷遺跡』宮代町文化財調査報告書第7集 宮代町教育委員会
- 新井和之 1982「黒浜式土器」『縄文文化の研究3』雄山閣
- 新屋雅明・福田 聖 1999『上の宮遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第252集
- 奥野麦生 1989「黒浜式土器の系統性とその変遷」『土曜考古』第13号 土曜考古学研究会
- 河井伸一 1994『藤曾根遺跡・中寺遺跡』宮代町文化財調査報告書第8集 宮代町教育委員会
- 河合伸一 2001『宮代町の中世遺物』宮代町文化財調査報告書第9集 宮代町教育委員会
- 河井伸一 2002『山崎南遺跡・道仏遺跡』宮代町文化財調査報告書第10集 宮代町教育委員会
- 河井伸一 2003『国納丸屋遺跡・中寺遺跡・伝承旗本服部氏屋敷跡遺跡』宮代町文化財調査報告書第11集 宮代町教育委員会
- 河井伸一 2009『地蔵院遺跡・東条原宿屋敷遺跡・藤曾根遺跡・山崎山遺跡』宮代町文化財調査報告書第13集 宮代町教育委員会
- 河合伸一・青池紀子 2002『宿・源太山遺跡』宮代町遺跡調査会報告書第2集 宮代町遺跡調査会
- 記念講演会・シンポジウム資料集 2006『江戸時代のやきもの一生産と流通一』財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター
- 小宮雪晴 1996「黒浜式土器の構成と展開に関する一考察<黒浜貝塚群出土土器を中心として>」『埼玉地域文化の研究』埼玉地区文化財担当者会
- 埼玉地区文化財担当者会考古部会 1999『埼玉の縄文前期一埼玉地区縄文時代前期調査報告書一』埼玉地区文化財担当者会
- 鈴木敏昭 1984『茶屋遺跡』白岡町埋蔵文化財調査報告書第2集 白岡町教育委員会
- 田中和之 1990「縄文時代前期中葉の土器群の問題点～「組合せ鋸歯状」文土器群の成立と展開を中心として～」『埼玉考古』第27号 埼玉考古学会
- 田中和之 1991『黒浜貝塚群 天神前遺跡』埼玉県蓮田市文化財調査報告書第17集 蓮田市教育委員会
- 利根川章彦 1991『竹之花・下大塚・円阿弥遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第105集
- 中島広顕・川田 強・大平理恵 1998『七社神社前遺跡II』北区埋蔵文化財調査報告書第24集 東京都北区教育委員会
- 細田 勝 2002「諸磯式土器の変遷過程」『研究紀要』第17号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 水澤裕子・山田直美・村田厚仁 1999『志村遺跡第6地点発掘調査報告書』凸版印刷工場内遺跡調査会
- 宮井英一・上野真由美・岡田勇介 2009『東野／平沼一丁田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第360集
- 宮代町 2002『宮代町史 通史編』宮代町教育委員会
- 宮代町 2008「速報 道仏北遺跡発掘出土品展」宮代町郷土資料館